
夢色彩のカーバンクル

倉元裕紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢色彩のカーバンクル

【Nコード】

N6452Y

【作者名】

倉元裕紀

【あらすじ】

前世の記憶。それは夢を通して伝えられる、過去の自分からの贈り物。世代を超えて伝えられる、忠告、運命、そして思い出。世界中の人々が必ず見るその記憶を、レオンはなぜか見られずにいた。そこで彼は冒険者になることを決意する。自分の魂を象る遺産、その場所を示すと言われている導きの妖精、カーバンクルに出会うために。世代を重ねる人間たちと、不死の存在であるカーバンクルが共存する世界。その中で成長していくレオンの物語。

雪解けの道

まだ雪が残っているからなのか、荷馬車越しに伝わってくる振動も控えめだ。まるで今日の日の僕の為に、雪を残しておいてくれたみたいに。春が雪解けを先延ばしにしてくれていたのだろうか。

きつと、明日からは本格的な春。

自然と顔が綻ぶ。

もつとも、村を出る時から、ずっと緩みっぱなしだったけれど。澄んだ心地いい空気。

何かの果物を干した物だろうか。甘い匂いが漂ってくる。

何より、抑えきれない期待。

レオンは馬車の外に目を向ける。

抜けるような青空。雲一つない、まさに快晴。

本当にいい日だ。

神様と、そしてイブ様に感謝しないと。

「おい。坊主」

荷馬車の御者の声。まだ若い男性だ。たまに村までやってくる行商の人らしい。今日までほとんど面識はなかったが、レオンの旅立ちの事を聞いて、ついでだからいいよと快く馬車に乗せてくれた、優しい人だ。

レオンは馬車の中から顔だけ出して聞いた。

「何ですか？」

御者の男性は、手綱を握ったまま、ちらりとだけこちらを見る。

口元が少しあがっていた。

「見えるだろ？」

彼の言葉の意味がすぐには飲み込めなかった。だけど、彼と同じように前を向いてみると、すぐに分かった。

山を下りた先。まだ遠いその先には、見渡す限りの平原が広がっている。

そして、その広大な土地にぼつりと、だが確かに町が見えた。
自治都市ユースアイ。

「うわぁ・・・！」

目を輝かせるレオンを見て、御者は少し苦笑したようだ。

「ちっさい町だよなぁ」

「小さいんですか？」

きょとした顔で聞くと、今度は声を出して笑われた。それがどうしてなのか分からなかったので、レオンはますます首を捻った。
「小さい小さい。まだ出来て400年くらいだし、それに、交通の要所ってわけでもないから、あんまり大きくならないんだよなぁ」
「へえ・・・」

「でも、住んでるのはいい奴ばかりだから、坊主みたいな田舎者にはちょうどいいな。せいぜい腕を磨いて、名のある冒険者になってくれよ。出来たら、サイレントコールドくらいの」

レオンは照れて頭を掻く。

「いや、そこまでは、ちよつと・・・」

「そうか？じゃあ、俺のお得意様になつてくれればいいや」

男はそこでまた笑った。やっぱり理由は分からなかったが、レオンもつられて笑った。

ひとしきり笑ったところで、御者がまた一瞬だけこちらを見た。

「というか、坊主。お前、ジーニアス？」

ジーニアスとは魔法が使える冒険者の総称だ。つまり、彼の質問の意味は、貴方は魔法が使えますかという事である。

「いえ、魔法は全然」

「でも、サイレントコールドの故郷だよな？お前の村」

「あ、はい。でも、僕は全く才能がないみたいで。一応調べて貰おうと思っているんですけど、たぶん魔法はダメですね。だから、アスリート志望で頑張ってみようかと」

アスリートとはジーニアスの反対。つまり魔法が使えない冒険者の事。冒険者を大別すると、このどちらかになる。アスリートの方は、剣とか弓とか、体力勝負の冒険者が多い。

「それは苦勞しそうだな。お前はあんまり身体が大きくないし……っというか、明らかに弱そうだな。俺の方が強いんじゃないか？」

酷い言われようだが、まったく異論はなかった。レオン自身も、それは自覚している。

実際、レオンは村の中でも、あまり腕っ節が強いとは言えなかった。身長は普通くらい。身体もあまり逞しいとは言えない。幼い頃は、よく女の子と間違えられたほどで、きっと、母親に似たのだろうとよく言われる。黒い髪と濃い瞳はまさに母親ゆずりである。だが、母親には魔法の才能が少しだけあったのに、それはレオンにはさっぱり遺伝しなかった。

多少残念ではあるが、レオンはあまり気にしていない。父親も母親も、レオンの旅立ちを応援してくれた。優しい両親だから、それだけで十分だ。

レオンは苦笑しながら言った。

「そうですね。一応はいろいろ訓練してみたんですけど」

「なんかさ。一年くらいたったなら、あそこの雑貨屋か何かで働いてる気がする」

「そんな事は……ないとは言切れないですね」

もしダンジョンで大怪我でもしたら、そうなっているかもしれない。

その返答に、御者の男は少し口元をあげる。

「謙虚だねえ。まあ、身体が小さいアスリートでも、伝説になった奴はいるんだ。スニークとかはいい例だよな。お前も大方、その辺りを目指してるんだろ？」

その質問はレオンには答えにくいものだった。

普通はそこで、はいとかいいえとか、はっきり答えられるのだ。

冒険者を志す人達は、みんな確固たる目標というか、指針がある。サイレントワールドとかスニークというのは、冒険者として伝説になった人達に与えられた称号で、今を生きる冒険者達の目標でもある。だが、彼らの名前には、それ以上の意味もある。

仕方なく、レオンは正直に答える事にした。

「いえ、その・・・なんていうか、僕は分からないんです」
「へ？」

男が驚いた表情でこちらを見る。予想していた通りの反応だった。そんなに驚かせて申し訳ないという気持ちだが、レオンの心の中で急速に膨らんだ。

若干焦りながらも、慎重に言葉を選んで説明する。

「そのですね・・・実は全く前世の記憶がないんです。イブ様どころか、夢自体も全く見た事がなくて。だから、冒険者になったら分かるんじゃないかと思って、決心したんです。もし一人前の冒険者になれば、アーツを手に入れられたら、前世が分かるんじゃないかって」

これで分かって貰えるだろうかと不安になりながら、レオンは御者の男の顔を見つめる。

その男は目を見開いたまま固まっていた。彼のこんな顔を見るのは初めてだ。村を経ってからまだ一日半ほどの付き合いだが、いつも気さくで余裕のある男。まだ若く見えるが、自分よりは明らかに年上だし、自分が彼の年齢になった時、彼くらい落ち着きある大人になれているとは思えない。そんな男が、思考停止するほどの事実なのだ。頭では分かっているものの、目の当たりにしてみると、自分でも意外なくらいだった。

「・・・やっぱり変ですか？」

おずおずと聞くと、男はやっと我に返ったようだった。

「あ、いや・・・まあ、そうだな。少なくとも、そんな奴は初めて聞いた」

「初めてですか？やっぱり珍しいんですかね」

「珍しいっていうか・・・そんな奴がいるとは思わなかった」

レオンはそこで、かねてからの懸念を相談してみる事にした。

「これ・・・ギルドに話しても、受け入れて貰えると思いますか？」

男は難しい顔をしながら前を向いた。

レオンにしてみれば、前世が見えないというのが、冒険者を志す最大の動機でもあり、また、最大の懸念でもあった。自分には見えないその前世というものを、多くの冒険者は自分の指針にする。前世が剣士ならば剣士の道を、魔術師なら魔術師の道を志すものなのだ。それが最も自分に適した道で、何より、前世の記憶がその楽しさを教えてくれる。

その指針がない自分は、いわば真つ暗闇にいる状態。これがどれくらいのハンデなのか、自分では分からないのだが、不安は不安だった。

黙ったまましばらく考えていたが、やがて唐突に口を開いた。

「俺さ。今は見ての通りの商売人だけど、夢の中では料理人なんだよ」

突然の話題に、レオンは反応が出来なかった。

「料理人っていつても、俺に見えるのは見習いの時の記憶だけなんだけどさ。しかも、そんなに大きくないレストランなんだ。だから、まあ、そんなに腕がいいわけじゃなかったんだろうな。だけど、料理に魅せられているのは、もの凄く伝わってくるわけ。見習いだから、自分の好きな料理なんか作らせて貰えないだけどさ。でも、それでも楽しかったんだ。食材を前にした時の高揚感だけは変わらない。今だって、料理人じゃないけど、料理は好きなんだ。昨日の煮込み料理も旨かっただろ？」

レオンは頷く。確かに素人の料理ではなかったが、行商だから料理も自然に身についたのだらうと思いきんでいた。

「そんな俺でも、今は料理人じゃなくて行商をやってる。もちろん、食材をみる時には役に立つ事もあるけど、せいぜいそんな程度。だから、まあ、前世なんてその程度だと思えばいいんじゃないか？ギ

ルドの方も、まあ困るかもしれないけど、みんながみんな、前世と同じ道を選ぶってわけじゃないと思うし・・・ユースアイのギルドは小さいところだから、いきなり追い返したりはしないと思うな。もつと大都市だと、大勢いて忙しいから、坊主みたいな初心者相手にされないかもしれないけど」

「そうですか・・・」

レオンは少し考え込む。

そこで男が可笑しそうに言った。

「今から戻れっというのはお断りだからな
慌ててレオンは首を振る。

「いえ！全然。あの、話して貰ってありがとうございます」

「あんな話でよければいつでも。しかし・・・前世の記憶がないから冒険者になりたいっというのも、結構な話だよなあ」

「やっぱり変ですよね」

「だなあ。でも、もしかしたら、お前、凄い奴なんじゃないか？」

突然の言葉に、レオンは戸惑う。

「え・・・何ですか？」

「だって、前世がないなんて奴、相当なレアなわけだ。もしかしたら、お前1人かもしれない。実は、凄い秘密があるとか、そういう事かもしれないだろ？」

「いや、秘密って言われても」

「もしかしたら、歴史に名を残すんじゃないか？サイレントコールドみたいに」

「だから僕、魔法使えませんか」

「じゃあ、スニークみたいに」

「僕の事、弱そうだって言ってたじゃないですか」

「いや、失敗したなあ。そんな大物だとは思わなかったから」

「あの、人の話を・・・」

「俺、伝説の男の旅立ちを案内した男になったわけか。どうせなら、もう少し為になる話をしとくんだったなあ。いや、今でも遅くない

か。そうか。そうだな。よし、じゃあ、とりあえず、俺の女性遍歴をざっと・・・」

全く為にならない予感しかなかった。

「いや、それはちよつと・・・」

「そうか？ 確実に為になると思うけど。お前だって、これから何人もの女性を泣かせることになるわけだし」

「勝手に変な予定を立てないで下さい」

「いやいや。絶対泣かせるぞ。冒険者だって、いろんな所をふらふらするわけだし。つまり、それだけ出会いがあるわけだからな。

特にお前は、腕っ節は弱そうだけど、見た目は悪くないっていうか・・・絶対、各所で女の子をひっかけていくタイプだな」

「人聞きが悪いですよ」

そこで急に、男の目が細くなった。

「よく考えたら、そういうタイプの男が一番迷惑なんだよなあ。うるちよろしないで一力所に留まってくればいいんだけど・・・でも、お前は伝説になってしまいうわけだから、そんなわけにもいかないだろうし」

何か言い返そうとしたが、なにやら雲行きが怪しかったので、黙り込む。

男の横目には明らかな敵意が込められていた。

「そうか。そうだよなあ。将来伝説になるとはいえ、今はまだひよっこなわけだ。ここでさくつと処分しておくって手もあるよなあ。いや、それどころか、ここで俺が倒せば、もしかして、俺が伝説の男って事に・・・」

「いえ、ならないです・・・よ、ね？」

最後の方は声にならなかった。男がすつとこちらを向いたからである。

もの凄い目をした男に睨まれる格好になった。

まだ平原の手前の山奥。

逃げたら逃げたで、気温や獣といった敵がいる。食料もほとんど

ない。

どうしよう。

だが、不意に男の表情が緩んだ。
助かった。

レオンの正直な感想はそれだった。

男がまた前を向きながら言う。

「まあ、そういう事だから」

急な言葉に、レオンは戸惑う。

「何がですか？」

「不用意に女に手を出すのはまずいつて事。変なところで恨みをか
つたりするからさ。だから、気をつけた方がいい。為になった？」

「・・・はい」

気をつけるもなにも、そんなつもりはさらさらないわけだから、
はつきり言つて余計なお世話だったが、口にすることは出来なかつ
た。

少なくとも、さっきの眼差しを忘れるまでは。

何事もなかったかのような口調で、御者の男は口を開く。

「しかし、天気いいなあ。これだと、明日の朝には着けそうだ。
お前もそのつもりで準備しとけよ」

「あ、はい。分かりました」

男は機嫌良さそうに口笛を吹き始める。全く聞いた事のない、テ
ンポの速い曲だった。

レオンはなんとなく、眼下に広がる平原を見つめる。

下っていく山道も、徐々に雪が減りつつある。標高が下がってき
た証拠かもしれない。ずっと山奥で育ってきたレオンにとって、初
めての下山。不安もあるが、やはり期待の方が大きい。御者の彼が
言うように、多くの人との出会いがあるだろう。最初に会った彼か
ら得た、記念すべき最初の教訓は、多少残念な内容だったけれど。
でも、面白い。

レオンは微笑む。きっとこれからそうだ。きっと楽しい事がた

くさんあるはず。

この先の平原。春の草原の中にある小さな町。ユースアイには、その姿も徐々に近づいてくる。

風も次第に暖かくなる。

春。

旅立ち。

雪の下から新芽が顔を出す。そんな季節だった。

導きの妖精

毛の長いマフラーを引きずったヒヨコが、頭の上を右往左往して
いる。

簡単に表現するなら、そんな感じだった。

レオンは自治都市ユースアイのギルド事務所にいた。正確には、
冒険者ギルド・アンリミテッドのユースアイ支部事務局。だけど、
この町まで連れてきて御者の人も、ここに来る途中で道を尋ねた人
も、皆がここを、単にギルド事務所と呼んでいた。それどころか、
目の前に座っている受付のお姉さんでさえ、正式名称では呼ばなか
った。レオンが正式名称を知ったのは、この入り口に書いてある
のを読んだからだが、それも掠れてしまっていて、かなり読みにく
かった。

入った途端にいかつい男達に睨まれる。そんなシチュエーション
を予想していたのだが、聞いていた通り、人は少なかった。それで
も、ぴりぴりした雰囲気の方が数人ベンチに腰掛けていたので、レ
オンは少し緊張した。

それでも、何事もなく窓口まで行き、冒険者見習いとして登録し
たい旨を説明すると、あっけなく手続きが始まった。田舎者のレオ
ンにとって、こういう手続きは初めてなので、何か失敗しないか心
配だったが、とりあえず、最初は上手くいったようでほっとした。

その矢先に、頭に飛び乗ってきたのが、この生物だった。

「・・・あの、すみません」

おずおずと聞くと、受付の女性がこちらを見上げる。自分より年
上のお姉さんで、理知的で落ち着いた雰囲気の人である。彼女はレ
オンの書類を作ってくれているらしく、椅子に腰掛けたままだった。
「はい。何か？」

ブラウンの瞳には、こちらをからかっている色は見えない。だが、

レオンの今の状態に気付いていないわけがない。

やや躊躇したものの、聞かないわけにはいかなかった。

「この、頭の上をうるちよろしてるのは・・・」

当然の質問だと思ったのだが、受付の人はきよとした顔で聞き返してきた。

「カーバンクルですけど・・・」

「いえ、それは僕にも分かります」

それくらいはレオンも知っていた。色違いだが、村に一匹だけいたからである。

「そうじゃなくてですね・・・なんで、僕の頭の上をうるちよろしてるんですか？」

受付のお姉さんは、ようやく理解したという顔になる。

「あ、すみません。最近だと、みなさん既にご存じの場合が多いので、説明を省略させて頂いていたんです」

はあそうなんですかと、レオンは生返事を返す。つまり、知らなかった自分の方が珍しいという事のようにだ。

「そのカーバンクルは、そうやって貴方の前世を見ているんです。もちろん全部は見られませんが、一部を読みとる事が出来ます。それを私に伝えて貰って、今度は私がギルドのレコードを調べます。そうすれば、貴方のおおよその適性が分かるんですよ」

そんな事が出来るとは初耳だった。村にいたカーバンクルは、ただのペット同然で、ほとんど役には立っていなかったからである。

「カーバンクルって、そんな事が出来るんですか？」

「あ、でも、それはギルドに住み着いている子だけです。他の場所にいる子には出来ないみたいです。特技とか芸みたいなものじゃないかとか、そういう役目として居着いているんじゃないかとか、諸説あるみたいですけど・・・」

「へえ・・・」

そこで、レオンの頭の上にいたカーバンクルが、受付の女性の方に飛び移った。反動のようなものはほとんど感じない。感じたのは、

ふさふさの毛の感覚だけだった。

藍色の瞳が一瞬だけこちらを向くと、そのまま受付の女性の頭に乗って、そこでまたくるくると堂々巡りを始めた。

それを全く気にかける様子もなく、受付の女性は微笑んで、右手を部屋の奥に向けた。

「もうしばらくかかりますので、そちらにおかけになってお待ち下さい」

レオンは軽く頭を下げてから、示されたベンチに腰掛けた。入った時にそこにいた男達は、もういなかった。

他に見るものもないので、レオンは、女性の頭の上をくるくる回っているライトイエローの生物をなんとなく眺めていた。女性は気にする素振りもなく、書類作りに精を出しているようだ。

カーバンクル。別名、導きの妖精。

見た目で一番近いのは、キツネやイタチかもしれない。同じ4足歩行の生物。それを子供サイズに縮小して、体毛を長くふさふさにした生物というのが、だいたいの外見である。

だが、その実態の多くは謎に包まれている。

例えば、体重が非常に軽い事。体毛や瞳の色が様々な事。群を作らない事などが挙げられる。

だが、最大の不思議は、この生物には死というものがないという事実である。

カーバンクルには寿命がない。少なくとも、自然死した個体は知られていない。さらに、カーバンクルは食事出来るが、しなくても生きていける。食べても排泄はしない。眠る事もするのだが、それが必要なのは不明。呼吸が必要なのかすらもはっきりしない。水中を普通に歩く個体もいるという噂だった。もつと言えば、どうやって数を増やしているのかも、まるで分からない。オスとメスがあるのかすらも分かっていないのだ。

今までにいろいろな学者が調べたが、まるで何も分かっていない。捕らえようにも、いつの間にか逃げてしまう。だから、大昔にもう

諦めてしまったというのが、レオンの村の長老の話だった。

まさに不思議生物なのだが、大昔の人達の間でも、そもそも生物となのかという話にはなっただけらしい。

そこで、とりあえずのカテゴリとして、カーバンクルは妖精という事になっている。他に妖精と分類されているものはないから、専用枠である。それだけ特殊な種なのだ。

そういうのはつきりしない存在なのだが、人を襲うわけでもないし、作物を荒らす事もない。気ままだが、大人しいし、鳴いたり暴れたりするわけでもない。特別な世話も必要ないし、懐いた人間なら言うことも聞く。そして何より、見た目が愛らしい。

そういうわけで、レオンの村ではペット以外の何者でもなかった。何か特殊能力があったわけではないが、見た目で少し癒される。見かけたら撫でてやって、何か食べ物でも与えてみる。それを食べる姿にまた癒される。はつきり言って、かなり良いご身分である。だけど、まあそれくらいはいいかなと思わせるくらいの愛らしさがあった。

だけど、ここのカーバンクルは立派に仕事をこなしているようだ。能力の理屈は不明だし、見た目には、人の頭の上をくるくる回っているだけなのだが、このギルドの一翼を担っているらしい。思ったより多才だった事に、レオンは驚きだった。

やがて、仕事が終わったのか、ぐるぐるしていたカーバンクルは不意に足を止めて、そのまま女性の頭の上で丸くなった。色合いもあって、金の王冠みたいに見える。

妖精は目を閉じていた。まさか、そこで休憩するつもりだろうか。その数秒後、女性は書類を持って立ち上がった。まったく頭上を気にする様子はないが、カーバンクルの方もバランス感覚がいいのか、張り付いたように動かなかった。

そのまま、女性はカウンターの奥の扉の向こうに消えた。

見るものがなくなってしまったので、仕方なく、事務所の中を見回してみる。

木で出来た建物。このベンチも、カウンターも椅子も、全部同じ木材を使っているようだ。照明はあまり多くないが、それでも十分なのだろう。あまり広くはない部屋に、事務員らしき女性が1人。レオンの母親くらいの年齢だろうか。その女性も、さっきの受付の人も、全く同じ服を着ている。ギルドの制服なのだろうか。黒が基調で、なんだが格好いい。そういう服を着ている人は、もちろんレオンの村にはいない。御者の人は小さい町だと言っていたが、レオンにしてみたら、十分都会である。

ここから始まる。

不意に頭を過ぎったその言葉に、レオンは急に気分が高揚してきた。緊張していたためだろうか、今まで忘れてしまっていたワクワク感が戻ってきたのである。

新しい世界。その始まりの場所。思ったより、劇的な事はなかったが、田舎者の自分にはこれくらいがちょうどいい。あまり刺激が強すぎても困る。

ここから頑張って、何とか一人前の冒険者になる。とりあえずはそれが目標だが、そこまでの道のりを想像するだけでも、レオンは楽しみで仕方なかった。

新しい出会いがあつて、新しい事を知って、新しい自分を見つける。

そこでレオンは、ふと気付いた事があつた。

自分の前世を見たい。それがこの旅立ちの目的のひとつでもある。だが、さっきの受付の女性は、あのカーバンクルが自分の前世を読みとってくれると言っていた。そして、詳しく調べるとも言っていた。

もしかして、それではつきりするのだろうか。

はつきりしてしまうのだろうか。

もしここで分かってしまったらと思うと、レオンの胸中は複雑だった。目的が達成されるのだから、もちろん悪いわけではない。だからといって、こんなにあっさり分かってしまうと、自分の悩みはな

んだったのかと思えてしまう。

どちらがいいんだろう。

聞きたいような、聞きたくないような。

レオンの予定では、自分の前世が分かるのは、見習い冒険者卒業の時だった。

一人前の冒険者として認められるには、魂の試練場というダンジョンを攻略しなければならない。その最奥で、その冒険者はカーバンクルと会おうと言われている。そのカーバンクルが、自分の魂の場所まで案内してくれると言われているのだ。

その魂の名前がアーツ。

前世の自分が、来世の自分の為に残した遺産。それを手に入れる事が、冒険者の証。

それを手に入れたら、自分の前世の事が分かる。

そんな予定を立てていたのだけれど。

「レオンさん」

不意に名前を呼ばれて我に返ると、いつの間にか、受付の女性が戻ってきていた。頭の上の妖精もそのままである。本当に装飾品みたいだった。

レオンは慌てて立ち上がって、窓口に向かう。

ここで分かってても、まあ、それはそれでいいじゃないか。懸念がひとつ解消されたと思えばいい。どちらにしたって、冒険者を目指すのは一緒なんだから。

だが、どうやらそんな話ではなかったようだ。受付の女性の表情は、傍目にも分かるくらい困惑顔だったのである。

「あの・・・申し訳ないんですけど、該当するレコードが見つからなかったんです」

レコードというのはよく知らないが、要は、自分の前世がよく分からなかったという意味だろう。

嬉しいような、残念なような、入り交じったような表情で、レオンは頷いた。

「そうですか・・・あの、やっぱり、珍しい事なんですか？」

女性は控えめに頷く。少し揺れたはずだが、頭上のカーバンクルに起きる気配はない。

「ええ、まあ・・・それで、出来たら、レオンさん自身が見た前世の記憶を教えてくださいませんか？そこからまた探してみますので」「記憶ですか」

レオンは苦笑した。ないものは教えようがない。

「あの・・・？」

「あ、いえ、実はですね・・・あの、驚かないで下さいね」

「驚くような前世なんですか！？」

何か期待するような響きが含まれていた気がしたが、それは必死に無視した。

「実は、僕、前世の記憶がないんです。今まで全く、夢を見た事がなくて・・・」

レオンはなるべく驚かせないようにゆっくりと言ったのだが、無駄だったようだ。

思いつきり気まずい静寂。

受付の女性は完全に固まっているし、奥で事務をしている人も、手が止まっていた。

他に誰もいなかったのが、救いといえば救いだった。

カーバンクルだけが呑気に眠っている。

どうしようかと困り果てたところで、受付の女性が絞り出すように言った。

「・・・あの、冗談ではないですよね？」

レオンは慌てて手を振る。そう思われるのが一番困る。

「いえいえ！そんな、冗談なんて・・・」

それを見て、受付の女性は額に手を当てた。何やら難しい顔をしていた。

「・・・もしかして、何か問題があったりしますか？」

もしかしたら追い返されるかもしれないという懸念が、再び顔を

見せ始める。

しばらく間があつてから、女性はこちらを向いた。

「えつとですね。ギルドに加盟する事は可能です。それ自体には、特に資格というものは必要ありませんので。ただ、前世が分からないというのは、レオンさんにとって不利になります。適性が分からないという事になりますから、何でも手探りという事になります。ですが、あの、もちろん、ご存じだと思いますが・・・」

そこで女性は間を取った。レオンもなんとなく姿勢を正した。ここからが、特に重要な話なのだ。

「冒険者は戦闘に重きを置きます。最初はある程度の安全を確保してありますが、基本的には命がけです。ですから、手探りと口で言うのは簡単ですが、その手探りにも命の危険がつきまといまいます。人より苦勞するのはもちろんですが、冒険者の場合は、苦勞だけで済まない事もあるんです。あと・・・これは申し上げにくいんですけど、レオンさんが仲間を探されるときに、恐らく障害になると思います。他の皆さんも命がけです。冷たいようですが、適性を十分に生かせていないレオンさんを受け入れる人は少ないと思うんです」

正直、シヨックな話だった。

こんなに自分にハンデがあるとは思っていなかった。自分だけで済むならともかく、仲間が見つからない可能性まであるのだ。

そうなったら、ずっと1人で戦うのだろうか。

それは無理だろう。何より、辛いだろう。

だけど。

レオンは微笑んだ。

「大丈夫です」

女性の瞳が少し大きくなる。

「心配してくれてありがとうございます。でも、とりあえず、やってみようと思うんです。あまり強くなれないかもしれないし、仲間も出来ないかもしれないけれど・・・でも、やってみないと分からないですから。とにかくやってみます。それでもダメだったら、村

に帰るなり、他の仕事を見つけるなりします。それくらいの決断は出来るつもりです。だから、挑戦だけはさせてくれませんか？」

「しばらく1人のままかもしれません。1人はつらいと思います。無理して冒険者にならなくてもいいんですよ？」

「1人じゃないですよ。ここまで乗せてきてくれた行商の人が言っていました。この町は良い人ばかりだって。だから、なんとかariusます。ギルドの受付のお姉さんも、すごく優しい人ですし」

女性の真摯な瞳としばらく見つめ合った。

だが、やがてふつと微笑んでくれた。

「分かりました。では、ギルドとして正式にサポートさせて頂きます。何か分からない事がありましたら、何でも聞いて下さい」

「はい。これからよろしくお願いします」

レオンが頭を下げると、女性も少し笑って頭を下げる。

「よろしくお願いします」

その揺れには耐えられなかったのか、黄色のカーバンクルが頭からカウンターに滑り落ちてきた。

だが、目覚める気配はなかった。

気持ちよさそうに眠っている。

レオンと女性は、それを見て笑った。

「お疲れみたいです」

「そうですね。レオンさんの前世がなかなか見えなくて、大変だったみたいです」

「・・・すみません。起きたら代わりに謝っておいて下さい」

「それでしたら、今どうぞ。撫でてやると喜びますから」

レオンは少し意表を突かれたが、すぐに撫でてみた。

村のカーバンクルとは色が違って、手触りはほとんど同じだった。ふかふかでふわふわ。いつまでも触っていたくなる。

「・・・あの、名前はなんて言うんですか？」

「私ですか？」

その言葉に、レオンは気付いた。

「あ・・・そういえば、聞いてませんでしたね」

「聞きたかったんですか？」

女性は悪戯っぽく笑う。なんというか、年上の余裕みたいなものを感じた。

少しどきどきしたが、そこで蘇ってきたのは御者の言葉だった。妙なトラブルは遠慮したい。

「あ、いえ、すみません、その・・・聞かなくても、大丈夫ですよ
ね」

戸惑ったように言うと、それが可笑しかったのか、女性は吹き出した。

「すみません。そんなに困るとは思わなかったので・・・」

「そ、そうですね。こちらこそ・・・」

「ケイトと呼んで下さい」

そう名乗ってケイトは微笑んだ。理知的で落ち着いた、ブラウンの髪と瞳の女性。恐らく20歳前後だろう。格好いい制服と、まとまったヘアスタイルのせいで大人っぽく見えるだけかもしれないけれど、少なくともレオンより年下という事はない。

「あと、この子はシニアです。もちろん、私が名付けたわけじゃないですけどね。だけど、このギルドで一番の年上なのは間違いないです」

「ということは、もしかして、町が出来てからずっといるんですか？」

「はい。少なくとも、もう400歳以上」

「へえ・・・」

どういうわけか、カーバンクルは一カ所に居着く事が多いらしい。人から聞いた話だったが、ここの妖精も、その例に漏れないようだ。その最長老の大御所も、今は愛らしい姿で寝息をたてていた。

マスター・ガレット

ユースアイはのどかな町だった。

きつと住みやすくて豊かなのだろう。少なくとも、レオンのいた村とは比べものにならないほど過ごしやすい。この時期、村はまだ雪解けしている頃だが、ここは完全に春の装いである。町の周囲は綺麗な緑一色だったし、空気もまったく冷たくない。山を下ってきたとはいえ、ここもそこそこの標高があるはずだが、それでもこんなに違いがあるのかとレオンには驚きだった。

町の中は思ったほどうるさくはないが、もちろん、村よりも圧倒的に人が多い。そもそも、町の大きさが違うのだ。村何個分だろうかと思えるくらいの広さがある。大通りには石畳が敷いてあって、石造りの建物もある。どちらも、村にはなかった物だった。そもそも、道なんて概念がない場所だったのだ。

そんなわけで、田舎者のレオンだと、道に迷う可能性が十分にある。闇雲に歩いたら、確実に迷子になる自信があった。ギルド窓口のケイトさんに、大通り沿いにありますと説明されていたので、とりあえず石畳の上から出ないようにしているが、それでも不安なので、度々道を尋ねた。結局、歩いて10分くらいですと言われた場所にたどり着くまでに、30分はかかっただろう。もっとも、あまりの物珍しさに、思わず商店などを眺めたりしていたので、それで余計に時間をとられたのもあっただろうけれど。

それでもなんとか、目的の場所にたどり着いた。まだ日は高い。もしかしたら、日が暮れるまで迷う羽目になるかもしれないと覚悟していたが、なんとかなったようだ。

レオンが立っているのは、木製の巨大な両開きのドアの前。

看板には、ガレットの酒場の文字。

見上げると、本当に巨大な建物だった。レオンにしてみれば、この町の建物はどれも十分に立派な物ばかりだったけれど、この建物

は立派を通り越して、否応なく威圧感が感じられる。恐らく、木造3階建て。もしかしたら、4階があるのかもしれないが、レオンにとっては大差ない違いだった。幅も奥行きも、もの凄く広い。凄い物だという感想はもちろんあったが、どちらかというと、倒れてきそうで怖いなという思いが強かった。いったいどうやって、こんな巨大な物を支えているのだろうか。

何はともあれ、自分はお世話になるんだ。

レオンは深呼吸した。

やっぱり、少し緊張する。

そう思った時だった。

「じゃあ、ちよつくら行つてきまーす」

扉越しに、女の子の声が聞こえた。活発そうな、明るい口調だった。

それに答えたのは、対照的に、低くて、野太い声だった。

「しつかりと息の根を止めてこい！」

もの凄く物騒な発言だったが、声に似合い過ぎていた。

「分かつてるって。というか、今日も来るわけ？」

「俺の勘がそう言ってる。新米はこの時期になると、懲りもせず次から次へとやってくる、相場は決まってる」

「そっかー。まあ、そうかもね」

「だから、ここできつちり処分しておかねえと面倒な事になる」

「でもさー、ケイトさんからの依頼を待った方がよくない？」

「あんなもん待つてられるか！とつと行つて、さくつと仕留めて来い！それがめえの仕事だろうが！」

「はいはい。じゃあ、まあ、出会い頭にぶすつとやってくるよー」
そこで扉が開かれようとしていた。

レオンはどうしようか迷った。

新米って、自分みたいな冒険者見習いの事だろうか。

その息の根を止める。処分する。さくつと仕留める。

何でだろうか。

ケイトさんからの依頼とか言っていたけど。

その理由は分からない。分からないけれど、もしかして大ピンチだろうか。

逃げようかとも思ったが、扉が開かれるまで一瞬だったため、そんな暇はなかった。

扉の正面にレオンは立っていたため、必然的に、出てきた人物と目があった。

彼女もまた、ブラウンの瞳をしていた。年の頃は、たぶんレオンと同じ10代半ばくらい。利発そうな顔立ちに、栗色の髪を高い位置で縛ったヘアスタイルが相まって、より活発そうな印象が際だっている。

扉越しに聞こえた声は彼女のものだろう。だけど、顔立ちはともかく、あまり荒事が出来るようには見えなかった。一般的な少女のどちらかという華奢な体つき。しかも、厚手の淡いピンクの服の上に、白いエプロンを着けている。すごく平和的な格好だ。

それでも、出会い頭にぶすつとされないか、一応警戒してしまっただ。

「あ、もしかして、見習い冒険者の人？」

少女がさばさばとした感じで聞く。

ここではないと言ったら、今度こそ刺されるのだろうか。

だが、レオンが返事をする前に、少女がすたすたとこちらに歩み寄って来て、あつという間に腕を掴んできた。

「え？あ、いや、その・・・」

慌てるレオンに、少女は笑いかける。屈託のない笑みだった。

「まあ、いいからいいから。お父さんに挨拶するんでしょ？」

「お父さんって？」

「いいからいいから。とにかく、入った入った」

楽しそうにそう言いながら、少女はレオンを店内に引っ張り込んだ。

店内は想像通り、もの凄く広かった。

中央の奥にカウンターがあり、その両脇には上り階段がある。そして、それ以外の場所には、丸いテーブルとイスが山ほど置いてあった。こんな大規模な建物の中に入るのは、もちろん初めてである。床も壁も木製で、特に光沢があるわけではないのだが、不思議と輝いて見えた。照明がたくさんあるせいだろうか。その照明も、見上げるくらい高い位置にある。

物珍しさに店内をキョロキョロ観察しているレオンを、少女はぐいぐいとカウンターまで引っ張っていく。屋内には食欲をそそるいい匂いが漂っていた。

店内のテーブルには空席が多いが、それはまだ昼間だからだろうか。それでも、こんな時間から酒を飲んでいるお客が10人ほどいた。そして、その全員が強面で、体つきがいい。間違いなく荒事をしている人達だろう。

つまり、冒険者達。

彼らと同じ場所にいる。その事実嬉しくなったが、目が合うと睨み返されたような気がしたので、じろじろ見るのは控えた。

10秒余りの道のりで、カウンターまでたどり着く。その辺りは、つんとした匂いが漂っていた。お酒の匂いだろうか。

そこにいる人物を見て、レオンは驚く。

なんというか、本当に想像通りの人物だったのだ。ギルドでは肩すかしだったが、時間差でついに巡り会ってしまった。特に会いたかったわけではないけれど、意味もなく感動した。

カウンターにいた男は、少女と言葉を交わす事なく、いきなりレオンに質問した。

「見習いか？」

「あ、はい・・・あの、ガレットさんですよ？」

男は値踏みするようにレオンを見てから、少女の方を向いた。

「おい。お前はとつと仕事してこい」

「なんでー？こっちの方が面白そう」

「見せ物じゃねえんだ。いいから、さっさと終わらせてこい」

「しつかたないなあ。まあ、また後で会えるからいつかなー」

少女は諦めたようにそう言うと、不意にレオンの肩を叩く。

レオンがそちらを向くと、少女は不敵な笑みを浮かべた。

「頑張つてね。うちのお父さん、この町で最強だから」

「最強？」

「じゃあね。また後で」

そう言つてウインクすると、軽やかな足取りで店から出ていった。何を頑張るんだろうとレオンは首を捻ったが、よく分からなかった。とりあえず、刺されなくて済んだ事が、よかったといえればよかった。

「名前は？」

唐突に問われて、レオンはまたカウンターの男に視線を戻す。

「あ、すみませんでした。レオンです」

男は腕を組んだ。それだけで、剥き出しになった二の腕に相当な大きさの力瘤が出来た。

まさに想像通りである。

カウンター内に立っている目の前のこの男こそ、レオンがおぼろげに想像していた人物そのものだった。冒険者に志願した自分を出迎えるのは、きっとこういう人物だろうと思っていたのである。

浅黒い肌に逞しい体つき。厳めしくて、彫りの深い面構え。頼りになる人物というのはもちろんだが、見習い冒険者を指導する立場の人物としても、申し分ない容姿だった。具体的には、それだけの威厳と威圧感が間違いなく備わっている。そして、腕っ節もあるに違いない。少なくとも、腕相撲では絶対に勝てないし、腕を折られたとしても不思議はなかった。

まだ名乗って貰っていないが、彼が恐らく、この酒場の主人のガレットだろう。

「レオン。お前、ギルドに行ったか？」

「はい。それで、ここに挨拶してくるように言われて・・・」

「そうか」

男はレオンの言葉を遮ってそう言った。

こちらをじっと見つめてくる。見つめるというのは穏やかな表現で、レオンにしてみれば、睨まれている感じだった。

「1年だ」

突然、男はそう言った。

「はい？」

「1年だけは面倒みてやる。だが、それで駄目なら諦める。これが約束出来るか？」

レオンは自分に問いかけてみた。

周囲からは静かな話し声が聞こえてくる。誰もこちらを気にしている様子はない。それも当然だと言えるだろう。自分はまだ見習い以下の、とるに足らない存在。

レオンの答えは一つだった。

「あの・・・1年もお世話になっていいんですか？」

こんな自分を1年も面倒をみてくれるなんて、こんなに有り難い話はない。

男の太い眉がぴくりと動く。

だが、次の瞬間、にやりと笑った。男臭い、だけど、さっぱりして印象のいい笑みだ。

「ガレットだ。寝床と飯は俺に任せろ。特に、お前の身体はまだまだ成長の余地がある。もつと食わせてやるから覚悟しろ」

「食わせてって・・・そこまでして貰っていいんですか？」

そう聞くと、ガレットは笑った。

「謙虚な奴だな！いいから食え！とにかく食え！ちゃんとギルドから金を貰ってるから、そんな事は心配いらねえ。お前が立派な冒険者になって、そこで儲けて金を返せばいいんだよ」

「あ、なるほど・・・」

レオンは頷いた。そういう仕組みだとは知らなかった。

「お前、何も知らないんだな。最近、妙な知識ばかりつけた連中が多いから、それが当然ってふんぞり返ってる奴がいるんだ。そう

「いう奴を見極めて、腐った奴を半殺しにするのが俺の仕事だ」

「半殺しって・・・」

店に入る前の、物騒な会話が頭を過ぎる。

「そういうわけだったんだが、俺はもう決めた。お前は面倒みてやる！1年間、せいぜい頑張ってみろ！」

そう言つて、愉快そうに笑いながら肩を叩いてきた。床が抜けるんじゃないかと思うくらいの衝撃で、きっと骨が少し歪んだだろう。だが、半殺しに遭うよりは何倍もいい。

「これからよろしくお願いします」

頭を下げるレオンを見て、ガレットはまた笑った。そして、自分がイスに腰掛けると、レオンにも座るように言った。

レオンも近くのイスに座った。

「俺も昔は冒険者だったんだ」

ガレットはそう切り出した。

「お前のような見習いの時期も当然あった。だから、多少はアドバイス出来る。ただ、専門的な事は難しいが・・・レオン、お前はジニアスか？」

「いえ、一応アスリートの方を」

前世云々の話は、出来たら避けたいところだった。

ガレットはレオンの身体を一瞬だけ眺める。

「そうか・・・しかし、お前だと重い鎧は無理かもしれねえな。武器屋には行ってみたか？」

「いえ、まだ全然」

「そうか。なら、まだ日が高いうちに行つてこい。鎧の仕立てには時間がかかるから、一日でも早い方がいい」

「分かりました」

「時間があつたら、道具屋と、あと伝承者にも会つてこい」

「伝承者？」

「それも知らねえのか・・・くそ、肝心な時に、あの馬鹿娘はいねえしな」

馬鹿娘というのは、恐らくさつきまでいたエプロン姿の少女だろう。今はどこかに行っているが、それは目の前の父親が追い払ったからである。だが、それを堂々と指摘する度胸はない。

「まあ、あの馬鹿に期待しても仕方ねえな。とりあえず、今日するべき事は分かったな？」

「はい。場所が分からないですけど」

「それは教えてやる。だが、その前に・・・」

急にガレットはイスから立ち上がって、そのままカウンター奥のドアを開けて、その中に入ってしまった。

調理場だろうか。開けた瞬間に、いい匂いが漂ってきたので、なんとなくそう思った。

そういえば、まだ昼食を食べていなかった。

お腹が減った。そう思った瞬間だった。

ガレットがドアの向こうから姿を現す。だが、レオンの目が釘付けになったのは、彼が持っている物だった。

羊肉だろうか。その巨大なステーキ。

こんな肉の塊を見るのは、お祭り以外では初めてだった。

ガレットはその肉が盛られた器を、レオンの前に置いた。

「とりあえず、今日はこれくらいで勘弁してやる」

レオンはそれをまじまじと見つめてから、急に居ても立ってもいられなくなってきた。

「いえ、あの・・・こ、こんなに!？」

ガレットは可笑しそうに言う。

「食えねえってのか?これくらい食わねえと、体力つかねえぞ」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

「何だ?男だったら、はつきり言ってみろ」

「こ・・・これ、凄く高価なものなんじゃ?」

レオンにしてみれば、当然の疑問だった。

こんな豪華な食事を食べる事なんて、村では滅多にない事なのだ。それこそ、一年に一度の祭りくらい。量もそうだが、この金銭感覚

のギャップに、戸惑わざるを得ない。

だが、しばらくの沈黙の後、ガレットは大笑いした。

「気にするな！とにかく食べ！食って食って食いまくれ！そうしねえと、ここ一番って時に力が出ねえぞ！」

そう言われても、なかなか踏ん切りがつけられるものではない。

「さつきも言っただろ？ギルドから金が出るんだ。つまり、お前の先輩が出した金だ。その先輩達も、見習いの頃はギルドの金で飯を食ったんだ。俺だってそうだ。お前は俺が出した飯を食って、それを血と肉にして、次の奴らの為に金を稼げばいいんだよ」

正直、まだ迷っていた。レオンの村はあまり裕福とは言えないからである。

だけど、これを通るべき道なんだ。

レオンは肉を切って、口に入れた。

齒ごたえがあって、肉汁が口の中に広がる。

「美味しい・・・美味しいですね！」

控えめに口にしたが、実際には想像以上の味に感動して泣きそうだった。

次々と口の中に放り込む。その勢いは全く衰えない。

ガレットはイスに座って、そんなレオンを眺めていた。相変わらずの素敵な顔の中にも、どこか優しいものが含まれていた。

「そうだな・・・夏までに体重を、今の半分増やせ」

その言葉に、レオンは吹き出しそうになった。

「半分！？半分って・・・ぶくぶくになりますよ」

「誰が肥えろって言ったんだ？食って、鍛えて、筋肉にするんだよ。いいか？夏までだ！そうしねえと、一年で魂の試練場を攻略するなんて絶対出来ねえ。とにかく、必要なのは身体だ！鍛えて鍛えて鍛えまくれ！」

そこで、店のドアが開いた。

聞こえてきたのは、先ほどの少女の声だった。

「あつれー？まだ生きてたの？」

いきなりの発言に、レオンはむせた。

「お前、仕事は？」

ガレットの声が少し低い。その目の前にいるレオンは、ステーキを頬張りながらも若干不安になった。

レオンは振り返ってみた。

少女は父親の威圧感をものともせず、すたすたとこちらに歩いてくる。

「途中でホレスに会ったから、任せてきちゃった。別にいいでしょ？」

「あいつか？なんで町にいるんだ？」

「知らないけど、別にいいじゃん、どこにいたって。それよりも・
・彼、ご飯食べてるって事は、合格なの？」

「何か悪いか？」

「悪くないけど・・・へえー」

少女がこちらの顔をまじまじと見つめてくる。やや切れ目だが、大きな瞳。あまりに遠慮のない視線に、レオンは少したじろいだ。

「おつかしいなあ・・・ちょうどぼっこぼこにされてる頃だと思って、楽しみにしてたのに」

「楽しみって・・・」

そんな事しまないで欲しいと、レオンは心底思った。

少女はガレットに視線を戻す。

「何がよかったの？なんか、私の方が強そうだけど」

「ずばずば言うなあと思ったが、どちらが強いかはともかく、自分が弱そうに見えるのは確かである。それに、実際に喧嘩する事になったら、自分は女の子を殴れないだろうから、そういう意味では間違いないと言えない。」

「ギルドが許可したんだつたら、そもそも俺がどうこう言える立場じゃねえんだよ。合格も不合格もねえ」

そうなのかと思ったが、案の定、少女はすぐに反論した。

「うっそだー。今まで何人も追い返したくせに。ギルドが断った人

よりも、お父さんが追いついた人の方が、絶対多い」

「俺が追いつくような奴は、どうにもならねえ奴らばかりなんだよ。そういう奴をギルドで追いついたりしたら、変に逆恨みする馬鹿もいるから、一旦許可してこっちまで連れてこいって言うてあるだけだ。そこで俺が綺麗さっぱり諦めさせてやる。断りの代理をしてるだけなんだよ」

「お父さんだって、逆恨みされたら困るでしょ？」

「俺に逆恨みする度胸があるなら、いいじゃねえか。その時は面倒みてやる」

「私とかお母さんとかを狙ってきたらどうしてくれるの？」

「いい度胸だ。そんな奴はどうしようもねえから、きっちり止めを刺してやれ」

なんというか、凄い発想だなとレオンは思ったが、少女も納得がいかなかったらしい。不満を表情で示した。

「私の身は可愛くないのかー？」

ガレットはどこ吹く風だった。

「可愛いだあ？普通の娘だったらまだ分かるけどな」

「私、普通の娘！」

「誰が普通なんだよ。普通の娘は、親父の殴り合いを見て喜んだりしねえだろうが」

普通の娘じゃなくても、きつとあまり喜べるものではない。その正論に、少女も一瞬口ごもる。だが、本当に一瞬だけだった。

「むう。でも、血を分けた娘なんだから、普通は少し心配になるものでしょ？」

「心配したなあ。昔は」

「普通は今も心配でしょ！私、年頃の娘なんだけど！」

ガレットの眉がピクリと動く。本能的に、レオンは身の危険を感じた。

「年頃は年頃でも、お前は棘があり過ぎるんだよ！お前に手を出そうなんて命知らずな男がいるわけねえだろうが！」

だが、少女は全く恐れる様子もなく堂々と言い返す。

「それはお父さんのせいだって！俺を倒せる男じゃないと嫁にやらんとか、そんな恥ずかしい事を堂々と言われたら、誰だってちよつと引くに決まってるでしょ！」

「それだけじゃねえだろうが！お前が今まで何人の男を返り討ちにしたと思つてやがる！そんな女に誰が近寄ろうとすんだよ！」

「下心丸出しの奴だったら、身を守つて当然でしょ！」

「それらしい守り方があるだろうが！普通の娘は実力行使に出たりしねえんだよ！」

「実力があるんだからいいでしょ！」

「まずそこが普通じゃねえんだよ！」

いい加減、レオンは口を挟む事にした。

「あの！」

凄い形相の2人に睨まれて、レオンは思わず両手を挙げた。その両手にはナイフとフォークが握られたままである。

圧倒的な視線に負けそうになりながらも、レオンはなんとか進言した。

「・・・喧嘩はやめませんか？他のお客さんもいるし」

そう言つて周囲に視線を走らせてみるが、どういうわけか、誰も気にした様子はなかった。

もしかして、いつもの事なのだろうか。

ガレットとその娘は、2人同時に大きく息を吐いて、そして、一瞬で口元に笑みを見せた。

「・・・そうね。今日はまあまあよかったかも」

「そうだな。悪くない」

レオンには、その言葉の意味が分からなかった。

「え？・・・あの、どういう意味ですか？」

2人は何食わぬ顔で言つた。

「親子のコミュニケーションなの。たまにやるんだけど、今日は結構いい戦いだつたわ」

「ストレス発散でもある。なかなかスッキリするんでな」

レオンの身体に、どっと疲れが押し寄せた。

どこからか、その戦いだったのだろうか。気を揉んだ自分が馬鹿みたいである。

そこで、ガレットが思い出したように言った。

「ベティ。そいつが飯を食い終わったら、伝承者の所まで案内してやれ」

「デイジーのところ？」

「そうだな・・・それと、ニコルの所も」

「ニコルもー？大丈夫なの？」

「真面目な奴だから、大丈夫だろ」

「染まつちゃったら困るでしょ」

「いざとなったら、俺がどうにかする。とにかく、会わせてみる」

「はい。まあ、面白そうだからいいけどね」

なんて素直な返事なのだろうか。さっきの口喧嘩は本当に嘘みtaiである。そういえば、店に入る前の会話も結構スムーズなものだった。

そこでレオンは気付いた。

「あ・・・ベティさんっていうんですか？」

そちらを向いて聞くと、ベティは微笑んだ。栗色のポニーテールと瞳が印象的な、活発そうな少女。腕が立つようだが、それももしかしたら冗談なのかもしれない。

「そう。ベティ。その親父の娘で、ここでも働いてるからよろしくねー」

「あ、はい。僕はレオンです。よろしく」

「レオンはさあ・・・」

すぐに会話を始めようとするベティをガレットが止めた。

「先に飯を食わせてやれ。冷めちまうぞ」

「あ、そうだねー。さあ、とっとと食えー」

ベティが笑いながらレオンの背中を叩く。

その衝撃で食べ物が変な場所まで入ってしまい、レオンはしばらく咳が止まらなかった。

名店の看板娘

自称、ガレット酒場の看板娘のベティは、気さくというよりは、かなりの話好きな人だった。

なんとか豪華ランチを攻略したレオンを待っていたのは、彼女との苛烈なトーク。質問責めのフルコースだった。レオンを武器屋まで案内してくれる道すがら、彼女の口が休む事はない。全く遠慮のない視線と物言いに圧倒されて、レオンは個人情報ほとんど吐露する羽目になっていた。

他にも、村の事、家族の事、友達の事、さらには、気になった女の子の事まで。

そして、レオンがなるべく言うまいと思っていた事も、あつという間に暴露させられた。

「へえー。それって、記憶喪失みたいなものじゃない？」

石畳の道から、脇道に入った所だった。

ベティがそう評価したのは、前世を見た事がないというレオンについてである。

「記憶喪失ですか？」

「そうそう。こう・・・なんていうの？強いショックとか受けたら人って記憶を忘れちゃう事があるみたいなんだ。私が懲らしめてやった奴らが、よく言うのよねー。あの日の事が思い出せないって」それは思い出せないのか、それとも思い出したくないのか。いずれにしても、聞いてて楽しい話ではなさそうだ。

「前世がない人っていうのは、ちよつと聞いた事ないし。だから、忘れてると思うのが普通なんじゃないかなー。案外、お父さんに1発貰ったら、ショックで思い出すかも。やってみたら？」

「え、いや・・・1年経つてもダメだったら、その時はお願いしま

す」

ベティは可笑しそうに笑う。屈託のない笑い方だった。

「分かった」。その時は私も加勢してあげる」

「やめて下さい。そもそも、一発だけなのに、どうやって加勢するんですか」

「特別製の重いやつを貸してあげる。それで、ドカンと・・・ね？」
何か、ハンマーみたいな物を振り下ろす仕草。

「ねって言われても・・・逆に現世の記憶も忘れてしまいそうなので、出来たら素手の方でお願いします」

「あ、ここだよ」

レオンの言葉を華麗にスルーして、ベティは足を止めた。

彼女のすぐ脇に建っているのは、普通の民家をさらに縮小したような、はつきり言って小屋みたいな所だった。レオンも立ち止まって、そこをまじまじと見るが、見れば見るほどこじんまりとした建物である。看板のような物もどこにもない。小屋自体は石を積んで造つてあるようだ。

「・・・ここ、何ですか？」

ベティはその言葉も無視して、その小屋のドアを無造作に開けた。

「たのもー」

そう言つて、レオンの腕を掴んで小屋の中に引きずりこんでいく。引きずられるまま中に入ったレオンだったが、中を見ても、そこが何なのか分からなかった。狭い室内には大きい台と椅子が2つあるだけ。商品らしきものもない。レオンたちが入ってきたドアとは反対側、台を挟んだ向こう側に同じ大きさのドアがあるが、他には窓すらない。

だが、人間なら1人だけいた。

台にもたれ掛かるようにして、奥の方を向いていた少女が、こちらを振り返る。

一瞬少年だろうかと思うほどの中性的な顔立ち。服装も、白いシ

ヤツの上にポケットの多い黒のベストという、どちらかというと男性的なファッションである。それでも彼女を女性だと思ったのは、整った小さな顔と線の細い身体、そして、ベティと同じポニーテールからだった。ただし、髪色はやや赤みがかったライトブラウンで、瞳の色も明るい。凜々しい顔立ちとギャップがあつて、どこか不思議な印象がした。

少女は一瞬だけこちらを見たが、すぐベティに視線を戻した。

「何？あれならまだ出来てないよ」

容姿は少年っぽいが、声は確かに女性のものだ。

「そうじゃなくて、彼、今日見習いで来たんだ。だから、鎧の注文」
「何？」

少女がこちらを見る。レオンはとりあえず、挨拶した。

「どうも初めまして。レオンと言います」

こちらをまじまじと見る少女。なんとなく気まずかったが、とりあえず黙っている事にする。

「・・・なんか弱そうだけど、大丈夫なの？」

やっぱりそう見えるんだなあと、レオンはちよつと落ち込んだ。

「さあ？一応お父さんがオツケー出したから、たぶん大丈夫なんじゃない？」

「ガレットさんが？へえ・・・」

信じられないといった表情だった。そんなに弱そうに見えるのだろうか。

「まあ、そんなわけだから、鎧作つてあげて。出来るだけ軽くて丈夫なやつ」

「そんなの当たり前。みんなそう言うよ。もっと詳しい注文はないの？」

「そうだねー。とりあえず、あんまり重い鎧は無理なんじゃないかって・・・後は、初心者だから、安くて適当なやつでいいんじゃないかなー。どうせすぐ壊すだろうし」

酷い言われようだったが、もしかしたら、最初はすぐ壊れるのも

のなのかもしれない。

だがやっぱり、その注文ではダメだったようだ。少し呆れたような顔をして、少女は奥のドアに手をかけた。

「父さんに聞いてくるから、ちょっと待ってて」

そう言い残し、少女は扉の向こうに消えた。

小屋の中は静かになる。

レオンはベティに聞いた。

「あの・・・父さんっていうのは？」

ベティは不思議そうな顔で聞き返す。

「父さんって、父親の事だけど？」

「それくらい知ってます。さっきの人のお父さんは何をしてる人なんでしょうか？」

「武器屋ってというか、鍛冶職人なんだ。向こうに工房があるの。ここは、一応店なんだけど、商品は陳列しないんだって。注文貰ってから作りたいんだってさー。その人に合った物しか作りたくないからって」

「へえ・・・」

「すごいんだよー。ジェフさんは、王様から賞を貰った事もあるんだから」

「本当ですか!？」

ベティはあっさりと言ったが、それはもの凄い事なんじゃないだろうか。王様直々に賞を授与される事なんて、滅多にない事のはずである。

「だから、たまに遠くからお客さんが来る事もあるんだ。よかったね。そんな人に武器とか鎧の面倒をみて貰えて」

「あ、はい。僕にはもったいないような気がしますけど」

「そんな事ないと思うなー。あの一家は、みんなマニアなんだよ」

「マニア？」

「そうそう。あの家は・・・」

そこで、奥のドアが開いた。顔を出したのは、先ほどの少女であ

る。

「こっちに來て」

何の前置きもなしにそう言われたので、レオンはすぐに反応出来なかったが、ベティの方は慣れた様子で少女の方に歩き出す。

それを見て、少女の方が止めた。

「ベティ。その格好で入るの？」

言われた本人は立ち止まって、自分の服装を確認する。淡いピンクの厚手のワンピースに、白いエプロン。春らしい装いだと言える。「まあ、いいんじゃない？余所行きってほどじゃないし」

「汚れたら大変だよ。着られなくなってから後悔しても遅いんだからね」

「怖いこと言うなあ」

ベティが迷っているところを、レオンは始めて見た。服の事は気になるのだろう。やっぱり女の子なんだと、失礼な感想を抱いてしまった。

「分かった。私、留守番してるね。ジェフさんによろしく」

「はいはい。誰か来たら、適当に接客しといて」

「適当でいいのー？」

「適当がいいの。変な注文だけはとらないで」

「変な注文って、どんな注文？」

そこで少女は口ごもった。若干だが頬が朱い事に、レオンは気付いた。

「・・・とにかく、よろしく。レオンさんは、こっちにどうぞ」

そう言って、少女は扉の向こうへ消えてしまった。

いったい何があったのだろうかと思って、レオンはベティの顔を見たが、彼女はいつもの微笑みを返すだけだった。少し悪魔的な笑みだったかもしれないが。

とりあえず、それは見なかった事にして、レオンも奥の扉を開ける。

そこは屋外だった。すぐ前に下り階段があって、その終点の先に

金属製の扉がある。その扉の前に少女が立っていた。

レオンはそこまで歩いていく。

どうやらそこは、地面をくり抜いて作った地下室のようだ。石の壁面に鉄の扉。レオンの村にはない、立派な物だ。

扉の前まで来ると、熱気のような物を感じた。それと同時に、金属を叩くような音もはつきりと聞こえてくる。

「服が汚れるかもしれないけど、それくらいは大目に見て」

少女はにこりともしなかったが、冷たいというよりも、むしろ格好いいと思った。不思議な感覚だ。

「あ、はい。それは平気です」

「あと、なるべく静かにしてて」

「静かにつて？」

「父さんは仕事中なので」

「あ、なるほど」

レオンは頷いた。鍛冶仕事の邪魔をしないでくれという意味だろう。

それを見て、少女は扉を開けた。重そうな扉に見えたが、少女はそれを軽々と開ける。

中はまさに鍛冶場そのものだった。それも、レオンの村の物とは比べものにならないほどの広さである。一番奥に炉があつて、鍛冶台が3カ所。他の場所には、注文された物なのか、金属製品が所狭しと並べられている。鎧や剣といった物はもちろん、鎌や鍬といった農具もある。

その鍛冶台の一カ所では、男性がまさに鍛冶作業中といった様子だった。剣か何かだろうが、細長い金属を炉に入れて軟らかくしてから、鍛冶台に移して叩く。しばらくして、それをまた炉に戻すといった作業をしている。

レオンはその流れるような作業にしばらく見入っていたが、少女がいつの間にか室内に入っているのを見て、慌てて自分も中に入った。

服が汚れると忠告されていたが、恐らくそれは避けようがないだろうと思われた。目に見えるくらいの煤が宙を舞っているのが見える。

レオンが室内に入ったのを確認してから、少女は作業中の父親に声をかけた。

「父さん」

すると、男は手を止めてこちらを見る。

レオンが想像していたよりも、ずっと小柄な男性だった。少なくとも、ガレットさんに比べたら子供のようなものだろう。だが、身体は引き締まっているし、腕も十分逞しい。鍛冶職人としての風格は十分にあつた。

男はしばらくレオンをじっと見つめる。見えているのかいないのか、分からないくらいの細い目である。ついでに言うと、髪が全くない。ベティと少女が同じ年くらいだろうから、この男性とガレットさんも、その年代は変わらないはずだが、まだ毛がふさふさのガレットさんに比べると、この男性はだいぶ老けて見えた。

しばらくレオンの身体を観察した男性は、ふっと視線を少女に移し、そして再び作業に戻ってしまった。

何だっただんだろうと思っていると、少女が突然こう言った。

「もう終わり」

「・・・はい？」

「出ましょう」

少女はスタスタと歩いて、扉から出て行ってしまった。

仕方なく、レオンもそれについて行く。

そのまま階段を上ろうとする少女を追いかけながら、レオンは聞いた。

「あの・・・今のは何だっただんですか？」

少女は振り返りもせず answers。

「父さんはあれで大抵の事が分かるの。武器は5日くらい。鎧は2週間くらいで出来ると思う。だから心配しないで」

「心配っていうか・・・例えば何が分かるんですか？」

見ただけで、何が分かるというのか。

「身体とか靴のサイズとか、手の大きさとか、あと、使いこなせる武器とかも」

「・・・どうしてそんな事が分かるんですか？」

「プロだから」

そんなにプロって凄いのか。

「でも、使いこなせる武器なんて、自分でもよく分かりませんけど」
レオンは村にいた時に、剣や弓に一通り慣れるくらいの訓練はしたが、専門家がいたわけではないので、まだ初心者くらいの腕しかない。

「体つきでいたい分かるんじゃない？私も詳しくは知らないけど」
もしかしたら、適当なのかもしれない。

レオンはちよつと心配になったが、よく考えたら、武器や鎧を仕立ててくれるだけでも十分恵まれた話である。ここであれこれ注文するのも、おこがましいだろう。

そう納得した頃に、少女が階段を上りきって扉を開ける。

そこでレオンは初めて気づいた。

小屋の中から男性の声がする。もしかして、お客さんだろうか。

レオンも階段を上りきって室内を覗いてみると、やはり男性がいた。

彼はすぐにこちらに気づいたようだ。

「あれ？見ない顔だね。お客さん？」

彼が聞いているのは、ベティではない少女の方である。だが、答えたのはベティだった。

「そう。今日来た冒険者見習いなんだ。だから、そのうちラッセルのところにも行くと思うよ」

「ああ、そうなんだ」

そこで、ラッセルと呼ばれた青年は納得したように微笑んだ。背が高いが、濃い瞳と髪をしていて、真面目で誠実そうな青年である。

彼は黄土色のエプロンをしていて、両手でやっとな持てるくらいの大
きさの木箱を抱えていた。

「それ、注文してたやつ？」

聞いたのは明るい髪の少女である。

青年は嬉しそうな表情で答える。

「そうなんだよ。やっとな届いたから、すぐに持ってきたんだ。ずつ
と待たせてたから、申し訳なくて・・・とにかく、中身を確認し
てくれる？」

そう言つて、ラッセルは木箱を少女の前の床に置いた。少女はす
ぐに蓋を開けて中身を調べ始める。中に入っていたのは鉱石の様だ
った。だが、鉄とか銅というわけではなさそうだし、明らかに精錬
前である。そのままでは使えないはずだから、自分達で精錬するの
だろうか。

ラッセルはそんな少女をしばらく見てから、レオンの方を向いた。
「僕はラッセル。冒険者向けの道具屋してるんだ。ダンジョンに
挑戦する頃になったら、いろいろ道具が必要になると思うから、そ
の時にはよろしく」

すごく話しやすそうな人だった。

「僕はレオンです。その時はよろしくお願いします」

「ラッセルは店長なんだよー。それも、結構やり手な」

ベティの言葉に、レオンは驚いた。レオンとそう変わらない歳に
見える。少なくとも、20歳は越えていないはずだ。

ラッセルは照れたように頭の後ろに手をやる。

「やり手ってほどでもないけど・・・前の店長だったお爺さんが引
退したから、成り行きで僕が店長なだけで、そんなに腕があるわけ
じゃないんだ。僕が作った店じゃないからね」

「でもさー、仕入れ代行みたいな事まで始めてるし。それって、な
かなか才能がないと出来ないと思うなー」

「それだって、お爺さんのコネがあったからだしね。道具屋という
よりは、便利屋みたいなものだと思って貰えばいいよ。レオン君

も何か特定の素材が欲しくなったら、僕に言ってくれば都合出来るかもしれないから、その時はよろしく。もつとも、そこまでギルドは面倒みてくれないから、取り寄せた素材はタダではないけどね」

そこで、鉱石を調べていた少女が木箱の蓋を閉めた。

「うん。これならたぶんいける」

ラッセルがすぐにそちらを向いた。

「よかった。じゃあ、下まで運んでおくよ」

「それくらい、私がやるから・・・」

「いいよ。こんな重い物持って階段で転んだら、怪我じゃ済まないかもしれない。そんな事をお得意様にさせられないよ」

ラッセルはそう言って、木箱を持ち上げた。そのまま奥のドアに向かい、それを足で開けて、ドアの向こうに消えていった。それを後ろから少女が追っていく。

どういうわけか、それを見届けたベティがクスクスと笑い出した。

「・・・どうかしたんですか？」

レオンが聞くと、ベティは意味ありげに微笑む。

「ラッセルも、なかなか頑張るよねー」

「え？まあ、仕事頑張ってますけど」

「そうじゃなくてさー・・・レオンは、リディアの事どう思う？」

リディアという名前に心当たりがなかった。

「誰ですか？」

「あ、まだ言ってなかった？さっきまでいたのが、ジェフさんの娘のリディア。ここの受付と、あと、細かい装飾品とか作ってるんだ」

「」

明るい髪と瞳をした、中性的な顔立ちの少女。彼女の名前がリディアという事らしい。物言いがつつけんどんな感じだが、それが格好いいと思わせる不思議な印象の少女だった。細かい装飾品とは、アクセサリーとかの事だろうか。

「へえ・・・そのリディアさんがどうかしたんですか？」

「だから、レオンはリディアの事、どう思った？」

「どうって言われても・・・なんとなく格好いい人ですね」

レオンがそう言うと、ベティが何度か頷いた。

「そうそう。まあ、そういう事なんだ」

「・・・どういう事ですか？」

「だいたい分かるでしょー？」

「全然分かりませんが」

その言葉に、ベティが苦笑する。珍しい表情だった。

「レオンはさあ・・・」

「はい？」

「人生の楽しみを、半分くらい損してると思うな」

レオンはその言葉に首を捻るばかりだった。

伝える者達

通されたのは、立派な調度品でいっぱいの部屋だった。

ベティの案内で次にやってきたのは、とある民家だった。民家と言っても、お屋敷と言ってもいいほど立派な建物である。綺麗に整えられた庭の周りを、高い柵が囲っている。入り口にも、家紋らしきものが彫られた門が設えてある。広さはそれほどでもないという事だが、それを補って余りあるほどの風格がその家にはあった。

その応接間らしき一室。初めて座るソファという物の感触に多少戸惑いながらも、レオンにはもつと気になる事があった。

自分の隣に座っているベティが、口元とお腹を押さえて身悶えているからである。しかし、彼女は別に、体調が悪いわけではない。ただ、笑いを堪えているだけなのだ。

その原因は、レオンの正面に座っている老人にあった。

立派な白髭を蓄えたお爺さんである。ただ、顔にはしわが深く刻まれているし、目蓋もほとんど上がっていないように見える。さきほど見てきた鍛冶師のジェフさんよりも明らかに年上の、真正正銘の老人である。この部屋に入ってくる時も杖をついてたし、非常にゆっくりとした足取りだった。座っている今も、かなり腰の曲がった前傾姿勢だ。

だが、ベティの笑いのツボにはまったのは、そのお爺さんの頭である。

きつと既に髪がないのだろう。そんな曖昧な表現になってしまうのは、その頭を占拠している生物、いや、妖精がいるからだだった。

歳経た木の幹のような焦げ茶色の毛。その中から、木の葉のような深緑の瞳がふたつ、ぱつちりと開かれてこちらを見ている。老人の頭の上で腹這いになっているが、眠っているわけではないようだ。

なんとなくだが、レオンにも、ベティが言わんとする事は分かった。つまり、お爺さんの頭上のカーバンクルが、ちょうどお爺さんの髪の毛みたいに見えるという状況。偶然なのか、故意なのかは分からないが、この奇跡的なフィット感。それでいて、その奇跡を全く意に介した様子のない、老人と妖精の堂々たる役者振り。レオンはそれほどではないが、確かにユニークな絵だとは言える。

それでも、本人を目の前にして、中々そこまで笑えるものではない。幸い、お爺さんは気にする様子はないが、もしかしたら見えていないだけかもしれない。その事が、さらにベティの笑いを誘っているのかもしれないが。

まだ笑いを堪えているうちはいいが、そのうち大声で笑い出すのではないかと、レオンはひやひやしていた。

そこで、部屋に少女が入ってくる。お盆の上に、ティーカップが4つ。紅茶のようだった。

「面白いでしょう?」

レオンの前にカップを置きながら、少女が言った。一点の曇りもない笑顔だった。

「え? あ、いや・・・」

何の事ですかとも、そうですねとも答えにくい質問だった。かといって、そんな事ないですよと答えるのも、隣で身悶えている少女のせいで説得力がない。

レオンが答えあぐねていると、少女が老人の隣に腰掛ける。すごく洗練された座り方だった。育ちがいいとはこの事かと思い知る。

レオンは自然と背筋を伸ばした。

「お楽にして下さい。いいんですよ。ベティくらい横になって貰っても」

実際、ベティはソファの背にもたれ掛かるようにして横を向いている。寝転がっていると言っても過言ではない。だが、さすがにそこまでリラックス出来なかった。というか、リラックスとはまた別の問題だ。単に笑い顔を隠しているだけである。

「いえ、それはちよつと・・・」

「冒険者さんともなると、普段から気を抜かないものなのですか？」

「まだ見習いなので分かりませんが・・・とりあえず、僕は大丈夫です」

「そうですか・・・でもご遠慮はなさらないで下さいね」

少女は微笑む。その微笑みも、ベティの屈託のない笑みとは少し違う。どこか抑制された、品格を感じさせる表情だ。

とりあえず、笑いから抜け出せないベティは放っておく事にして、レオンは話を切り出す事にした。

「あの、僕はレオンと言います。今日、見習い冒険者になったばかりです。よろしく願います」

「私はデイジーです。こちらが祖父のフレデリック。よろしく願います」

デイジーが少しだけ頭を下げる。もの凄く優雅な動きだった。田舎者のレオンは、こういった所作に全く免疫がない。否応なくそわそわしたし、そして、ドキドキした。

これが本物のお嬢様なんだ。

所作もさる事ながら、彼女は見た目でも、落ち着きと洗練さを兼ね備えていた。ほぼ黒髪と言えるほどの濃いダークブラウンの髪は、艶やかに真っ直ぐ腰まで伸びていて、前髪も綺麗に切り揃えられている。派手さはないものの、小さく整った顔立ちをしていて、華奢な肢体を象牙色のワンピースが包んでいる。一輪の花という表現がぴったりの、慎ましい可憐な少女だった。

レオンもちろん綺麗な人だと思ったが、それよりも、自分が場違いみたいで気が引けた。彼女自体は綺麗な花でも、それを育てあげた環境を連想してしまう。彼女の洗練された所作が、彼女の後ろ盾を否応なく思い出させるのだ。

彼女に見入ってしまいそうになっていたレオンは、なんとかそれを振り払った。今日の目的はとりあえず顔を見せておくというもの

だったが、もちろんお見合いではない。冒険者見習いとしての訪問である。そして、レオンには聞いておきたい事があった。

「あの、デイジーさん。こんな事聞くのもおかしい話かもしれないんですけど・・・」

レオンはその質問をデイジーにする事にした。本当はお爺さんの方がいいのかもしれないが、彼女の方が話しやすそうだったからである。

「何でしょうか」

デイジーの黒い瞳が瞬く。何か引き込まれてしまいそうで、レオンは直視出来なかった。

「伝承者っていうのは何なんでしょうか？僕、そういった事を全然知らないで・・・」

「あ、いえ。知らない方も、たまにいらつしゃいますよ」

そう言つてデイジーは微笑む。レオンは少し気が楽になった。

「簡単に言つと、伝承者というのは、伝説の冒険者の記憶を伝える人達の事です。偉大な事を成し得た方々が培った知識や経験を、今を生きる冒険者達に授ける事。それが伝承者の仕事です」

「記憶という事は・・・つまり、伝説になった人達が前世だったという事ですか？」

「そうです」

あまりにあつさりとした答えに、レオンはいまいち驚けなかった。

「・・・それって、凄い事ですよね？」

「凄いと言いますか、珍しい事だとは思いますが」

「いえ、だって・・・という事は、デイジーさんも、前世は伝説だったという事ですか？」

その言葉に、デイジーは笑つて首を振った。

「私ではありません。祖父です」

レオンはそちらを見た。

なんというか、どう見ても普通のお爺さんだった。だけど、伝説の冒険者が前世という事は、もしかして、若い頃は名のある冒険者

だったのだろうか。

表情から読みとれたのか、デイジーが説明する。

「祖父が冒険者だった事は一度もありません。武器の訓練所等で冒険者に関わってはいましたけれど、どちらかというと、ずっと裏方の仕事をしていたそうです」

「そうなんですか？ちよつと、もったいないような・・・」

冒険者になっていれば、それこそ偉大な功績が残せていたのではないだろうか。そう思っの発言だったのだが、フレデリックさんは全く微動だにしない。

そんなレオンを見て、デイジーはまた小さく首を振った。

「祖父は、これが自分のなすべき仕事だと思っていたそうです。そして、今思い返してみても、自分の選択は正しかったと思っっているそうです。自分が冒険者になっいても、きつと大成出来なかつた。それでは自分の役目を果たせなかつたと・・・これは、祖父の口癖です」

「役目ですか？」

「つまり、自分の経験を伝えたい、後輩を指導したいという思いが強かつたという事ではないでしょうか。レオンさんは、ソードマスターの話聞いた事はありませんか？」

ソードマスターも伝説となつた冒険者の1人だ。レオンもその称号はもちろん知つていたが、具体的な事はほとんど知らない。詳しい逸話を知つているのは、レオンの故郷の村が出身であると言われている、サイレントコールドこと、イブという名前の女性についてのみである。

「いえ、全然・・・称号を聞いた事はもちろんありますけど」

「ソードマスターは、その称号の通り、比類無き剣技を誇つたとされる冒険者です。しかも、それが大剣でも細剣でも、例え初めて握つた剣であっても、自由自在に扱う事が出来たとか」

「へえ・・・」

凄い事だとは分かつたが、あまり実感がわかなかつた。まだ剣の

技術でそれほど苦勞した経験がないからだろうか。

「そんな彼ですが、非常に子供好きだった事でも知られています。彼が冒険者になったのも、身よりのない子供達に孤児院を作る為だったそうです。そこで自分が剣を教えて、冒険者として独り立ちさせる。そんな計画だったのですが、資金が集まって、孤児院を建てる話がまとまった矢先、彼は姿を消してしまったのです」

「え……どうしてですか？」

「そこで彼は最後の戦いに向かったのだらうと、そして彼は帰ってこられなかったのだらうと言われています。事実、その時期には天災が多発していたのですが、彼がいなくなった翌年から、ぱったりとやんでいるのです。つまり、天災に匹敵するような強大なモンスターと戦って、相打ちになったのではないかと……そして、自分がいなくなってもいいように、孤児院の話だけはまとめておいたのではないかと、そう言われています」

応接間に沈黙が満ちた。

まるで知らないその伝説の人物について、レオンは想像でしか触れる事が出来ない。彼は最後の戦いに向かう時、どんな心境だったのか。もう戻って来れないと分かっていたのだらうか。そんな強い敵を倒せた事ももちろんだが、自分がいなくなった後の事まで考えていた。今の自分には遠すぎて見えないような強さだ。

デイジーは微笑んだ。この静かな空気にも全く水を差さない、淑やかな笑みだ。

「祖父の記憶のほとんどは、子供達との思い出なんだそうです。ですから、戦うのは自分の役目じゃない。自分の役目は教える事だった……」

「……そうですね。すみませんでした。もったいないなんて言うて」

十分立派な役目なのだ。その価値を昔の自分が教えてくれたのだから、なおさら無視は出来ない。

レオンはフレデリックさんに頭を下げる。お爺さんは愉快そうに

少しだけ笑った。弱々しい笑い方だが、十分優しさも感じられる。頭上のカーバンクルは、その深緑の双眸で、じっとこちらを見つめていた。

「それに、ソードマスターの記憶を受け継いでいる人は祖父だけではありません。ですから、どなたか他の記憶をお持ちの方が、立派な冒険者になっておられるのではないのでしょうか」

それは確かにそうなのだ。偉大な人物の記憶ほど、多くの人に分化して伝えられる。何を隠そう、レオンの母親も、サイレントコールドの記憶を持っていると言っていた。

そこでレオンは気付いた。

もしかして、自分の母親も伝承者だったのだろうか。仕事としては、ただの主婦というか、農家だったわけだが、その資格があったという事なのだろうか。

「すみません。伝承者っていうのは、伝説の冒険者の記憶を持っている人って事ですか？」

デイジーは少し首を傾げる。

「どうでしょうか・・・そういう方ばかりとは限らないと思いますけれど」

「えっと・・・もう少し詳しく説明していただけませんか？」

「もしかして、どなたか記憶をお持ちの方に心当たりがあるのですか？」

思ったより勘がいい。レオンはその洞察力に驚く。

それだけで、ばれてしまったようだ。デイジーは口元に手を当てて、少し笑った。特にやましい事があったわけではないが、レオンは気まずくなる。

「一応ですが、ギルドから伝承者として認められるには条件があるんです」

「あ、ギルドに認めて貰わないといけないんですね」

「そうですよ。だって、お仕事ですから」

全くの正論だった。自分で名乗るだけでお金が貰えるわけがない。

「すみません。僕、田舎者なので・・・」

デイジーはクスツと笑う。上品さの為か、嫌らしさが全くない。

「ギルドの条件は3つです。1つ目は、16歳以上である事。2つ目は、ギルドで面接試験を受けて、それに合格する事。つまり、そこで冒険者の助力になり得る人がどうか、見極めるのだと思います。そして、3つ目は・・・」

そこで祖父の頭に目をやる。

「カーバンクルと共にある事です」

レオンは驚いた。カーバンクルが何かの役に立つのだろうか。

そこでふと、ギルドでの会話を思い出す。

「もしかして、何かの記憶を伝えてくれるとか、そういう事ですか？」

ギルドにおけるカーバンクルは、志願者の前世を読みとって、それを受付の女性に伝える役目を果たしていた。だったら、逆の使い方も出来るのだろうか。

デイジーは頷いて肯定する。

「必要だと判断すれば、この子はソードマスターの記憶を直接レオンさんに見せてくれます。それがレオンさんの悩みを解消するきっかけになったり、場合によっては、突然剣の腕が上達する事もあります。伝説となった人の記憶を伝える。それが伝承者の仕事です」

「へえ・・・」

ようやくレオンにも伝承者の役割が分かった。要は、先人に話を聞きにいくという感じだろうか。その道で伝説となった人にアドバイスを貰いにいく。それがただの言葉ではなくて、直接見る事が出来るものならば、確かな価値があるのではないだろうか。

「それに、すぐ隣に武器の訓練所もあります。今はギルドのものですから、レオンさんも使っていただけます。遠慮なく使って下さい」

「あ、はい・・・お世話になります」

そういえば、フレデリックさんは、若い頃に武器の訓練所に関わっていたという事だった。このお屋敷の隣にある建物がきつとそう

なのだろう。

レオンは閃いた。

「もしかして・・・例の孤児院っていうのが、それですか？」

何の根拠もない思いつきである。口にした途端に、自分でも、どうしてそんな事を思い付いたのか不思議になった。

デイジーは驚いた表情を見せたが、すぐに微笑んで、首を横に振った。

「違います。ソードマスターが生きていたのは、この町が出来るより、ずっと前ですから」

「そうですか・・・そうですよね」

「でも、同じかもしれませんね」

「え？」

祖父を見ながら、デイジーは優しく微笑んだ。

「ソードマスターの記憶があつたから、祖父が携わったのです。彼が建てた孤児院も、祖父が大きくした訓練場も、同じ思いで出来たものです。だから、同じかもしれません」

少し前とは違う静寂。

暖かくて、ずっと居たくなるような、心地よさが満ちる。

レオンも、大昔の伝説の男性に思いを馳せる。

皆が持っている前世というものの重みが、ほんの少し分かったような気がした。どういうわけか、自分にはそれがないわけだが、特に困った事はなかった。だけど、今、ほんの少しだけ、羨ましいと思つた。

この町の歴史よりも長い時間を経ても、伝わってきた物。

「・・・そろそろ帰ります。大事なお話をありがとうございました」
レオンが腰を上げようとする。いい加減帰らないと、日が暮れてしまう。まだ行くところが他にもあるのだ。

それをデイジーが止めた。

「もうちょっと、待ってあげたらいかがですか？」

「はい？待つつて・・・」

レオンは自分の隣を見た。

そして、呆れた。

妙に静かだとは思っていたのだ。

ベティはいつの間にか、ソファの上で寝息を立てていた。

正体不明

「いやー。ごめんごめん」

「いえ、まあ・・・起きて貰えてなによりです」

あまり悪びれた様子のないベティに、レオンはその言葉を返すのがやっとだった。

ソファの上で眠りこけていたベティを起こすのに、レオンは予想外の苦勞をさせられた。最初は普通に声をかけてみたのだが、全く反応がない。仕方ないので、肩を揺すってみたのだが、それでもダメだった。そこで、最終手段として、頬を叩いてみる事にした。叩くと言っても、そんなに強く叩いたわけではない。顔に少し違和感がある程度でも、気になって起きるだろうという目論見だった。

だが、ベティの反応は過剰防衛以外の何者でもなかった。

「私も油断してたなー。まさか、会った初日に、しかも他人の家で、レオンに襲われるとは思わなかった」

さらっととんでもない事を言うので、レオンは周囲を気にしたが、幸い誰もいなかった。裏路地と言ってもいいようなところだから、人通りは少ない。

日も少し陰り始めている。

「襲ってません。人聞きが悪い事を言わないで下さい」

どちらかというと、襲われたのはレオンの方だったが、もう指摘する気力もない。

そんなレオンの主張を聞いているのかいないのか、ベティは両の拳を打ち合わせながら、何度か頷いて言った。

「でも、バッチリ迎撃したし。うんうん。さすがにお父さん仕込みなだけはあるなー。スカートじゃなかったら、もう一発蹴りが増えて、6連コンボだったのに」

「・・・是非毎日スカートにして下さい」

「レオンはスカートが好きなのー？」

「何でそんな話になるんですか。被害縮小の為です」

「でも、もし本気で襲われてたら、私、スカートでも蹴りは出すよ？というか、それでもし中を見られたら、見た物を忘れるまで徹底的にやるから、うーん・・・どっちがいいんだろうね？」

どっちにしろ、蹴りが出る事は避けられないらしい。

レオンは溜息を吐く。

「・・・というか、僕が襲ってないと分かっているながら、5回も攻撃してきたんですか？」

その指摘に、ベティは真顔で頷いた。

「見習い冒険者なんですよー？あれくらい普通に避けられないと」
出だしの裏拳を貰った時点で、見習い冒険者としては残念な感じだが、その後の、眉間を狙いにきた右手の突きと、それを必死に避けたあとに、胸ぐらを掴んできたのはすぐに弾いた。だけど、その後の牽制のビンタにお膳立てされた、左のアップパーは避けられなかった。この後に、ズボンだったら蹴りがお見舞いされていたようだが、もし出ていけば、恐らく綺麗に入っていただろう。

つまり、レオンから見て、2勝3敗。蹴りがあつたなら、2勝4敗。

しかも女の子相手に。

情けないと言われても、全く反論出来なかった。

落ち込んだ様子のレオンを一応心配してくれたのか、あっけらかんとした様子で、ベティが肩を叩いてくる。

「まあまあ。冒険者もいろいろあるし、多少弱くてもなんとかなるって。これから強くなればいいんだから」

「・・・そうですね」

「そうだ。レオンはスニークの事知ってる？」

スニークも伝説の冒険者の称号である。この町に来る荷馬車の中でも、名前が出た人だ。

「えっと、称号くらいは」

「あの人も最初は弱かったんだって。というか、女の子だったって噂だし」

「確か、本当の名前を誰も知らなかったって人ですよね？」

「そうそう。名前どころか、性別とか年齢も分からなかったって。変装の達人だったっていうしねー。ずっと正体を隠してたから、どんな事してたのかとか、いつ死んだのかとかも分からないんだって」

「・・・そんな人が伝説に残るような事をしたって、どうして分かったんですか？」

「あ、ここだよー」

ベティがまたもやレオンの質問を無視して立ち止まった。本日2回目だ。このマイペースぶりに、既に慣れ始めている自分に驚きだった。

今度も立派な民家だが、フレデリックさんの家ほどではない。木造平屋だが、そこそこの広さがある。ユースアイでは、これが平均的な民家のようなだ。今日だけでも結構町の中をうろろしたが、だいたいこれくらいの民家が多い。それか、もう少し狭い代わりに二階建てか。ガレットさんの酒場や、フレデリックさんのお屋敷は別格である。この家も、広い庭があつて、ガレージのような物が建っているから、もしかしたら裕福な方なのかもしれない。

ベティは躊躇う様子もなく、勝手に敷地内に入っていく。仕方ないので、レオンもその後続いた。

ところが、彼女が向かったのは家の方ではなく、ガレージの方だった。

その扉の前に来たところで、レオンは尋ねた。

「こんな所に、伝承者がいるんですか？」

もう1人伝承者に会いに行くのは知っていた。だけど、それ以外の事は何も聞いていなかったのだ。

「うん。大抵こっちにいるんだー。ここがニコルの部屋みたいなも

のかな」

「へえ・・・」

広さはともかく、あまり住み心地がよさそうな建物ではなかった。特に、冬は凍えそうだ。隙間風が吹きそうなくらいだから、この時期でも、きつと朝晩は寒いだろう。同じ伝承者であるフレデリックさんと比べると、生活にかなりの差があるように思えた。

ガレージからは、何か、カチャカチャという小さい物音がする。

「レオン」

「はい？」

「ちよつと、ノックしてみて」

ガレージのドアをノックしろという意味らしい。入り口には、窓のついたドアがあるのだが、その窓には張り紙でもしてあるのか、室内を窺う事は出来ない。

「・・・僕がですか？」

今まで、止める間もなく、何でも自分でやってきたベティだけに、急にそんな簡単な事を頼むのは違和感があつた。

ベティは微笑みながら言った。

「いいからいいから。とにかくやってみて」

「別にいいですけど、何で急に・・・」

「今度からはレオン1人で来るわけでしょ？ だったら、慣れておいた方がいいと思うな」

「慣れないといけないような事があるって事ですか・・・」

多少うんざりしながらも、レオンはドアの前まで進み出る。ドアをノックしたくらいで、何か起こると思えない。だけど、妙な緊張感が、レオンの身体を包んだ。

呼吸を整える。

そして、軽くドアを叩いた。

その直後だった。

子供の悲鳴。何かの金属製品が崩落したような物音。どちらもガレージ内からだった。

自分のノックなど、軽く音が出る程度である。思いもよらぬ過剰反応に、レオン自身が一番戸惑った。

すぐにドアが開く。

その向こうにいたのは、まさしく子供だった。性別ははっきりしないが、身体つきから言っても、レオンより年上という事はある。レオンは16歳ながら小柄な方である。そのレオンより明らかに小柄だから、恐らく12歳くらいだろうか。その小柄な身体を、グレイのシャツとモスグリーンの膝丈のズボンで包んでいる。子供らしいファッションだった。

だが、一番の注目点は、その子供が、両手を目元に当ててしゃくりあげている事だった。

どう見ても泣いている。

「泣かしたー」

背後から、これ以上ないくらい無責任な声が飛んてくる。振り返ると、ベティの悪魔的な微笑みが目に飛び込んできた。

「え？いや、その・・・」

泣かせるつもりはなかったし、泣かせるような事をした覚えもない。だけど、もしかしたら、本当に自分のせいなのだろうか。

レオンはもう一度子供の方を見た。

よく分からないけれど、とにかく可哀想だった。見ていて、気の毒な気分になる。

とりあえず、謝ろう。

「えっと・・・その、ごめんね」

なるべく優しく言ったが、効果はない。子供はやや俯いたまま、すすり泣くだけである。

まさに途方に暮れた。

泣いている原因も分からないし、どうやったら泣き止むかも分からない。

レオンはまた振り向いた。ベティに助けを求めたのだ。

困り果てたレオンの表情を見て満足したのか、ベティが意味あり

げに頷く。そして、子供の方を向いて、やや大きな声で言った。

「ニコルー。仕事だよー」

その言葉に、レオンは意表を突かれた。確か、ニコルというのは、ここに住む伝承者の名前のはずだ。だけど、フレデリックさんの孫のデイジーが言うには、伝承者になるには16歳以上でないといけないはずである。だから、きつとこの子はニコルという人物とは別人だと思っていたのだが。

レオンは子供の方に視線を戻す。
びっくりした。

ニコルと呼ばれた子供が、レオンの目の前で目を輝かせていたからだ。

「近!？」

いつの間に寄ってきたのか。というか、さっきまで泣いていたのはなんだったのか。

ニコルの目は、全く赤くなっていない。髪は濃い色だが、瞳は明るいブラウンだった。子供らしい、大きな瞳だ。

「本当に!？仕事って事は冒険者見習いだよね?うわあ!凄い!ねえ、どこから来たの?ジーニアス?それともアスリート?なんかあんまり強くなさそうだけど、うん、でも、これくらいの方がいいなあ。ちよつと弱いくらいの方が工夫しがいがあるし。僕、ニコルって言うんだ。僕のところに来たって事は、伝承者の仕事だよね?うわあ……。やった!嬉しい!もう何でも聞いてね!特に、鍵開けとか、そういう細かい作業なら、もうなんでも!あと、ちよつとした仕掛けだね。そういうの、ガジェットって言うんだけど知ってる?ここにもいっぱいあるんだ。君も絶対気に入ると思うよ!どうどう?見ていかない?見ていかない?」

いつの間にか、右手を両手で包み込まれていた。

レオンはゆつくりとベティの方を振り返る。

「……だいたい分かりました」

おおよその事は、ニコル本人の口から暴露されていた。

ベティは少し笑いを堪えながら言った。

「良かったねー、ニコル。これからはレオンが実験に付き合ってくれるから」

「そうだよね・・・うわあ！ダンジョンで試せるなんて、楽しみ！」

「いや、試すって、僕はまだ・・・」

レオンの言葉をニコルが遮る。

「あ、そうか。もしかして、まだ成り立て？」

「え？あ、うん」

「そっか・・・うんうん。でも大丈夫。楽しみは後にとっておかないとね！」

それはいったい何が大丈夫なのだろう。とりあえず、レオンの安全を保証しているわけではなさそうだ。

「じゃあとりあえず、僕の作った物を見ていつてよ。なんなら、実際に・・・」

「あー、ゴメン。ニコル」

そこで割り込んだのは、意外にもベティだった。

「レオンは他にも行くとこあるから、また今度でいいかなー？出来たら今日中に回っておきたいんだよね」

そんな話は聞いていなかったレオンだったが、何も言わない事にした。ベティの表情が、いつもとさほど変わらないながらも、目元が真剣に見えたからだった。

ニコルは残念そうな表情を顔いっぱいに浮かべたが、すぐに頷いた。

「仕方ないね。じゃあ、えっと・・・レオンだったっけ？また今度おいでよ。いろいろ用意しておくから」

「あ、うん・・・また今度、よろしくお願いします」

レオンが軽く頭を下げると、ニコルは笑顔に戻って、ガレージの中に戻っていった。

ドアが閉められ、辺りは静かになる。

それを見届けてから、レオンは息を吐いた。何もしていないが、

何か終わったという達成感があつた。

振り返ってみると、ベティは既に帰り道を歩き出していた。

慌ててレオンもそれを追いかける。敷地から出た辺りで彼女に追いついた。

「他に行く場所なんてあるんですか？」

開口一番にそれを聞くと、ベティは口だけで微笑んだ。珍しい表情だった。

「ないよー」

「じゃあ、どうして嘘を言ったんです？」

「レオンはまだ心の準備が出来てないから」

「僕ですか？」

ベティは前を向いた。その横顔は、いつもの彼女よりも大人びて見える。そのギャップにレオンは驚き、そして、一度大きい鼓動が聞こえた。

「ニコルは悪い子じゃないんだけど・・・うーん、いや、違うな。」

ニコルは悪い子なんだよ」

あまりにもあっさりと言い切ったので、レオンは一瞬思考停止した。

「・・・えつと、ニコルさんって、さっきの子の事ですよ？普通の子供に見えましたけど」

「そうなんだけどねー。なんていうのかな、ニコルは悪戯っ子なんだ」

「悪戯っ子ですか？それって、そんなに珍しい事じゃないような・・・」

ある程度の悪ふざけは、子供なら誰だつてするだろう。

「あの子はちよつと違うんだ。なんていうのかな・・・ニコルは自分が出した事が悪い事だつて分からない子なんだよね。私はニコルじゃないから、本当はどう思ってるのかは分からないけど」

「僕はもつと分かりませんけど・・・それが僕とどう関係するんですか？」

ベティはこちらを向いた。優しい微笑み。これもまた珍しい表情だ。

「私はね・・・ううん、私達は、つまり、今日レオンが会った人みんなだけど、ニコルの事が嫌いなわけじゃないんだ」

レオンは黙って頷く。

「だからね、レオンにも嫌いになって欲しくないなーって、思っただけなんだ。ちゃんと準備してからじゃないと、初対面の人に一瞬で嫌われるような、そんな子だから」

その理屈は分からないでもない。

でも、理由としては弱い。

「・・・それだけじゃないと思いますけど、違いますか？」

ベティはまた前を向いた。横顔だけでは、表情は読みとれないが、少し寂しそうに見える。

「私はニコルが嫌いなわけじゃないけど、でも、やっぱりちょっと怖いな」

言葉の最後が少し小さかった。口にするのが嫌だったのかもかもしれない。あるいは、口にするのを躊躇うくらい怖いのだろうか。

それ以上に、ベティの口から怖いという言葉が出てきた事が、驚き以外の何者でもなかった。怖じ気付く事のない、怖いもの知らずの女の子だと思っていたのだ。

その彼女が恐れているのが、何の変哲もない子供。

「昔はね、ニコルと一緒に遊んだりもしたんだよ。だけどね、だんだん遊ばなくなったんだ。本当に、ニコルの事は嫌いじゃないんだよ。だけど、なんとなく一緒にいなくなった。これは、私だけじゃなくて、みんなそうなんだ。そして、最近、やっと理由が分かったんだ。ニコルといるとね、影響されるんだよ」

「影響ですか？」

「私も悪い事が分からなくなってた。ニコルみたいに、社会のルールが見えなくなるんだ。それが怖くなって、ニコルから離れていったんだよ」

「えっと、つまり・・・僕も影響されるかもしれないという事ですか？」

ベティは頷かなかった。

「レオンはニコルにとって初めての仕事なんだ。あの子が伝承者になったのは、つい最近の事だから。初めてだから、何が起きるか分からないんだよ。レオンがどうなるかも分からないし、ニコルがどうなるのかも分からない。だけど、ニコルにしてみたら、今が大きな節目なんじゃないかって思うんだ。だから、なるべく上手いって欲しいって、そう思ってるだけなんだよ」

そこでベティはようやくこちらを向いた。いつもの屈託のない笑みだった。

「もちろん、一応レオンも心配してるんだけどね。でも、多少レオンの根性が曲がった程度の事なら、お父さんがどうにかしてくれるから平気だよ。命の保証は出来ないけどねー」

どこか、言葉に迫力がない。

今の説明を聞いただけでは、レオンには、この町の人達とニコルの関係が分からなかった。嫌われているわけではないが、皆から距離を置かれている。口で言うのは簡単だが、上手く想像できそうもない。

だけど、なんとなく、レオンはベティの様子を見ただけで、どうい感じの話なのかは分かった。もちろん、楽しい話ではない。だが、辛い話かというと、少し違う気がした。

寂しい話というのが、一番しっくり来る。

「・・・分かりました」

「何が？」

「要は、ニコルさんと町の人達が馴染む事が出来ればいいんですよ？」

その言葉に、ベティは少し戸惑ったようだ。

「いや・・・別に、そこまではしなくていいと思うけど。レオンはとりあえず、冒険者になればいいんじゃない？そうすれば、ニコル

の仕事も成功って事になるわけだし」

「いえいえ。町の人達に恩返し出来るかもしれないですし」

「でもなー。1年しかないんだよ？」

「1年でだめなら、もう1年頑張ります」

「そこまではお父さんも面倒見てくれないと思うけど」

「その時は、どこかのお店で働きます」

「・・・なんていうか、本当にそうなってそうで嫌だなー」

ベティは呆れ顔をしてから、それでも、すぐにいつもの微笑みに戻った。

「まあいい。せいぜい頑張れー」

声が低い。どうやら、ガレットさんの物真似らしい。

レオンは笑った。

「さすが親子ですねえ」

「そう？こういうの、ニコルは上手なんだよー。なんといつても、スニークの伝承者だから」

変装の達人のノウハウを生かしているのだろうか。

「へえ・・・というか、スニークの伝承者だったんですか」

「そうだよー。昔から、家の鍵とか普通に針金みたいなので開けてたし。たぶん町中の家の鍵は開けたことあるんじゃないかなー」

当たり前前みたいに言ったが、もちろん一般的な趣味とは言えない。

「いや・・・それ、泥棒ですか？」

「練習してたんだってさ。だから、ニコルの家は鍵穴がないんだよー。なんか、ネジみたいなのを差してドアを固定するんだ。それだったら、ニコルも開けられないから」

自分の子供基準の防犯対策をしているらしい。

「・・・それ、ドアの内側で使うんですね？じゃあ、出かける時どうするんですか？」

「それは気にしないんじゃない？だって、ニコルは閉まってる鍵にしか興味ないから」

もはや、防犯対策ではなかった。

「・・・出かける時に閉められない鍵って、意味ないですよね？」
「そもそも、泥棒なんて滅多にいないし。それに、ニコルに開けられるって事は、普通の泥棒なら開けられるって事だから」

正論みたいな口調で言ったが、きつと何か間違っているだろう。けれど、これ以上聞くと深みにはまりそうなので、レオンは話題を変える事にした。

「・・・えっと、ニコルさんって、16歳ですか？」

伝承者なら最低16歳。だが、全然そうは見えなかった。何かの特例だろうかと思つての質問である。

だが、ベティはあっさり認めた。

「そうそう」

「本当ですか？なんていうか・・・失礼ですけど、幼く見えますよね」

「見えるねー。全然胸もないし」

全然寝癖がないと言っているのと同じくらいの軽い発言だった。

レオンはそこにも深入りしない事にする。

「・・・というか、あの、もっと失礼なんですけど、ニコルさんは女性ですか？」

子供っぽいのもあるだろうが、鍛冶屋で会ったりディアどころではないくらい、見た目では性別が分からなかった。

「私はそう思うけど」

「・・・私は？」

「本人は秘密だつて言ってるからねー。というか、男女どちらの服でも似合うし、変装も上手だし」

「・・・ご両親に聞いてみたりはしないんですか？」

「何か、口止めされてるんだって」

どうしてそこまでして隠すのだろうか。

「一緒にお風呂に入ったりとか、ないんですか？」

「だって・・・もし男だったら恥ずかしいし」

それは確かにその通りだ。

「レオンが入ってみればー？女だったら儲け物でしょー？」

「儲け物って・・・」

「でも、胸がないからダメかー」

ベティは平然と言ったが、さすがにレオンは恥ずかしくなった。

「そういう事を言うのはさすがに・・・」

「あれー。レオンはない方がいいの？」

「違います。変な話をしないで下さい」

当然というべきか、やっぱりベティは止まらなかった。

「やっぱり大きい方がいいでしょ？私よりもデイジーの方が実はあるんだよー」

一瞬デイジーの胸元を思い出そうとした自分に気付いて、慌ててそれを打ち消した。目の前のベティに至っては、首から下を見られそうにない。

レオンはしどろもどろになる。

「いや、そういう事じゃなくて・・・」

「じゃあ、形の問題？それとも触った時の・・・」

「わー！わー！」

耳を押さえながら必死で叫ぶと、ようやくベティも止まってくれた。悪魔的な表情だった。弄ばれていたのは、間違いなさそうだ。

「レオンはさあ・・・」

次は何を言い出すのかと思って、レオンは心の準備をする。

だが、ベティの言葉は、今度こそ正論だった。

「いくら強くなっても、たぶん女の子には勝てないよねー」

思いつきり上半身から力が抜けた。

反論の余地は欠片もない。

「・・・せめてモンスターには勝てるように頑張ります」

不思議なもので、今ならばどんなモンスターにでも立ち向かえる気がしたレオンだった。

プロフェッショナル・アイ

「よし！休憩！」

その一言で、レオンの身体は看板が倒れるみたいに後ろに傾く。地面の衝撃。

固いけど痛くはない。土の匂いが鼻を掠める。

剣と盾を離して大の字になった。

空は青い。

小さな雲。

子供達の歓声。

レオンは深呼吸した。体内の熱い空気を吐き出すと、代わりに外の冷たい空気が入ってくる。

心地良い疲労感。

だが、それとは逆のもややしたものが、小さいながらも心の中にはあった。

やっぱり上手いじゃない。なんとなく、分かってはいたのだけだ。

小さく息を吐く。先ほどの深呼吸とは違い、心の中のわだかまりを追い出そうとしたが、今度は上手いかなかった。

レオンがいるのは、この町で一番大きい訓練所である。伝承者をしているフレリックさんが大きくしたという施設だ。場所はそのフレリックさんのお屋敷のすぐ隣。今はギルド所有の建物という事だが、どうやらフレリックさんが、今でも管理人の立場なようだ。

訓練所といっても、レオンのような冒険者見習いは全くいない。むしろ、子供達が剣を習いに来る場所になっているらしい。子供達が20人くらい走り回っても十分過ぎるほどの屋外スペースに、着

替えや休憩の為の小屋が併設されている。小屋といっても、家具さえ揃えれば、1家族が十分暮らせる規模の物だ。その中に、刃を潰した訓練用の武器や、簡易防具が大量に保管されている。

自分の武器と防具が出来上がるまで、レオンはここで戦闘訓練をする事にした。どんな武器が用意されているか分からないというのがなんとも言えないところだが、とりあえず、鍛えておくに越した事はない。

「レオン」

まるで刃のように硬質な男性の声に、レオンは身体を起こす。

その彼が、ちょうどこちらに向かつて水筒を差し出したところだった。お世話になっている酒場のガレットさんが用意してくれた水筒である。小屋の前に置いていたはずだが、わざわざ持ってきてくれたようだ。

「アレンさん。どうもありがとうございます」

水筒を受け取りながら、御礼を言う。そのまま彼は、レオンの正面に座り込んだ。

少し長めの黒い髪。黒い瞳に、鋭い顔の輪郭。だが、彼の一番の特徴は、間違いなくその長身だった。かなり大柄なガレットさんよりもさらに上。彼より背が高い人間を、レオンは見た事がない。体つきは筋骨隆々というほどではないが、それでも鍛え上げられているのが分かる。正確としては、無口というほどではないが、どちらかというと寡黙な人物。頼りになるお兄さんという印象が強い。

それがアレン。彼はこの町の警備の他に、この訓練所の教師をしている。レオンがここを初めて訪ねた時に出迎えてくれたのが彼だった。そもそも教師は数人しかいないようだが、そんな縁もあってレオンの訓練に付き合ってくれているのだ。

「やつぱり上手くいきませんね。村を出る前に、少しは訓練したんですけど」

レオンから話を切り出す。アレンから話しかけてくる事はあまりないから、こちらから話さないと、ずっと沈黙が続くのだ。

アレンは表情を変えずに答える。

「そうでもない。レオンは筋がいい方だと思う」

その評価が、レオンには意外だった。

「・・・でも、僕、未だにアレンさんから一本も取れませんが」
誇張も何もなく、まさしくその通りだった。

この訓練所を訪ねて、今日は3日目である。初日にまず、アレンはレオンの腕がどの程度なのかを見てくれた。レオンが自己評価するなら、やっと剣の振り方を覚えたくらいの腕である。だが、それだけ出来れば十分だという事で、すぐに剣と盾と防具をつけて、アレンさん自ら訓練してくれる事になった。

実践形式というか、決闘形式である。剣の腕もさることながら、体格に結構な差がある。もう何十回と打ち合ったが、未だにレオンの剣が届いた事は一度もなかった。

「そんな簡単に一本取られても困る。それに、一本取って欲しいわけじゃない」

「え？そうなんですか？」

アレンは頷く。

「剣を通して、レオンの事を見せて貰っていただけだ」

「僕の・・・」

「剣は俺の専門分野だ。剣を通してなら、相手の事がほとんど分かる。だから、それに付き合っ貰っていただけだ」

「つまり・・・まだ訓練じゃなかったんですか？」

「強いて言うなら、剣を握る前に筋力トレーニングをさせていた。あっちが訓練だ」

確かに、妙に念の入ったトレーニングだとは思っていた。ちょっと騙されていたような感じもするが、自分は初心者なわけだから、それが普通なのかもしれない。

「ただ、あれだけ必死になって一本取ろうとしていた自分は何だったのか。」

空しくなったような、ほっとしたような、複雑な気分で溜息を吐

くと、アレンが唐突に質問してくる。

「レオン。もしかして、狩猟経験が相当あるんじゃないか？」

その指摘にレオンは戸惑いながらも頷く。

「あ、はい。父さんが狩人なので、よくついて行ってたんです。えっと、6歳からだから・・・そういえば10年間になりますね。もちろん、最初は見るだけでしたから、実際に狩りしてたのは、7、8年くらいだと思いますけど」

レオンのいた村では、狩りはとても重要なものだった。食肉を確保する上でももちろんだが、どちらかというと、山の動物達にこちらの縄張りを認識させるための仕事だった。

自然との共生。それがレオンの村の出身である、サイレントコールドことイブ様が大切にしていた教えである。

その答えに、アレンは大きく頷く。

「やはりか。お前の剣はそういう剣だった」

そういう剣と言われても、レオンにはさっぱりだった。

「えっと・・・どういう剣ですか？」

「まず、レオンは実践慣れしていた。普通は、いきなり人間相手に武器を振るうのは躊躇するものだ。相手が傷つくのを想像してしまうから、それを振り払うのには、相当な精神力がいる」

「いや、僕だって、結構躊躇してましたけど」

「確かにそうだが、普通はその程度じゃない。最初に人に相対する時は、誰もがどこかで負けたいと思っているくらいだ。相手よりも自分の剣を恐れる。自分の剣がとれくらい危険な物なのか分からないからだ。どんなに腕がある人間でも、最初は震えて力が出せない。だが、レオンは最初から俺を倒す気でいた。相対した俺なら分かる。レオンの剣は震えていなかった。それはある程度、他の生命を傷つけた事があるからだ」

そう言われると、確かにそうかもしれない。最初は確かに緊張したが、どちらかというと、上手く戦えるか心配していた為だった気がする。

土の上に座ったまま、アレンはこちらをじっと見つめている。

「そして、もうひとつ。レオンは戦士としての戦い方が、全く板に付いていない」

はつきり言われるとやはり残念だが、頷かざるを得ないところだった。

「それはそうですよ。まだほとんど訓練してませんから」

「いや、そうじゃない。レオンの戦い方は柔軟過ぎる」

「え？柔軟ですか？」

そう言われても、自覚はなかった。

「俺が教えている子供達は、ここに初めて来る時は皆真っ白な状態だ。他の戦い方を全く知らない。だから、ある程度教えていると、皆同じ様な戦い方になる。変な言い方だが、教師である俺の戦い方に染まっていくと言ってもいい」

「それはまあ・・・そうかもしれないね」

「だが、レオンの戦い方は、戦士の模範からまるで外れている。剣や盾の使い方は教わったようだが、はつきり言って全く様になっていない。俺には剣と盾が浮いて見えるくらいだ。それは、既にレオンの身体に他の戦い方が染み込んでしまっているからだ。その戦い方に、今日やっと確信が持てた。レオンはまさに狩人の戦い方をしている。大自然の、決して平坦ではない地形で生き抜くための、柔軟で軽快な身のこなし。そんなレオンに重い剣や盾を持たせても、上手くいくわけがない」

真っ直ぐな眼差しで、そう断言されてしまった。

たっぷり数秒間を空けて、レオンは尋ねる。

「えっと・・・それはつまり、僕には戦士が向いてないって事ですか？」

「そうだ」

「・・・あの、僕、一応アスリート志望なんですけど」

剣や盾が使えなければ、それを扱う事が専門であるアスリートにはなれない。

「レオン」

「はい？」

「ついてこい」

アレンが立ち上がりながらそう言うので、レオンも立ち上がる。彼が向かったのは、併設されている小屋の方だった。レオンもその後をついていく。ふと横を向くと、少し離れた場所で、男の子4人が小さなサイズの剣を一生懸命に振っている。なんとなく微笑ましい。デイジーからソードマスターの話聞いていたからかもしれない。

アレンは小屋の前でレオンを待たせると、自分だけ中に入っていた。

待つこと数分。なんとなく空を見上げる。今日もいい天気だ。しばらくして、アレンが小屋から出てくる。

出てきた彼は、盾を持っていた。だが、さっきレオンが持っていた物よりかなり小さい。ガレット酒場で使われているお盆みたいだと思った。

「これをつける」

その盾を差し出しながら、アレンは言った。

「え・・・これ、つける物なんですか？」

レオンの中で、盾と言えば、手に持つ物である。

その発言を聞いたアレンは、黙ってレオンの左腕を掴んで、盾の裏側中央から伸びているベルトの様な物を巻き付ける。

取り付けられてみると、さっきまで持っていた盾ほどではないが、それでも少し重い。

「バックラーだ」

アレンはそれだけ言った。この盾の名前らしい。

「へえ・・・」

腕を動かしてみるが、思ったよりもしっかり取り付けられているようだ。だが、盾としては、面積が寂しいので心許ない。

「レオン、ひとつ宿題を出しておく」

「え・・・何ですか？」

「両利きになれ」

もの凄く端的な命題だった。

「・・・えっと、両利きってというのは、つまり、両手が利くようになれって事ですか？」

「そうだ」

「それって・・・そんな簡単に変わるものですか？」

右利きの生活を既に16年も送ってきたのに、今更直せるものなのだろうか。

「簡単には直らない。だが、その盾を生かす為には必要な事だ。それは両手を空けながら、盾を利用する為の物だ。その方が、両手が使える分、より柔軟に戦える。だが逆に、分かつとは思うが、防御が手薄になる。防御を代償として、機動力と柔軟性を手に入れる。難しい戦い方になるが、レオンの狩人としての経験を生かすためには、これが最善だと思う」

「なるほど・・・」

理論としては分からないでもない。

「でも、両手が使えるとはいっても、具体的にどうしたら・・・」
アレンは頷いた。当然の疑問だったようだ。

「将来的には、二刀流出来るのが望ましい。つまり、左手でも武器を扱えるようになるのが理想だ。だが、とりあえず左手を空けておいても、武器や盾を捨てなくても道具が使えるし、あるいは、盾を捨てなくても弓の補助が出来るようになる。ただ剣を振るうだけではなく、場合によっては、弓や道具を使う。そういう幅広い戦術を意識するといい」

「なんていうか・・・頭を使わないといけませんね」

「そうだ。だが、それが出来ないレオンは生き残れない。レオンはガレットさんの娘のベティと面識はあるか？」

突然その名前が出てきた事に驚いたが、すぐに苦笑して頷いた。

「はい、もちろん。面識があり過ぎて困ってますけど」

面識だけならいいが、過剰なボディランゲージが伴っているので気が抜けない。気を抜いたら大怪我をさせられそうな、ある意味で元氣過ぎる女の子である。

アレンはくすりとせぜずに、真顔で頷く。

「彼女も狩人だ」

「え？そうなんですか？」

初めて聞く話だった。よく考えたら、自分の事は大方白状させられたが、彼女の事は何も知らない。

「まだ数年ほだから、レオンよりは経験が浅い。だが、彼女には同僚というか、師匠がいる。元々は彼1人で狩人をしていたんだが、事情があつてベティが手伝うようになった。彼の名前はホレス。聞いた事はないか？」

「あ・・・名前は一度だけ」

この町に來た初日、ベティが口になっているのを聞いた気がする。

「一度彼に会つてみるといい。彼は冒険者ではないが、かなりの腕利きだ。戦い方の参考になるかもしれない」

「あ、なるほど・・・分かりました」

「彼は日によつて居場所が違うが、ベティに言えば案内してくれるだろう」

「・・・そうですか。頑張つてみます」

「どうかしたか？」

「いえ、別に・・・」

何か災難が起こる気がするとは言えなかった。

そこで、2人に近づいてくる人物がいた。

レオンはすぐに氣付く。

「リディアさん」

鍛冶師のジェフさんの娘、リディアである。赤みがかつた茶髪を前と同じ高い位置で束ねている。どこか中性的な顔立ちの中に、明るい瞳が不思議な印象を放っているのは相変わらずだが、珍しく今日はスカート姿だった。珍しいとレオンが評価出来るのは、ベティ

から、リディアはスカートをほとんど穿かないと聞いていたからである。そのためか、以前は格好いい印象が強かったが、今日は一段と女性らしく見えた。

彼女は、布に包まれた大きな箱のような物を小脇に抱えている。

「アレンさん、レオン、こんにちは」

リディアは軽く頭を下げる。レオンだけ呼び捨てなのは、年齢を意識しての事だろう。彼女は17歳。レオンよりも年上なのだ。これも、聞いてもないのにベティが教えてくれた情報である。

「こんにちは。こんな所までお仕事ですか？」

「そう。ベティがここだつて、言つてたから」

「もしかして、僕に用事ですか？」

「アレンさんもいるなら、ちょうどよかった。とにかく、はい、これ」

持っていた箱を、両手でレオンに差し出す。

「・・・はいって、何ですか？これ」

リディアは即答した。

「武器」

「・・・僕の武器、箱ですか？」

「中身に決まつてるでしょ。開けてみて」

「え？あ、はい・・・」

剣とか槍にしては箱の大きさが小さかったので、中身が想像出来なかった。そもそも、武器をわざわざ箱に入れてこなくてもいい気がする。

布を取つてみると、中身は木箱だった。

その蓋を慎重に開ける。

中に入っていたのは、革の帯。

そして、黒い柄と鉄の刃。

レオンは取り出してみた。

「・・・ナイフですか？」

言葉通りの、それは短剣だった。正式にはダガーと呼ばれる物だ。

長さは30センチもない。箱の中身は、それが3本と、それを腰に下げる為のベルトのようだ。食事用のナイフよりは大きいものの、武器としては小型の物で、しかも軽い。扱いやすいのは間違いないが、威力は心許ない気がする。

だが、手に馴染むのは確かだった。子供の頃から狩りの度に握っていた物とよく似ているのである。思わず懐かしさを覚えたほどだった。鍛冶師のジェフさんが、自分を一目見て勝手に作った物だが、とりあえず、慣れている武器という点では間違いない。さすがの職人の目である。

「これは、投擲用か」

アレンが呟くように言った。

リディアが軽く頷いて答える。

「はい。だから、アレンさんに投げ方を教えて貰った方がいいと思
って」

「いや、投擲は専門じゃない。ホレスが知っていればいいが・・・」

「ホレスさんは接射が上手いですから」

「そうだな。知らない可能性が高い。そうになると・・・」

2人はそこで黙った。

レオンは、そんな2人をキョロキョロと眺める。

「えっと・・・もしかして、教えてくれる人がいないって事ですか？」

アレンとリディアは顔を見合わせた。

「いや、いるにはいる。もの凄い名手が」

「そう。だけど、ちょっと事情があつて・・・」

そこで突然、声が割り込んできた。

「事情って何の事ですか？」

レオンも驚いたが、それ以上に驚いたのは、アレンとリディアの方だった。いつもクールな2人だけに、驚いた顔は珍しい。

声の主の方に3人は注目する。

日傘の影の中にいたのは、長い髪が目を引き、落ち着いた容姿の

少女。3人のリアクションに戸惑っているようだが、それもどこか抑制されていて、育ちの良さを感じさせる。

この訓練所の隣にあるフレデリックさんのお屋敷。そこに住んでいる彼の孫娘。

「あ・・・デイジーさんですか。急に声がしたので驚きました」

レオンが笑いながら言うと、デイジーも微笑みを返す。

「それは失礼をいたしました。何か深刻な話かもしれないと心配になったものですから。この訓練所で、何か足りない物がありますか？」

「いえ、全然。ちょっと、この・・・」

そこでリディアに口を塞がれた。

だが、レオンが両手で持っているのだから、当然気になっただろう。デイジーは自然と箱の中身を見て、そして嬉しそうな声を上げた。

「まあ・・・素晴らしい一品ですね。これはジェフさんの作品ですか？」

聞かれたリディアは、諦めたように息を吐いてから、レオンを解放する。

「そう。お父さんの。バランスは私が調整したけど」

「ジェフさんもしリディアもさすがですね。とても綺麗に出来ています」

綺麗かと言われると、確かに綺麗かもしれない。だが、刀身はともかく、柄はただ真っ黒なだけの味気ないデザインだから、女の子の趣味としては微妙なところではある。

だが、デイジーの発言はここで終わらなかった。

「レオンさん。ちょっと、使ってみてもよろしいですか？」

さすがに耳を疑った。

「・・・使えますか？」

その言葉に答える事なく、デイジーは勝手に箱からスローイングダガーを一本抜き取る。それを見て数秒間うつとりしてから、彼女

は重さを確かめるように、短剣を握った右手首をスナップさせる。妙に手慣れてると思った、次の瞬間だった。

デイジーの右手が一閃した。

放たれた短剣は直線を描くように真っ直ぐ飛び、20メートルほど先にあつた木の幹の真ん中に突き刺さる。

完全に玄人の投擲だった。

誰も声が出ない。

デイジーは満足げに微笑むと、リディアの方に向き直る。

「綺麗ですね。本当に美しいバランスです。あれだけ重心がしっかりしていれば、かなり長い間使えるでしょうね」

専門家みたいな感想だった。

今度は、レオンの方を向いた。

「レオンさん。また今度、よかつたら触らせて下さいね。他にも、剣の事なら、何でも聞きにいらして下さい。それでは、私、ここで失礼いたします」

デイジーは優雅に一礼すると、機嫌良さそうに、門の方へと歩いていった。

しばらく、誰も喋らなかつた。

最初に口を開いたのは、アレンである。

「・・・そういえば、そろそろ差し入れを持ってくる時間だった。失念していた」

フレデリックさんが高齢の為か、代わりにデイジーがここまで差し入れを持ってやってくる事が多い。レオンも何度か顔をあわせている。

だが、今更後悔しても遅すぎた。

一応気になったので、レオンは聞いてみる事にした。

「デイジーさんはどうして・・・あんな事が出来るんですか？」

投擲と云えばいいのだが、なんとなく口にするのが憚られた。お嬢様の趣味としては、間違いなく一般的ではないはずだし、趣味程度の腕ではないのがレオンにも分かった。

アレンはすぐ隣に建つお屋敷の方を向きながら言った。

「彼女の祖父がソードマスターの伝承者なのは知っているだろう？」

「あ、はい」

「彼女は幼い頃から、お祖父さんに可愛がられていた」

「・・・えっと、それで？」

「それだけだ」

「・・・そうですか」

女の子にはそれらしい可愛がり方がある気がする。

「なんていうか・・・この町の女の子は、皆さん逞しいですね」

デイジーもそうだし、狩人をしているベティもそうだ。

だが、反論する人が1人いた。

「みんなじゃないけど」

リディアのどこか冷めた声に、レオンは慌てる。

「そ、そうですよね！リディアさんは違いますよ・・・ね？」

言い切る自信がなかったレオンだった。

「一緒だと思う？」

「いえ！そんな・・・」

じつと見つめてくるリディアの視線に、レオンは耐えきれなくなつた。

「そ、そういえば、今日は、リディアさん、スカートですね。素敵だと思います」

「デイジーは大抵スカートだけど」

「で、でも、リディアさんは、珍しいじゃないですか！その、いつもは格好いい感じですけど、今日は一段と可愛らしいっていうか・・・」

自分で言つてて恥ずかしいくらいだった。

言われた本人はもつと恥ずかしかったのだろう。視線を逸らしながら、頬を赤らめているのが分かる。

レオンの左腕を一瞥してから、ぶっきらぼうな口調で言う。

「・・・鎧と盾はもうちょっとかかるから」

その言葉を残し、リディアは足早に去っていった。

残ったのは男2人と短剣3本。

よく分からないけれど、とりあえず、解放されてよかったという
思いでいっぱいだった。

そこで、いつの間にか木に刺さった短剣を回収してきてくれたアレ
ンがぽつりと言う。

「レオンは友人に恵まれているな」

どこか、認めにくい言葉だった。

「・・・そうですね。とりあえず、武器も手に入っだし、使い方を
教えてくれる人も見つかったし」

だけど、後で何かとんでもないしっぺがえしが来そうな気がする
のは何故だろう。

レオンの背後では、無邪気な子供達の歓声が響いていた。

必要不十分

細長い金属棒が穴の中を這いずり回る。

金属が擦れ合う音。

針金から手に伝わってくる振動。

その両者を感じ取りながら、構造を想像する。

傍らに置いてある本に載っている図と比較しながら。

これだろうか。

100年ちよつと前に作られた型。

別のツールを取り出す。

針金を曲げて、形を微調整する。

上を押さえて、下の本体の方へ差し込む。

カチツという、確かな手応え。

「・・・やった」

レオンの口から、達成感と共にその言葉が零れ出たその時だった。
「ちよつ・・・うわっ！」

その声の後に小さな炸裂音がしたかと思うと、レオンの背後で、
積んであった酒瓶が崩れ落ちたかのような、盛大な音が鳴り響いた。
思わず両手で耳を塞いだレオンだが、数秒後、恐る恐る振り返る。
元々散らかっていたガレージ内だったが、今はさらに多くの、よ
りどりみどりの物が床に散らばっている。

その中心にいるのは、黒っぽいショートヘアの、子供にしか見え
ない人物の後ろ姿。レオンと同じ16歳という事だが、どうも臍目
に見ても、12歳くらいにしか見えない。ついでに性別不詳という
謎の人物。今は床に座り込んでいるから、腰に巻いた上着がスカ―
トみたいに見える。だから、なんとなく女の子っぽく見えるが、立
ち上がってこちらを向いたら、ハーフパンツを履いているのがはっ

きりするので、その時点で性別に自信が持てなくなる。見る方向によって印象が変わる、万華鏡みたいな人物である。

そんな人物だが、今はここからでも分かるくらい肩が震えていた。怒っているのか、泣いているのか分からないけれど、いずれにしても不機嫌なのは間違いない。

「その・・・ごめん、ニコル」

レオンが控えめに謝ると、ニコルは大きく溜息をついて、床に寝ころんだ。

逆さまの顔も、目が大きくて子供っぽい。明るい瞳が自然と目を引くが、それほど怒っている様子ではなかったので、レオンはほっとした。

「まあ、いつかぁ・・・元々見込み薄だったんだよね」

息を吐き出すようにそう言った。ニコルは声が少し高い。だけど、男の子だとしても、声変わりしていない場合もあるから、それほど不自然ではない。

邪魔をしてしまった手前、レオンは一応聞いてみる事にする。何か作っている時のニコルは、ちょっとした物音にも敏感なのだ。自分の呟きが邪魔をしたのは明らかである。

「何を作ってたの？」

「うーん・・・一言で言うなら、魔法妨害装置かなあ。ちょっとアイデアがあつて、もしかしたら、魔力に干渉して、魔法を妨害出来るんじゃないかと思ってたんだけど」

「え・・・それって、もしかして凄い事なんじゃ？」

魔法の才能はからつきしなレオンだが、そんな発明品は聞いた事がない。もしかしたら、偉大な発明ではないのか。

「でも、そもそも、魔法を妨害したかったら、術者の前に、閃光弾とか火薬とかシンバルとか、とにかく大きな音とか光を出す物を投げればいいだけだし」

「なかなかシンバルは持つて行かないと思うけど・・・それだって、確実に妨害出来るわけじゃないよね？」

「確実なのは、まあ、攻撃する事だよね。出来たら息の根を止める事」

「でも、それだって、相手に護衛がいたらダメなわけだし」

「まあね。というか、音とか光が効かないモンスターもいるだろうから、結局、確実なのは人間相手の時だけかなあ」

「・・・今気付いたけど、ニコルが想定してるのは、人間同士の戦いなのか？」

「人間はいいんだよ。さっき言ったように、閃光弾とか投げればいいんだから。だけど、モンスター相手には何が効くか分からないから、もし魔力妨害が出来るなら、一番確実でしょ？」

「ああ・・・なるほど」

「それでアイデアを思い付いたから、ちょっと作ってみてたんだ。だけど、やっぱりちよつと難しいな。そもそも、僕には魔力が見えないから、確かめようにも確かめられないし」

レオンは不意に思い付いた提案を試してみる。なるべく悟られないように、自然な感じを心がけた。

「だったら、誰か町の人に頼んでみたら？魔法が使える人がいるはずだし」

その提案にも、ニコルは浮かない顔のままだった。

「あんまり頼みたくないなあ。もしかしたら、魔法が暴発するかもしれないし」

「でも、もし成功したら、凄い事だよね？」

「そうでもないよ。魔力を利用した装置なら、同じ様な物が結構あるから」

「そうなの？そっか・・・」

それ以上の言葉を思い付かなくて、レオンは口を閉ざした。勧誘失敗。

そこで、鈴が転がるような音がする。

音の方を見ると、長い黒毛のカーバンクルが床に散らばった金属の球のような物を転がして遊んでいる。遊んでいるというより

も、その物体の丈夫さを確かめているような、慎重な手つきだった。その妖精が不意にこちらを向く。闇そのものの様な漆黒の中に、アメジストの様な瞳が輝く。

「クロ。おいで」

ニコルが身体を起こしながら呼ぶと、クロはそちらに悠然と歩いて行って、膝に飛び乗った。

頭を撫でているニコルも、撫でられているクロも、同じように目を細める。

その微笑ましい光景にレオンも口元が綻ぶが、心はすっきりとしない。

ここに訪問するのは6度目だが、このガレージに、ニコルとクロ以外がいた事は一度もない。それとなく聞いてみると、ニコルはあつさりと、他には誰も来ていない事を認めた。寝食をする時はさすがに家に帰るらしいが、それ以外はずっとこのガレージで、1人と1匹。たまに、酒場のベティや道具屋のラッセルが訪ねて来る事もあるらしいが、その頻度もかなり少ないらしい。その理由は簡単で、ニコル自身が、研究の邪魔だからと言って追い返すかららしい。

ニコルは自分で周りから距離を取っている。

これはベティの評価である。最初に訪問した時の嘘泣きは、人を追い返す時の常套手段であるらしい。他にもいろいろな手があるらしいが、結局は、わざと相手に嫌われようとしている。その結果が今の環境らしい。ベティは昔のよしみがあるから、ラッセルはたまに資材を運びに行くから、そして、レオンは仕事相手だから話して貰えるらしいが、他の人ではこうはいかないという事だった。

自分でこしらえた孤独。その中にいるニコルは、傍目には寂しうには見えない。

もしかしたら、本当に寂しくないのかもしれないとベティは言っていた。そういう一般的な感性の持ち主ではないらしい。だけど、付き合っただけで浅いレオンには、そう簡単に受け入れられる話ではなかった。

きつと寂しいに違いない。だから、何かのきつかけで外に出て欲しい。

そう思っで、それとなくいろいろ誘っでみているのだが、今のところ、上手くいく気配は全くない。元々レオンは口が上手くない。もつと口が上手いはずのベティだつて試したはずなのだ。それでも上手くいかなかったわけだから、難敵なのは間違いない。

そんなこんなで、訓練が終わつた後に毎日のように訪ねている。その結果、ニコルには変化はないが、レオンの鍵開けの技術はメキメキと上達していた。もちろん、悪いわけではないが、素直に喜べないところである。

「それで、その鍵開けられたんだよね？」

いつの間にか目の前にいたニコルに、レオンは仰け反るほど驚いた。

「近っ！！」

その驚きように、ニコルは頬を掻きながら苦笑する。頭の上にはクロが乗っでいて、薄紫の双眸がなければ、完全に髪の毛と一体化していた。

「レオンも、僕の気配くらいは感じられるようになって欲しいなあ。その調子だと、不意打ちとかで大怪我しそつで心配なんだけど」

確かに、今不意打ちされていたら、大怪我どころではなかったかもしれない。

「そつだよね・・・ごめん」

「まあ、僕で慣れてくれたらいいよ。それで、その鍵は分かつた？」

「あ、うん」

ニコルは腕を組んで、関心したように何度か頷く。だけど、見た目は子供なので、威厳は全くなかつた。

「レオンは勉強熱心だよ。あと、手先もそこそ器用だし」

「そ、そつかな？」

「冒険者よりも、怪盗とかになつてみたら？」

あまりにさりげない口調だつたため、一瞬頷きそつになつた。

「・・・いや、そもそも、そんな職業あるのかな」

「スニークは元々泥棒だったんだよ。悪い奴からしか盗まなかったとかじゃなくて、大金持ちから手当たり次第に盗んでた大泥棒」

レオンは知らなかった。そして、聞いた瞬間に、出来れば知りたくなかったと思った。伝説の冒険者の功績が、少し霞んだような気がした。

「・・・だけど、結局偉大な事をしたから、伝説になったんですよ？」

「さあ・・・僕はその頃の記憶は知らないから」

ニコルは少し首を捻ってそう言った。らしくない、不自然な動作だった。何か前世の記憶で気になる事があるのだろうか。

「それよりも、その鍵が済んだって事は・・・そっか。基本はそんなところだね。あとは応用すれば、大抵の鍵はなんとかなるよ。普通の鍵は、だけどね」

「普通じゃない鍵って？」

「ダミーの鍵とか、特別な加工がしてある高級な鍵とか、魔法の鍵。あとは、錆び付いて開かなくなった鍵とか」

「なるほど」

凄く具体的だった。経験が相当あるのだろう。

「とにかく、あとは経験あるのみ。というわけで、これから毎日、夜な夜な・・・」

レオンはそこで言葉を遮った。

「・・・泥棒の真似事は遠慮します」

ベティ情報によれば、ニコルは練習と称して、町中の家の鍵を開けて回った事があるらしい。

そんなレオンの反応が可笑しかったのか、ニコルは軽く笑いながら言った。

「冗談だよ。僕が集めた鍵があるから、それを持って帰って練習したらいいと思う。あとは、まあ、ダンジョンで余裕があったら、必要な鍵でも開けてみたらいいよ。もちろん、罠がなかったらだけ

ど」

そこでレオンはかねてからの疑問を尋ねてみる事にした。

「あの、前から気になってたんだけど」

「何？」

「こういう鍵開けの技術って、ダンジョンで必要なの？」

冒険者といえば、戦闘のイメージしかなかったレオンである。

ニコルの回答は無関心そのものだった。

「さあ」

「さあって・・・」

「だって、僕、ダンジョンに行った事がないし」

「それはそうだけど」

「とりあえず、ラッセルの店で解錠用のツールが売ってるから、鍵があることはあるんだよね。だけど、例えばドアとか檻とかだったら、壊して通る事も出来るし、魔法で開ける事だって出来るから、

まあ、他のメンバー次第なんじゃないかな」

「他のメンバー・・・」

今のレオンにとって、それは最大の懸念だった。

「もしかして、まだ仲間がいないの？」

ズバリ尋ねられて、レオンは答えに窮した。だが、それで十分答えになっていた。

ニコルは特に表情を変えずに、あっさりと言った。

「だったら、覚えておいた方がいいよね」

「え？」

「だって、レオンは魔法が使えないし、壊して通るほどの力もないし。火薬とか使って吹き飛ばす手もあるけど、水気が多いと使えないし、数に限りがあるわけだから、出来るなら取っておきたいしね」

とても論理的だった。きっと正論である。

だけど、1人でいる事をあまりにあっさりと想定しているから、それが気になった。

クールとかドライとか、そういう風にもとれる。もしかしたら、

これがニコルの強さだと言う人だっているかもしれない。身体は小さいけれど、頭も技術もある。強い敵がいたら隠れる事が出来る。不意をつく事だって出来る。

まるで、1人でいるために培ってきたような能力。

レオンはやっぱり、少し寂しいと思った。ニコルが寂しそうじゃないから、そして、ベティが寂しそうだったから、その両者を知っているレオンは、その対比が余計に寂しい。

でも、これは結局、レオンの印象でしかない。

ニコルの心の中は分らないのだ。ここ数日通い詰めた程度では、分かる方がおかしい。

だが、もし分かったら、何か変えられるかもしれない。

相手を理解する方法がないだろうか。

そこで、レオンは思い出す。つい先日、訓練所でのアレンさんの言葉。

良い手かもしれない。

「ニコル」

突然レオンが表情を明るくしたので、ニコルは訝しんだのかもしれない。少し顔を傾けて聞いた。

「何？」

「僕に何かガジェットを作ってくれない？」

ガジェットというのは、ニコルが作っている怪しげな装置の事だ。それが一般名詞として広く定着している物なのか、それともニコルが勝手にそう呼んでいるのかは知らないが、今はそんな事はどうでもいい。

レオンの言葉を聞いたニコルは、文字通り目を輝かせていた。

「本当！？いいの！？」

言い出したのはレオンの方だが、その喜びように、思わずたじろいだ。

「う、うん・・・」

「うわぁ！嬉しい！本当は、いつ言い出そうかって思ってたくらい

なんだ！だけど、やっぱりこちらからは頼みにくいでしょう？頼みにくいんだ。頼みにくいんだよ、これが」

何故か繰り返されたので、レオンは気圧されて頷く。

「そ、そっか」

「そうなんだよ！だけど、もう、レオンから頼んできたからには、断るのは筋違いってものだよね！もう、任せて！使いやすくて、威力がばつちりな奴を用意してみせるから！どうせ、レオン以外は全て敵なわけだしね！木っ端微塵にしてみせるよ！」

自分は木っ端微塵にならないだろうか。それが果てしなく心配だった。

「出来たら、もう少し大人しいのでも・・・」

「そう？あ、そうか。レオンの戦闘スタイルがあるよね。分かっている分かってる。レオンはどうせ、重い鎧は無理でしょ？武器はどうするの？あ、投げナイフだっけ？」

「そ、そうだね。あと、軽めの剣も作ってくれてるみたいで」

これはアレンさんと、それからデイジーの提案だった。スロージングダガーだけだと臨機応変さに欠けるというのである。武器訓練の専門家であるアレンさんの意見はもちろん、何故か剣に関して尋常ではない知識があるデイジーのお墨付きまである。それを鍛冶屋のリディアに相談してみたら、あっさり承諾してくれたのだ。

ニコルはレオンの左腕を見る。そこには、バツクラーが取り付けであるままだ。重さに慣れる

為に、普段からつけて歩いている。最初は恥ずかしかったが、すぐに慣れてしまった。

「要は、軽い剣と飛び道具だね。なるほどなるほど。うん。任せて！特に、左手が使えるわけだから、どうにでもなる。うわあ！・・・楽しみ！絶対凄い奴を用意しておくから、任せてよ。本当に、威力だけは保証するから！」

少し前のレオンの言葉は、綺麗さっぱり忘れられていた。

だけど、本当に嬉しそうなニコルの表情を見ると、何か言う

気が失せてしまった。

ただ、ニコルが作った物を通してなら、作った本人の事が分かるのではないかと思ったただだった。アレんさんが、剣を通して自分の事を知ろうとしてくれたように、話す以外の事で、知ろうとする方法があるような気がした。その為のアプローチのつもりだったのだ。まさかこんなに喜ぶとは思わなかったけれど。

でも、もちろん、悪い気はしない。

ニコルの表情につられるように、レオンの表情も笑顔になる。

ただ、漆黒のカーバンクルだけが、ニコルの頭上で眠そうに大欠伸をしていた。

雨音の帳

酒場の喧噪。

20以上あるテーブル席は、相当な場数を踏んでいると思われる熟練の冒険者達でほとんど埋まっている。彼らには昼夜の境といったものは曖昧なようだ。まだ昼間と言えるこの時間でも、既に何本もの酒瓶を転がしているテーブルが多い。それぞれが、次の行き先、戦術の見直し、あるいは単に世間話等、思い思いの事を話している。硬い岩を削っているような荒くれ者達の声が屋内を支配していた。

だが、そんな喧噪も、今のレオンの耳には入らない。いつものカウンター席。

レオンの全神経は、目の前の小さな金物に注がれていた。

細長い針金越しに伝わってくる内部の構造。外面の滑らかな金属盤からは想像も出来ないが、中身は精巧かつ緻密そのものだ。かれこれ数十分程こうしているが、あまりに複雑過ぎて、頭の中で上手く構造を想像出来ない。恐らく、そう意図された構造なのだろう。何かに書き留めながらならもっと効率があがるかもしれないが、まだ練習の段階だから、出来るだけ楽をしたくはない。

そうして完全に没頭していたレオンの後頭部を、突然硬質な円盤が襲った。軽く音が鳴る程度だったが、頭の中で少しずつ積み上げていた内部の想像図がどこかに雲隠れしてしまった。

「あー・・・」

一度忘れたものは、思い出そうにも容易には思い出せない。情けない声を出すレオンに、明るい少女の声が飛ぶ。

「レオンー。あんまり熱中すると、今に飢え死にするよー」

聞き慣れた声に体を捻って振り返ってみると、案の定、そこには見慣れた栗色のポニーテールと瞳の少女が笑っていた。

ここ、ガレット酒場の看板娘のベティである。多少元氣過ぎる女の子だと思っていたが、この酒場でお世話になっているからなのか、怖いことに、レオンは既に幾分慣れ始めている。

彼女はレオンの前に左手に載せていたお盆を置く。レオンの昼食である。今日は鳥のようだ。皿いっぱい肉の片隅に、熱を通した野菜が数種類だけ、申し訳程度に顔を覗かせている。

「あ、ごめん・・・ありがとう」

ベティはまだ右手にお盆を載せている。さすがに手慣れた様子で、そうしていると、れっきとしたウェイトレスなんだと思い知る。

レオンはふと店内を見回した。テーブルの一角では、店長のガレットが、顔馴染みらしき大男と悪態をつき合っている。顔が笑っているから、そういうコミュニケーションなのだろう。彼の両手にも料理を載せたお盆があるから、ちゃんとした仕事である。

「なんだか忙しそうですね」

「まあねー。雨が降つてると多いんだよ。やっぱり、どうせ行くなら晴れの日がいいんじゃないかな」

雨だと移動が困難になるし、火に関連した道具が使いにくくなる。日を選ぶのなら、雨の日は避けたいものなのだ。

意識を屋外の方へ向けてみる。喧噪の陰にうつすらと、雨が地面を叩いているのが分かる。

レオンはイスから立ち上がった。

「僕も手伝います。忙しそうだし」

ベティは少しだけ瞳を大きくしたが、すぐに可笑しそうに笑った。「あんまり手伝ってばかりいると、本当にうちの店員になるよー」

冒険者を目指している身としては笑えない冗談だったが、お世話になっている身分でもあるから、何もしないわけにはいかない。それに、レオンには別の目的もある。

「大丈夫です。それに、やっぱり聞いておきたいので」

その言葉に、ベティは少しだけ笑みを引っ込めた。

「聞いても無駄だと思うよ。みんなベテランだと思うし」

「ダメもとですから。どちらにしても、手伝いますよ」

そういうわけで、レオンは酒場の仕事を手伝った。

手伝うと言っても、出来た料理を運んだだけである。これまでも特に忙しそうな時は手伝う事があった。元々、接客するのは店長とその娘の2人だけ。たまにベティがいらない事もあるくらいの、要は、あまり忙しくない酒場なのだ。

それでも、今日のような雨の日は、普段より忙しい傾向があるようだ。もともと、店員はそれを気にする様子はない。注文が遅れるのはおろか、たまに注文を忘れている事もあるくらいの、良く言えばおおらかな、悪く言えば仕事がぞんざいな店なのだ。どこで忙しくするかを自分達で選んでいるとも言える。

だから、別にレオンが手伝わなくても、ガレットとベティが困る事はない。だが、お客の方から無言の圧力がかかっているような気がして、どうにも落ち着かない。じつとしているよりも、働いている方が、ずっと気が楽なのだ。

それに、レオンにとって、他の冒険者と接触する事には大きな意味がある。特に、今日は雨の為かお客さんが多い。いつもよりわずかながら期待が大きかった。

その期待も、見事に砕け散ったわけだが。

数十分後には、落胆した表情でカウンターに突っ伏しているレオンの姿があった。

「だから、無駄だつて言っただのにー」

隣に座るベティがこちらを見もせずと言っ。彼女の手には、レオンが挑戦中だった錠前と解錠ツールがあった。鍵穴に針金を突っ込んでカチャカチャと動かしているが、恐らく適当にいじっているだけだろう。

「いいんです。僕が諦めきれないだけなので・・・」

力なくそう言っ、そこでカウンター奥の扉からガレットさんが出てくる。昼食後の片づけが一段落したのだらう。相変わらずの山男の様な肉体の上に厳めしい顔が乗っているが、その表情もどこか

困っているように見える。

カウンター内のイスに腰掛けるなり、彼はレオンに言葉をかける。
「無駄だと言ってるだろうが」

数秒前に聞いた台詞だった。

「・・・ガレットさん、ベティさんと同じ事言ってます」

気まずそうな父親に対して、娘の方はくすくすと笑っている。

咳払いしてから、ガレットは諭すように言った。

「だがな。無駄なのは確かなんだよ。今この店にいる連中は、とうの昔に見習い冒険者を卒業して、魂の試練場どころか、この町の外れにある、20階層は下らねえって噂のダンジョンに挑戦しようって奴らばかりだ。そんな奴らにお前みたいなひよっこか混じったところで、最初のモンスターの餌になるのがオチだ。間違っても何かの役に立つわけがねえし、いたら邪魔なだけなんだよ。一時的にでもパーティを組んでやるなんて奴がいたら、そいつはよっぽどの大馬鹿か、妙な下心があるかのどちらかだ。この酒場内にそんな奴がいたら、今頃俺が直々に、そいつが正気かどうか確かめてるだろうよ」

「それは分かってはいるんですけど・・・」

ベティがそこで割り込んだ。声色を変えて、尊大な口調で言う。

「分かってるなら、つべこべ言わずに、とにかく実力をつける事だな。そうすりゃあ、仲間なんざ自然とついてくる。とにかく食べ！そして鍛えろ！身体が弱い奴は冒険者とは言えねえぞ！」

最近の彼女のマイブームなのか、父親の物真似である。気のせい
か、前よりも完成度が高い。

そこで本人が低い声で娘をたしなめる。

「ベティ。今、真面目な話をしてんだよ」

だが、素直に引き下がるベティではなかった。錠前をいじりながら
ではあるが。

「真面目に言わせて貰うなら、お父さんにも責任あると思うなー。
レオンの前に来た見習いを残らず追い返したのはお父さんでしょー

？」

ガレットは片眉を上げた。

「何でそれが関係あるんだ？」

「もし追いついてなかったら、レオンの仲間だったかもしれないじゃない？」

「そりゃそうだが、あれはもう去年の秋だろうが。もう半年になる。仮にまともな奴だったとしても、レオンとはもう実力差が出来ちまってるだろうよ」

そこでレオンは顔を上げた。

「という事は・・・もしかして、今年来たのは、僕が初めてなんですか？」

自分の前に来た見習いが去年の秋ということは、冬になって、年を越してから来た人間はいないという事になる。

ガレットはどこか遠い目をして言った。

「そうだな・・・よく考えりゃ、早いとは思ってたんだよな」

「え？何がですか？」

答えたのは、隣のベティだった。

「レオンが来たのって、山奥の方からでしょ？」

「え・・・あ、はい。そうですけど？」

「だからまあ分かるんだよね。冬が終わったっていうのが。だけど、低地から来る人達は、いつ冬が終わったかなんて知らないから、もうちょっと暖かくなしないと来ないんだよね。まだこの辺りは雪が積もってると思うてる人もいるんだってさ」。特に、遠い所から来ようって人は尚更分からないから、この時期に来る人はあんまりいないんだよ」

移動するにしろ訓練するにしろ、選べるのなら雪がない方がいい。この店にいる人達が、雨が降っていない方がいいと考えるのと同じである。ずっと山奥で過ごしてきたレオンにとって、低地との季節のギャップに驚くばかりだが、その考え自体はもちろん理解出来るものだった。レオンだって、山を降りる為に春になるのを待ってい

たくらいなのだ。若干フライング気味ではあったけれど、それは、たまたま行商の人が村に来ていて、親切にも乗せてくれたからである。

「ということは、見習い冒険者が来るのは、これからが本番って事ですか？」

それならば、これから仲間が見つかる可能性だってある。

酒場の父娘は、2人ともこちらを見ないままに、同時に答えた。

「俺の目に適う奴だったらな」

「お父さんに追いつかれなかったらね」
全く同じ意見。

父娘は一瞬だけ視線を交わしたが、すぐに目を逸らした。仲がいいのか悪いのか、よく分からない。

それは置いておく事にして、レオンはこれからこの町にやってくる見習い冒険者の事を考えてみる。自分と同じようにまずギルドに行き、そしてこの酒場まで来て面接される。だが、レオンにしてみれば、それは何の障害でもない。なにせ、自分だって大丈夫だったのである。これ以上低いハードルはないとすら思える。

「それなら、焦る事はないですね」

その言葉が、まさにレオンの結論だった。

いつの間にか笑顔になって見習い冒険者を見て、酒場の父娘は顔を見合わせた。どこでそんな結論になったのかは分からないが、問題はなさそうだし、別にいいか。そんなお互いの考えを確かめ合ったのだらう。今度もやはり、視線を交わしていたのは一瞬だけである。

「まあ、そうだな。せいぜい頑張れー」

またベティによる口真似である。そう言いながら、いじっていた錠前とツールをレオンの前に置いた。もちろん、解錠出来ていないガレットは、そんな娘に冷ややかな視線を送っている。

「頑張ります」

レオンはそれを手に取る。これを解錠するのが、今日の目標だっ

た。

「でもさー、レオンは一体何を目指してるわけ？今やってる事といえば、食べて身体を鍛えて、泥棒の訓練をしてるだけでしょ？」

言い方は良くないが、内容は概ね間違っていない。

「ええ、まあ・・・泥棒に師事しているわけじゃないですけど」

「もつと武器の訓練とかしなくていいのー？」

「してまずけど・・・あんまり深く聞かないで下さい」

聞かれると、お嬢様であるデイジーの隠された一面に触れなければならぬ。もちろんベティは既に知っているだろうが、なんとなく、口にしにくい事柄なのだ。

「武器はスローイングダガーとショートソード。盾がバックラー。

まあ、ある意味でオーソドックスではあるな。初心者向きの装備じゃないが」

ガレットがレオンの身体を見ながら言った。彼が口にした装備を、レオンは今も身につけているのである。重さに慣れるためだが、防犯の意味合いも強い。部屋に置いておいて、なくなっていたら困る。「威力なさそうな装備だよー。ハンマーとかにした方がいいんじゃない？」

「・・・ベティさんはハンマー好きですよー」

「武器ならなんでも好きだよー」

「・・・ですよー」

あまり聞きたくない話である。

「というか、その鍵にしたって、そんなちまちまするより、扉を壊した方が早いんじゃない？」

ベティがレオンの手の中にある物を見ながら言う。確かに、ニコルも同じような事を言っていた。

「そうですね、鉄製の扉とかだったら、壊せないかもしれないですし」

「そっちだって、鍵穴がなかったら手も足も出ないわけでしょ？」

「ですね・・・両方出来るのが一番いいんでしょうけど」

「そういえば、レオンは畏の解除とかは習ってないの？」

レオンの手が止まった。

「・・・畏って解除出来るんですか？」

真顔で聞くと、ベティはこちらの顔を見たまま停止した。それを見て、そうやら常識だったらしいという事を思い知る。この町に来てからというもの、自分が世間知らずであるという事を思い知らされる事が多々あった。

だが、さすがと言うべきか、ガレットさんは、口元に余裕の笑みを浮かべていた。

「畏の解除は素人には荷が重い。身に付くまで結構時間がかかるんだよ。だから、とりあえずって事で、先に鍵の解錠から教えてるんだろうよ。鍵はコツさえ掴めれば簡単だし、レオンみたいに、力も魔法もない人間には必要な技術だ。それに、畏の方は解除しなくてもなんとかなる場合も多いからな」

「なんとかなるんですか？」

レオンはすぐに聞いた。これからダンジョンに挑戦する身なのだ。知っておける事ならば何でも知っておきたい。

ガレットは笑みを浮かべたまま答える。

「とりあえず、最低でも、畏に気づけねえと話にならねえけどな。だが、気づいたならまず、その場所を通らねえってのがひとつ。だが、どうしても通らざるを得ないって場合もある。その場合一番簡単なのは、わざとひっかかるって事だ」

首を捻る。

「・・・ひっかつたらまずくないですか？」

「お前自身がひっかかるんじゃないやねえ。例えば床を踏んで発動するような畏だったら、そこに重い物を投げてみるとか、扉に触れたら危なそうだったら、遠くから弓矢で射るとか、要は、畏が発動しても安全な場所にいるって事だな。具体的には、なるべく遠くから発動させるんだ。畏が解除出来ない人間は、大抵そういう手を使ってる」

「へえ・・・」

いちいち感心しているレオンに、ガレットは不思議そうな顔で聞いた。

「というか、お前、元狩人なんだろう？ 罾とか使った事あるんじゃないのか？」

「え？・・・いや、あんまり」

実際、レオンの父親はほとんど罾という物を使わなかった。だから、レオンもそれが普通の狩人だと思っていたのだ。

レオンはそこで重要な事を思い出した。

「あ・・・」

思わず発してしまった声に、ベティが食いついてくる。

「どうしたの？」

「はい、まあ・・・」

正直、忘れていた自分がなんとも情けない。自分で自分に呆れたが、それはともかく、今思い出せたのだから、忘れないうちに言うておかなければいけない。

「ベティさん。ちょっと頼みがあるんですけど」

彼女は真顔で言った。

「寝室に罾を仕掛けて欲しいとかー？」

もし頼んだら、命に関わる罾を用意されそうな気がする。

レオンはなんとか平静さを保ちながら、真面目に答えた。

「違います。あの、アレンさんから聞いたんですけど、ベティさんも狩人なんですよね？」

ベティは一度瞳を瞬かせてから、軽く頷いた。

「そうそう。それがどうしたのー？」

「アレンさんが言うには、ベティさんの師匠のホレスさんって人が、凄い腕の狩人だとか」

「うん。何？もしかして、決闘してみたいとか？」

この少女の頭の中は、やはり偏っているようだった。

「そうじゃないです。僕の戦い方の参考になるんじゃないかって言われたので、出来たら会って話してみたいんですけど、僕でも会

って貰えるでしょうか？」

「レオンの戦い方？うーん・・・」

いつも即断即決のベティにしては珍しく、何かを思案している様子だった。

「あの・・・無理にとは言いませんけど」

ベティはそこで腕を組んで、少し首を傾げる。

「会つのは簡単なんだけどね」。ただ、レオンの参考にはならないかもよ？」

「え？そうなんですか？」

「とりあえず、ホレスは剣を使えないと思うし」

予想外の情報である。どんな武器でも使いこなせるような猛者を想像していたのだが。

「使えないんですか？」

「使えないと思うな」。ホレスっていえば、とりあえず弓なんだよね。あと、笛」

2番目が既に武器ではない。いくつもの武器を使いこなすのが理想とされた自分とはかけ離れたスタイルに思える。

レオンが首を捻っていると、ベティが笑顔に戻って屈託なく聞いてくる。

「どうするー？とりあえず、弓の腕だけは確かだけど」

「弓の腕・・・」

戦闘スタイルはともかく、弓もいずれば練習しなければならない。それならば、アドバイスのひとつも欲しいところだが、まだ弓は素人同然の自分が突然行ったら、迷惑ではないだろうか。

そこでガレットさんの一押しがあった。

「どうした？とにかく行ってみる！ひよっこが遠慮するもんじゃねえぞ！」

レオンは頷いて、ベティに向き直る。

「迷惑じゃなかったらですけど、今度ホレスさんに会わせて貰えないですか？」

彼女はあつさり頷いた。

「いいよー。今から行く？」

なんというか、本当に躊躇しない女の子なのだ。

「今からはちよつと・・・」

反射的にそう言ったレオンに、ベティが少し笑った。

「雨降ってるしねー。じゃあ、明日？」

「そ、そうですね。明日晴れてたら」

「りょーかい。というわけで、お父さん明日休んでいい？」

その言葉に、レオンは自ずと気付かされた。

「あ、すみません・・・お店が忙しい時に」

だが、ガレットは笑って答える。

「さつきも言つたる？ひよつこが気にするんじゃないやねえ！分かったか！？」

「は、はい！」

その返事に一笑を返して、今度は娘の方に視線を移す。若干眼が据わっていた。

「ベティ。いい機会だ。この間のけりをつけてこい！」

「はい」

返事はこれ以上ないくらい軽い。

何事もなく話がまとまったようだが、当然と言つべきか、レオンは氣になった。

「・・・この間のけりつていうのは何ですか？」

父娘はまた視線を通わす。また何らかの意志疎通があつたようだ。

「まあ、来たら分かるよー」

ベティは自然にそう言つたものの、ガレットは、こちらから目を逸らして何も言わなかった。何か後ろ暗い事があるのだろうか。それにしたつて、滅多にない振る舞いである。

あからさまに様子がおかしい。

「・・・何か隠してませんか？」

「そうだ。レオンってさあ・・・」

ベティの言葉は続かない。無理矢理話題を変えようとしているのが明らかである。

「・・・絶対隠してますよね？」

「隠す程の事じゃないよー」

「だったら話して下さい」

「でも・・・」

そこでちらつと、父親の方を見た。また例の意志交換である。

ベティの表情に陰が差す。

「・・・聞いたら、レオンはどうなるかな」

声のトーンが暗い。いつも明るいだけに、より顕著に感じられた。よく分からない。分からないけれど、レオンは閃いた。

畏かもしれない。畏というか、深入りしたら危ない。避けよう。

そういう判断が、瞬時に採択された。

「そ、そういうえば、ホレスさんってどんな人なんですか？会う前に、少し聞いておいた方がいいですよー！」

必死の話題転換である。自分でも分かるくらい、不自然に明るい。だが、とりあえず畏は避けられたようだった。ベティが元の笑顔に戻る。

「ホレスはまあ、変わり者だよね。でも、私は好きだなー」

なんとも軽い好きだった。少なくとも、レオンが慌てないで済むくらいの軽さである。

「そうなんですか。良い人って事ですよー」

「そうだねー。あと、さっきも言ったけど、弓と笛が上手」

「弓はもちろんですけど、笛も教わってみたいですね」

「そっかー」

ベティにしては短い台詞だった。

彼女は、しきりに首を捻っている。

「・・・どうかしました？」

「うーん・・・なんか、まとまらないよね」

「何ですか？」

「笛が上手で、鍵開けも上手い。なんだそれーって言われそう」
悲しい事に、自分でもそう思った。

「・・・とりあえず、弓の方を優先で」

なるほど。戦闘系がないとしまらないものだな。

その日最後に得たのは、そんなどうでもいい教訓だった。

ファースト・エンカウント

自治都市ユースアイは、レオンの故郷の村程ではないものの、十分に丘陵地と言える場所にある。

レオンには低地でも、一般的な感覚からすれば高地。夏には避暑地として観光に来る人もいるらしい。周囲はなだらかな平原が広がっているし、未踏破ダンジョンとも距離があるから、モンスターがうろついている事もほとんどない。北から西にかけては大山脈の一角が占めていて、そこで育まれた大自然の実りと、天然の防衛網の恩恵を得ている。少し東に外れた場所には、大きな湖があつて、景観はもとより、水資源の宝庫でもあるらしい。ただ、春や秋には、湖に流れ込む川が氾濫する事が多々あるらしく、それを避ける為に、少し離れた今の位置に町が形成されたという事だった。

まだこの町に来て2週間程だが、住みやすい町だと思つた最初の印象は揺らぐどころか、疑いような確信となつている。自然環境に恵まれた町なのは間違いないし、そこで生活する人々も、その豊かさを象徴するように、気質が穏やかな人が多い。レオンの村の人々も気性が荒いわけではないのだが、やはり育つた環境そのままに、厳格で逞しい人が多かった。そんな中でも、レオンの家族は例外で、よくぼんやりしていると言われたものだが、この町ではそれほど浮いているわけではない。もちろん、田舎者で世間知らずなのは否めないけれど。

そんな穏やかな町だから、防衛の為の施設がほとんどない。せいぜい獣がやってくる程度の事しかないのだろう。町の周囲には簡単な木製の塀があるだけ。門には警備の人間が一応立っているが、申し訳程度に槍を立てかけているだけである。訓練所のアレンさんが警備と教師を掛け持ちしているのも、きつと警備だけだと暇過ぎるからだろ。言わば、警備員というかボランティアの自警団なのだ。

そのボランティアの警備員に、隣を歩くベティは慣れた様子で声をかける。普段は雑貨屋で働いていそうな、荒事とは無縁そうなお兄さんである。もしかしたら、一番重要な仕事は、ここを出入りした人間を覚えておく事なのかもしれない。腕っ節はともかく、記憶力ならば期待出来そうだった。

レオンとベティは、並んでユースアイから出て行くところだった。方角は西。畑や放牧地の横を抜けながら、短い草の生えた道を歩く。昨日は雨が降ったが、歩きにくいほどはぬかるんでいない。近くには木々がほとんどない為、これ以上ないくらい見晴らしがよかった。

右手には険しい山々。まだほんの少し雪が残っているようだ。

左手には平原が続く。それが途切れた先には山々が見えるが、あまり高いようには見えない。もしかしたら、レオン達が立っているこの場所の方が高いのかもしれない。

2人の目的地は、この町の郊外にあるというウイスキーの蒸留所だった。元々は、ベティの母親の両親の物だったらしいが、今管理しているのはベティの父親のガレットである。

「そういえば、どうしてわざわざ町の外に作ったんですか？」

急に思いついたので、レオンは聞いてみる事にした。

ベティがこちらを向く。いつものブラウンの瞳とポニーテール姿だが、今日はエプロンではなく、シャツの上に長袖の上着、そして薄汚れたズボンを履いている。完全に作業用のファッションだった。そして、背中に矢が詰まった矢筒を引っかけている。弓がないから危険はないはずだが、彼女が持っている、なんとなく不安になる。かく言うレオンも、同じ物を背負わされていた。結構重いが、苦になる程ではない。

「水がどうか、湿度がどうか、要はそういう事らしいよ。こだわりの銘酒なんだって」

「なるほど・・・」

レオンは頷く。場所にまでこだわって、味を追求したという事だ

ろっ。

「一応、ちょっとしたブランドらしいよ。少しだけけど、遠くからも取り寄せの注文があるくらいだから」

彼女はいつもの口調だったが、恐らく、そんなにありふれた事ではないはずだ。

「・・・あの、それって凄い事だと思うんですけど」

その言葉にも、ベティは少し首を傾げるだけだった。

「そう？でも、私は小さい頃から飲んでるから」

小さい頃からのというのも極端な話だが、何を隠そう、レオンも小さい頃からアルコールを飲んでいた。お湯で何倍にも薄めた物だが、極寒の冬を越す為の生活の知恵である。

「そうですか・・・さすが酒場の娘という感じですね」

「そうだねー。お陰で今だと何杯飲んでも平気だよ」

「・・・あの、子供の頃からってというのは、もしかして、薄めないで飲んでたんですか？」

ベティは当然といった様子で頷く。

「当たり前でしょー？もしかして、レオンはお酒だめなの？」

「アルコールに強い弱いはともかくとして、ユースアイには飲酒の年齢制限はないんですか？」

ちなみに、レオンの村にはなかった。だけど、普通はあるものだと聞いていたのだ。

「あるよー」

「あるよーって・・・いくつかからですか？」

「16歳以上」

「・・・ベティさんの小さい頃ってというのは、もちろん16歳未満ですよ？」

「そうそう」

「それって・・・どう考えても法律違反じゃないですか？」

そこでベティは微笑む。微笑みというには、邪過ぎる表情だったが。

「ばれたらしょうがないよねー」

「いや、しょうがないって・・・」

たじろぐレオンだったが、ベティはすぐに表情を緩めた。

「まあ、本当の事を言つと、法律違反じゃないんだよ」

「え？そんなんですか？」

ベティは得意げに頷く。だけど、すぐに少しだけ目を細めた。

「私が子供の頃にはね、私のお母さんのお父さん、つまりお祖父さんがまだ生きてたんだ。そのお祖父さんがウイスキーづくりを始めた人だけど、よく仕事場まで遊びに行つてたんだ。それで、まあ、お祖父さんは優しい人だったんだけど・・・なんていうのかな、押しに弱い人だったんだよね。孫が可愛かつたんだと思うけど」

レオンには、おぼろげながらも話の展開がよめた。

「まさか・・・ウイスキーを飲ませて欲しいって言つたんですか？」

頼む方も頼む方だが、飲ませる方も飲ませる方である。

「そうなんだー。あの時のウイスキーは美味しかったな・・・きつと、孫娘への愛情がたつぷり詰まっていたからだよね」

美談みたいな言い方だったが、もちろんそんなわけがない。

「あの、ベティさん」

「何？」

「結局、16歳未満でお酒を飲んでるわけですから、法律違反ですよね・・・？」

ベティは右手の人差し指を立てて軽く振る。

「それが違うんだよ。私がお酒を飲んだのは、蒸留所の中でしょ？」

「・・・それがどうかしたんですか？」

「あそこはユースアイの法律の適応外なんだよ」

それだけ言われても、レオンにはさっぱりである。

「・・・えつと、すみません。もう少し詳しくお願いします」

「うーん、私もあんまり詳しくないんだけど」

「そこをなんとか」

「じゃあ、だいたいでいくねー」

彼女は右手の人差し指をくるくる回し始める。何の意味があるのかはよく分らない。

「自治都市ってだいたいの事は自分で決められるんだけど、一部だけ、国に認可して貰わないと作れない物があるんだって。たぶん、鉱山とか河川の開発とか、要は資源系だと思うけど」

「へえ・・・」

話が大き過ぎるので実感がわかないが、そういうものなのかもしれない。

「だけど、どういうわけか、お酒に関する施設も国の認可がいるんだよ。なんか、大昔にお酒が原因で争いみたいのがあったらしくて、今の国になってからも、お酒に関する事は徹底しようって事になったんだって。歴史に学んだって事だと思うけど・・・あ、歴史の話ならデイジーが詳しいから、興味があつたら聞いてみたら？」

「えっと・・・あ、はい。機会があつたら」

正直、興味云々の前に、お酒で争いが起きたという史実を想像するのすら難しい。どんな状況になったら、お酒程度の事で、そんな深刻な事態になるのだろうか。

ベティは、回していた指を下ろして、話を続ける。

「そういうわけで、お酒関連の施設は全部国の管理下にあるって事になってるんだよね。だから、自治都市の管理内でも、蒸留所内は国の法律優先なんだ。それで、この辺りは、国の区分では寒冷地って事になってるんだよ。そして、もっと寒い山奥の方では、冬場に身体を温める為に子供にもアルコールを与える習慣があるから、寒冷地には特例が適応されてるんだって。レオンの村でも、普通に子供の時からアルコール飲んでたでしょ？」

「あ、はい」

「国の区分だと、ユースアイもレオンの村と同じって事になってるんだよねー。まあ、低地の人から見たら一緒なのかもしれないけど、ユースアイは結構新しい町だし、低地から来た人も多いからそんな習慣はないんだ。だから、ユースアイの法律では普通に16歳まで

飲酒禁止。それなのに、蒸留所内は国の寒冷地特例で飲んでもよし。うん、不思議だねー」

「なるほど・・・」

要は、蒸留所内は法律上ユースアイではないという事らしい。なんとなく屁理屈のような気もするが、レオンも同じ寒冷地特例の恩恵を受けていたわけだから、人の事をとやかく言う筋合いはない。

ただ、一応一言だけ言っておこうと思った。

「それは分かりましたけど、ベティさん」

「何ー？」

「子供がウイスキーをストレートで飲むのはまずいと思いますよ・・・下手すると倒れるだけでは済みませんから」

ウイスキーはアルコール度数が40を超えるものも珍しくないのだ。大人でも危険な状態になる事もあるくらいだから、身体の小さい子供は尚更である。

ベティは楽しそうに言った。

「飲んだって言っても、ちょっとだけだし。でも、あれで味を覚えたのは確かだよね」

「・・・お祖父さんはとんでもない事を覚えさせましたね」

「何？もしかしてレオンはお酒ダメな人？」

「いえ、飲めない事はないですけど」

「そっかー。じゃあ、レオンが初めてダンジョンクリア出来たら、祝杯だねー」

嫌な予感しかしない提案だった。

「祝杯って、あの、僕は別に・・・」

「我ながらいい事思いついたなー。どうせなら、みんな呼ぼうか。うんうん。みんなお酒強いからね。きつと凄い事になるよー」

「なるよーって・・・」

凄い事ってどんな事だろうか。とりあえず気になったのは、血を見る事になるのかという事。そして、ならないまでも、怪我をしないうで済むだろうかという事だった。ベティとガレットがいるだけで、

半ば予想が出来る事だったが。

本当に凄い事になるかもしれない。凄惨という意味で。

「・・・とりあえず、魂の試練場のクリアまでとっておいて貰えませんか？」

レオンは控えめに、そう口にした。

その言葉を言い終えた、その時だった。

何の前触れもなく、その音は聞こえた。

最初は、どこか遠くで雪崩が起きたのだろうかと思った。腹に直接響くような低い音。山の唸り声の様だった。

レオンとベティは立ち止まる。

2人がいるのは、ユースアイからかなり離れた場所である。町はだいぶ後方に見える。周囲にはもう畑等はなく、ただ丈の低い草地が広がるだけである。元々、こちら側には農地が少ないのかもしれない。

見晴らしだけは抜群にいい。

「・・・獣の声だった？」

ベティがこちらを見て聞く。いつもの彼女の笑顔はなりを潜めていて、どこことなく不安げな表情だった。

それを見て、レオンは自分の表情を認識した。

見た人が不安になるくらい、怖い顔をしていたんだ。

「いや・・・」

笑おうとは思えなかった。狩人生活の長かったレオンにははつきりと分かったからである。

あれは獣の声じゃない。あんな声で鳴く獣は、あの山にはいない。そうになると、他に考えられる可能性は、そう多くはない。

そこでまた、地響きの様な音が聞こえる。

レオンは驚いた。

とんでもなく近い。

そして、音はすぐに終わらなかった。

どんどん近づいてくる。

黙ったまま、ベティの腕を左手で掴んだ。

「え？何？ちよつと・・・」

少女の狼狽えた声に構わず、レオンは体勢を低くする。ベティに背を向けて、右手を短剣の柄に持っていた。

近づいてくる地響き。そして振動がはつきりと伝わってくる。

まさかとは思った。だけど、もう疑いようがない。

何か地中にいる。

しかも、かなり大きいやつが。

あと数秒もすれば、ここに到達するだろう。

武器はある。だけど、鎧がない。戦えるだろうか。

だが、レオンの決断は早かった。

「逃げて」

自分だろうか？と疑うくらい無機質な声だった。同時に、背負っていた矢筒を地面に放り出す。

「え？」

背後の彼女が戸惑っているのが分かる。だけど、もう待っていていられなかった。

レオンは左手でベティの身体を突き飛ばした。彼女の身体が自分から離れる。

「逃げて！ベティ！」

その声のわずか後。

自分の二の腕くらいはあるつかという程の太さの針が、突如地面から飛び出してくる。

レオンの顔めがけて。

咄嗟に右後方に倒れ込む。避けたつもりだったが、もしかしたら腰が抜けたのかもしれない。だが、すぐに左手について反動で立ち上がった。体勢を整えながら、周囲を観察する。

そこで見てしまった。

針だと思ったのはほんの一部で、実際には黒い木の幹のような物の先に、同じ黒い針が付いていただけである。針自体はそれほど太く

ないが、それでも槍の穂先くらいはあった。その針を操る黒い幹は怪しく蠢いている。

それだけでも十分気色悪いが、それに拍車をかけるものがあった。目玉。

そうとしか例えようのないものが、地面から顔を出しているのだ。生えていると言った方がいかもしれない。

その周囲は地面がめくれてしまっていて、幸か不幸か、目玉の動きがよく分かる。キョロキョロと辺りを観察しているようだ。大きさは人間の物どころではなく、明らかにどの生物のものより大きい。生物ではないのだ。

いつか戦う事になるはずだった。その時に緊張しないように、あるいは恐れないように、心の準備をしていたはずだった。その成果なのかは分からないが、とりあえず、緊張も恐怖もそれほどではない。だからといって、もちろん嬉しいわけがない。

まさか、こんな所で会うなんて。

目玉の周囲の地面が崩れていく。

地震のような地響き。

やがて、地中からせり上がるようにして、それは全貌を表した。

サソリという虫によく似ていた。同じ様な地を這う体勢に、大きな鋏状の前脚。長い尻尾の先には鋭そうな針。ただ違うのは、その大きさが、高さで2メートル、全長は尻尾を入れれば軽く5メートルを超すくらいはあるという事。鋏以外の脚が4本しかない事。

そして、通常なら顔にあたる部分に、大きな目玉がひとつだけしかない事。

見たらもう疑いようがない。こんな生物はいない。

間違いなく、モンスターだった。

レオンは右手にスローイングダガーを握る。左手にも握っておくが、投げるのは無理だ。投擲には相当な技術が必要で、レオンはただ右手でしか投げられない。左手に持っていて、持ち替えの時間

を短縮する程度の意味しかない。

武器はダガーが3本とショートソード。これ以外には何も準備していない。

その一本目のダガーをレオンはいきなり投擲した。

狙いは目玉。一番弱そうな部位だったからである。

だが、サソリ型のモンスターは、あつさり左の缺でそれが弾いた。機敏かつ的確な動き。

巨体に似合わないその動きに驚きつつも、早くも困り果てた。

自分の装備があまりにも少な過ぎるのだ。もっと武器や道具があれば工夫しようがあるが、それもない。近づこうにも、鎧がないから強気には出られない。かといって、弓もないから遠距離だと決定打がない。投擲程度の速度だと見切られてしまうのだ。

隙をつくしかない。

2本目のダガーを腰から抜こうと思った時だった。

目玉の周りで紫の光が軌跡を描く。

信じられなかった。

幼い頃に、母親に一度だけ見せて貰った事があった。あの時は青白い光だったが、今の間違いない。

魔法だ。

そう気付いた時には遅かった。

球形だったモンスターの目玉の輪郭が突如歪む。

直後、レオンの身体はバランスを崩しそうになる。

音は普通に聞こえる。だけど、視界がおかしい。水の上に垂らした油が広がっていくように、中心から歪んでいく。

魔法の効果だという事には、すぐに気付いた。

もちろん気分は良くない。だけど、目を瞑ったらもっと酷い事になる。

その予感が、レオンの気力を保っていた。

モンスターが近づいてくるのを音で判断する。虫が動き回るような小さな音ではないが、ぬかるんだ地面のせいで、音の大半が吸収

されてしまっているようだ。

何を恐れるべきなのか、向こうの武器で注意すべき物は何なのか、必死に考えた。

尻尾の針だ。

歪んだ視界に黒い面積が増えたとき、咄嗟に身体を右に捌く。視界が曖昧だから、上手く動けたのかよく分からない。

左側で風を切るような音が響く。

上手く避けられたのか。

だが、その一撃で終わりではなかった。

腹部に衝撃。

後方に飛ばされる。地面から足が離れて、宙を浮く程のパワーだった。

地面に倒れ込む。

腹部の痛みに耐えながら、必死に息をした。それと同時に、頼りにならない視界は諦めて、耳の方に神経を注ぐ。

地を引きずる音が近づいてくる。

速い。

勘弁して欲しいと思った。あるいは、諦めて楽になりたいと思ったのかもしれない。何の前触れもなく、アレンの言葉を思い出す。最初は誰でも負けたいと思っている。きっと用法は間違っているけれど、今の自分と少なからず共通点はあるような気がした。

だけど、レオンは諦めない。

それが父からの教えだったから。

自分かとどめを刺す動物達。彼らは最後まで目を逸らしたりはしない。最後までじっとこちらを見ているのだ。

それが生きるという事だ。

父の声が聞こえた気がした。

「レオン！」

ベティの叫ぶような声。

危機感が体中を駆け巡る。

左手を地面に叩きつけ、その反動だけでその場から離れた。
わずかに遅れて、地面を抉るような音。

右手について体勢を起こしながら、内心助かったと思った。思わずベティにお礼を言いそうになる。

だけど、いつまで避けていられるだろうか。

この目眩ましの魔法がどれくらい続くものなのか、レオンには判断出来ない。魔法を使った事はおろか、効果を体験したのも今が初めてなのだ。予測なんて出来るわけがない。

モンスターの足音は容赦なく近づいてくる。

諦める気はない。だけど、手が何も思い付かない。

焦りが顔を出す。

だが、突然、モンスターの足音が乱れたような気がした。

レオンは訝しんだ。普通にこちらに迫ってくる感じではない。脚を地面に擦り付けているような、ともすればのたうち回っているような、そんな感じた。

その時、突然レオンの視界が戻った。何の予兆もなかった為、魔法が切れたのだと気付くのに時間がかかった。

そして、目の前の光景に驚く。

そこにいたのはサソリ型のモンスター。そこまでは当然だが、視界が戻つてみると、それは本当にのたうち回っていた。十分気持ち悪い光景だが、それよりもレオンは、モンスターにも痛覚があるんだなとぼんやりと思った。

痛みの原因。それは、モンスターの目玉を見れば明らかだった。

その中心を、矢が数本も深々と貫いている。

よく見ると、それは今日自分とベティが背負っていた矢にそっくりだった。自分のはとくに放り出してしまったから、もしかしてベティの矢だろうか。

だけど、彼女は弓を持っていなかったはずだ。そう考えながら、レオンはベティを突き飛ばした方へと視線を向ける。

なんだか随分久し振りに見た気がするベティは、今も尻餅をつい

たままの体勢だった。大怪我をしている様子はないので、とりあえず安堵する。彼女の矢筒は背負われたままだ。

彼女は自分とは反対側を見ている。

レオンもそちらを見た。

最初は誰もいないと思った。だが、よく見ると平原の遙か彼方に、馬に乗った人物がいる。

その人物が馬を駆りながら、弓を構えたように見えた、その一瞬後。

感じたのは、視界で捉えきれない程の速度で飛来した何か。

「え？」

思わず声に出るほど驚いた。

モンスターの目玉に刺さった矢がいつの間にか増えている。それを確認している間にも、次々と吸い込まれるように突き刺さっていく。中には、貫通し過ぎて、やじりが見えてしまっているものもあった。

レオンはもう一度馬の位置を確認した。軽く200メートル以上は離れている。あんな距離では、狙いに正確に命中させる事はもちろん、これだけ深々と刺さる勢いが残っている事もあり得ない。ましてや馬を駆りながらとなると、想像も出来ない領域の腕前だ。

だが、状況から考えるとそれしかない。何故なら、他には誰もいないのだから。

目玉を蜂の巣にされたモンスターはほとんど動かなくなった。

やがて、身体中から紫の煙を出したかと思うと、空気に溶け込むように薄くなつて、あっという間にその姿を消した。

助かったとは思わなかった。

この信じがたい弓の腕を見せられて、ただ呆然と、何もいなくなつたモンスターの跡を眺めていた。

支える瞳

昨日の雨の影響なのか、それともいつもこうなのか、湿っぽい空気が漂う場所だった。

平原にぼつりと建っている、廃屋と呼んでも差し支えない小屋。むしろ、建物というよりも、休憩所と呼んだ方がいいかもしれない。誇張でもなんでもなく、四隅の柱に屋根が乗っているだけの建物である。昔はちゃんとした壁があつたのかもしれないと想像が出来るくらいには壁らしき物が残っているが、それもほぼ半壊状態。文句なしのオンボロ小屋である。

ただ、そもそも屋根さえあれば十分だったのだろう。その小屋の中心あたりに、岩を加工して作つたらしい、地下扉がある。レオン達がいるのはその中だった。

扉と同じ岩で出来た階段を下っていくと、まず事務室らしき部屋にたどり着く。テーブルやイスはもちろん、棚や水道もある。壁も床も石材だから、暖かみも何もないが、不思議と寒くはない。ろうそくの明かりが、廠かで幻想的な雰囲気を出していて、ちよつとした非日常を味わえる不思議な場所だった。どこかで匂った事のあるつんとした香りが、うつすらと漂っている。

レオンは、この部屋にひとつしかないイスに座らされて、ベティに傷の手当てを受けているところだった。彼女は狩人だからなのか、なかなか手慣れた様子だった。

「擦り傷とかはともかく、お腹は平気なの？」

右手首に包帯を巻きながら、ベティが聞く。彼女は片膝をついた姿勢だった。その方が巻きやすいのだろうが、自分だけイスに座っているこの状況は、なんだか申し訳ない。

一応、空いている左手で腹部に触れてみる。

「ちよつと変な感じですけど・・・痛くないので、たぶん平気だと

思います」

モンスターの巨大鉄によって、身体が吹き飛ぶくらい殴打された腹部だったが、骨はおろか、内出血している様子もない。違和感があるにはあるが、きつと打撲程度だろう。

その返答に、ベティは少しムツとしたようだった。薄暗い上に陰になっていたので、表情がよく分からない。

「そういうのは危ないと思うな」。町に戻ったら、一応医者に見て貰った方がいいよ」

「え？ いや・・・そんなに大した事ないですよ。寝て起きたら元通りだと思います」

「痛くないって、無理してない？ あんなに吹き飛んでたのに」

「いえ、全然」

「本当？ ちょっと触ってみてもいい？」

「え、あ、はい・・・あの、拳を握るのはやめて下さい」

そう言つと、ベティは笑った。どうやら突っ込み待ちだったらしい。あっさりと拳を引っ込める。

「そう言うベティさんこそ、大丈夫ですか？」

最初に思いつき突き飛ばしてしまったのが、レオンは一番気になつていた。だが、それがなかったとしても、突然モンスターに襲われたわけだから、動揺していてもおかしくない。

「私は平気。レオンのお陰で無傷だったからね」

ベティは明るく答えたものの、少し元気がないような気がした。

この場所の雰囲気のせいかもしれないし、自分が心配しているせいかもしれない。だけど、もちろんそれで納得出来るわけがない。

「・・・すみません。僕につき合ってもらったから、酷い目に遭わせてしまつて」

後悔の念でいっぱいなのレオンだったが、ベティは優しい表情でそれに応える。

「それって逆だよな」

「え？」

「レオンがいたから助かったよー。ありがとう」

思いも寄らない言葉だった。

自分がここまでの道案内を頼まなければ、彼女が怖い目に遭う事もなかったのに。

「いや、そんな・・・」

ベティはそこで立ち上がって、両手を腰に当てた。顔は優しいままだ。

「分かってないなー。ここまで案内してあげるって、私が請け負ったんだから、レオンが気にする事ないでしょ？それどころか、あんな大きいモンスターを相手に私を守ってくれたんだから、ありがとうっていうのが普通じゃない？」

「守ったっていうか・・・あんまり守れてませんでしたけど」
事実、自分だけだったら完敗だっただろう。

ベティはそこにやりと笑う。

「そうだねー。レオン、あんまり強くなかったね」

「・・・ですよね」

武器や鎧がなかったとは言える。だけど、それは言い訳というものだろう。準備万端だったとしても、あの目眩ましの魔法を使われたら、負けていた可能性が高い。

がつくり肩を落とすレオンに、ベティは顔を近づける。

「でも、格好良かったよ」

思わずドキツとするような大人びた声が、耳元で囁かれる。

当然とすべきか、レオンはこれ以上ないくらい慌てふためいた。元々バランスの悪かったイスごと、後ろに倒れ込む。

そんな過剰反応に栗色の瞳を大きくしたベティだったが、すぐに笑顔に戻る。

「ダメだなー。こっちは全然免疫出来ないねー」

「・・・お願いですから、僕で遊ばないで下さい」

身体とイスを起こしながらレオンが言った。とにかく心臓に悪過ぎる。目眩ましの魔法なら視界だけで済むが、こちらは思考が止ま

るからもつと質が悪い。

ベティは悪びれる様子もなく微笑んだままだった。

「いいでしょー？だって、格好良かったのは本当だし」

「格好良くないですよ。というか、格好良かったとしても普通に言っただけさ」

「さっきのは普通だと思うなー。なんなら、普通じゃない方を聞いてみる？」

「・・・すみません。さっきのが普通でした」

レオンはすぐに折れた。これ以上の衝撃は心臓が保たない。

それで満足したのか、ベティは一息吐いて、この部屋唯一の木製の扉の方を見る。その扉の向こうにある物が、この地下空間で最も重要な物なのだ。

即ち、ウイスキーの蒸留所。

「それじゃあ、治療も済んだし、ホレスに挨拶しよつかー」

「あ、そうですね。さっきのお礼もしないといけないし」

レオンは立ち上がりながら同意する。

その言葉を聞くと、ベティは何も躊躇せずにその扉の方に向かう。彼女は子供の頃からここに入出入りしているのだ。十分に勝手知ったる場所だと言えるだろう。

彼女の後ろに、レオンも続く。

木の扉の向こうに入ると、そこはまさに酒蔵といった様相だった。先ほどまでいた事務室らしき場所もそこその広さがあった。生活しやすいかはともかくとして、広さだけなら十分一人暮らし出来る程である。だが、こちらの酒蔵の方を見ると、それも氷山の一角だった事が分かる。

とにかく目に入るのは、棚によって綺麗に整列された酒樽の山だった。人1人が入れるくらいのおおきな樽が、横倒しの状態で所狭しと並べられているのだ。他にも、蒸留用の道具なのか、巨大な木製の器具や箱が積み上げられているが、それすらもほんの一部。とにかく酒樽だけで、ニコルのガレージはおろか、もしかしたら、ガ

レット酒場くらいのスペースは占拠されているかもしれない。もちろん、高さは一階分程度しかないのだが、広さは相当な規模のものだ。

その酒樽を収納している棚。それによって通路が仕切られているようなものだが、扉のすぐ正面の通路の奥に、1人の男が壁にもたれて座り込んでいる。どちらかというと、しなだれかかっているという感じかもしれない。足を投げ出して、どこか気の抜けた感じでぼんやりと近くの酒樽を眺めているように見える。

正直、レオンには違和感があり過ぎた。さっきの神業の射手はどこに行っただのか。もしかして双子の別人だろうか。

一応周囲を見渡してみる。もちろん、視界のほとんどは酒樽によって遮られているのだが、他の人の気配はなさそうだった。

そんなレオンをさし置いて、ベティはさつさとその男性の方へ歩いていく。しばらくしてからそれに気付いて、レオンもその後続いた。

たどり着くまでの十数秒間。男は微動だにしなかった。

「ホレス。さっきはありがとう」

ベティが抑えめの声で言う。

その声に、ようやくその男はこちらを向いた。

なんというか、恐らく中肉中背の人なのだ。むしろ、少し上背があるから、体格的には恵まれているはずである。だけど、どこことなく彼が貧相に見えてしまうのは、ボサボサの髪と、年季が入り過ぎている服装、そして、まるで魂が抜けてしまったかのような、無造作な座り方のせいに違いなかった。

そんな彼の唯一の明るさ。それは間違いなく彼の瞳だった。

髪に半分隠れているが、確かに彼の瞳は、右目だけエメラルドのような碧色。左目はベティと同じブラウンの瞳。

瞳の色が左右で違う人がまれにいるとは聞いていたが、実際に見るのはこれが初めてだった。

「気にするな」

ぶつきらばうな声だった。不機嫌なのか、それともこれで普通なのか、レオンには判別しかねるところである。

ベティはそんな口調にも構わず、親しげに会話を続ける。

「気にするなって言われても、気にすると思わない？ ねえ、お礼は何がいい？」

「礼なんかされたら困る」

「別に困らないでしょー？ キスくらいでいい？」

一番動揺したのはレオンだっただろう。言われたホレスの方は無表情そのものだった。

「安売りするものじゃない」

「安売りじゃないでしょー？ だって、命の恩人なんだし」

「命の恩人なら、そっちの彼の方だ。お礼なら彼にしたらどうだ？」
とんでもない提案だった。

密かに、いつでも逃げ出せるように準備していたレオンだったが、ベティはこちらを振り向きもしなかった。それどころか、どこか不満そうな口調になる。

「ホレスは、私がレオンにキスしてもいいわけ？」

「ベティの自由だ」

「何それー？ 私のフィアンセでしょー？」

さすがに、レオンはその言葉を無視出来なかった。

「あのー・・・」

ベティとホレスがレオンの方を向く。

「・・・今、フィアンセって言いました？」

「うん」

あっさりと頷くベティ。

レオンの頭の中では、なぜかフィアンセという言葉の定義を確認する作業が始まっていた。もしかしたら、婚約者という以外の意味もあったかもしれない。それどころか、もしかして、婚約者という意味だと思っていたのは自分の勘違いだったかもしれないと、そんな意味不明な疑問が頭の中を駆け巡っていた。

もちろん、そんな勘違いはない。

それをどうにか受け入れた瞬間、レオンの身体は驚きの声をあげるべく、止まっていた空気を思いつきり吸い込んだ。

そこに、男の声がタイミング計ったかのように水を差す。

「ここで大声は出すな」

急な要請だったが、なんとか、声ではなく息を吐き出すにとどめる事が出来た。

そんなレオンの様子を見て、ベティは可笑しそうに笑う。

「もしかして、レオンは私にフィアンセがいてシヨックだったのー？」

言われてみて、腕を組んではたと考えてみたが、しばらくして首を捻る。

「・・・いえ、あんまり？」

ベティは腰に手を当てる。だが、顔は笑っていた。

「それはそれで、ちょっと傷つくなー」

「あ、いえ。もちろん、驚きはしましたけど」

フォローのつもりだったが、あまり意味をなしていなかった。

そこでまた、ホレスの声が割り込む。

「フィアンセといっても、もう無効だ」

「無効・・・？」

そう言われても、レオンにはよく分からない。

その様子をみて、ベティが説明する。

「さつき、私のお祖父さんの話をしたでしょ？」

「あ、はい」

あの後モンスターに襲われたわけだが、もちろん忘れてはいない。ここで子供だったベティにウイスキーの味を覚えさせたという、ある意味で罪人である。

「ホレスはね、そのお祖父さんのお気に入りだったんだよね。ちょっとした縁で知り合って、この手伝いをしてくれてたんだ。えっと・・・もう何年くらい前からだったっけ？」

「15年」

素っ気ない答えにも、ベティは慣れた様子だった。

「その頃はまだ私も小さかったから、ずっとお祖父さん1人だったんだよ。だから、きつと少し寂しかったんじゃないかな。息子がいれば後を継がせたかったんだろうけど、女の子ばかりだったし。だから、ホレスが手伝ってくれるようになって、きつと息子っていうか、まあ、後継者にしたいと思ってたんだよね。ホレスは見込みがあるって、よく言ってたし」

「俺はそれほどでもない」

「そんな事はいいの」

ホレスの呟きにベティがすぐさま言い放つ。手慣れた会話で、本物の兄妹みだった。

「それで、ずっとお祖父さんとホレスが2人でここを切り回したんだけど、3年ちよつと前くらいに、お祖父さんが体調を崩しちゃって、まあ、なんていうか・・・もう仕事には戻れないって事になっちゃったんだ。もういい歳だったからね」

ベティの表情は明るいが、どこか笑顔になりきれていない。まだ3年程しか経っていないのだから、無理もない。その人とベティには思い出がたくさんあるようだから、尚更である。

「あの、ベティさん。別にいいですよ。僕、そんな話になるとは思わなかったの・・・」

レオンの言葉に、ベティは少し照れたような笑みを浮かべた。

「いいのいいの。えつと・・・あ、そうそう。それで、いよいよ最後つて時に、何かお祖父さんを喜ばせたいと思ったんだよね。それなら、ホレスがこの後継ぎになるって事が決まれば、安心出来るだろうなって思って、もう思いついたその日に、ホレスのところまで行って、すぐに病室まで連れて行って、私達婚約しましたーって」

なんというか、子供みたいな話だが、レオンは素直にベティらしいなと思った。呆れるよりも前に、思わず笑ってしまった。

ベティもそれにつられたようで、いつもの笑顔に戻った。

「あの時は、私はまだ結婚出来ない歳だったからねー。もう1年遅かったら、勢いで結婚してたかもしれないなー。ホレスも別によかったでしょ？」

「そうだな」

当たり前みたいに聞いたなら、当たり前みたいな答えが返ってきた。

「いや、あの・・・結婚ですよ？」

レオンが怖ず怖ずと確認すると、ベティはきよとした顔をする。

「そうだけど？」

「えっと・・・結婚ってあれですよ。夫婦になるっていう」

また言葉の定義をついつい確認してしまう。

「当たり前でしょー？他にケツコンっていったら、すぐに拭き取ったらそうでもないけど、後になつたらこびりついて取れなくなる、お父さんの喧嘩の後にいつの間にか増えてるあれの事くらいじゃない？」

ベティにしてみたら、確かに血痕はそういう物かもしれない。

「そうじゃなくて・・・普通は、結婚って好きな人同士がするものですよね？」

その質問に、ベティは真顔で答えた。

「私、ホレスの事好きだけど」

何の偽りも感じられない、堂々とした宣言だった。

ベティはホレスの方を向いて聞く。

「ホレスも私の事好きでしょ？」

「そうだな」

またもや、当たり前みたいな会話だった。

レオンはたつぷり間を空けてから、慎重に言葉を選んで聞いた。

「・・・あの、僕が気付いてないだけで、ベティさんとホレスさんは恋人同士なんですか？」

「ううん」

「違う」

同時に、同様の答えが返ってきた。

レオンはなんとか、納得のいく答えを導きだそうとする。その数秒後にはあえなく破綻したのだが。

「・・・すみません。僕にはついていけないみたいです」

正直に敗北宣言する。

2人がどういう関係なのか、さっぱり分らない。

あっけらかんとした口調で、ベティは言った。

「それよりも、レオンはここに來た目的を忘れてないー？」

そうだった。すっかり忘れていたのは事実だが、今ならすぐに切り替えられる。とりあえず、現在の摩訶不思議な難題を忘れ去りたいという思いが強過ぎる。

レオン本人が聞く前に、ベティが勝手にホレスに尋ねた。

「ホレスー。レオンが弓と笛を教えて欲しいんだって」

全く見当違いではないが、かといって正解とは言えない。正確には、狩人としての戦闘について、アドバイスして欲しいというのが正しい。

だが、レオンが訂正するより前に、ホレスの答えがあつた。

「いいだろう」

こちらを見るわけでもなく、隣の酒樽を見つめながらの返事。

わずか数秒で、話がまとまった。

「よかったねー」

ベティの言葉はとりあえず置いておく事にして、レオンはホレスに確認した。

「いや、あの・・・いいんですか？」

「ああ」

「こういうのもなんですけど・・・お忙しいんじゃないですか？」

「暇な日もある」

「そうかもしれませんが・・・別に僕の為に使わなくても」

そこでホレスはこちらを向いた。向いたのは碧の右目だけだったが、それだけで彼の全てがこちらを向いたような、それほどの存在

感があつた。

「レオンだったな」

やや気圧されながらも、レオンは頷く。

「は、はい」

「ベティの命の恩人だ」

意外な一言である。ベティに言われた時も戸惑ったが、ホレスの口からその言葉が出るのは尚更違和感があつた。

「いえ、僕は何も・・・助けたのはホレスさんですよ。どちらかというと、ホレスさんが僕の命の恩人です。本当にありがとうございました」

その言葉にも、ホレスの碧の瞳は微動だにしない。

「俺はとどめをさしたただけだ。俺がいなくてもベティは逃げられた。だから、助かったのはレオンのお陰だ。本当に感謝している」

全然感謝している口調でも体勢でもない。だけど、きつと不器用な人なのだろうとレオンは思う事にした。

「逃げられたかは分かりませんが、ベティさんがここまで来たのは僕が頼んだからなんです。だから、あれくらいは当然というか・・・本当は、見習いとはいえ冒険者なんですから、倒せないといけないんですけど」

「ダガーを使っていたな」

突然の話題変更に、戸惑いつつも頷く。

「え？あ、はい・・・まだ習いたてですけど」

「アレンに言われたのか？」

「そうですね・・・」

「なるほどな」

「・・・はい？」

そこでホレスはベティの方を向いた。

「ベティ。これからはレオンと一緒に来い」

何の脈絡もない言葉だが、やはり慣れているのか、ベティはすぐに答える。

「それはいいけど、毎回一緒は無理だと思うよ。レオンはこれからダンジョンにも挑戦し出すから、結構忙しくなると思うし」

「・・・分かった。遅いようだったら俺が迎えに行く」

「ホレスが？それって、私を心配してくれてるの？」

「当たり前だ」

ベティは照れたように苦笑する。ホレスの前ではよく見せる表情なのかもしれない。

「そんなに心配しなくてもいいよー。あんなモンスターはそうそう出ないと思うし。だいたい、今まで出た事なかったしね」

「一応だ。絶対に1人では来るな」

「はいはい。心配性だねー」

諦めたようなベティの口調。お互いの事をよく知っているのだろう。会話を聞く度に、その印象が強くなっていく。

そこでふと、2人の関係が分かった気がした。

「レオン」

ホレスの声に、レオンの思考は中断された。

「あ、はい」

「狩人としての弓という事なら教えられる。ベティの護衛を頼むよ
うで悪いが、俺のところまで来て貰えれば出来るだけの事は教えよ
う。元々、野外でしか教えられない。わざわざ出向かせるようだが、
理解してくれ」

その言葉で、レオンの推測はほとんど確信に変わった。

「いえ、教えて貰えるだけでも十分です。それで、あの、ホレスさ
ん」

「どうした？」

「ホレスさんにとって、ベティさんってどんな存在ですか？」

回答はやはり早かった。

「幼馴染み。それか、妹か。いずれにしても大切な人間だ」

やっぱりそうだった。恋人というよりも、そちらが近い。ある意
味夫婦にも近い存在なのかもしれない。家族同然の付き合いという

事なのだろう。

そこで、ベティの声が響く。

「恥ずかしい事聞くよねー。そんな事確認してどうするの？」

そちらを見ると、どこかにやけた顔をしていた。からかう気満々である。

どう答えたら被害が最小限で済むだろうか。そう思案していた時、ホレスが不意に、懷から笛を取り出す。オカリナに似ているが、穴が少ないように見える。片側しか見えないが、2カ所しか確認できない。薄苔色の不思議な楽器だった。

「あ、吹いてくれるの？」

ベティのどこかわくわくとした声。

「ああ」

「こんな時間に珍しいね」

「今日は特別だ」

その言葉に、ベティは微笑んでレオンの腕を掴んだ。

「何ですか？」

「いいからいいから。座って座って」

腕を引っ張られて、強引に床に座らされる。石材だから冷たいかと思ったが、意外にも少し熱を持っていた。

2人並んで、ホレスの方を向く。演奏者の方かというと、笛に口を当てて、じっと目を瞑ったまま動かない。精神統一しているのだろうか。

「ホレスはね、よくウイスキーに笛の音を聞かせてるんだよ」

「・・・どうしてですか？」

「味が良くなるんだってさー。だから、ここも大声厳禁なんだよ」

「へえ・・・」

聞いた事のない話だったが、職人が言うのだから、きっとそうなのだろう。

そこで突然、笛をくわえていたホレスが口を開く。目は瞑ったままである。

「これはウイスキーの為じゃない」

ベティは笑顔でそれに返事をする。

「じゃあ、何の記念？」

「記念じゃない」

「あれ？レオンとの出会い記念じゃないの？」

「それもいいが、観客はもう1人いる」

少女の瞳が一瞬大きくなる。

「・・・へえ。珍しいね」

「これくらいしか出来ない」

「本当に心配性だなー」

今日何度目かの、ベティの照れた声。

それを受け止めるようにして、笛の音がその片鱗を見せ始める。

決して高くはない、身体に直接響いてくるような素朴な音。それをどこか寂しげな旋律で彩るのだが、不思議と暗い印象は全くない。悠久の自然に、或いは母の腕の中に抱かれるような、心休まるメロディ。身体中を癒しの音色が包み込んでいく。

その笛の音に酔いしれながら、レオンは演奏する青年と隣に座る少女を見た。

さっきの会話を思い出す。

通じ合った2人の会話だから推測で補うしかないが、やはり兄妹だと考えると分かり易い。兄は、明るく振る舞っている妹の事が心配なのだろう。あんな体験をすれば、本当は辛かったはずなのだ。その心の負担を和らげる為の演奏なのではないだろうか。そんな優しさそのものの音色に聞こえる。

家族。

笛の音にのせて、レオンも自分の村に思いを馳せる。まだ村を出て半月程しか経っていない。ホームシックになるには早過ぎるが、この2人を見てこの音色を聞くと、否応なく故郷が恋しくなってくる。

だけど、それにはまだ早過ぎる。

ついさっきの戦いを思い出す。文句なく、自分の完敗だった。次に戦う事になった時、自分は勝てるだろうか。もし傍に誰かいたら、その人を守るだろうか。

逆の懸念もある。あの時ベティがいなかったら、自分は針の攻撃を避けられなかっただろう。彼女の声があったから、咄嗟に避けられたのだ。それだって、確信があったわけではなく、ほとんど勘みたйнаものだった。

あんなのがダンジョンにはうようよしているのだろうか。

そんな場所で、自分はたった1人でも生き残れるのだろうか。やめるなら今のうち。

そんな考えが頭を過ぎった時だった。

最初はそういうメロディーなんだと思った。だけど、違った。

笛の音が次第に遅くなっていく。音色だけではない。他の音も、感覚も、時間でさえ、勢いを失っていくのだ。ゆつくりと、だが確かに停滞していく世界。

それを認識していたレオンだが、どういうわけか身体が動かなかった。意識だけが遠くから見ているような感覚。

そしてついに、時が止まる。

だが、それも一瞬だけだった。

気付いた時には、時は元に戻っている。

笛の音は元の旋律のまま。

ホレスは目を閉じている。ベティはこちらを見ていない。何も気付いてないようだった。

だけど、レオンは確かに感じた。

今何か起きた。

そして、確かに見た。

時が止まった一瞬。その時自分の視界を支配したのは、この蒸留所の風景ではなかった。

そして、その場所でじつとこちらを見ている存在。

行儀良く座って、じつとこちらを見ていたのは、白毛に紅眼の力
ーバンクル。

今のは何だったのだろう。

笛の音はまだ続いている。

その癒しの旋律も、今のレオンの耳にはどこか遠くの音色のよう
に聞こえた。

酒場の主人と行商人

ガレット酒場の朝は早い。

それは、ここが宿屋の食堂も兼ねているからとか、また、冒険者は日の出前の時間に出立する事が多いからという理由もある。だが、もしそんな理屈を本気で信じている人がいるとしたら、それはきつとこの酒場の事をよく知らない人だろう。ここはそんな客目線の発想をするような店ではないのだ。

この酒場の朝が早い理由。それは、単純に酒場の主人のガレットが早起きだからである。

彼の場合、日の出前に起きるのは当たり前。睡眠時間が3時間を越すことはほとんどない。仕事の為とかではなくて、そういう生活習慣が身についてしまっているのである。

元冒険者であるガレットにとって、睡眠は短い程良い。特に、魔法を使うジーニアスは精神的負担が多い為か、睡眠時間が長い傾向がある。夜の見張りは基本的に、彼のようなアスリートの仕事なのだ。無駄に長い睡眠は他のメンバーの負担になるし、何より、寝ている間は無防備だから、寝ていても落ち着かない。その頃の癖が抜けないままのガレットは、長い睡眠が出来ない身体なのである。

それだけなら、彼が早起きであるというだけの話で済むのだが、ガレットには欠けているものがあつた。

一言で言うなら、それは配慮、あるいは遠慮である。

早朝だから静かにしようなどという発想が彼にはない。冒険者にしてみたら当たり前の事なのだが、酒場兼宿屋の主人となつた今でも、困つた事に変わらない。何かしていないと落ち着かないという事なのだろう。客はおるか、家族だつてまだ寝ている時間でも、平気で廊下をうろろする。うろろするだけならまだ良いが、掃除や片づけを始めたりする。特に、何か捜し物があると、妻や娘を起

こして聞く事もある。本人達はもう慣れてしまったわけだが、その話し声を聞かされる客達の方はそうではない。

端的に言えば、朝から落ち着かない。

そういう場所だから、ここに宿をとる一般の客はほとんどいない。初めてここに泊まった一般人は、次からは大抵他の宿をとるし、そもそも、ユースアイの人々は親切だから、一般人が宿を探している場合、ガレットの宿場を紹介する事はない。

代わりに、冒険者が宿を探している場合には、迷わずここを紹介する。何故なら、冒険者の生活習慣が身につくからである。さらに、明日の出立が早い場合でも、寝坊する事はまずない。仮に自分達で起きられなくても、主人自ら起こしにくるからである。多少身体にダメージが残る起こし方だが、他の宿屋ではこうはいかない。夜遅くに帰ってきた場合でも、ガレットはすぐに飛び起きて出迎えてくれるし、そもそもほとんどの時間起きているわけだから、閉め出しされる心配もない。好意的に見れば、冒険者向けの宿屋だと言えるだろう。

そんなガレットの店だが、1階のフロアのほとんど全てが酒場兼食堂となっている。そこで冒険者達が、酒を飲んで語り合ったり、羽を休めたりするわけだが、そういう場合、多くの客達はテーブル席を使用する。というのも、冒険者の多くはパーティを組んでいるからで、イスが3つしか用意されていないカウンター席は、4人以上が理想とされる冒険者パーティには少な過ぎるのである。

カウンター自体の広さはもつと多くのイスを置くのにも十分なものだが、ガレットはそれ以上のイスを置こうとはしない。その理由を一言で説明するのは難しいが、簡単に言えば、冒険者達と必要以上に馴れ合いたくないからである。馴れ合ってもお互いの為にならない。志半ばで冒険者を引退した自分にとっても、これからより高みを目指す冒険者達にとっても。

その為、現在カウンター席を利用する人間といえば、まだ仲間がない見習いのレオン、たまに遊びにくる自分やベティの友人達。

それから、今座っている行商人の男くらいである。

ガレットはカウンターの中から、座っているその男を見下ろす。

男は2つのグラスに注がれたウイスキーを交互に飲み比べているところだった。

旅人にしては頼りない体つきで、道中で強盗に襲われたらどうするのだろうかといつも思うのだが、町中にいる時には恵まれた外見だと言えるだろう。相手に警戒心を抱かせないのはもちろん、実は整った顔立ちでもある。客に取り入るには有利な武器となっているに違いない。服装も当然くすんだり汚れたりしているわけだが、こういった職種の間人には珍しく、意外に気を使っているという事だった。これは、本人に聞いたわけではなく、妻や娘の意見である。少し無精髭をのばしているが、それもファッションのうちという事なのだろう。人当たりがいいのは間違いない。

彼は自分の事をガイと名乗っているが、本名ではなく、覚えやすいからそう名乗っているという事だった。そして、実を言うと、彼こそがこの町までレオンを乗せてきた男である。ついさっきこの男に確認もしたし、レオンが住んでいたような山奥まで行くような行商といえば、彼くらいのものである。まだ若い男だが、その若さに見合ったフロンティア精神と、しっかりとした商売眼を併せ持っている、なかなか大した男である。

ガイは両方のグラスとも二口しか飲まなかった。それもそのはずで、これが彼の仕事の一部だからである。

しばらくして、彼は顔を綻ばせながら言った。やや苦笑気味と言っている。

「……同じ場所で作ってるのに、どうしてこんなに違うんだろうなあ」

彼が味見していたのは、ガレット酒場自家製のウイスキーである。彼の妻の父親が始めたという、こだわりの銘酒だ。

「そんなに違わねえだろ」

ガレットが吐き捨てるように言ったが、ガイは全く意に介さず続

ける。見かけによらず、この男は度胸もある。

「いやいや。分かる人には分かるんですって。ホレスの方は小川のせせらぎみたいな繊細さがあるけど、オッサンの方は土石流……」
眉がぴくりと動いたのが自分でも分かった。

「てめえ、本人を目の前にして土石流ってな……覚悟してるんだろうな？」

怒気を込めた眼で睨むと、ガイはあっさり両手を挙げた。だが、顔は笑っている。

「そういう荒々しい方が好みって人もいますよ。この口の中で荒れ狂う感じはなかなか出せないって」

「てめえなあ……それで褒めてるつもりか？」

ガイは口元を上げる。

「もちろん。悪い品だったら、買い手なんてつかないし」

「その買う奴も買う奴で、何を好き好んで、そんな土石流を飲みたがるんだ？」

「都会人は刺激が欲しいんでしょうね」

「じゃあ、ホレスの方はどんな奴が買うんだ？」

「それはまあ……違いが分かる人でしょうね」

自分のは出来が悪いと遠回しに言われたような気がしたので、もう一度睨んでみたが、今度は効果がなかった。どうもやりにくい相手である。

ガイは周囲を見渡してから、ガレットに聞く。

「今日はベティちゃんは何？ホレスのところですか？」

世界広しといえど、ベティの事を今もちゃん付けで呼ぶ男はガイだけである。

ガレットはグラスを片づけながら低い声で答える。

「レオンの鎧が出来たとかで見に行っちゃったんだよ。付き添いつていうか、仕事をサボる口実みたいなもんだ」

「へえ……レオンはどんな感じですか？」

「どうってなあ……これからようやくダンジョンに挑戦ってとこ

るだから、何とも言えねえだろうな。まあ、なるようにしかならねえよ」

「いや、そうじゃなくて・・・例えば、息子としてどうですか？」
思わぬ質問に、ガレットは鼻で笑った。新しいグラスを手に取りながらガイの方を見ると、彼も楽しそうな表情だ。

「まあ、息子としてなら、どこに行ってもやっていけるだろうよ。うちもたまに手伝って貰ってるが、よく働uksi、人当たりもいいしな」

「やっぱりそうですよねえ・・・俺も、ここに連れてくる時、そう思ったんですよ」

「そういえば、そんな話をあの馬鹿娘から聞いたな。弱そうだ弱そうだって、皆に言われたらしいんだが、連れてきて貰った行商の男にもそう言われたってな」

娘のベティは、そういう情報を聞き出す事にかけては天才的と言ってもいい。

悪びれる様子もなく、ガイは可笑しそうに笑った。

「本当に弱そうですからねえ。最初はジーニアスかと思ったんですけど、魔法は使えないって言うし・・・だから、一応少し心配してたんですよ。というか、最初に会った時、止めとけって言おうと思っただくらいで。だけど、レオンの両親と知り合いだったから、断るのも悪いし」

氷を入れたグラスにウイスキーを注ぎながら、ガレットは軽く答える。

「あいつのご両親がお得意さんだったか、それが母親か姉が美人だったか、どうせそんな理由だろうが」

ガイは微笑む。肯定の笑みだ。

「美人っていう事なら、それはもう・・・レオンの母親ですからね、愛想が良くて優しい人ですよ。そうだ。それで、聞きました？」

ガレットはウイスキーの入ったグラスをガイの前に置く。

「何をだ？」

いつの間にか、ガイは真剣な表情だった。

「実は、つい最近、新ダンジョンが見つかったんですよ。それが滅多にないような規模のものらしいんですけど、その入り口がユースアイからも結構近いそうで」

思い当たる節があり過ぎる話だった。

「おい。そのダンジョンの入り口、まさか、ここから西の方か？」

目を見開いたガイの表情を見れば、その答えも一目瞭然だった。

「あれ・・・知ってました？西っていうか、正確には北西の山奥の方なんですよ。どちらかというところ、こっちよりも、山を越えた向こうの方では、結構な強さのモンスターが出るようになったみたいで、今ちよつとした厳戒態勢だとか」

ガレットは右手を額に当てて、大きな溜息を吐いた。

「てめえは・・・こういう時はちつとも役に立たねえんだよなあ」
役立たず呼ばわりされたガイだったが、困惑しているのは明らかである。

「いや・・・なんか知りませんが、俺、間が悪かったですか？」

あさつての方を向きながら、ガレットは言い放った。

「こつちにも出たんだよ」

「モンスターが？」

「当たり前だろうが。もつと早くに聞いてたら・・・いや、もういい。てめえに期待しても仕方ねえ。それよりか、ギルドの情報網はどうなってるんだ」

「いやいや。何かあったんですか？あれ、西つて言えば・・・もしかして、モンスターに襲われたの、ベティちゃん？」

西にはさっき味見させたウイスキーの蒸留所があり、そこにベティが度々通っている事くらいはこの男も知っている。相変わらず彼の勘は鋭いが、今更働いても意味がない。

さすがに驚いた表情のガイはさておき、ガレットは心中穏やかではなかった。そんな情報があるのなら、ギルドから注意勧告があってもいいはずだが、それが全くなかった。一言でも情報があれば、

いくらでも対処方があったはずだ。

だが、ガイはその辺りの心情も読み取れたらしい。こちらの勘は捨てたものではない。

「いや、ケイトさんは悪くないですよ。この情報をここまで持ってきたのは、たぶん俺が一番手ですからね。入り口が判明したのは、本当について先日なんです。それまでは、山のどの辺りかなんて全然分かってなかったわけですから。あの山脈、結構広いですからね」

「そんな情報が、何でギルドよりも先にてめえにまわってくるんだ？」

「大した事じゃないですよ。何の偶然かは知りませんが、山奥でたまたま乗せた冒険者達が、その入り口を見つけた人達だったっただけです。まさにその帰りだったらいいんですけど、移動手段の方をモンスターにやられて途方に暮れてたらしいんですよ」

「・・・てめえはそんなモンスターが溢れる山奥をうるちよろしてたのか？」

「いやあ、そんな事知りませんでしたからね。堂々と通ってたら、意外に会わないものなんですねえ」

他人事みたいに言ったが、一歩間違えたら命がなかったのは確かである。ただ、ここで笑い飛ばせるというのが、彼がただ者ではないという何よりの証明かもしれない。

ガイはグラスに口をつけてから、話を戻す。

「そういうわけなんで、そろそろギルドにも報告が来て、手練れの冒険者が押し寄せて来ると思いますよ。まあ、山の向こうの方が大々的に募集してると思いますから、こっちはそれほどもないと思いますけど」

「そのダンジョンの規模がどれくらいかは分かるか？」

「いや・・・その人達も入り口を見てきただけらしいんで。そういう依頼内容だったらいいですね」

ギルドからの依頼だったという事だろう。普通、ダンジョンの入り口は冒険者が勝手に見つけるから、そんな依頼が出る事はほとん

どない。逆に言えば、それだけギルドの憂慮する案件だということだろう。

難しい顔をしている酒場の主人に、ガイは少し間を取ってから聞いた。

「・・・その、ベティちゃんが襲われたモンスター、倒したのはホレスですか？」

ガレットは憮然として答える。

「ああ」

「強さはどんなものだったかは聞きました？」

「矢を13本使った」

「あいつらしい表現ですねえ。でも、13本っていつたら・・・」

そこでガイの言葉は途切れたが、言わんとする事は分かる。ホレスの矢は正確無比であり、普通の獣なら1本あれば急所を射抜く。急所がはつきりしないモンスターでも、普通は5本もあれば十分事足りる。その倍以上使ったという事だから、それだけ強力なモンスターだったという事だ。

「・・・どうも嫌な感じだな」

ガレットの呟きに、ガイが軽く聞く。

「元冒険者の勘ですか？」

「行商の勘は何て言ってるんだ？」

「ここは安全」

「・・・根拠は？」

「勘だからなあ・・・と言いたいところですけど、実はひとつだけいい材料があるんですよ」

方眉を動かしたガレットに、ガイは微笑んで言った。

「レオンは、実はただ者じゃないんですよ」

「何？」

確かに、前世を見た事がないという意味ではただ者ではないし、強力なモンスター相手に恐れもなく立ち回ったというのは、聞いた時は思わず感心した程だ。だが、ガイの口振りではそれだけではな

さそうである。

たつぷり間を取ってから、ガイは自信満々の口調で言った。

「あいつは伝説になる男なんです」

同じくらいたつぷり間を空けてから、ガレットは半眼になって聞いた。

「・・・根拠は？」

「俺の勘」

「帰れ」

グラスを下げようとするガレットを、慌ててガイは止めた。

「いやいや！今は冗談」

「今のは？どうせ他に理由なんかねえだろうが」

「あるある！」

「分かった。とりあえず聞いてやる」

「そう言いながら、グラスから手を離さないのは何で？」

「いいから言ってみやがれ」

ガイはそこで困った顔になった。

それを見たガレットは、口元に笑みを浮かべる。全然明るくない笑みを。

「・・・ガイ。こちらも家族の命が賭かってるんでな。お前の戯れ言につき合ってる暇はねえんだ。これ以上つまらねえ冗談を言いやがったら、二度と馬鹿な事が言えねえ身体に矯正してやるから楽しみにしてる」

「いや、冗談ではないけど・・・ただ、あの、最後まで怒らないで聞いていただけませんか」

「そうだな。最後まで望みは聞いてやろう」

「最後って・・・」

「何だ？もう言い残す事はないか？」

ガイは瞬時に両手を挙げて、後ろに飛び退いた。ウイスキーよりも命を優先したようだ。なかなか賢いと、ガレットは少し感心した。それを見届けてから、黙ってグラスを片づけると、不意にガイが

近寄ってきた。まだ話があるようだ。

「・・・何だ？」

思いつきり不機嫌な声で言ったが、ガイは少し微笑むだけで、それを受け流す。

「レオンの村。サイレントコールドの故郷なのは知ってますよね？」

「それがどうした？」

「これは本当は秘密なんですけど・・・レオンが知らなかったら話しておいて貰えますか？」

ガレットは眉を動かす。どうやら真面目な話らしい。

ガイは小声で話を続ける。

「実は、レオンの村には、サイレントコールドが作ったアーティファクトがあるって話なんですよ」

アーティファクトとは、魔法によって作られたアイテムの中でも最上位の物の総称だ。一般人はもちろん、冒険者でも一生お目にかかれない事が多い。普通の魔法のアイテムなら、ある程度のジーニアスならば作る事が出来るが、アーティファクトとなると、伝説級の能力がなければ製作不可能と言われている。まさに幻の品であり、それに秘められた力も、他のアイテムの比ではない。

「そのアーティファクトにはいろいろな力があるらしいんですが、常に作用してるのは、村を守る機能なんです。あの辺りに雪女が出るって話を聞いた事あると思うんですけど、それがまさにその防衛機能らしいんですよ。アーティファクトの力によって生み出された幻影なんですけど、モンスターとか、あと、盗賊とかの前に現れて、そいつらを魔法で氷漬けにしているらしいです。若い頃のサイレントコールドにそっくりの姿で、その魔法の力も、並の冒険者じゃ勝てないって話です」

「その村で育ったんだから、レオンもそれくらい知ってるだろ？」

当然のガレットの疑問だったが、ガイは頷かなかった。

「子供にはそういうお伽話として教えてるらしいんですよ。レオンは16歳だから成人といえば成人なんですけど、いつ教えるかは親

の勝手らしいんです。というか、レオンのご両親が、なんていうか・
・ちょっとぼんやりしてるんで、たぶんまだだろうなあと思って」
酷い言われようだが、ガレットにも否定出来ないところだった。

またベティ経由の情報だが、レオン一家は村でもぼんやりした家族
で有名だったらしい。

ガイはそこで身体を離す。微笑みながら軽く左手を挙げた。

「じゃあ、そういう事なんでよろしく。ボトルの方は、明日取りに
来ますんで」

それだけ言うと、出口の方へと歩いていく。

ガレットは腕を組んでそれを見送っていた。

相変わらず、食えない男である。

結局、ガイが何故こんな話をしたかというと、レオンの村がその
北西の山脈のどこかに位置するからだろう。ガレットは行った事がないから分らないが、ガイは何度か訪ねた事があるらしいから、
場所を知っているのだ。

つまり、これから新ダンジョンの話が広まれば、当然レオンの耳
にも入る。そうになると、レオンは自分の故郷の事が心配になるだろ
う。それでも、村にある程度の防衛機能があるという事を知ってい
れば、ある程度は安心出来る。

もちろん、彼は行商人だから、ただの親切心だけだとは思えない。
自分やレオンに対して誠意を見せたと捉える事も出来る。彼はそれ
くらいの計算が出来る男であり、そうでなければ、あの若さでたっ
た1人、行商を続ける事は出来ない。

そう捉えられる事もまた、お互い承知の上である。商売人とはそ
ういうものなのだ。

「あれー、ガイさん来てたの？」

ガイが出口にたどり着こうとした時、扉が向こうから開いた。そ
こに立っていたのは、新品の皮鎧を着たレオンと、ベティ、そして
鍛冶屋で働くりディアの3人だった。ばったり出くわす格好になっ
たわけだが、当然というべきか、最初に口を開いたのはベティだっ

た。

「お久しぶり。ベティちゃんもリディアさんも綺麗になったね」

齒が浮くような台詞だが、ガイは平気な顔で言える男なのだ。

「何で私だけちゃん付けなのー？」

「レオンも鎧が出来たんだって？」

「私の質問は！？」

ガイはあっさりとそれも無視する。扱いに慣れているというか、完全に遊んでいる。付き合いが長いわけでも深いわけでもないのにここまでの事が出来るのは、きつと相性の問題だろう。

レオンは慣れない状況に戸惑っているようだった。いつもベティに振り回されているわけだから、無理もない。

「えっと・・・」

ガイはそんなレオンの肩に手を置く。あまり体つきはよくないが、それでも身長はガイが一番高い。

「鎧はよく似合ってる。だがな、レオン。二股は程々にしておけよ。鎧と一緒に、2人同時なんてのは無理があるんだ。ベティちゃんとはかく、リディアさんみたいな美人を見て、思わず手を出してしまった気持ちは、分らないではないけどな」

完全な濡れ衣だったが、ガイがわざと言ってているのは明らかだった。声がやや大きいのは、多くの人間に聞かせる為だろう。

酒場中の視線が、出入り口の扉に集中する。

「私はともかくって何ー！？」

怒った様子のベティはともかく、レオンとリディアは完全に固まっていた。好奇の視線を一身に浴びているのが分かっているのだ。レオンは顔が青くて、リディアは顔が赤いという違いはあるが。

「じゃあな。みなさんお元気で」

普段通りの口調でにこやかにそう言うと、ガイは颯爽と店を後にした。

酒場には、変な空気が残っていたが。
ガレットは溜息を吐く。

これは一体何のサービスなのだろうか。さっきのアーティファクトの話のように、何か利点があるのだろうか。

考えても答えはない。あるはずもない。

ただの遊びに違いなかった。

そして、結局、この事態を処理するのは、自分の仕事のようにだった。

「ベティ！レオン！あの馬鹿の戯れ言はいいから、とっとと報告しやがれ！リディアの仕事が止まっちゃまうだろうが！」

ガレットの店内を揺るがす声が、凝り固まりそうだった空気を一喝で吹き飛ばした。

ダンジョン入門

その日、レオンの朝は早かった。

どれくらい早起きだったかというところ、泊まっている宿場の主人のガレットよりも早かった。彼は、毎日夜明け前には廊下を徘徊している事で有名だが、今日起きた時には、宿場内は静寂そのものだった。しばらくしてから用を足そうとして部屋を出たら、その物音でガレットを起こしてしまったらしく、気まずい思いをした程である。そもそも、ベッドに入った時間が早かったとは言える。だけどそれ以上に、よく寝付けなかったのは自分でもよく分かっていた。

高揚と緊張。

それらと上手く折り合いをつける為の心の準備をしながら、薄明を迎え、身支度をして、早い朝食を済ませたレオンは、まだ早朝と言える時間に酒場を後にした。

風がやや冷たい。

だが、それが気にならない程、レオンの頭はこれから向かう場所の事でいっぱいである。

ガレットにも訓練所のアレンにも、ただの通過点だと言われた。それでも、最初の一步には違いない。

まだ人気の少ない大通りを歩きながら、装備を確かめる。

腰に下げているのは、スローイングダガーが3本とショートソード。それから左腕にはバックラー。もう重さには十分慣れている。投擲もだいぶ上達してきて、動きながらも狙った位置に飛ぶようになってきた。ただし、それは右手で投げた場合だけで、左手で投擲するのはまだ難しい。

一昨日初めて着たのが、鍛冶師のジェフとその娘のリディア特製の皮鎧。ただの皮だけではなくて、特殊加工した金属で網目を作っ

て、それを下地にしてあるという事だった。軽くて丈夫だが、もちろん、金属製の鎧程の信頼性はない。それでも、命綱としては十分な物である。元冒険者のガレットにも見て貰ったが、初心者には勿体ないと言わせた程、手の込んだ代物だった。

背中には弓と矢筒。狩人であるホレスのお下がりだが、かなり小型の弓で、矢は10本程しかない。というのも、レオンはまだあまり弓が使いこなせない。よほどのが大きくないと、動きながらは当てられない。急所を狙うなんて事はもつての他。あくまで補助としての武器だ。

そして、昨日最後まで揉めたのが、二の腕に巻き付けてある紐のような物だった。細くて光沢のある紐の両端に、小さな円錐状の器具が取り付けてある。紐の長さは最長で4メートル程はあるが、端の器具に仕掛けがあつて、普段は短く収納されるようになっていて、それを左の二の腕に2本、右腕に1本巻き付けてある。皮鎧の上からだから、それほど痛くはない。

実はこれはニコルが作った物だ。彼が呼ぶガジェットという物である。

昨日、ニコルは様々なガジェットを見せてくれた。自分の為に用意してくれた物だったが、予想通りというかなんというか、その大半が、凶悪な威力を誇る代物だった。もちろんガレージ内では実践できないから、説明を聞いただけである。粉塵が舞ってみたり、二種類の液体が混合したり、とにかくいろいろ過程はあるものの、最終的には何らかの形で爆発させるのがニコルの流儀らしい。

だが、嬉々として説明していたニコルはともかく、実際に使うかもしれないレオンは、はっきり言って気が進まなかった。取り扱いを誤った場合はもちろん、万が一モンスターの攻撃が命中して起動したりすれば、木っ端微塵になるのは自分の方だからである。

それをなるべく丁寧に訴えてみたところ、次にニコルが紹介したのがこの器具だった。いろいろ用途を教えてくれたのだが、とにかく爆発しない。その一言で、レオンはほぼ即決した。

以上が、レオンの装備の全て。

全てといっても、他にも食糧等の細々とした道具が必要だから、重量にもある程度の余裕が必要だ。そう聞いていたからこの装備でいいと思っていたが、実際には初めての事だから加減が分からない。やってみなければ分からない。

例えばそれが危険なチャレンジでも。

いつの間にか、レオンは目的地に着いていた。

町の南西部。ぼっかりと空いた大穴の中を、石レンガで出来た下り階段が続いている。

その脇には石碑があり、大きくこう書かれている。

ダンジョン。ビギナース・アイ。

自治都市ユースアイは、その町の中にダンジョンを有している事で有名でもあるらしい。普通はもちろん、ダンジョンの入り口は町の外にある。そこからモンスターが出てくる事もあるし、観光名所になるわけでもない。だが、この町は、敢えてこのダンジョンを囲むように作られたという事だった。

それには当然理由がある。最も大きい理由は、今から400年以上前、この町を作ろうとしていた頃に起きたとある事件だった。

ある町の中心に、突然ダンジョンの入り口が出現して、そこからモンスターが溢れ出てきたのだ。

それは、レオンでも知っている程有名な話だった。その町の人々は必死に応戦したが、一週間もしないうちに、その町には人がいなくなつた。ダンジョンの規模が大きかった為、モンスターの強さも相当なものだったのだ。ダンジョンの規模とその中に潜むモンスターの強さは比例するし、外に出てくる頻度も多くなる。

その話を聞いて、ここに移住しようとしていた人達も不安になった。そもそも、ここが自治都市なのは、国が普通の都市として認めていないからである。今でこそ大きくなったが、当時にしてみれば、交通の要所でもないし、高地で冬が厳しいし、季節の変わり目には水害もある。自然の恵みもあるが、裏を返せばそれは厳しさでもある。

る。ただでさえ辺境と言える土地なのに、そんな住みにくい都市を、国力を費やしてまで守ろうとは思わなかったのだ。そこで、自治都市という事にして、軍備や行政を丸投げしているのである。

そんなわけだから、万が一ダンジョンが出現しても国は守つてくれない。自分達を守るのは自分達以外にはいない。だが、人も資産にも恵まれないわけだから、備えようにも備えられない。

力が無かった当時の人達は、そこで頭を使つた。

だったら、最初からダンジョンがある場所を選べばいいと。

本末転倒な話に聞こえるかもしれないが、もちろん根拠があつた。踏破済みのダンジョンからはモンスターが外に出て来ない事。そして、ダンジョンの入り口には一定以上の間隔があるという事。どちらも経験則でしかなかったが、移民がほとんどだった為、それぞれの故郷の話を聞いているうちに、そういう傾向がある事に思い至つたのだ。

当時、この付近にはダンジョンが2カ所存在した。ここ、ビギナース・アイと、町東部の池のほとりにあるというファースト・アイ。どちらも難易度が低めであり、かつ踏破済みのダンジョンだった。ビギナース・アイは、その名の通り、まさに初心者向けのダンジョンであり、万が一モンスターが出てきたとしても被害が大きくなる。ない。

それから150年程すると、町北部の山脈の入り口辺りにダンジョンが出現した。ほどなくして、そこが魂の試練場と呼ばれる特別なダンジョンだという事が分かった。魂の試練場からはモンスターが出てきた事はない。ユースアイの人々は安堵したに違いない。

それから今に至るまで、大きくなったユースアイの町中に突然ダンジョンの入り口が顔を出すといった事態は起きていない。ビギナース・アイからもモンスターが出てきた事はない。

ただ、だからといって、ユースアイの先祖が慧眼だったかという、それは断言出来ないところだった。何故なら、400年以上前のあの事件以来、町中にダンジョンが出現したという事例はないの

である。今では、あの町であの時、邪悪な何者かが暗躍したのではないかという説が有力という事だった。

もっとも、ユースアイの人達だって、自分達の推測をまるごと信じたというわけではないだろう。ただ、これからこの土地を開発しようという時に、不安は出来るだけ解消しておきたかったはずだ。その為のお守りというか、気休めのようなものだったに違いない。

最後の想像も含めて、これはデイジーから聞いた話である。彼女は読書が趣味という事で、そういった歴史に詳しい。ただ、歴史は歴史でも、血生臭い方面に偏っている傾向はあった。そもそも、この話を聞いた時もダガーの投擲の訓練中だったのだ。たおやかに微笑みながら短剣を投げる彼女の姿は、それだけでも十分アンバランスだった。

その光景を思い出して複雑な心境になっていたレオンだったが、ふと我に返る。

目の前には、ビギナズ・アイと記された石碑。

昔はともかく、今は自分の為にあると言っても過言ではない。

ダンジョン初挑戦。

それにうってつけのダンジョンなのだ。

レオンは大きく深呼吸する。

ここから始まるという期待。そして、ここで終わるかもしれないという不安。

どちらも、完全には消えなかった。

さらに小さく息を吐いて、呼吸を落ち着ける。

そして、足を踏み出したレオンだったが、その方向はダンジョン内へ続く石段ではなく、隣に立つ家屋の方だった。

怖じ気付いたわけではない。そもそも、そういう予定なのである。隣に立つのは、この町では一般的な木造2階建て。横にダンジョンがあるわけだが、特別な防備を備えているようには見えない。むしろ、ダンジョンの方に向けて、大きな両開きのドアが備え付けられている程である。

もちろんモンスターを迎え入れる為の物ではない。

レオンはその扉のすぐ脇にある勝手口の方をノックする。

「入れ！」

聞き覚えのない女性の声。だが、もちろん予想はついている。

レオンがドアを開くと、そこは広間だった。この家の一階部分の3分の1程の広さはある。そのスペースをカーテンで仕切って、広々とした何もない空間を確保している。本当は何もないわけではなくて、入った右手には大きめのベッドが置かれているし、木製の小さなイスが2つと棚もある。ただ、それでも広々とした感じがするほどの、普通の広間にしては家具が少なすぎる部屋だった。

そして、室内には先客が3人いた。そのうち2人とは顔馴染みで、1人は、ユースアイのギルドで働くケイト。もう1人は、冒険者向けの道具屋をしているラッセル。

最後の1人は、今日初めて会う人物である。やや明るい髪を頭の上の方で留めている、鋭い顔つきの女性。白いブラウスにカーキ色のズボンという格好だが、何となく立ち方が様になっている。鋭角的な雰囲気といい、ファッションといい、どこかリディアに似ている感じがした。彼女があと10年くらいしたら、きっとこういう女性になっているだろう。要するに、それくらい大人の女性である。

レオンはベティからいくつか予備知識を得ていた。彼女の名前はイザベラ。ここで医師をしている女性で、現在32歳。子供が3人いる。ただし、絶対に年齢は聞くなという事だった。

「朝早くから、僕の為にわざわざすみません」

3人の近くまで行くなり、レオンはそう言っただけで頭を下げた。

微笑んで答えたのはケイトだった。ブラウンの髪と瞳はいつも通りだが、今日は相棒のカーバンクルであるシニアはいない。きつとギルドで留守番をしているのだろう。そのせいなのか、いつもはしている頭の装飾品を忘れているような、そんな物足りなさがある。

「いえ、これが仕事ですから。見習いの方が最初にダンジョンに入る前には、必ず説明しておくようにと。それがギルドの方針です」

そう言うなり、ケイトは隣のイザベラの方を向く。彼女の話聞けという事だろう。ラッセルは最初から少し離れた位置でこちらをまとめて眺めている感じだった。

しばらくしてからレオンが注目すると、イザベラはこちらを値踏みするような視線を送ってから、何もリアクションせずに口を開いた。

「レオンだっけ？」

優しいと厳しいの中間のような口調。さばけた感じが出ていて、大人は大人でも、母親らしい口調だと思った。もっとも、レオンの母親はもっとおっとりした話し方だったけれど。

「はい」

「とりあえず、言うておくことが3つある」

ダンジョンに入る時の注意事項だろう。レオンが気を引き締めて頷くと、イザベラが右手の指を1本立てる。

「まず、私の事は先生と呼びなさい」

「・・・はい？」

いきなり小さな要求をされたので戸惑ったが、その返事が気に入らなかったらしい。もともと鋭かったイザベラの視線がさらに強くなる。

「返事は？」

彼女の低い声に、レオンは咄嗟に頷いていた。

「あ、はい」

「じゃあ、2つ目」

元の声を表情に戻ったイザベラは、右手の指をもう1本立てた。

「私の歳を詮索しない事」

「・・・はい」

既に知ってしまったているわけだが、それを言うのはやぶ蛇だろう。幸い気づかれた様子はなく、イザベラは3本目の指を立てる。

「じゃあ、最後」

正直、レオンはあんまり期待してなかった。たぶん、また小さい

要求だろう。一応、この人との関係を良好に保つ上では役に立ちそうだが、それ以外には使えない情報に違いない。

だが、最後だけはそうではなかった。

「私でも、死んだ奴は治療出来ない」

イザベラの表情は変わらないまま。だけど、隣にいるケイトの表情が、少しだけ曇ったのが分かった。

女医の言葉は淡々と続く。

「もし怪我をしたら、例えばそれが軽傷でも、あと少しでダンジョンクリアでも、今日の儲けがほとんどなくても、要するにどんな状況でも、とにかく撤退する事を選択肢に入れなさい。軽傷を負ったという事は、次は重傷を負うという事だと考えなさい。重傷を負えば、死はすぐそこだ。死との距離を確認する方法は、自分の身体に聞く以外ない。傷を見たらその背後の死を見る事。経験が浅いうちは、とにかくこれが鉄則だ」

言われた事を噛みしめるようにしながら、レオンはゆっくりと頷く。

それを確認すると、イザベラはケイトに視線を送る。もう言うべき事は言ったという事なのだろう。てきぱきとしていて効率的だ。医者という仕事をしていたら、自然とそうなるのかもしれない。

ケイトの方はどこか表情が固い。それを見ているレオンの方が、少し心配になった。

「では、レオンさん。私の方からは、ダンジョンの構造について、簡単にですが説明させていただきます。今から説明する事は、この先どのダンジョンに入った場合でも、すべてに共通している事です。今日入って出ていただければ忘れる事はないと思いますが、万が一確認したい場合には、いつでもギルドに尋ねて下さい」

「分かりました」

そこでケイトは少し微笑んだ。レオンの声に緊張が含まれていないのを確認して、少しは安心して貰えたのかもしれない。

「まず、ダンジョンの定義についてです。多くの方は、地下空間に

あつて、中にモンスターがいる場所をぼんやりとダンジョンだと考えていますが、ギルドには正式な定義があります。レオンさんは、ダンジョンも転生しているという話を聞いた事はありませんか？」

「え？」

思わず声が出る。そんな話は聞いた事もないし、考えた事もない。

「ダンジョンは入る度に構造が変化します。昨日と今日では、同じ人が入ったとしても、中にいるモンスターはもちろん、部屋や通路の配置、鍵や罠の有無も違います。昨日ダンジョン内で落とした物が、次の日入って見つかる事はまずありません。逆に、同時に入った冒険者の場合、つまり仲間の場合ですが、仮に中ではぐれてしまった場合でも、ダンジョンから出なければ合流出来る事が確認されています。ですが、一旦外に出てしまうと、中で再会するのは難しいと言えます」

そこでケイトは言葉を止めた。こちらをじっと見ている。どうやら、理解出来ているか確認したいようだ。レオンが頷いてみせると、彼女も小さく頷く。

「ですので、ダンジョンは普通の地下空間ではありません。学者の方々は、そこが時の牢獄ではないかとか、冒険者達の幻覚ではないかとか、それから先程の、転生しているのではないかという説、とにかくいろいろ議論されていますが、結論はまだ出ていません。ですが、ギルドとしてはその結論を待つわけにはいきませんから、とりあえずとしての定義を設けています。それは、入り口に導きの泉があるという事です」

導きの泉。レオンも名前は聞いた事がある。

「ビギナース・アイにも、入ってすぐにその泉があります。広い部屋の中央に、白い石で設えられた泉があつて、その中心部分に、同じ石で出来たカーバンクルの像があります。高さはだいたい1メートル程の像で、直方体の台座の上に、立派な翼の生えたカーバンクルが座っています。それは見ていただければ分かるのですが、問題はそのカーバンクルの见ている先です」

「見ている先？」

ケイトは軽く頷く。

「その導きの泉がある部屋に入ると、ちょうど台座の上のカーバンクルに見つめられる格好になります。というのも、像のカーバンクルは必ず入り口の階段の方を見ているからなんです。そして、実はこれが目印になっています」

「目印ですか？」

「はい。導きの泉はダンジョンの中に何力所もあります。そして、そこにある像のカーバンクルは、すべて上り階段がある方を見えます。それで、不思議な話なんですけど・・・その上り階段は、そのすべてがダンジョンの入り口につながっているんです」

頭の中がこんがらがった。

「えっと・・・どういう意味ですか？」

レオンが首を捻りながら聞くと、ケイトは少し苦笑したようだった。

「仕組みは誰にも分かりません。ですから、事実だけをお伝えします。ダンジョンの入り口は一カ所だけです。ですが、導きの泉は、つまり、出口は何力所もあるんです。中には何十階層もあるダンジョンもあります。例えば、地下20階の導きの泉にある出口を使ったとしても、ほんの数秒歩くだけで、最初に入った入り口から出てきます。例えば2階でも、200階でも、道のりは同じだと言われています」

摩訶不思議な話だった。どんな仕組みなのか想像もつかない。

「ですから、導きの泉の場所さえ覚えておけば、入った場所を覚えておかなくても、ダンジョンから出る事が出来ます。ダンジョンは出る事さえしなければ構造が変わりませんから、余裕がある時に地図を書いておくといいと思います。或いは、目印でも構いません。退路の確保という意味で、是非利用して下さい」

よく分からないものを信じ切って利用していいのだろうか。レオンはそう思ったが、命に関わる事だから、それくらいは妥協した方

が いい の か も し れ な い 。 帰 り 道 は 短 い 方 が い い に 決 ま っ て い る 。 長
け れ ば 長 い 程 、 モ ン ス タ ー に 会 う 確 率 が 上 が る の だ か ら 。

レオンの頷きを見てから、ケイトは話を再開する。

「導きの泉についてですが、その部屋にはモンスターが出ないとも聞きます。もちろん、絶対出ないとは言えないと思いますが、遭遇しにくい場所とは言えると思います。それに、湧いている水も綺麗で、飲んでも平気だという事です。ですから、休憩をとる場合、可能なら、導きの泉で休むのがいいと思います。ダンジョンには時間の感覚がありませんから、無理をしないように、なるべく余裕をみて休息して下さい」

「・・・親切設計ですね」

思わずぼやくと、ケイトは苦笑いする。

ギルドからの説明はまだ続いた。

「最後に、いわゆるボスモンスターについて説明します。ボスモンスターは、必ずダンジョンの最深部にいるわけではありません。ですが、9割以上は最深部にいると考えていいと思います。そして、他のモンスターより強力な場合がほとんどですが、これも絶対とは言えません。ですから、当然、ボスモンスターにもギルドの定義があります。それをお見せしようと思ひまして、今日用意してきました」

「え？見せられるものなんですか？」

「はい」

ケイトはずっと右手を身体の後ろに隠していたが、それをすつと自分の胸の前に持つてくる。

彼女の親指と人差し指の間にあったのは、トウモロコシの粒くらいの大きさの、真っ赤なガーネットのような石だった。

レオンは顔を近づけてそれを見た。ただの宝石のようだが、よく見ると、中でゆっくりと水流のようなものが起きている。石ではなくて、枠の中に液体を閉じこめているのだろうか。

「これは魔石です」

全く心当たりのない単語だ。

それを表情から読みとったのか、ケイトは補足する。

「ルーンとも言いますが、魔石を加工したものがルーンですので、これは正式には魔石です。ただ、世間一般にはルーンという言葉が定着しています。レオンさんも、ルーンという言葉なら聞き覚えがあるのではないですか？」

「いえ・・・全然」

田舎者丸出しだが、本当に聞き覚えがないのだから仕方ない。

その返答には表情を変えず、ケイトは補足を続ける。

「魔石はその名の通り、魔力を秘めた石です。これを職人の方が加工する事で、ルーンとなります。ルーンは魔力に特定の働きかけをする物で、魔法の武器やアイテムに使われるのが主な用途ですが、それらには使えないような弱い魔力のものも多いです。そういった物は、一般的な装飾品としても使われています。見ての通り、見た目が綺麗ですし、魔力が弱いとはいえっても、ちょっとした魔除けくらいにはなりますので、富裕層の方々の間では人気がある物なんです」

「という事は・・・もしかして、これも高価な物ですか？」

レオンの質問に、ケイトは軽く頷く。

「これは最小クラスの物ですけど、それでも、ルーンになったらそこその値がつくものです。というかですね、実はこれ、ビギナーズ・アイのボスモンスターがドロップする物なんです」

ドロップという言葉にも聞き覚えがない。落とすという事だろうか。だが、この前遭遇したモンスターは、ルーンどころか何も痕跡を残さなかった。煙のように消えてしまったのだ。そういう事態はギルドへの報告義務があるという事だったので、当然ケイトにも伝えてある。

彼女は魔石片手に話を続けた。

「通常のモンスターはまれに何か残していく場合もありますが、それはそのモンスター固有の素材である場合が全てです。例えば、獣

に酷似していれば、牙や爪。植物に似ていれば、茎や種等です。ですが、ボスモンスターのみのみ、倒すと必ず魔石を落としていきます。つまり、魔石を持って帰れば、そのダンジョンをクリアしたと認められます。魔石の形状や大きさは、ダンジョンによってほぼ決まっていますから、魔石さえ見せていただければどのダンジョンをクリアしたのが分かります。さらに、魔石の流通は基本的にギルドが引き受けています。ですから、換金という意味でも、魔石を得たらギルドに来て下さい。それがレオンさんの資金になりますし、またダンジョンクリアというステータスにもなります」

「それ・・・もし拾い忘れて出てきたら、どうなりますか？」

ケイトはにつこり微笑んだ。

「やり直しになります。ですから、絶対に忘れないで下さい」

努力が全て水の泡。資金もそうだが、ダンジョンクリアも認められない。結構重要な事だが、すっかり忘れてしまいそうな気がして、レオンは正直不安だった。

ケイトはラッセルに目配せする。彼女の話はここで終わりのようだ。

いつの間にか、ラッセルは背負い袋を抱えている。袋の容量の割には、中に入っている物は少な目なようだ。外からは、何が入っているのかよく分からないが、端から松明が突き出しているのだけは分かった。

彼はこちらに歩いてくると、それをレオンに差し出す。片手で持ち上げられるくらいだから、結構軽い物のようだ。

「とりあえず、食糧は最小限だよ。2日分。あとはまあ、いろいろ入ってるから、後で確認しておいて。在庫は確保してあるから、店まで来てくれたらいつでも補充出来る。だけど、たぶん足りない物とか、これがあったら便利って物もあると思うから、気づいたら僕に言ってね。なるべく早く早く用意するから」

レオンは袋を受け取った。

ラッセルはそれっきり何も言わなかった。この程度の説明なら、

事前に話してくれば済む事だが、実は今日彼がここにいるのは、彼がそう申し出たからだ。どうしても直前に直接渡したいと言ったのだ。その事実だけで、彼の気持ちが伝わってくる気がした。

3人の顔を見てから、やっぱりレオンは言わないではいられなかった。

「あの、本当にありがとうございます」

イザベラが淡々とした口調で言う。

「仕事だ。というか、もしかして1人か？」

「はい」

「それなら焦らない事だ。隠しても仕方がないから言っておくけど、ビギナズ・アイは、4人パーティならば初心者でも、入ったその日にクリア出来る。だが、それが3人になると2日かかるようになる。2人だと1週間。1人だと2週間以上かけるつもりでいなさい。入って出てを繰り返して、徐々に慣れるようにしなさい。そうしないと、下手すると一生出て来られなくなる。その代わり、1人でクリア出来たら、4人でクリアした奴の数十倍は価値がある経験が来る」

優しさと厳しさ、両方とも伝わってくる。

「・・・はい。これからお世話になります」

そこで、イザベラは笑ったようだった。

「レオンは本当に変わった子だな。本当に冒険者か？噂になっていたよ」

その噂の発信源に、心当たりがないわけではなかった。

「・・・ベティが何か言っていましたか？」

だが、彼女はあっさり否定した。

「いや、うちの子達だ。一番上の子がアレンのところで剣を習っている」

「あ、そうなんですか・・・」

まさに奇遇である。

「下手な真似をするな。レオンが帰ってこなくなったら、理由を子

供達に説明する羽目になる。そんな事は御免だ」

「・・・はい」

まだ付き合いが短いとはいえ、ユースアイの人達とも他人ではないのだ。

ケイトとラッセルの顔を見ると、2人とも微笑んでいた。多少ケイトの表情が不自然だったけれど、それは経験の差だろうか。彼女が案内した見習い冒険者のうち、どれくらいの人が帰ってこなかったのだろうか。それを聞いてみたくなかったが、すぐに思い直す。今の自分が聞いてもどうにも出来ない事だし、何の為にもならない。

3人とも、もう何も言わなかった。

聞くべき事は聞いたのだ。

これはただの通過点。だから、見送りなんていらぬ。見送りなんてされたら、もうお別れみたいだ。ベティではないが、それくらいならクリア出来た時にお祝いして欲しい。

レオンは笑顔になって、その場で挨拶した。出来るだけ頼もしく見えるように。

「それじゃあ、行ってきます」
踏み出す。

それが、半月程かかってようやく実現した、レオンの冒険者としてのスタートとなった。

初心者の残照

入り口から覗いてみると、階段の先の部屋から灯りが差ししているのが見える。扉などはないようだ。距離があり過ぎて、ここからは部屋の様子は分からない。

この階段に罠があったりしないだろうか。

いきなり罠というのも容赦のない話だが、絶対ないとは言えない気がする。そもそも、どの程度用心すればいいものなのか、加減が分からない。ダンジョンとは、何の為にあるのかも、誰が造ったのかも分からないものなのだ。ただ経験則として、罠が仕掛けられている事が多いというだけの事である。侵入者を撃退する意志は見えるのだが、何故撃退したいのかは分からない。これが仮に、元々誰かのお屋敷だったとか、誰かが住んでた洞窟だったとか、そういう来歴でもあれば、罠がありそうな場所に見当がつくのだが。

それでも、冒険者達はここを進むのだ。

彼らは怖じ気付いたりしない。どんなダンジョンでも、どんなモンスターでも、きつと冒険者が倒してくれる。そういう希望を一身に背負う存在なのだから。

自分もそういう人間になってみたい。それは結局レオンにとって、自分を知りたいという事に他ならない。前世が分からない自分は、どんな人間なのか自分でもよく分からない。空虚というか、足元がよく見えない。他の人にはある来歴が自分にはない。だが、もし冒険者になれたら、人の希望を背負えるだけの人間になれたという事なのだろうか。

それもよく分からない。

ただ、それでも挑戦してみたいと思ったのだ。自分を見られるチャンスがあるなら、見てみたいと思った。自分を確かめてみたいと

思った。

そして、もし見られるとしたら、それはダンジョンの中だと思ったのである。

魂の試練場。

導きの妖精。

レオンは小さく頷いた。

進もう。

ダンジョンに足を踏み入れる。石材の固さを確かめるような、そんな慎重過ぎる足取りだったが、これでいい。自分1人なのだから、自分らしい方法でいい。

一步一步慎重に進む。

下り階段は思ったよりも明るい。上からの太陽の光と、下からの室内の灯り。階段には何の光源もないのだが、その両者の光だけでも十分な程明るかった。もしかしたら、この通路に使われている石材が、光をよく反射しているのかもしれない。

結局、最初の部屋にたどり着くまでに10分以上はかかった。安全を買ったと思えば、安いものかもしれない。

聞いていた通り、最初の部屋には導きの泉がある。もちろん見るのは初めてだが、間違えようがない。中心に白亜の石で出来た泉と台座。その台座の上には、実寸大よりも少し大きいくらいのカーバンの像。普通の妖精とほとんど同じだが、やはり言われた通り、翼のようなものが背中から2枚生えている。その翼を中途半端に開いた状態で、まるで寐られたかのように行儀良く座っている。翼のせいなのか、どこか優美に見える。

当然だが、その瞳も白い。全身真っ白の石像が、こちらをじっと見つめている。

どこかで見た事がある。なんとなくそう感じたレオンだったが、すぐに思い出した。

そして、驚いた。

初めてモンスターと戦ったあの日。その後、ホレスの演奏を聞き

ていた時、一瞬だけ見えたあの光景。白毛に紅眼のカーバンクルがこちらをじつと見ていた。その光景と今の光景がそっくりなのだ。違いといえば、妖精の瞳の色と、翼の有無くらいのもの。

妖精もそうだが、背景には一点の違いもない。

まさにこの場所。少なくとも、こことそっくりの場所が、あの時見た光景の場所。

それを確かめずにはいられなかったレオンは、部屋の入り口で、じつと像の方を見つめたままになってしまった。今にもその石像がひび割れて、中から紅眼のカーバンクルが出てくるのではないか。そんな気さえした。

しばらくして、ようやく我に返る。

こんな事をしてる場合じゃない。部屋の様子を確認すらしていなかったのだ。モンスターがいたら怪我どころでは済まなかったかもしれない。

自分は一体何をしていたのか。

気を取り直して、部屋を観察する。

ケイトが言っていたように、相当な広さがある部屋だ。ニコルのガレージより広い。中央に泉があるものの、10人くらいは問題なく寝られるだろう。壁も床も天井も、どうやら石レンガのようだ。白に少し黄色が混じったような、見た事もない石材である。各壁の中央辺りには、松明に似た物が取り付けられていて、煌々と部屋を照らしている。

ふと、先日のモンスターの事を思い出した。そして、すぐに腰を屈めて、床に触れてみる。

結構しつかりしているようだし、仮にここから何か出てきても、音がするのですぐ分かるだろう。

壁にも軽く触れてみた。床と同じような感触。天井は高すぎて手が届かない。

水の流れる音が泉の方から響いている。

この部屋は上から見たらほぼ正方形の構造になっているが、入り

口から見て、左と右の壁のそれぞれ中央辺りに木製のドアがある。正面の壁には何も無い。

進むなら、左か右か。そういう事らしい。

とりあえず、レオンは中央の泉に向かった。水が流れる音がしているのに、泉の中の水が増えたり減ったりする様子がない。どんな構造になっているのか見ておこうと思ったのだ。

縁に立って覗き込むが、ただ白いだけ。穴はおろか、突起や凹みのようなものもない。

水の流れる音がするだけ。

中央の像や泉の縁に触れたり、軽く叩いて音を聞いてみたりしたが、何も分らない。

手がかりはない。

レオンは左の扉に向かった。なるべく足音を立てないようにする。そつとドアに耳を当てる。何も聞こえない。

今度は右のドアの前まで行き、また耳を当ててみた。もちろん、音は立てないようにする。

音が聞こえた。

糸車が廻るような、カラカラという音。まさか本当に糸車があるとは思えないが、音はそっくりだった。

迷わず、レオンはまた反対の扉に向かう。

こういう時どちらのドアを選ぶべきなのか。そういう類の話を全く聞かなかったわけではないのだが、その答えは十人十色と言ってもよかった。そして、そのいずれの答えも、思わず頷けるようなものだったのだ。だから逆に、あまり参考にはならなかった。余計混乱したと言ってもいい。

だから、今の選択はレオンの勘である。

音がしない方が安全という根拠はない。だけど、何か異変があった時、聴覚を頼りに出来る。

異変を察知出来たからといって、対処出来るとは限らないのだが、左の扉の前でもう一度耳を当てて音がしない事を確かめてから、

少しだけ開けてみた。

その隙間から向こう側を覗き見る。

扉の先には通路が続いているようだった。ドアは1人が通れる程度の大きさのもののだが、通路の幅は3人並んで歩ける程広い。向こう側にも灯りがあるらしく、通路の様子もよく分かる。一応、背負い袋の中には松明もあるが、使わないで済むならそれに越した事はない。

通路は20メートル程先のところで右に折れているようだ。左側の壁にはその曲がり角の辺りに、右側は通路の中程の位置にドアが1つずつ。

何かが動く気配はない。

まるで深夜に部屋を抜け出る時みたいに、忍び足で通路に出て、静かにドアを閉めた。

静寂。

何も物音はしないが、もちろん安全が保障されているわけではない。

間違った選択をすれば、それはすぐに自分の身に跳ね返ってくるのだ。

思わず、唾を飲み込む。

ダンジョン攻略の為には、ボスモンスターを倒す事が条件。そして、ボスは大抵最深部にいると言われている。ここビギナーズ・アイは2階層ダンジョンで、ここは地下1階。つまり、下り階段を見つけたら、ボスがいる階層にたどり着く事になる。だが、階段がどこにあるのかはほぼランダム。決まった法則はないとの事だった。

とりあえず、しらみつぶしに確認していくしかない。

レオンはまず、すぐ近くの右のドアを調べる事にした。少しずつ、空白を埋めていくように進んでいきたい。不用意に進んで挟み撃ちにでもされたら、仲間がいない自分には対処出来ない。

畏がないか注意しながら、そっと扉を引く。

向こうには灯りが無いようだ。かなり暗い。

それでも、こちらからの光が差し込んで、近くだけはうつすらと確認出来る。

何かと目が合った。

暗闇に浮かぶ青い髑髏。

その眼窩がじつとこちらを見ている。

動く様子はない。

他人の部屋に間違えて入った時みたいに、たっぷり間を空けてから、レオンはゆっくりとドアを閉めた。

考える。

今のは何だろう。

モンスターだろうか。それにしては、こちらを襲ってくる気配はなかった。どちらにしても、不気味なのは間違いなかったのだが。

それでも、悪い状況の方を想定しておくべきだろうと考える。つまり、モンスターだと思っておくべきだ。さっきは襲ってこなかったが、次もそうとは限らない。

戦って倒しておくべきだろうか。だが、さっきのが一体だけとは限らないのだ。暗くてよく見えなかったから、もっと大量にいる場合もある。そうなったら、自分1人の手には負えないだろう。

しばらくその場で頭を悩ませていたレオンだったが、そこで、ニコルのガジェットの使用を思い出した。

右腕に巻き付けていた方を、くるくると解いていく。現在の長さは1メートル程。

両端の円錐状の器具を持って、その扉と導きの泉の中間辺りまで行く。そこでレオンは、床から1メートル程の高さの壁面に、円錐の平面部分を押し当てた。ニコルに教えられたように、傘の部分にある突起部分を操作する。しばらくしてから手を離すと、円錐状の器具は接着されたように壁から離れなくなった。

もう一方の端は反対側の壁面に取り付ける。通路の幅は3メートル以上あるが、端の器具内に予備部分が収容されているのだ。簡単な操作で、紐というか糸の長さを調整出来るようになっていた。

程なくして、通路の高さ１メートルの辺りに１本の見えにくい糸が張られた格好になる。これ以上ないくらい、原始的で簡易なトラップ。

ニコルの発明にしては穏やか過ぎるが、端の器具が手の込んだ代物で、何度でも取り外し出来るし、取り付いている間は滅多な事では外れない。空気の圧力を利用しているとの事だが、レオンにはよく分からない。本人の目標としては、モンスターが引つかかって糸が切れた時に、その器具が爆発するようにしたかったそうだが、それだと小型化出来なかったらしい。そこで、もっと切れにくい丈夫な糸を使う事にして、簡易トラップという事にして落ち着いたようだ。結構高級な糸らしく、人が乗っても切れない程丈夫な物らしい。ちなみに、この糸は昔鍛冶場からくすねてきた物らしい。後でリディアに伝えておくべきだろうかと、少し悩んでいるところである。いずれにしても、こうして罠を張っておく事にした。自分が引つかからないようにしないといけないが、こちらまで逃げてくれば足止めくらいにはなる。そうすれば、落ち着いて迎撃出来るはずだ。その後、背負い袋から松明を取り出した。通路に取り付けられている松明から火を貰おうとしたが、その時初めて全然熱を持っていない事に気付いた。どうやら魔法の灯りのようだ。仕方なく、発火用の石と紙切れを取り出して、それで火をつける。

松明は左手で持った。

先程のドアの前に立ち、音をたてないように小さく息を吐く。

覚悟を決める。

先手必勝。

ドアを少しだけ開いてから、思い切り蹴破る。

さつきと全く同じ位置に青い髑髏。

確認すると同時に、ダガーを右手で飛ばす。

完璧な軌道。

ダガーはあっさりと髑髏の眉間辺りに突き刺さり、それだけにとどまらず、その周辺をバラバラに砕いた。

だが、それだけではなかった。

残った部分は、まるで振り子のように宙をぶらぶらと揺れている。正確に言えば、振り子そのものだったわけだが。

元々、違和感があったのだ。こちらと目が合ったはずなのに、身動きひとつしない。追いかけてこないのはまだしも、まったく動かないのは、意志あるものとしてはおかしい。

だが、まさか、こんな悪戯みたいな物があるとは思わなかった。

レオンは松明の灯りを近づけてみる。

髑髏の頭頂部。そこから目立たないくらい細い糸が、天井に伸びている。紛れもなく、ぶら下がっているだけだった。

「・・・なんだ」

ほっとしたような、騙されて少し悔しいような、複雑な気持ち。

あまり気持ちがいい悪戯ではないが、噛みついてくるわけではない。

だが、自分が思わず声を出していたのに気付いて、思ったより緊張していた事が分かった。モンスターと戦うという事に、それほど心理的な負担があったのか。

やはり、先日的一件事があったからだろうか。

最初の戦闘が敗北だったというのは、どうやらマイナスな部分が多いようだ。負けた経験だけで勝った経験がないから、どうしてもいいイメージを持つのが難しい。

悪戯ひとつに、馬鹿みたいに怯えなくてはならない。

そんな自分が弱く感じられて、そして情けない。

少し落ち込む。

だから、レオンは気付かなかった。

確かめなかったのだ。

そこが何の為の部屋なのか。

しばらくして、ダガーの分だけ増えた重さに耐えられなくなったのか、糸が切れて髑髏が床に落下する。乾いた破碎音と、金属音。

それから一瞬遅れて、カチツという音が部屋の奥から聞こえた。

レオンが視線をそちらに向けたのと、弦を弾く音がしたのはほぼ

同時だった。

その音を聞いた事があつたのは不幸中の幸いだった。クロスボウがボルトを発射する音。クロスボウとは弓の一種だが、自分の力で弦を引くわけではなく、板バネの力を利用する。ニコルが趣味で作っている装置の中にそれを改造したものがあつて、発射する音を聞いた事もあつた。

だから、咄嗟に気付いた。

罨だ。

半歩身を引く程度しか動けなかった。

一瞬前まで自分の右半身があつた空間を、視認出来ない程の速度の何かが射抜く。

背後の壁で乾いた音が響く。

壁の陰に避難してから、後ろを振り返る。

折れたボルトが床に落ちていた。

自分の身体を射抜いていたかもしれない、凶器。

跳ね上がった鼓動を抑えながら、頭の中を整理する。要は、あの罨體を吊っていた糸がスイッチだったのだろう。冒険者が罨體を攻撃するなり取り外したりすれば、その分そちら側が軽くなる。すると、反対側の重りか何かが下に落ちて、罨を起動させる仕組みだったのだ。今回は幸運にもダガーが刺さったまま残ったから、すぐに起動しなかったのだ。

もつとすっかり天井を見ていればよかった。せつかくの幸運をふいにするところだったのだ。

自分は何故見なかったのか。

落ち込んでいたからだ。

何を馬鹿な事をしていたのだろうか。

未熟。

その一言に尽きる。

だが、不思議とレオンはそれで気が晴れた。開き直ったと言ってもいい。

自分が未熟なのは百も承知だ。だから、危険な思いをするし、惨めにもなる。

だけど、そもそも何のリスクもなく冒険者になれるわけがない。もしそんな冒険者がいたら、頼りない事この上ない。

それを自分は、何を勘違いしていたのだろうか。今日すぐにダンジョンをクリア出来ると思っていたのだろうか。

自分は何を落ち込んでいたのだろう。これからこんな経験ばかりだというのに。

小さく息を吐く。今度は音を抑えたりはしなかった。

来るなら来い。むしろ、来て欲しい。そう思えるくらいでないといけない。

まず生き残れるようにならないと。

状況を把握する。罾は発動したが、それで安全を確保したわけではない。じっくり室内を観察しなければ。投げた短剣も向こうの床に残ったままだ。

松明の灯りを差しのべながら、すぐ横のドアの奥をそつと覗き見る。

あまり広くない部屋。用途は分からないが、木製の棚が奥の壁に2つ。そこにあつたクロスボウからボルトが発射されたようだ。

天井には予想通り、糸を通せる木製のリングが何力所か取り付けられている。

床には粉々になった髑髏。すぐ脇に短剣。

そして、ここから見て右奥の方には、これみよがしに小さな木箱が置いてある。

もしかしたら、何か役に立つ物かもしれない。そういう考えが、頭の片隅にはあつたが、今の自分にはそんな余裕はない。

レオンは問答無用で、その木箱めがけてダガーを投擲した。

問題なく突き刺さったが、普通の木材に刺さった時のような硬質な音ではなかった。カリカリに焼いたパンをフォークで刺した時のような、パリッとした音。

それは紫の煙を上げたかと思うと、あっという間に姿を消した。何かのモンスターだったらしい。どんなモンスターだったのかはさっぱり分からなかったが。

意外にやれるじゃないか。

そんな思いがわき上がりそうになったが、すぐに飲み込む。これから先しばらく、もしかしたらずっとかもしれないが、とにかく今は必要ないものだ。

部屋に入って、ダガーを2本とも回収した。今はそうでもないが、何度も投げたら刺さりにくくなっていくに違いない。次からは砥石を用意した方がいいかもしれないと思った。

部屋には役立ちそうな物はなかった。だが、クロスボウはニコルが喜ぶかもしれない。そんなに重い物でもなかったので、持って帰る事にした。自分が通路に張っていた罠も、忘れずに回収しておく。それから先も、とにかく扉をひとつひとつ確かめていく。中には鍵がかかった扉もあったが、開けられないような複雑な鍵はなかった。罠もいくつもあったが、気付かずにひっかかったものはない。というのも、明らかに不自然な物ものばかりだったからである。最初の部屋の罠體のように、なんとなく気になる物や無視しにくい物があつたら、なるべく飛び道具を当ててみる事にした。そして、その後すぐに、壁の陰に隠れる。難易度の低いダンジョンだからなのか、それで困るような罠はなかった。

モンスターも少ない。途中でモモンガみたいなのが3匹飛んで来るには来たが、ほとんど嫌がらせレベルの能力しかなかった。というのも、どうやら目あまりよくないらしい。こちらの顔に飛びかかってきたら怖いが、ほとんどそういう事はなく、ただこちらの周りを飛び回っているだけの有様だった。

それでもやはり、そう簡単にはいかなかった。

レオンが今身を屈めて覗き見ているのは、もしかしたらこのダンジョンで一番広い部屋かもしれない。40メートル四方はある大広間。何も物がない部屋なのだが、それは物に限った話である。

黒い鳥型のモンスター。何か意味があるのか、あの時のサソリと同じく一つ目である。大きさはそれほどでもないが、小動物なら十分に狩っていく程はある。その鳥が高い天井付近に3匹、休む事なく旋回している。

そして、下を守っているのは、カタカタと音をたてながら歩いている人の骸骨だった。右手に剣、左手に盾という標準的な装備だが、鎧はない。その骸骨が4体。

1人だと手に余る数である。だが、骸骨の動きは遅いから、駆け抜けていけば、攻撃されずに向こう側に見える扉までたどり着けるかもしれない。狭い部屋だったら無謀な話だが、これだけ広い部屋だから可能性はある。それでも、あくまで可能性だ。骸骨の動きがあれで全力とは限らないし、扉に鍵がかかっているかもしれない。それに、上にいる鳥型のモンスターをやり過ぎるのは難しいだろう。やり過ぎるのが無理なら、おびき寄せるのがいいだろうか。

レオンが今いるのは、その広間に続く扉の前である。ドアを少しだけ開けて覗き見ているのだが、こちらの通路ならば、それほど広くはないから、ニコル特製の簡易罠を使う事も出来る。足払いくらいにはなってくれるかもしれない。だがそれも、倒すとなると難しい。

こちらは諦めて、引き返すべきだろうか。

ここまで分かれ道のようなものはなかったから、引き返すなら最初の部屋まで戻る事になる。

それも仕方ないか。

そう思った時だった。

薪が破裂したような音。

すぐ近くで起きた突然の爆音にレオンの心臓は飛び跳ねたが、衝撃は身体にもあった。

ドアをこちらに向かって蹴破る何かがいたのだ。

咄嗟にドアから離れながらも、レオンの頭の中は思いの外冷静だった。

事態を把握しようと試みる。

骸骨の足音はしなかった。

という事は鳥の方か。向こうからは見えないうちにしていたつもりだが、もしかしたら、匂いか何かで分かったのかもしれない。

その予測を裏付けるように、開かれたドアの向こうから、鳥が3匹とも、一斉に襲いかかってきた。

鳴き声はない。そもそも口がない。

レオンは咄嗟にダガーを投げつけてから、身を屈めた。

それが1匹に命中。後の2匹は翼をはためかせながら、こちらの頭の上を飛び抜けていく。

まだ左手には松明を持っている。それがふと頭に過ぎった。動物ならともかく、モンスターに役に立つだろうか。

鳥は低くなった天井にぶつかりながら旋回している。止まっているも同然だった。

すぐにダガーを抜き、2投目。

問題なく命中。

床に崩れ落ちるモンスターを尻目に、残る1匹の動きを確認する。まだ旋回中。3投目も十分間に合う。

だが、そこで気付いた。もう1本は左側にぶら下げているのだ。もちろん手が届かないわけではないが、時間がかかる。そこまでの余裕があるかどうか、レオンは一瞬迷ってしまった。

結果、投擲のタイミングを失う。

モンスターは、既にこちらに滑空してきていた。

咄嗟に左手を掲げる。松明よりも、盾を掲げたつもりだった。だが、モンスターは火を見て驚いたようだった。滑空の勢いが衰える。今度は見逃さなかった。

モンスターと盾が接触したと同時に、レオンの右手が腰から抜いたショートソードが、3匹目を仕留めた。

消滅していくモンスターを確認してから、レオンは振り返った。やはりというべきか、骸骨の方もこちらに気付いたようだった。

ゆっくりとこちらに近づいて来ている。あまり速くは動けないのか、まだ開かれたドアの向こう側だった。

レオンは迷った。進むか、退くか。今は骸骨しかない。だから、広間を通り抜けられるかもしれない。

悩む事数秒。

レオンは広間に背を向けた。

そのまま走り出す。

ショートソードを腰に差し、2匹目が落下した辺りに落ちていたダガーを回収する。

それを腰に下げながら、床に手を突き、再び反転した。

駆け抜ける。

1匹目を仕留めたダガーを拾いながら、広間に飛び込んだ。ここも屋内には違いないのだが、まるで屋外に出たかのような開放感があった。

骸骨の動きは遅い。

その間を抜けるようにしながら、レオンは奥に見えていた扉を目指す。戦わないで済むなら、それに越した事はない。

十数秒程で近くまでたどり着く。

だが、すぐに駆け寄るわけにはいかない。もし罠があるとしたら、広間のどこかよりも、扉の近くだろう。他には何の特徴もない部屋なのである。今までのパターンからすれば、一番目立つ位置に仕掛けているに違いない。

走って速くなった呼吸を整える。

背後の骸骨達とはまだ距離がある。慌てなくても大丈夫なはずだ。近づいてきたら音で分かるはずだし、ここが開かなかったとしても、また駆け抜けて向こうに戻ればいい。

レオンは慎重に扉に近づく。一步一步、床の感触を確かめるように歩いた。

程なくして扉にたどり着く。

金属製の扉だった。遠くからは分からなかったが、装飾に隠され

るようにして鍵穴があるのが見える。

開けようとしてみるが、やはり鍵がかかっていた。どれくらい時間がかかるのか、外から判別するのは難しい。それに、背後からモンスターが迫っている状況で、自分が解錠に集中出来るかは難しいところだった。頭と手に相当な神経を使うのだ。後ろの方まで気にしていられない。

やはり戻ろう。

レオンは振り返る。

だが、そこで気付いた。

こちらに迫っている骸骨が2体しかない。あとの2体はどこに行ったのか。

その2体の姿を見つけた時、レオンは驚いたというよりも、何故か感心してしまった。

骸骨モンスターは半分だけ、向こうの扉の前に陣取っているのである。

戦略とかそういう物とは無縁なのだろうと思いこんでいた。そもそも、この骸骨達は動きが鈍いので、意志のようなものがあるとも思えなかった。だが、それはただの先入観だったようだ。少なくとも、敵の退路を断つ事を思い付くくらいの知能はあるらしい。

2体ずつに分かれているというのも、なんともそつないところだった。扉の前に1体だけだったら、そちらを奇襲して突破出来たかもしれない。だけど、2体ずつだったらそれも出来ない。その方が逃げられる可能性も減るし、こちらに向かってくる方も2体いるから、数の上で優位なのは変わらない。

まさに冷静沈着。

閉じこめられたのは確かだった。

出なければ倒せという事か。

レオンは松明を床に置いた。元々この広間は、十分な魔法の灯りがある。背負い袋も下ろす。それほど重くはないが、身体が軽いに越した事はない。

左手と右手。両方に短剣を1本ずつ持つ。ちゃんと回収していい良かったと、心からそう思った。

近づいてくる2体の骸骨は、つかず離れずといった距離を保っている。

遠距離なら攻撃し放題。とりあえずダガーを投擲しようとしたレオンだが、どこを狙おうか迷う。人型の骸骨だが、もちろん心臓も脳もない。どうやって動いているのか見当もつかない。

しばらく思案した結果、とりあえず頭を狙ってみる事にする。的として一番大きい。この距離なら、外す事もない。

呼吸を整えて、右腕を一閃。

真っ直ぐに頭蓋骨めがけて飛んでいったダガーだが、驚く事に、それは阻まれた。

骸骨の左腕が、まるで計算されたかのような正確な動きで、その軌跡を阻んだのである。

今までとは段違いの機敏な動きに、レオンの脳裏には先日の子型モンスターの光景が一瞬フラッシュバックした。

だが、すぐに振り払う。冷静になれと言っている自分が、どこかにいるような気がした。

思ったより手強いかもしれないというのはマイナスだが、守ろうとしたという事は、頭部への攻撃が有効と考えられる。それが判明したのはプラスだ。

左手のダガーを腰に戻してから、弓を手取る。あまり上手ではないが、こういう時に使わなければ意味がない。

矢を取ってから、構えて弦を引く。

十分弓がしなってから、手を離した。

矢の残像だけが残る。

速度は十分だが、頭蓋骨には命中しなかった。距離が近過ぎるのもあるかもしれないが、自分の腕が足りないのが原因だろう。はっきり言って、あの小さい的に当てる自信はない。

レオンは距離を取りながら、新しい矢を用意する。

次は身体を狙う事にした。隙間の多い身体だが、的としては大きい。

2本目は胸の辺りに命中。

少し頷いてから、次々と矢を取って射る。

3本目、4本目と命中したが、5本目はあさつての方向へと外れた。

あと半分。焦る気持ちを抑えつつ、また距離を取る。

6本目も命中。だが、あまり効いている様子はない。

7本目。

放った瞬間、いい感触がしなかった。力が少し抜けてしまったよ
うな、どこか失敗したような気がしたのだ。だが、それが逆に良か
つたらしい。

その矢は偶然にも、頭蓋骨の眼窩の辺りを射抜いていた。

骸骨は紫の煙を上げながら消滅した。

思わず声をあげそうになったくらい嬉しかったが、そんな場合で
はない。まだもう近くにもう1体。それ以外に2体もいるのだ。

矢はあと3本。

8本目。

少し力を抜いてみたが、やはりそう上手い話はなかった。外れた
のを見て、内心かなり落胆したが、なんとか気を取り直す。

9本目。胸に命中。だが、モンスターの様子に変化はない。

ラストの10本目。

精一杯の願いを込めてはみたものの、やはり当たってはくれなか
った。

半分溜息のような息を吐いてから、弓を背負い直す。1体倒せた
だけでも儲けものだと思うしかないだろう。

ショートソードを抜く。

前回のサソリの時とは違い、今度は鎧もある。それに相手も1体
だ。向こうの方が、武器も盾も立派な物だが、それくらいは妥協す
るしかない。

レオンは駆け出す。骸骨の周りを回るようにしながら、隙を窺う。レオンは騎士でも戦士でもない。正面から切り込むつもりはない。骸骨の動きは遅いままで、こちらの動きについてこれていない。

背後を取ってから、思いつき剣を振り下ろす。

だが、それは甘かった。

骸骨は向こう側を向いたまま、腕だけ動かして、盾であつさりとそれを受け止めたのである。視界もさることながら、人間だとあり得ない関節の動きだった。

その動きに目を疑う。

隙だらけだと、モンスターにも分かったのだろうか。

やはり後ろ向きのまま、右脇腹めがけて剣を振るってくる。

その動きに、レオンは気付けなかった。

鎧越しの衝撃だが、裂けるような痛みがした。

レオンの身体を、骸骨は右腕一本で綺麗に吹き飛ばした。

床の上を数回転がってから、レオンは左手をついて起きあがる。

痛みで呼吸が乱れる程だった。

骸骨の持つ剣は立派な物だが、さすがに丈夫な鎧だけあって致命傷ではない。それでも、骨が折れていないのは幸運だっただけだろう。だが、もちろん無傷というわけではないし、若干右手の握力が弱い気がした。

それでも、剣は手放していない。

骸骨は振り返ってこちらに近づいてくる。

前後どちらでも見えるようだし、後ろ向きでも、剣も盾も問題なく使えるのだから、振り返る必要などないだろう。もしかして、それを隠しておくただけにわざわざ向きを変えていたのだろうか。だとしたら、なんとも小憎らしい話だ。

なんとなく、そこで悟った。

このモンスターはかなりの剣の腕がある。訓練所のアレンと少し似ている剣かもしれない。少なくとも、自分よりもずっと上手なのは間違いない。

勝てない。

正攻法では。

レオンは距離をとりながら、右腕に巻いていたニコルのガジェットを解く。そして、それを今度は右手の平に巻いた。その系の先端の器具をショートソードの柄に接着させる。これで、仮に剣を手放したとしても、床に落ちる事はない。

ショートソードをぶら下げたまま、両手にダガーを握る。二刀流は自分にはまだ難しいが、今は贅沢を言っている場合ではない。

手首を曲げて右手の感覚を確かめてみる。怪我の影響はさほどない。だが、剣を下げているから、とにかく重い。投擲出来ない事はないが、狙い通りの位置には飛ばないだろう。だが、それでもやるしかない。

勝つ為に必要なのは、手数。

骸骨の方を見やる。悠々と歩いているように見えた。

これで駄目ならもう後はない。

一呼吸する。

レオンはモンスターに向かって走り出しながら、同時に右手で投擲を行った。

狙いは頭部。投げる前は心配したものの、上手く飛んでいる。

骸骨は盾をかざして防ぐ。

この時には、レオンはもう接敵していた。

既に、右手にはショートソードを握っている。いつでも握れるようにする為の処置だ。

それを頭蓋骨めがけて振り下ろす。

モンスターの盾はこれも的確に受ける。

剣と盾が接触する前に、レオンはあっさりショートソードを手放した。この攻撃はフェイントだ。

既に左手の短剣を繰り出している。

実はこれもフェイントだった。そもそも、自分はまだ左手を上手く使えないのだ。

骸骨がそれを迎え撃つように、右手の剣を振り下ろすのが見える。ここがタイミングだった。

左手のダガーを離しながら、その剣に盾を合わせる。さらに、その手放し方が問題だった。

その短剣が敵の頭蓋骨めがけて飛ぶように手放す。

ここが正念場。というか、ほとんど賭だった。

骸骨はそれにも機敏に対処した。

ショートソードからは既に力が抜けている。それくらいは、その剣を受けた盾から伝わってくるだろう。ならば、ダガーの方を対処するべきなのだ。それが刺さるかどうかは別にして、そちらの方が危険なのは間違いないのだから。

まさにギリギリの位置で、盾の端でその短剣を弾いた。

内心、レオンは舌を巻いた。

なんとという対応力だろうか。見た目は骸骨でも、腕も頭脳も馬鹿に出来ない。

だけど、それでよかった。

きっと出来ると見込んでいたのだから。

骸骨が短剣を弾いた一瞬後。

力を失ったはずのレオンのショートソードが、再び命を取り戻したかのように一閃し、モンスターの頭蓋骨を捉えた。

モンスターでも、もしかしたら驚いたかもしれない。

レオンは煙を上げ始めたモンスターを見ながら、そんな事を考えた。

だが、それも一瞬の事。

骸骨は敗北を認めた騎士のように、潔くその姿を消した。

右手にはショートソードがしっかりと握られている。

最後の攻撃の姿勢のまま、じっとその剣を見つめていたレオンだったが、しばらくして大きく息を吐いてから、ゆっくりと体勢を戻していく。

相手の盾を攻略する為には、2方向から同時に攻撃するしかない。

だが、向こうにも腕が2本ある。敵の攻撃を防ぎながら、さらに両手で攻撃するのは、普通なら不可能な事だ。

だから、あんなややこしい方法をとったのである。一度右手がフイントだと思わせれば、特に、一度柄から手を離すのが見えたらさすがに油断してくれると思ったのだ。そうすれば、頼りない左手の攻撃を受けてくれる。その瞬間なら、相手の剣は自分の盾が、相手の盾は左手から飛んだ短剣に対処中であり、自分の右手が空いている。だが、そこで腰から剣を抜いている時間はないのが悩みどころで、正直、一瞬でまた手放した剣を握れるかは賭だった。

結局のところ、運の勝利。

あまり喜べない。

だけど、喜びも悲しみも、命あればこそというじゃないか。

右の脇腹はまだ痛む。重傷という程ではないが、イザベラ医師の言う通り、これ以上戦えば重傷を負うのは確実だろう。

そろそろ潮時だろう。

ふと、入ってきた方の扉を見やる。

まだ、門番の骸骨が2体陣取っている。意地でも逃がす気はないようだ。片方だけでも近づいてくるかもしれないと思ったが、その辺りは徹底している。少なくとも、向こうは食糧がなくても生きていける。我慢比べならば向こうが有利という事なのだろう。

短剣を回収してから、レオンは反対の扉へ向かう。近くには、背負い袋と松明があるが、松明はいい加減消え始めていた。

装飾が施された、金属製の扉。

向こうが駄目なら、こちらを開けるしかない。

背負い袋から、解錠ツールを取り出す。

針金を差し込んで程なくすると、簡単にはいかない事が分かる。高級品の鍵に違いない。あまり嬉しくはないが、さっきの骸骨に比べたら何でもない。

意識を頭と手と耳に集中する。

そこで気付いた。

扉の向こうから、ほんの少しだが水の流れる音がする。
今日聞いた音だ。

入り口で聞いた音。だけど、今は出口を示す音。
根拠はない。

だけど、確かに信じたくなるものなんだ。

先輩冒険者達の気持ちに一步近づいた気がする。

だが、それを確認するのはここを開けてからだ。

レオンの意識が、鍵穴の中へと深く浸透していった。

微細反応

「ほら。やつぱり爆弾があつた方がよかつたでしょ？」

大きな瞳をこちらに向けながらそう言ったのは、幼い容姿が特徴の、黒っぽいショートヘアの人物。今日は紺色の上下に濃い紫のジヤケットという、ニコルにしては大人っぽい格好だが、それでも全く大人に見えない。子供が親の服を仕立て直して着ているような印象だった。もしかしたら、本当にそうなのかもしれない。

ニコルはガレージの床の上に座り込んで、見慣れぬ金属製の器具を片手に、ダンジョン土産のクロスボウを解体しているところだった。かなり手慣れている様子で、視線はこちらに向いているが、手は問題なく動いている。

その頭の上では、カーバンクルのクロが、じつとその解体作業を見守っていた。

ガレージ内唯一のイスに座らされているレオンは、控えめに答える。

「あつたらあつたで、怖かつたと思うけど・・・松明片手だったし」
火気厳禁の代物を持っていたら、きっと松明なんて使えなかつただろう。

そこでニコルは呆れたような表情になる。

「レオンは度胸があるのかないのか、よく分からないよね。モンスターと戦うのは平気なのに、火薬を使うのは怖いのか？普通は、そんな生きるか死ぬかみたいな経験をしたら、じゃあ爆弾のひとつでも備えておこうってなると思うけど」

「そ、そう？」

「もし最後の部屋で持ってたなら、そんな一か八かみたいな賭をしなくても済んだわけでしょ？」

「・・・済んだかもね」

確かにそんな兵器を持ち込んでいたら、それを放り投げるだけで済んだかもしれない。

ニコルは手元に視線を戻しながら言った。

「やっぱり、威力があるやつを持つておいた方がいいと思うなあ。今のレオンに一番足りないのは、決定力というか継戦能力っていうか、結局、ダメージの総量だね。昨日の鳥とか骸骨みたいに一発で倒せるような雑魚ならいいけど、ボスはもつとタフなわけだから戦っているうちに息切れするのが目に見えてるよ。それに、ボスだけならともかく、取り巻きがいるかもしれないわけだし、そんなのまでいたらもつとダメージを出さないといけない。火薬でも何でも使える物は使った方がいいと思うなあ」

とても理路整然としている。本物の冒険者みたいだと思ったが、よく考えてみれば、ニコルはスニークの記憶を受け継いでいるのだ。もしかしたら、その前世の経験に基づいた話なのかもしれない。

だが、それを持ち歩く事を考えると、どうしても乗り気になれなかった。特に、灯りが必要な場所では松明を使う事になる。松明と火薬と一緒に持ち歩くんなんて、考えただけでも恐ろしい。

そんなレオンの心境を読みとったのか、ニコルは解体作業の片手間といった感じで口を開く。

「そもそも、松明なんて使わなくてもよかったのに」「え？」

真顔で聞き返したレオンを、ニコルは顔を上げてじっと見つめた。クロスボウを解体中だった手が止まっている。その為なのか、頭の上に張り付いているクロモ、いつの間にか視線を上げてこちらを見ている。

ライトブラウンと紫の双眸。4つの瞳に注視されて、レオンは少しじろぐ。

しばらくして、ふとニコルは後ろを振り返った。

実は、今日はガレージにもう1人いるのである。

「ラッセル。レオンに道具の説明しなかったの？」

ニコルの質問を受けて、ラッセルは困ったような表情を浮かべる。彼は、ガレージの入り口に積み上げられた木箱の中身を確認しているようだ。

「してないけど・・・見たら分かるような物しか入れてないよ」

実際その通りだったが、ニコルはその回答が不満だったらしい。

「もしかして、つまらない原始的な物しか入れてなかったの？だめだなあ、ラッセルは。今は便利な物がいくらでもあるんだから、多少高価でもそういう物を入れておかないと。そうしないとラッセルだって儲からないよ。古くて安い物よりも、新しく高い物を使って貰った方が、お互いの為になるに決まってるんだし」

「そう言われても・・・僕はギルドの注文通りに入れただけだから」
「ギルドに進言したらいいじゃない。もっといい物を買って欲しいって」

「いや・・・ケイトさんが困るだけだと思うよ。道具屋とギルドの板挟みになって」

「そういう仕事だから仕方ない・・・けど、うん。そうだね。ラッセルの言う通りかも。ケイトさんは真面目だから、きっと言っても聞いてくれないね。こういう時には頭が固いけど、まあ仕方ないよ」
「僕はそこまでは言っていないけど・・・」

ますます困った顔になったラッセルだったが、ニコルはもう興味がなくなっただのか、再び解体物の方へと視線を戻す。ニコルと以心伝心なのか、クロの視線も下を向いた。

ラッセルもすぐに自分の仕事に戻る。彼の前にある木箱は自分で持ってきた物で、どうやらニコルが注文していた物らしい。その中身が間違っていないか確認しているようだ。

急に静けさが訪れたガレージ内で、レオンは少し気まづくなった。自分も鍵開けの練習を始めてもいいのだが、同じ場所に3人もいるのに、何も会話がないというのは寂しくないだろうか。

昨日、レオンはダンジョンに初めて入り、そして、なんとか軽傷

だけで出て来られた。出た時はもう黄昏時だったが、診療所のイザベラ医師は何も言わずに診療してくれた。そして、ただ一言、明日は休養しなさいとだけ言われて、診療所を追い出された。

そういうわけで、いつもは訓練終わりの夕方に来る事が多いこのガレージを、初めて午前中に訪問した。訓練所のアレンとも話をしたいところだが、まだこの時間は仕事中だから、邪魔をしても悪いと思ったのだ。

すると、珍しい事に先客がいたのだ。ラッセルも仕事でここに来ていたわけだが、レオンも手伝おうとしたらやんわりと断られた。今日は休養日だという事を彼は既に知っていた。誰から聞いたのかは尋ねなかったが、だいたい予想はつく。

いずれにしても、珍しいシチュエーションには違いない。ガレージに3人以上集まる事は滅多にないはずだ。何かニコルに変化がないか、レオンは少し期待した。

だが、結果はこの通りである。

ニコルはマイペースそのもの。嬉しそうでもないし、嫌がっている様子もない。気を遣うわけでもなければ、誰かを邪険に扱うわけでもない。拍子抜けする程、普段通りだった。

だが、それが逆にレオンは不思議だった。ニコルは凄く落ち着いている。これならば、町の人とも普通にやっていけるのではないだろうか。少なくともレオンにとっては、ニコルは十分普通の人間だ。おかしいとか怖いとか、そういう印象はほとんどない。

それなのに、ニコルは外に出ようとしない。その理由が、レオンにはさっぱり分らない。町の人と距離を取らなければいけない理由なんて、一体どこにあるというのだろうか。

そんな事を思い耽っていたレオンの耳の近くで、突然声が響いた。「レオン、生きてる？」

はっと我に返ると、やっぱりというか、案の定ニコルの顔がすぐ近くにあった。さすがに慣れてきたのか、少し仰け反るくらいで、あまり驚かなかった。

「あ、ごめん。ちょっと考え事してて・・・」

その言葉に、ニコルは困ったように頬を掻く。

「考え事するのはいいんだけど・・・僕の気配、全然気付いてないよね。というか、僕が目の前にいる事の方に慣れてるし。それって、ますます鈍くなってるって事じゃない？」

鈍くなっているかどうかはともかくとしても、危機感が薄れていると言われても文句は言えない。

「・・・そうだね。ごめん」

「本当に大丈夫かなあ。ぼんやりしてるレオンの為に、これから毎回、ガレージに罠を仕掛けておいてあげようか？」

その提案自体はいいかもしれないと思ったが、ニコルの作る罠といえ、間違いなく爆発系である。

「・・・命の保証がある罠なら」

ニコルは腕を組んで真面目な顔になる。そして、一度大きく頷いてから、こう断言した。

「命の保証がある罠なんて、罠じゃないね」

物凄く重みのある言葉だった。昨日借りたガジェットでさえ、例えば馬車が通るような道に仕掛けておけば、大惨事になりかねない代物だ。しかも、あれで妥協品なのである。本来なら起爆装置になるはずだったわけだから、もし完成していたら、致命的な罠になっていただろう。

そんなものを仕掛けられたらたまらない。命がいくつあっても足りない。

「・・・ごめん。やっぱり遠慮するね」

レオンの言葉に再び重々しく頷くニコル。頭上のクロもそれに伴って頷いたように見える。だが、その動作に何の意味があるのかは謎だった。

そこでニコルは腕を解いて、普段通りの表情で聞いた。

「それより、結局レオンはどうするの？」

何が結局なのか分からず、レオンは聞き返した。

「どうするって、何を？」

「だから、爆弾。というか・・・ああ、そっか。ちょっと待ってね」
ニコルは振り返った。

「ラッセル！」

まだ仕事中のラッセルだが、それでも手を止めてこちらを向く。

「何？」

「レオンの持ち物、ちょっとくらい融通利かないの？」

ラッセルは少し考えてから答える。

「元々、本人の希望にはなるべく応えるように言われてるんだ。だけど、あくまで予算内だから、ニコルが言うような高価な物は無理だよ」

残念がっているかと思っただが、再びこちらを向いたニコルの顔には笑みが浮かんでいた。子供に似つかわしくない邪な笑みに一瞬驚くが、よく考えたらニコルはもう16歳のだから、全く不自然な事ではなかった。

いずれにしても、嫌な予感がしたのは確かだ。

「レオン」

「な、何？」

「今の話聞いたよね？」

よっぽど耳が遠くない限り、聞き逃すわけがない。

「聞いたけど」

「つまり、レオンが希望すれば、大抵の物は用意して貰えるんだよ」

「安い物ならね」

すかさず釘を刺したのはラッセルである。

「・・・ラッセルさんはああ言ってるけど」

レオンの言葉に頷いたニコルは、笑みをたたえたままこう言った。
「簡単な事だよ。買えないなら、自分で作ればいいよね」

しばらく思考に空白が出来たレオンは、首を捻ってから聞いた。

「・・・どういう意味？」

「大丈夫だよ。爆弾なんて簡単に出来るから」

あまりに自然な笑顔で言ったので、つられて頷きそうになった。けれど、すんでのところで気付く。

何か今、ニコルは妙な事を言わなかっただろうか。

「・・・今何て言った？」

「だから、大丈夫だって」

「その後」

「簡単に作れるから」

「・・・その間」

そこでニコルは苦笑した。

「そんなに爆弾作るの嫌かなあ」

啞然として固まるレオン。好きとか嫌いとか、それ以前の問題として、この子供にしか見えない人間が何を考えているのかよく分かっていなかった。

爆弾を作る。

そんな危険物を作らせて何をさせようというのか。というか、自分を何にするつもりなのか。

そこで、仕事が済んだのか、ラッセルが近寄ってくる。

「まあ、知識として、火薬の事を知っておくのはいいんじゃないかな」

彼の言葉を聞いて、レオンはやっとニコルの言葉の意味が分かった。

「あ・・・もしかして、ニコルが言ってたのはそういう意味？」

ニコルはすました表情で首を傾げる。

「結局のところ、そう言えない事もないけどね。だけど、レオンは冒険者志望なんだから、知識がどうこうって言ったところで、用途としては武器として使うのがほとんどだと思うよ。爆弾を作るっていう表現で正しいと思うけどなあ」

正しいのかもしれないが、そんな説明をされたら素直に頷きにくい。

ラッセルがこちらを見て、丁寧に補足してくれた。

「分かるとは思っけど、ニコルは凄く頭がいいんだ。だから、何でも自分で勉強して、自分で作れるようになってる。これだけ多くの物を作れるのも、細かいところから自分で作ってるからなんだよ。その方が安く済むし、使わなくなった物を分解して再利用したりも出来る。レオンも火薬の知識があれば自分で調合出来るようになるから、少ない予算でやりくり出来るし、ダンジョンの中の物を利用して来るようになるかもしれない」

「それに、火薬詰めたまま渡したら怖くて使えないんでしょ？ だったら自分で詰めて貰うしかないし、ある程度知識があれば、何が安全か危険か分かって貰えると思うからね。まあ、全部覚えるのは無理でも、その火薬に対する偏見がなくなるくらいまでなら大丈夫でしょ」

後を継いだニコルの説明で、ようやくレオンの頭でも事情が飲み込めた。

だけど、自分でそんな知識が理解出来るだろうか。あまり頭がいわけではないし、正直、火薬とか爆弾とかいった物は、物騒で手に負えない物というイメージしかない。猛獣とか暴れ馬とかと、だいたい似たような物だ。

そんな心境を汲み取ってくれたらしく、ラッセルはこう勧めてくれた。

「火薬に限った話じゃなくて、もっと広い知識として教わったらどうかな？ モンスターの中には酸や毒を使ってくるモンスターもいるし、植物や鉱石なんかを見分けられるようになったら、どこへ行っても役に立つと思うよ」

なるほど。それは納得出来ると思っていたら、そこでニコルがからかうように言った。

「ラッセルは口が上手いよね。さすが商売人」

若干照れたようにして、ラッセルが謙遜する。

「いや、僕はそんな・・・」

「だけど、女心の方はまだまだなんだよね？」

何かを誤魔化すように咳払いするラッセルだが、レオンはよく分からなかった。

「女心？ラッセルさんは誰か・・・」

「あ！僕はそろそろ失礼するね。じゃあ、また」

早口にそう言ったラッセルは瞬時に反転する。背筋がぴんとついて、何かの式典の時みたいだった。

その数秒後には、ガレージから姿を消していた。いつもの彼からは考えられないような機敏な動き。人が変わったというか、まるで別の生き物みたいに見える。

呆然としたレオンだったが、ニコルの方は特に変化はなく、いつもの表情だった。むしろ、いつもより無表情だったかもしれない。余程興味がないのだろうか。

しばらくしてから、ニコルはガレージ奥の本棚の中を搜索し始める。頭上のクロは、いつの間にか眠りこけていた。

レオンは何を聞こうか考えていたが、その結論が出るよりも早くニコルの方から質問してくる。

「えっと、とりあえず、いろいろ勉強するって事でいいよね？」

ラッセルの事はもうどうでもいいのか、その前の話題に戻っていた。

「あ、うん。お願いしてもいい？」

「それはいいんだよ。僕としても、レオンの火薬嫌いが直らないと仕事にならないから。それはいいんだけど・・・」

珍しく、ニコルの歯切れが悪い。

「どうかした？」

ニコルは軽く頷く。

「ラッセルは大きく言ったけど・・・僕は火薬とか装置とか、そういうのには詳しいけど、他はあんまり自信ないなあ。全然勉強してないわけじゃないけど、他はもっと詳しい人がいると思うよ」

「そうなの？」

「うん。毒とかだったら普通に医者の方が詳しいと思うし、鉱石は

鍛冶師だよ。ジェフさんを知ってると思うけど、あそこは自分で精錬もしてるからかなり詳しいと思うよ。まあ、あの一家は男が全然喋らないから、聞いたかつたらリディアに頼むしかないけど」

「へえ……」

「植物は……フィオナさんかシャーロットかなあ」

「どちらも聞き覚えのない名前だった。」

「フィオナさん……？シャーロットって？」

「ニコルはきよとした顔でこちらを見る。」

「レオンは会った事ないの？」

「ないと思うけど……」

「少なくとも、名前を聞いた記憶はない。」

不思議そうな顔をしていたニコルだったが、やがて納得したように小さく頷く。

「あ、そうか。レオンはアスリートだったっけ」

今更な発言だが、外見を見てジーニアスだと思い込まれる事はある事だった。きっと、その時の印象がどこに残っていたのだろう。

本捜しを再開しながら、ニコルは説明した。

「フィオナさんは伝承者の先輩なんだよ。だけど、アスリートだと縁がないかもね」

「ああ、なるほど……」

どうやら伝説のジーニアスの記憶を受け継いでいるようだ。アスリートの自分が会っても、あまり意味がないという事だろう。

「シャーロットは魔法関係の道具屋をしてるんだ。ラッセルの店の隣なんだけど、入った事ないの？」

「あ、そうか。実は、僕はまだラッセルさんのお店に行った事がなくて……」

レオンは苦笑いしながら説明する。ラッセルは町の中で見かける事が多いから、用事があっても、店まで行かなくて済んでしまっていたのだ。よく考えると、あまりいいお客とは言えない。

ニコルはこちらを向いて少し微笑む。それが少し、レオンには意外だった。愛想笑いに見えるが、あまりそういう事はしない人物なのだ。

「まあ、まだレオンが行くような店じゃないと思うよ。シャーロットの店の商品はルーンを使った物も多いから、もうちょっとお金が稼げるようになってから行った方がいいね」

口調は普通だった。少し釈然としなかったが、レオンも普通の質問をする。

「そのフィオナさんとシャーロットさん、植物に詳しいの？」

「魔法を使う時に植物が必要だったりするんだよ。それと、魔法のアイテムの材料とかにも。だから、詳しいんじゃないかなあ。狩人のホレスも詳しいとは思うけど、知識の量ではジーニアスの方が断然多いと思うよ。狩人は現地の事には詳しいけど、ジーニアスはどこに行ってもやっていけるように、世界中の知識を学ぶからね。だいたい、ホレスはあんまり本なんか読まないと思うし」

確かに、ホレスは本どころか、あまり文明的なものに興味がなさそうだった。

本棚から数冊本を取り出しながら、ニコルは言葉を続ける。

「まだ会った事ないなら、会ってみたらいいと思うな。植物の勉強に付き合ってくれるかは分からないけど」

少し気になったので、レオンは聞いた。

「その2人って、どんな人？」

ニコルはすぐに答えず、大きな本1冊の上に割と薄い本を2冊積み上げる。体格の小さいニコルには重そうだったので、レオンは近寄ってその本を受け取った。

そこでようやく、ニコルは答える。

「フィオナさんはね、たぶんこの町で一番頭がいい人だよ」

「え・・・ニコルよりも？」

迷う事なく、ニコルは頷く。器用にしがみついたままのクロが少し揺れる。

「シャーロットはちょっと変わり者というか・・・強いて言うなら、僕に似てるよね」

最後の言葉は苦笑混じりだった。レオンには、それが何故かなのかは分らないが。

「でも、2人ともいい人なのは間違いないよ。まあ、悪い人なんていないけどね」

「あ、うん。そうだね」

確かに、この町の人はいい人ばかりだ。そう思って頷いたレオンに、ニコルはまた少し微笑んだ。またあの愛想笑いのような微笑み。今日はよく見られるが、やっぱり少し違和感がある。

そんな疑念をよそに、ニコルはレオンが抱えた本をポンと叩く。

「とりあえず、これを貸すから、時間がある時に読んでみて。あ、上2冊ね。大きいのは辞書だから」

「うん・・・ありがとう」

「お礼はいいけど、うーん・・・結局、すぐには無理だね」
レオンは首を捻る。

「何が？」

「いや、だって、すぐには火薬の事覚えられないと思うよ。だけど、またそのうちダンジョンに行くんでしょ？やっぱり、何か威力がある武器がいるんじゃない？」

「あ、うん。それなら大丈夫」

ニコルは瞳を一度瞬く。

「何か当てがあるの？」

「先輩に相談してみる」

「アレン？それともホレス？」

「両方」

ニコルは苦笑いする。

「どちらにしても、すぐには無理だと思うけどなあ」

仮に何かアドバイスされたとしても、すぐに身につくわけではない。

レオンは頷いた。

「うん。でも大丈夫」

「何で？」

「すぐには無理だって分かってるから」

一瞬ニコルの動きが止まった。瞳が大きくなる。

驚いているという事に気付くのに少し時間が必要だった。もしかしたら、驚いた顔を見たのは初めてかもしれない。

ニコルは呟くように言う。

「・・・たまにレオンは、意味不明な事言うよね」
そんな事を言われたのは、実は初めてではない。

「そ、そう？」

ニコルは笑った。今度はいつもの笑み。

「じゃあ、一応僕からアドバイスしておくよ」

「あ、うん」

「伝承者になる為の条件って知ってる？」

「え？」

知っているが、それが何だと言うのか。

頭上の妖精を撫でながら、ニコルは言った。愛おしむような表情だ。

「たまには、このお飾りの妖精達に働いて貰うといいんじゃないかな」

その言葉が聞こえているのかいないのか。

漆黒のカーバンクルは、今も夢の中にいるようだった。

暖色の小休止

冬の影はもうない。

それに気付いたのは、今が初めてだったのかもしれない。少なくとも、はつきりと意識したのは今が最初。だけど、身体の方はしっかりと季節の風を覚えている。もしかしたら、乾いた冬の風が去った事にずっと前から気付いていたかもしれない。

この間の雨。あれが変わり目だったのだろうか。

まだ日は高い。

春の陽気は本当に心地よい。レオンの故郷のような極寒の地はもちろんだが、どんな土地でもきつとそれは同じだろう。今のような暖かくて穏やかな午後は、何をするにも最適だし、何だって出来る。そんな可能性に後押しされた、身体が弾むような開放感がこの季節にはある。

アレンがいる訓練所の前にたどり着くと、いつものように子供達の歓声が聞こえてくる。それを聞くまでもなく、アレンがまだ仕事中なのは分かっている。

一度酒場に戻って昼食をとり、ニコルに借りた本を読み始めたレオンだったが、これを半日中続ける自信はなかったし、一日中身体を動かさないというのが、思ったよりも苦痛だった。それならば何か手伝いでもした方がいいと思い、こうして早めに出てきたのだ。

とりあえず挨拶だけはしておこうと、小屋の横を抜けて訓練場の方へ行こうとしたレオンだったが、意外な事に、小屋の中から話声がした。

立ち止まって、耳を澄ませてみる。

女性2人の話し声。聞き覚えのある声だった。

少し迷ったものの、レオンは一声かけていく事にする。恐らく彼

女達も仕事中だが、それなら手伝っていけばいい。

来た道を引き返して小屋の入り口に戻ろうとしたレオンだが、そこにたどり着く前に、中から人が出てくる。

女性ではなく、男性だった。とてつもなく背が高い。

「あ、どうも・・・アレンさん、仕事中心じゃなかったんですか？」

近づきながら声をかけたレオンを、アレンは特に驚きもせず見下ろす。彼が立つて話をする場合、見下ろさないで済む場合はほとんどないだろう。

彼は簡易防具こそつけているものの、武器は持っていない。どちらかというと、仕事終わりのような格好だった。

「レオン。遅かったな」

感情のはっきりしない声だが、きっと皮肉ではないはずだ。いつものアレンの口調である。それでも、一応レオンは頭を下げた。

「すみませんでした。今日は休養するように言われていたので」

「それは聞いた。今日訓練しようとしたら、二度と無理が出来ないように、もっと重傷を負わせてやれとな」

「・・・ちなみに、それは誰から聞きました？」

「皆から聞いたが・・・」

既に広範囲に伝わってしまったようだ。その指令の発信元を特定するのは難しそうだった。もちろん、容疑者はそれほど多くないのだが。

それはともかくとして、レオンはアレンが出てきた小屋の方を見る。彼女達の話し声はまだ聞こえてくる。

「中にいるの、リディアさんとデイジーさんですよ？仕事中心ですか？」

アレンもそちらをちらりとだけ見た。

「訓練用の武具を点検しているところだ。もう終わる。彼女達に何か用事か？」

「あ、いえ・・・」

用事がない事もないが、ここに来た目的はアレンと話す為である。

だが、話し声を聞きつけたのか、中からその2人が出てきてしまった。リディアはいつかの白いシャツと黒いベストに、淡いブルーのズボン。だが、今日は胸の辺りに、髪と同じ色のブローチをつけている。枝に小鳥がとまっているような形。瞳とも近い色だからなのか、よく似合っている。デイジーの方は薄い茜色のワンピースだが、白いブラウスを肩にかけていた。そして、リディアのブローチと同じ色の髪留めをつけている。形は何かの花をモチーフにしているようだ。

「お身体は大丈夫ですか？レオンさん」

デイジーが笑顔で聞く。あまり心配しているように見えないが、深刻な顔をされるよりもよっぽどいい。大怪我をしたならまだしも、軽傷で済んだのだから。

それにしても本当に知れ渡っているんだなと苦笑いしつつ、レオンは頷く。

「ええ、まあ・・・すいません、お仕事なのに」

「いいんですよ。もう終わりましたから」

「リディアさんも、お仕事ご苦労様です」

彼女は軽く頷いただけだった。

何故かそこで、会話が途切れる。

無表情のアレンとリディア。微笑んだままのデイジー。それはいいのだが、誰も動こうとはしないし、口を開こうともしない。

いい加減耐えきれなくなったレオンが、仕方なく口を開いた。

「・・・あの、皆さん。僕はもういいですから、お仕事に戻って貰っていいですよ」

アレンが即答した。

「だから、こうして待っているんだが」

「・・・何をですか？」

真顔で聞き返したレオンに、彼は少しだけ表情を動かす。

「レオンは俺にアドバイスを貰いに来たんだろ？話を聞かない事にはアドバイス出来ない。だから、話し出すのを待っている」

しっかりとこちらの目的を見抜いていたようだ。さすがの洞察だと思っただ、もしかしたら、そこまで情報流出していたのかもしれない。

そのアレンの言葉に、デイジーが続いた。

「私も、しっかりと聞いて祖父に伝えなければいけませんから。私が伝えれば、レオンさんが祖父のところまで出向く手間が省けます」

口ではそう言ったものの、彼女の濃い瞳には拭いきれない輝きがあった。あまり考えたくはないが、きつと戦闘系の話全般に興味があるのだろう。

下手に突っ込むのも嫌なので、黙ってリディアの方を見る。

その視線に気付いたリディアは、少し考えてからこう言った。

「・・・武器と鎧の具合を聞いておきたいから」

どうやら全員に話す必要があるようだ。

レオンは溜息を飲み込む。あまり格好いい話ではないから、出来るだけ聞かせたくない。少なくとも、喧伝してまわるような話ではないだろう。自分が未熟だと説明してるようなものなのだから。

だが、ここで抵抗しても無駄なのは明らかだった。ダンジョンから帰ったその日に、既に大方の事をベティに白状させられている。だから、もう皆に知れ渡ったも同然だ。自分がいくら沈黙を決め込んだところで、彼女に聞けば全て話すだろう。

「・・・あまり面白い話ではないですからね」

せめて、それだけは言っておいてから、レオンは話す覚悟を決めた。

だが、さすがに立ったまま聞かせるのは悪いので、小屋の中を借りる事にする。屋内には、大きなテーブルが2つとイスもいくつかある。そこに、男女向かい合うように座った。レオンの隣にアレン。彼の前にはリディア。自分の正面はデイジーである。アレンに聞いて貰う為にここに来たわけだから、この配置はおかしいような気がしたが、デイジーは聞き上手でもあるので、話易い事は確かだった。他の2人はあまり相槌を打ったりしないのだ。少なくとも、一番興

味津々に聞いているのは、間違いなくデージーだった。

いざ話すとすると、どうやって話したらいいのか迷うところだった。実際、レオンはどちらかというと話下手な方だと自覚している。だが、ベティは遠慮なく質問してきたし、ニコルの時はラッセルが、今はデージーが話を上手く誘導してくれるので、それほど困る事はなかった。

順序立てて、起きた事、遭遇したモンスターの事を説明していく。やはり一番の核心部分は、最後の広間での戦闘の事だった。

「運がよかったな」

話を聞き終えて一番最初の言葉が、アレンのその一言だった。

「ええ、まあ・・・自分でも、よくそんな真似が出来たと思います」
やや小さくなりながら言ったレオンだが、それがまさに本心だった。他の手を思いつかなかったとはいえ、今考えてみると、そんな賭を躊躇なく出来た自分が不思議だった。もう一度同じ事をやれと言われたら、絶対躊躇うだろう。そんな真似が出来たのも、戦闘によつて興奮状態だったせいかもしれない。

「だが、そんな事が言えるのも命あってこそだ。諦めなかったのは誇っている」

こちらを向かずに、独り言のようにアレンは言った。表情はいつも通りだが、そんな話し方をするアレンを初めて見た。

そこに、優しさを感じた。或いは、心配したという言葉聞いた気がした。

リディアとデージーも、そんなアレンをじっと見つめる。

しばらくの沈黙の後、再び口を開いたアレンは、もう元の声に戻っていた。

「武器は有効に使えている。もっとも、まだ武器に使われている感じだが」

「使われている、ですか？」

アレンは頷いた。

「どんな人間でも、装備が同じならだいたい同じような戦い方をす

る。自分が武器を使っているつもりでも、実際には武器に戦術を縛られている事が多い。真の意味で武器を使いこなすには、一人前よりもさらに一回り上の実力がいる」

デイジーがそこで補足してくれる。

「それは、レオンさんが使っているダガーを例えると分かり易いですね」

「え、これですか？」

今日も下げてきている短剣を、レオンは示した。

彼女は頷いてから説明を続ける。

「その武器を持たされたら、どんな初心者でも利き手で握って斬る事は出来ます。剣とは元々、そういう風にデザインされた物ですから。ですけど、もちろん他の使い方もあります。それは投擲用に重さを調整された物ですから、投げるのももちろんですが、軽い物です。補助武器としても使えます。慣れてくれば、武器としてだけではなく、防具としても使えますよ」

「防具ですか？」

盾とを考えても、これほど面積の寂しい盾はないだろう。

デイジーは微笑んでから、また頷いた。

「今は無理だと思えます。ですけど、剣とは刃がついただけの棒とも言えますから、そう捉えた戦い方もあるという事です。手に馴染めば馴染む程、理解すればする程、剣は斬る物という固定観念から解放されていきます。アレオンさんが言う、武器に使われている状態というのは、まだその固定概念に縛られている状態の事だと思います」

彼女がアレンの方を向くと、その視線に気付いたのか、彼はゆっくりと頷いた。

概念としては分かってても、具体的に形にするのは難しい。だが、それはつまり、レオンがまだ武器に使われている証拠なのだろう。「訓練するしかないだろうな」

脈絡もなくアレンが言う。

「とりあえず投擲は上手く出来ているようだが、それを左手で出来るようにする事。弓は、ホレスに接射を教わった方がいい」

「接射？」

「至近距離で弓を射る方法です」

デイジーの補足が入る。

「あと、剣か・・・それは俺が教えるが、どちらかというと、俺は敵だと思った方がいい」

「はい？」

いきなり妙な事を言われて、レオンは戸惑う。今から敵だと思っ
のはさすがに無理があるし、思いたくもない。

だが、そんなレオンを余所に、アレンはデイジーの方を向く。

「俺の剣を教えても、狩人のスタイルには合わないだろう。いつか
時間がある時でいいから、フレデリックさんに都合をつけて貰えな
いか？ ソードマスターなら、参考になるアドバイスが出来るかもし
れない」

デイジーはにっこり微笑む。

「ええ、もちろん」

むしろ話したくて仕方ないのだろう。そして、自分も祖父からの
話を聞きたいに違いない。もしかしたら、自分の戦闘スタイルの参
考にしたいのかもしれない。

何か暗殺者とかを目指しているのだろうか。そんな想像が少しだ
け頭を過ぎったが、さすがにそれはないはずだ。だが、既に十分な
腕があるような気がするのもまた確かだった。

アレンはこちらを向いた。ここに座ってから初めてかもしれない。
い。

「レオン。その骸骨モンスターだが、俺に似ていると思ったのだろ
う？」

「あ、はい。一応・・・」

よく考えたら失礼な話である。だが、悪い意味で言ったわけでは
ない。剣の腕が相当なものだという意味である。

アレンの表情も、真剣そのものだった。

「つまり、そいつは戦士の戦い方をしていた。それなら、俺をそいつに見立てたらいい。俺が狩人の剣を教えるのは無理だが、戦士の剣を相手にする方法を教える事は出来る。だから、明日からはそのつもりで来い。もちろん剣の基本は教えるが、それをどう使うかは自分で考える。他にも、フレデリックさんやガレットさんやホレスもいる。彼らからもアドバイスを貰え。だが結局のところ、剣を振るのはレオンだ。それを忘れるな」

彼の言葉を、レオンは頭の中で繰り返す。結局、どういう意味なのか一言で説明するのは難しいが、要するに、戦闘スタイルというのはただの技術ではないという事だろうか。だから、人からそっくりそのまま教わっても意味がない。自分で咀嚼して使うしかないのだ。

レオンが頷くのを見て、アレンは話は済んだとばかりに前を向いてしまった。その正面にはリディアがいるわけだが、彼女は一言も喋らずに話を聞いているだけである。

「祖父の方は任せておいて下さい。私が上手く話しておきます」

デイジーの言葉に、レオンはそちらを向いて頭を下げた。

「お願いします」

そこで彼女は、隣にいるリディアに話しかける。

「リディアは？何か話したい事はないですか？」

その言葉にこちらをじつと見つめるリディア。最近やっと分かってきた事だが、彼女は考え事をする時に、じつと目を見つめてくる癖があるようだった。というよりも、自分の視線がどこを向いているか分からなくなる程考えているらしい。集中力が尋常ではないのだ。だが、それに気付いたお陰で、見つめられてもあまり緊張しなくなつたレオンである。

しばらくしてから、リディアは唐突に口を開いた。

「武器の手入れの方法を覚えた方がいいと思う」

それを聞いて、レオンは思いだした。

「あ・・・そう。確かに、ダンジョンにいる時もそう思ったんです。特に短剣とかは、投げてばかりいるから、砥石か何かを持ち込んだ方がいいかなって」

リディアは小さく頷いた。

「さっきダガーを見た時に私もそう思った。まだ短いダンジョンだからいいけど、数日かかるようなダンジョンもあるから、手入れの仕方くらい知っておいた方がいいと思う。というより、レオンは手入れの仕方知らないの？」

最後は少し責めるような口調だった。自分が手を加えた武器だから、愛着があるのだろう。レオンも武器の手入れ方法を全く知らないわけではないのだが、どうやら今の手入れでは、リディアは不満なようだ。

「正しい手入れの方法を教えて貰えないですか？僕のやり方は、なんていうか・・・たぶん、邪道だと思うので」

狩人をしている父親に教わった方法だが、きっと我流なのだろう。再びリディアは頷く。無愛想なようだが、話してみると結構素直で親切な人なのだ。

そこでまた、レオンは思い出した。

「あ、そうだ。リディアさん」

「何？」

「リディアさんって鉱石の事に詳しいですよね？」

少し瞳を見開いたリディアだったが、すぐに答える。

「詳しいって程でもないと思うけど、仕事で使うから、普通の人よりは詳しいと思う」

「もし時間があつたら・・・いえ、何か鉱石に関する本とか、そういう本を貸して貰う事って出来ないですか？」

教えて欲しいと言いかけたが、よく考えなくても、リディアが忙しいのは明白だ。毎日仕事をしているのだから。

また彼女の遠慮のない視線が固定される。ある意味分かり易い。考え中というサインみたいに思えてくる。

「別にいいけど、どうして？」

「えっと・・・そういえばそうですね。特に目的があるわけじゃないんですけど、知っておいたら後々役に立つんじゃないかって」

「それなら、後でいいと思うけど」
そう言われると、確かにそうだった。今は他にもっと覚える事がある。

「・・・ですよね。じゃあ、もう少し後になったらお願いするかもしれない」

あっさり会話が終わってしまつて、変な沈黙が出来てしまった。それを察してか、デイジーが会話に割り込んできた。というか、アレンもリディアも、沈黙が苦ではないのだろう。

「そういう知識があれば、ダンジョンでも役に立つかもしれませんね。ダンジョンによつては、珍しい鉱石が採取出来る場所もあるそうですから」

「へえ・・・」

そんな話は初めて聞いた。だけど、そういう物を資金に出来るから、冒険者はやっていけるのかもしれない。

「レオンさんも、もし見つけたらリディアの為に持って帰ってあげて下さいね。リディアは珍しい鉱石なら、何でも喜びますから」

「ちよつと、デイジー・・・」

困つたような表情で止めるリディアに、デイジーは悪戯っぽい笑みを見せる。いつものお淑やかな表情とは違う一面だが、実はレオンは慣れている。ダガーの投擲を教えて貰う時、彼女は子供みtainな笑みを浮かべる事が多いのだ。その表情と、今の笑みはとてもよく似ている。

以前から感じていた事だが、リディアとデイジー、そしてベティもだが、この3人は仲がいいようだ。もっとも、ベティは誰に対しても親しげに話すし、彼女を相手にしたら、どんな相手でもいずれ根負けして受け入れてしまうだろう。

だけど、リディアやデイジーはそういう押しが強いタイプではな

い。どちらかというと、相手と距離をとる事が多いような、割と控えめなタイプである。だから、余計に2人の仲の良さが分かる。他の人には見せないような一面を、彼女達はお互いに見せ合っている。今も、2人の距離は近い。物理的にも、精神的にも、お互いのテリトリーを共有出来る程の親密さなのだ。

そういう仲のいい人を見ると、ついついレオンも嬉しくなってしまう。

「デイジーさんとリディアさん、凄く仲がいいですね。もう長いお付き合いなんですか？」

2人は一瞬視線を交わす。その動作にも、慣れた感じがよく出ていた。

笑顔で答えたのはデイジーだった。

「ええ。同じ年ですから。もう17年になります」

結婚して17年みたいな言い方だった。レオンは少し笑ってしまった。

「そういえば、髪留めとブローチ、同じ色ですよ。わざわざ揃いにしたんですか？」

何気なく言っただが、デイジーもリディアも驚いたようだった。そして、それはアレンも同じだったようだ。

「・・・本当だな。俺は全然気付かなかった」

「え、そうでした？僕は最初に気付きましたけど」
その言葉にデイジーが反応する。

「前も、リディアが珍しくスカートを穿いてたら言われたって・・・
レオンさんは、変なところを見てますね」

「変なところって・・・」

それは大袈裟だと思ったが、リディアが同意する。

「男の人は普通気付かないと思う」

確かに、アレンはそうだった。

「あれ・・・もしかして、僕、本当に変ですか？」

不意にレオンは動揺した。これはもしかして、自分が女っぽいと

いう事だろうか。男らしさが十分とは言えないが、さすがにそこまではないと思っていたのだが。

そんな様子を見て可哀想だと思ったのか、デイジーが助け船を出してくれる。

「それくらいなら変ではないと思います。女性なら一目見ただけで同じ人が作った物だと分かりますから」

「え、そうなんですか？」

確かに作りが似ているような気はしたが、同じ人が作ったとまでは断定出来ない。

「製法が一緒なのはもちろんですけど、デザインの趣味が同じですから。男性はあまりそういう事を信じませんが、女性は大事にしますよ。これを別々の人が作ったと言われたら、ほとんどの女性が疑うと思います」

「へえ……」

そういうものなのだろうか。女性の勘と目の付け所に、レオンは少し感心した。

そこでまた、デイジーが悪戯っぽく笑う。彼女は左手で髪留めに触れながら言った。

「実はこれ、リディアの手作りなんですよ」

さすがにレオンは驚いた。デイジーの髪留めを見て、リディアのブローチを見る。そして最後に、リディアの顔を見た。気のせいかな少し恥ずかしがっているようだった。

どう反応していいか分からなかったが、とりあえず正直な感想を口にした。

「……凄いですね。売り物だと思ってました」

売り物は売り物でも、きつと高級品だと思っていた。デザインはそれほど複雑ではないが、精巧な作りで、手作り感が全くない。女性ならいざ知らず、男性のレオンなら、店に陳列してあったとしても不思議に思わないだろう。

デイジーは隣のリディアを見た。

「昔から得意なんです。今では、きっと町の誰よりも上手です」

「・・・プロだから」

力強く頷いてからリディアが言う。どうやら、プロという言葉に拘りがあるようだ。

「この髪留めも、6年前の誕生日に贈ってくれた物なんですよ。今はもっと上手になっていくはずですよ。でも、私にとっては、上手でも下手でも、とても大事な物です。リディアが本物のデイジーの花を見ながら作ってくれた物ですから」

「え？その花がデイジーって言うんですか？」

全然知らなかった。花の名前には疎いレオンである。

デイジーが淑やかに微笑む。

「やっぱり男性ですね。この辺りでは有名な花ですよ」

知らなかったのはいただけないが、男性扱いされたような気がして、無性に嬉しかった。

仲良しの2人は、また慣れた様子で視線を交わす。デイジーはもちろんだが、あまり表情が豊かとは言えないリディアも、少し柔らかい表情になっている気がした。

その光景を見て、なんとなくよかったなと思った。少なくとも、いい休日だったと思えた。たまにはこういう日があってもいい。

よく考えてみたら、この町に来てからは初めての休日だった気がする。毎日毎日訓練して、勉強してばかりいた。雨が降った日も、とにかくじっとしているのが嫌で、酒場を手伝ったりしていたのだ。だけど、今日は怪我のせいで訓練出来なかった。晴れているから、手伝う程の仕事もない。

正直、身体が疼いて仕方なかったのかもしれない。どこか心が落ち着かない一日。

それでも、今初めて、ほっと出来たような気がする。

また明日から頑張れる。

正面の少女の頭をなんとなく見やる。

そこには、花びらの多い小さな花が、その名を持つ少女のように

慎重しく佇んでいた。

隙間風の摂理

狩人と言で言つても、その生活は様々であるらしい。

レオンの父親も狩人だった。少なくとも、村の人は皆そう認識していたし、自分でもそう主張していた。だから、それを幼い頃から見てきたレオンも、きつとそうなんだと思つていた。

だけど、最近になって、その認識が揺らぎつつある。

隣で弓を引いている男。

あまり逞しい身体とは言えない。さらに、彼の着ている服が、もう少して布切れと化すその一歩手前といった有様なので、どうしても見窄らしく見える。長めのダークブラウンの髪も、手入れ云々以前の問題で、恐らく無造作に伸ばしているだけに違いない。

それでも、やはりただ者ではない。一見細身に見える身体だが、若木のようにしなやかで、内には相当な力が秘められている。弓をいっぱいに引いている今も、彼の身体は微動だにしない。まるで彫刻かの如く、遠くの一点を見つめたまま静止している。通常なら、弦を引く手には大きな負荷がかかるはずだが、彼の右手はまるで楽器を弾いているかのように静かに佇んでいる。

その瞳は、右目だけが新芽のような緑色。

一瞬その目を細めるや否や、芸術作品のように美しく留まつていた彼の時が弾けた。

驚く程、音が小さい。

それなのに、消えてしまったと思える程の、目にも留まらぬ矢の速度。

林の方に飛んでいったはずだが、レオンの目ではその軌跡を追う事は出来なかった。

わずかに遅れて、林から鳥が数羽飛び立っていくのが見える。

ここからその地点まで400メートル。もしかしたら500メートルはあるかもしれない。

何度見ても凄い。名人というか、もう超人だと思うしかない。

その凄腕の射手の方に視線を戻すと、彼は流麗な動きで弓を下ろしていた。これも何度も見ているが、まるでその動きだけ練習していたかのように、全く同じ所作である。同じ時を繰り返しているのかと疑ってしまう程だった。

彼は首を少しだけ捻った。

緑の右目だけが、こちらを見据える。

「分かったか？」

これも何度目かの質問だった。いい加減申し訳なくなるから、出来るなら分かったと言いたところだった。

しかし、分からないものは仕方ない。

「・・・いえ、さっぱり。というか、今思ったんですけど」

控えめな声で前置きすると、男は少しだけ頷いたように見える。

「林に向けて矢を射ってますけど、大丈夫なんでしょうか。動物に当たるかもしれないし、誰かいないとも限りませんし」

最初はそもそも届くと思っていなかった。届くなんてあり得ない距離なのだ。

彼の返事は簡潔である。

「岩に当てている。問題ない」

「・・・見えるんですか？ここから林の中が」

「ああ」

どうやら本物の超人だったらしい。視力が尋常ではない。

そこで、明るい少女の声が、目の前の男を挟んだ向こう側から聞こえてきた。

「レオンもさ、いい加減突っ込んでもいいと思うな。見ただけで分かるかーってのはつきり言わないと、ホレスは平気でこれを一日中続けると思うよ」

男の陰になっているから姿は見えないが、もちろん誰の声かは分

かる。

それはそうと、言い方はともかく、彼女の言う事も一理あった。

「・・・すみません。やっぱり見たただだと無理みたいです」

怖ず怖ずと告げると、ホレスは視線を遠くにやる。

「そうか・・・悪いな。人に教えた経験がほとんどないから、あまり教え上手じゃない」

「いえいえ！僕の方こそ、なんていうか、飲み込みが悪くて・・・」
恐縮するレオンに、ベティが笑いながら言った。

「そこでもっと押さないと。下手でもいいから努力しろーとか言うてみたら？」

「・・・そこまで図々しくはなれないです」

「ホレスと会話しようと思ったら、とにかく押さないとダメだよー。レオンもホレスも全然押しがないから、言葉は交わしてるけど、本当の意味で会話になってないし。全然摩擦が起きてないんだよねー。もっとお互いの事を分かり合う為に、本音で会話しないと」

レオンとホレスは、顔を見合わせた。

しばらくしてから2人はベティの方を見て、同時に言葉を発する。

「本音で話してますけど」

「本音でしか話せない」

男性陣の視線を浴びながら、彼女は苦笑いした。

「じゃあ、嘘でも・・・いや、とにかく、ああ、もういいかー。私が通訳するから、とにかく頑張つてー」

投げやりに言いながら、彼女は寝心地良さそうな草原に背を預ける。

訳が分からない男2人は、また視線を交わした。さっぱり分らないという事を、互いに確かめ合う程度の意味しかなかった。

駆け抜けていく春風が緊張を解す。

「・・・そろそろ休憩しよう」

ホレスがそう口にする、ベティが瞬時に跳ね起きる。彼女のポニーテールが、本当の馬の尻尾みたいに跳ね上がった。

「昼飯だ！」

「昼飯はやめろ」

「お昼ご飯だ！」

一瞬の会話。決まり文句みたいなやりとりに、レオンは呆気にとられる。案外、本当に昼食前の決まり文句なのかもしれない。

それはそうとして、そこで昼食となった。

3人がいるのは、ユースアイ南西部の平原。のどかな草原が広がっていて、南北両側に、それぞれ違った高さの山々を望む事が出来る風光明媚な場所である。さらに西には、先ほどホレスが矢を放った林があり、そこから時折鳥や小動物が顔を見せる。ピクニックにはもってこいの場所である。

汲んでおいた水で手を洗ってから、大きなバスケットを囲うようにして座った。バスケットの大きさは尋常ではなく、旅行鞆の代わりに使えそうな程である。

ベティがにこにこしながら、その蓋を開ける。今日の彼女は、淡いオレンジのワンピースに白いエプロン。ある意味この景色に一番似合っている。

「今日はサンドイッチ！私の手作りだよー」

その言葉通り、中にはサンドイッチがぎっしり詰まっていた。意外にも野菜が多いようで、見た目も鮮やかだ。

「凄いですね・・・」

「美味しそうですねー？」

「え？あ、はい」

レオンの呟きは、出来映えよりもむしろ、その量に対するものだった。これはいったい何人分だろうか。3人どころか、6人いても間に合いそうなくらいある。これだけ作ろうとしたのもさすがだが、実際に作るのは相当大変だったはずだ。

もちろん、美味しそうなのも間違いない。

ふと気付くと、ホレスが右手を顔と胸の前で忙しく動かしている。何かの作法というか、神様に祈りを捧げているようだ。

気になってそれを見つめていたレオンだったが、その動きもあったという間に終わった。

「じゃあ、いただきますーす」

「いただきます」

少女の声に続いて、男2人の声が平原に伝わっていく。

一口食べてみて、レオンは驚いた。

ベティお手製のサンドイッチは、いつもレオンが酒場で食べているこつてりした料理とは違って、かなりあっさりした味だったのである。

思わず、食べかけのサンドイッチを見つめる。

「何か、変な物入ってた？」

その声がかかなり近くから聞こえたので、レオンは慌てた。

いつの間にか、ベティの顔がすぐ近くにある。彼女はレオンの顔と、レオンの左手にある食べかけのサンドイッチを交互に見つめていた。

「いえ、そういうわけじゃ・・・」

「そう？何か慌ててない？」

「慌ててるのは・・・というか、ベティさん、わざとやってませんか？」

必要以上にお互いの距離が近いような気がした。

案の定、その言葉を聞いたベティの表情に笑みが浮かぶ。予想通り悪戯だったようだ。

「レオンも少しは耐性出来たねー。私の努力の賜物だよね」

彼女は可笑しそうに言う。確かに彼女のお陰はお陰かもしれないが、きつと努力とは少し違うものだろう。

「・・・喜んでいいんですかね」

「ダメダメ。もっと精進しないと」

「・・・つまり、まだ僕で遊ぶ気満々ですか」

「うわー・・・レオン、鋭くなったね。じゃあ、ご褒美に、サンドイッチ食べさせてあげる」

彼女はこちらを見て微笑んだまま、無造作にバスケットの中に左手を突っ込む。

咄嗟に右手を出して阻止しようとしたレオンだったが、その前に彼女の右手がレオンの胸ぐらを掴んだ。

失敗したと思ったが、もう遅かった。

身体にかかる浮力。

見事なくらい鮮やかに、右腕一本で押し倒される。

柔らかい草原のクッション。

お陰でそれほど痛くはなかったレオンだったが、もちろんいい状況ではない。

彼女の左手が飛んでくる前に、両手を顔の横に挙げる。左手には食べかけのサンドイッチ。

だけど、彼女は止まらなかった。

次の瞬間には、レオンの口の中がサンドイッチで埋め尽くされていた。量が多い。胸ぐらを掴まれたままだったので、呼吸するのが辛い。

サンドイッチをねじ込んだ左手を戻しながら、ベティは少しだけ首を傾げた。

「こっちはまだまだだねー。位置から考えても、私の左手に間に合うわけないんだから、せめて右手に注意しないとダメだよ。というか、逆に私を押し倒すくらいじゃないと。そうしないと、もしバスケットの中に武器が仕込んであったら、仮に右手に対処出来たとしても、その後、武器を持った左手に襲われるんだから」

その言葉は聞こえていたものの、レオンはサンドイッチを飲み下すのに精一杯だった。

返事がないのにも構わず、ベティの考察は続く。

「最後の左手には間に合ってたけど、あれだって、もう押し倒された後のわけだから、あの体勢で攻撃を防御するのは難しいでしょ？ やっぱりね、戦いは先手必勝。今で言えば、私の右手が届いた時点で、というか、レオンが私の左手に気を取られた時点で、もう勝

負は決まっただんだよ。まず冷静に私の右手を弾く事。出来れば逆にこちらを押し倒す事。それを一瞬で判断して実行しないと」

ようやく、レオンはサンドイッチを飲み込んだ。

「・・・せめて、左手を掴んでおくんでした」

最後にサンドイッチをねじ込んできた手の事である。

普段から彼女のこの手の奇襲はあるのだが、女性を相手に本気で戦えないと訴えたところ、両手を顔の横に見せて降参の意志を伝えれば、そこで戦闘終了というルールが定められた。

だが、今回はそのルールが破られた事になる。レオンの言葉は、その事に対する不満を込めたものだった。

ベティは口元を少し緩める。

「サンドイッチを食べさせてあげるって言ったでしょ？最後のはただのご褒美。どっちにしたって、怪我するわけじゃないんだし」

怪我はしないかもしれないが、危うく窒息しそうにはなった。

レオンは小さく息を吐く。よくある事だからとはいえ、いい加減慣れてきた自分が怖い。

「さつてと・・・どうしよっかなー」

やたら楽しそうなベティの声が上から響く。

レオンは背筋が冷たくなった。いつもの彼女なら、先程のような感想を述べて終わりなのだ。それなのに、今日は身体を退ける気配がない。それどころか、まだ何かを企んでいるような表情だった。

身の危険を感じた。

すぐに状況の把握に努める。地面に押し倒された状態だが、彼女の右手が胸ぐらを、右足が腹の辺りを押さえているだけだ。完全に組み敷かれているというわけではない。自分の両手は自由だし、体重もこちらの方があるだろう。しかし、彼女は腕が立つし、それに何より、下手に暴れると、彼女が怪我をしないか心配だった。

交渉しよう。レオンは密かにそう決心した。

「あの・・・ベティさん？もう退いて貰ってもいいですよ」

ベティは笑顔になった。だけど、何かを覆い隠しているのがみえ

みえの笑顔だった。完全には隠せない程、隠そうとしている物が強大なのか。

「私が勝ったわけだし、レオンをどうしようと、私の自由でしょ？」
冗談だとしても、彼女の今の表情を見れば、全然笑えない。

「いえ、そんなルールはないと思いますけど・・・」

「勝負の世界では常識だと思うなー」

「常識って・・・」

「ここからレオンが逆転したら、私を自由にしていって事になるわけだし。だったら、公平な条件だと思わない？」

あまり思えなかったレオンだが、口に出すとまずいような気がしたので、無理矢理別の話題に移った。

「とりあえず、昼食をいただきませんか？ほら、せっかくベティさんが作ってくれたわけですから」

その瞬間、胸ぐらを掴んでいるベティの右手に力がこもったような気がした。咄嗟にレオンの身体が緊張したが、幸いと言うべきか、攻撃はなかった。

草原の爽やかさがかき消される程、重苦しい沈黙。

何故こんな事になったのかと思っていると、変化が突然訪れた。ベティが急に笑みを引つめたのだ。

レオンは目を疑った。

無表情。いや、明らかに落ち込んでいる。

いつも明るい彼女がこんな表情を見せたのは、もちろん初めてだった。

「・・・美味しくないなら、無理して食べなくてもいいよ」

トーンの低い声に、今度は耳を疑った。

「はい？」

びつくりの連続で、こんな間の抜けた返事を返すのがやっとだった。

状況がさっぱり分らない。

「サンドイッチ。どこが口に合わなかった？」

また訳の分からない質問だった。

だけど、いつになく深刻な彼女の顔と声だった。もしかしたら、これが泣きそうな顔なのかもしれないと、一瞬だけ思った。

「えっと・・・ちょっと待って下さい」

そう断ってから、レオンは左手に残っていたサンドイッチを口に放り込んだ。倒れたままだったが、それほどの量ではないので、喉に詰まる事はない。一瞬、ベティの瞳が大きくなったような気がしたが、それには構わず、とにかく口の中に感覚を集中した。

野菜の食感も残っているし、パンも固くない。味は最初感じたように素朴だが、少し胡椒が利いているようだ。だけど、野菜やハムの味を邪魔する程ではない。

凄く無難にまとまっている。感動するような味ではないかもしれないが、そもそもサンドイッチで人を感動させるのは難しいのではないか。逆に、どこか欠点を見つけると言われても見あたらないから、そういう意味では出来がいいと言える。

それに、ベティが作ってくれた料理なのだから、普通のサンドイッチよりも美味しく感じる。例え有名な料理人としても、赤の他人が作った物と、知り合いが作ってくれた物では、やはり味わいが違う。

結局、レオンの口から出たのは次の一言だった。

「・・・これ、口に合わない人がいるんじゃないだろうか？」

もし欠点を指摘出来る人がいるなら、それはきつと、サンドイッチ自体に何か恨みがある人ではないだろうか。偏った目で粗探しでもしないと、欠点と思えるような箇所はない。そうとしか思えなかった。

だけど、ベティはその答えを聞くなり、すつと目を細めた。

レオンの顔から血の気が引く。

「・・・今から正直に言えば、命だけは保証してあげるけど？」

彼女の目は完全に据わっている。この状況で笑える人がいたら、きつとその人は、前世が相当な猛者だったか、或いは、今現在相当

な猛者であるか、そのいずれかだろう。

両手を顔の横に持つてくる。今の彼女がこのルールを覚えているかは分らないが。

「しょ、正直に言ってますけど・・・」

「へえ・・・未練はないって事でいいの？」

ベティが握った左手を持ち上げる。

「な、何で信じて貰えないんでしょうか・・・」

声が尻すばみに小さくなる。

彼女は微笑んだ。だが、目は笑っていなかった。

「レオン。冥土の土産に教えておいてあげる。女の子はね、手料理を作ったら、絶対最初の一口は見逃さない。見てないふりをしていても、こっそり見る。その時の反応の為に作っていると言っても過言じゃないんだから」

最初の一口。自分がどんな反応をしたか、必死に思い出そうとする。

それ自体は難しくなかった。

だけど、何故ベティが不満なのか、それがよく分からない。

「さあ、どう？正直に言う気になった？」

結論が出るよりも早い、最終宣告。

もうなりふり構っていらなかった。

「わ、分かりました！正直に言います！」

彼女は頷いた。拳は握ったままだったが。

なんだか不条理な気もしたが、とにかく誠意を尽くして話すしかない。

「一口食べてみて、とにかく最初に思ったのは、意外にヘルシーなんだなって事です。ほら、いつも酒場で食べてる料理って、こってりした物が多いじゃないですか。だから、新鮮だったというか、どちらかというと、村ではこういう物ばかり食べてたので、懐かしかったというか・・・あと、ベティさんが作ってたって聞いてたので、味付けが素朴だったのが意外だったというか、とにかく、全然、そ

の、美味しくないとか、口に合わなかったとかじゃなくて、ただ、予想と違ったから驚いたただけなんです！味とかそういう意味では、むしろ美味しかったですよ！」

最後を強調すべく必死にアピールした。

だがそこで、ようやく助けが来た。

「ベティ」

ホレスの一声。いつもの彼の声だった。

それなのに、その声には驚く程効果があった。

一瞬ベティの表情が乱れたかと思うと、彼女は慌てたようにレオンの上から飛び退いた。

解放された事に安堵するよりも、彼女の反応が気になって、じつとそちらを見つめてしまう。

彼女は気まずそうに視線を逸らして、元の位置に座り直した。俯いたままで、こちらの顔を見ようとしてもしない。心なしか、少し元気がないようにも見える。

いつもの彼女とは正反対と言っても良かった。

呆氣にとられたままのレオンの耳に、ホレスの声が届く。

「早く食べる。昼食が夕食になりかねない」

「え、あ、はい・・・」

その言葉に、レオンは反射的に身体を起こして座り直す。

誰も、何も言わない。

ベティとホレスを交互に見るのだが、ベティは俯いたままだし、ホレスは林の方を見ているだけだった。

さすがに気になったので、レオンは怖ず怖ずと尋ねた。

「・・・ベティさん、大丈夫ですか？」

彼女がこちらを向く。まるで人形みたいな表情。さすがに少し気圧された。

「・・・ごめんね」

やっと届くような細かい声だった。本当に彼女の声だろうかと思ってしまう程だ。

次に口を開いた彼女の声は、いくらか声量が回復していた。だが、視線がさまよっている。いつもの彼女とはまるで別人だった。

「ごめん。私、ちよつと、その・・・ああいうのはだめなんだ。その、レオンが嘘を吐いてるって思ったから」

「え？・・・あ、いえ、分かつて貰えればいいんですけど」

よく分からないものの、ベティのあまりの深刻さにそう返事したレオンだったが、彼女は首を横に振った。

そこでホレスが唐突に口を挟む。

「俺はバターで死にかけた事がある」

端的過ぎて分かりにくい説明だった。普通に考えても、バターと死が結びつく事なんてあるだろうか。

その後をベティが引き継いだ。

「昔からね、今日みたいに、ホレスに差し入れするのはよくある事なんだ。ホレスは昔から、何でも美味しい美味しいって食べてくれるから、つい嬉しくて、いろいろ作って持って行ってたんだよ。だけど・・・だから、気づかなかったんだ」

それっきり黙ってしまう。

だけど今度ははつきり分かった。無表情が崩れそうになっている。今度こそ、本当に彼女は泣きそうだった。

レオンは何も言えなかった。いつも明るい彼女だし、以前お祖父さんの話を聞いた時も、彼女はここまでの表情をしなかった。

余程辛い事なのだろう。

重い沈黙を破ったのはホレスだった。

「どうやら、俺は牛乳とかバターとか、そういう物が食べられない身体らしい。ただそれだけの事だ。ベティが悪いわけじゃない。俺が自分の身体の事に気付かなかった。自分の身体に異常があったのに、それを気にも留めなかった。自業自得だ」

まだ話の細部は掴めないが、あまり聞きたい話とも思えない。ベティにこんな表情をさせてまで聞きたい話はない。

「いえ、もういいです。僕は全然・・・もう何も気にしてませんし、

それに、嘘を吐いたりもしません。これでいいですよね？」

その言葉を否定したのは、他ならぬベティだった。

「うつん・・・やっぱり、聞いておいた方がいいと思う」

彼女は真っ直ぐにこちらを見つめた。いつになく真剣な表情だった。

それを受け止めるレオンも、背筋が自然と伸びる。

「私も詳しくはないけどね、食べ物が原因で人が死ぬ事があるんだ。イザベラさんが調べてくれたんだけど、最初は身体が痒くなるとか、少し気持ち悪くなるとか、そんな程度でも、次に食べたら呼吸が止まったりする事もあるんだって。ホレスがそうなんだよ。最初は少し発疹が出ただけだった。だけど、その次は・・・」

ベティは言葉を濁したが、それが何よりの説明になっている。

つまり、彼女が持っていた料理で、ホレスが死にかけてしまった。

彼女の料理に使ったバターが、彼の命を奪うところだったのだ。

「最初の時も、その時も、ホレスは私の料理を、美味しいって言うてくれたんだ」

「美味しかったからな」

ホレスが即答した。彼にしては早い回答だった。

彼の方を少しだけ見て、ベティは視線をこちらに戻した。

「だけど、正直に言ってくれたら、もしかしたら気付けたんじゃないかって、今でも思うんだ。だから、レオンも、料理くらいとか思わないで、何でも正直に言ってね。軽い嘘だっと思わないで欲しい。なんていうか、レオンとホレスは似てるから、2人とも優しいから、だから余計に心配なんだよ。私に気を遣ったせいで、突然いなくなるんじゃないかって・・・ごめん。縁起でもないね。だけど、そんなつまらない嘘は吐かないで欲しい」

この表情を見ているだけでも、その一件が彼女の心にどれだけの影を落としているのかが分かる。モンスターに襲われた時よりも、祖父が亡くなった時よりも、彼女には辛い事だった。それは、彼女自身や祖父の命が、ホレスの命よりも軽いという事では決してない。

ただ、自分のせいで身近な人が消えてしまう。その恐怖が計り知れない程大きいものだだったという事なのだ。

彼女の過剰とも言える行動は、自分が嘘を吐いたと思って、どうしても見過ごせなかったのだろう。もしかしたら怒っていたのかもしれない。

「こう言つとベティは怒るんだが」

ホレスがそう話を切り出した。

「俺は、あの時死にかけてよかったと思っている」

そんな事を言つたら、さすがに怒るだろう。だが、ベティの方を見ると、彼女は少し口元を緩めて肩をすくめただけだった。どうやら、もう怒りきつた後らしい。

「レオン。狩人になる条件を知っているか？」

知らないし、考えた事もない。レオンの父親は、きつと自分で名乗っていただけだった。

首を横に振つてみせると、ホレスはリアクションせず話を続けた。

「自然の一部になる事だ。人間は肉体が滅んでも、来世でまた新しい肉体として生まれ変わる。自然も同じだ。一日を繰り返し、季節を繰り返す。土から植物が生まれ、それを動物が食べ、動物が死ぬと土に還る。その輪の中に入るのが狩人だ。自然の営みを見て、自然を理解して、その中で暮らす。そして、その一部になる。俺もずっとそうして生きてきた。だが、レオン・・・そのうちこう思うようになるんだ。俺が生きていても死んでいても、結局同じ事だとな」

生きていても死んでいても同じ。レオンには難しい言葉だった。

「俺がこうして生きていても、或いは死んで土になつていても、自然にとつては同じ事だ。俺はその一部でしかない。ただ、土なのかそれ以外なのか、せいぜい場所が違うだけだ。一日に例えるなら、昼なのか夜なのか、太陽がどこにいるのか、そんな程度の意味だ。自然から見れば、俺が生きているか否かというのは、その程度の違いしかない。俺はずっとそう信じていたし、それでいいと思つてい

た。俺の命に、俺が生きている事に価値はない。この身体にも、全く未練はない。だから、あの時、最初に身体に発疹があった時も、何とも思わなかった。何かおかしい、病気かもしれないと思った。だが、それだけだ。放っておけば死ぬかもしれないと、ほんの少しだが考えた。だが、重要な事とは思えなかった。どうせ同じ事なんだからな。だが・・・」

彼の右目だけが、彼の大事な家族を一瞬捉えた。

「あの日、俺は人生で一番苦しい時を過ごした。息をするのが難しい程だ。これで死ぬかもしれないと思った。それでいいとも思った。だが、声が聞こえた。ベティが俺の手を握りながら、ひたすら俺の名前を呼ぶのが聞こえた。後で聞いた話だが、丸一日以上、ずっとだ。ベティは泣いていたな。そんな声を聞いたのは初めてだった。その声を聞きながら、俺は考えた。何故彼女は泣いているのか。俺が生きていても死んでいても、同じ事だ。そもそも、生きている者は皆死ぬ運命だ。また来世になれば生まれ変わる。だというのに、彼女は何を泣いているのか。分からなかった。だが、レオン。俺は考えているうちに気付いた。もしかしたら、自然は輪を描いているわけではないのかもしれないとな」

自然が輪を描いているわけではない。

ホレスは視線を遠くにやる。

「何かはつきりとした答えを得たわけじゃない。ただ漠然と、もしかしたら、俺は間違っていたのではないかと考えただけだ。自然の一部になった気でいたが、よく考えれば、自然そのものとは違う。俺が自然の一部だと思っっているにも関わらず、その中心からは自分を外している。それが矛盾のような気がした。何か俺は見落としている。そして、もしそうなら、俺は何をしているんだと思った。ベティを泣かせたまま、どこへ行く気なのか。不思議なもので、そう思った次の瞬間には、俺の意識が戻っていた。その時、確かに俺は確信した。輪の構造よりも、もっと世界を忠実に示す構造があると。その一端に触れたから、俺は帰ってきた。その一端が、彼女を泣か

せた。そしてレオン、弓を引く時もそうだ」

「え・・・弓ですか？」

ベティの聲がそこに割り込んだ。もう、いつもの彼女の声だった。「その前と後だと、ホレスの弓の腕、全然違うんだよ。前は名人くらいだったけど、今は超人くらいあるし」

どちらにしても、レオンにしたら凄過ぎる腕前に違いない。

しかしそこで、連想するものがあつた。短い時間で、急に腕前が上がる。こういう話を以前聞いた事がある。

こちらの表情から読みとつたのか、ホレスがその疑念に答える。

「いや、俺は伝説の記憶に触れたわけではない」

「違いますか？伝承者にアドバイスされた人の中には、そういう人もいるって聞きましたけど」

最初にフレデリック邸を訪ねた時、デイジーが言っていた事だ。

「俺は伝承者にアドバイスされた事がないから、はつきり違うとは断言出来ない。だが、俺は違うと思っている。実際、俺はそういった記憶を見た覚えがない。ただ、死にかけていた時はとにかく朦朧としていたから、覚えていないだけかもしれないが」

そんな状態だったのに難しい事を考えていられるというのは、やはりそういう生活を送ってきたからだろうか。ずっと自然の中で育ってきたのだ。よく考えてみれば、牛乳やバターが駄目だという事にその事故の時まで気付かなかったのは、それまで口にした事がなかったからではないだろうか。いったい彼はどんな生活をしていたのだろうか。

少なくとも、レオンの父親とは違う。父は間違はなく片手間にやっていた。それが良い悪いという話ではきつとない。村は人手が少なかったから、兼業が基本なのだ。

だが、ホレスはまさに生粋の狩人なのだろう。もしかしたら、ずっと1人で暮らしていたのかもしれない。

ホレスはこちらを見ながら話を続ける。

「弓はただ決められた姿勢で引けばいい物ではない。いや・・・決

められた姿勢を教わるというのも、恐らく悪くはない。だが、それだと精度に限界があるし、動きながら射るのは難しい。だから、レオン。弓を射る時には、弓と矢と目標だけに注意しては駄目だ。風や空気はもちろん、もつと広い意味で、空間の繋がりのようなものを意識しろ。自分の力が弓や矢にどう伝わっていくのか、そしてそれが他の物にどう伝わるのか、まずはそれを理解しろ。少なくとも、それが出来なければ狩人の弓とは言えない。直射でも曲射でもそれは同じだ。狩人にとって、それが基本でもあり、真髄でもある。彼の言葉を反芻してみる。空間の繋がり。力の伝わり方。それが真髄。

これ以上分かりにくい話があるだろうか。

「・・・難しいですね」

思わずそう漏らしてしまう程、難しい概念だった。口で言われてもさっぱり分らない。それに、仮に理解出来たとしても、実践出来る気がしなかった。

難しい顔をしているレオンを見て、ベティが微笑みながら言った。「とりあえず、先にお昼済ませた方がいいよ。お腹減ったら、頭も働かないし」

「・・・そうですね」

ベティの方を向くと、彼女はもう食べ始めている。いつもの笑顔に戻っているようで、レオンは安心した。

彼女特製のサンドイッチを頬張る。あっさりしていると思ったが、バターやマーガリンを使っていないという事だろう。だが、パサパサ感はない。何か工夫があるようだ。

「これ、全然パサパサしてないですね。何か秘訣があるんですか？」

彼女は水筒に口をつけてから、ゆつくりと頷いた。

「もちろん。でも、秘訣って程じゃないよね。乳製品を使わなくても、意外となんとかなるもんだよ」

「へえ・・・」

そうは言っても、代用品を使えば、普通はそれだけ質が落ちる気がする。だが、この特製サンドイッチには全くそれが感じられない。ここまで工夫してくれるのは、やはりそれだけの愛情があるからに違いない。

「うちはお母さんが調理場に入り浸ってるから、その影響で私も料理好きなんだよね。だから、こういう試行錯誤は割と好きだし、結構得意だし。というか、私って、よく考えたら、家事はそこそ得意だなー。うんうん。いつでも嫁に行けるねー」

実際には、彼女はガレット酒場の一人娘なわけだから、嫁に行かれると大変かもしれない。だけど、そこに口を出す程、まだ自分は親しくないだろう。

そんな事を考えていたレオンだったが、そこで思わぬ奇襲がやってきた。

「というわけで、よろしくね、レオン。出来る嫁を貰って、幸せ者だねー」

結果、激しくむせた。

ベティはその背中を叩いてくれた。顔は笑っていたが。

「そんなに喜ばなくてもいいのにー」

「・・・喜んでません。驚いただけです」

「正直だなー、レオンは。うん、でも、今回はそれで許してあげようかな」

彼女は笑顔でそう言った。許すも何もないのだが、嘘を吐かないで欲しいと言った手前、正直に言ったレオンに敬意を表してくれたのだろうか。

小さく息を吐いてから、またサンドイッチに手を伸ばしたレオンに、思いついたようにベティが口を開く。

「そう言えば、お詫びしないね」

手を止めた。どう考えても、彼女からのお詫びなんていい響きとは言えない。

「お詫びなんていいです。何も被害を被ってませんから」

予防線を張るように言った言葉。

ベティは少しだけ首を傾げる。

「・・・やっぱり、似てるよね」

「はい？」

「ホレスもねー、ずっとそう言うんだよ。お詫びなんてされたら困るって。ごめんって謝っても受け取ってくれないんだ」

そこで、その本人から声が飛んだ。

「ベティは何も悪くない」

そちらをちらりと見たベティだったが、やがてまた首を傾げた。

「・・・私の周り、どうしてもこういう男が集まってくるのかな」

それはきつと、誰にも答えられない問いだった。

だけど、レオンはひとつだけ分かったような気がした。それは、ホレスがベティからのお詫びを受け取らない理由。以前、モンスターから助けてくれたお礼も拒否していた。

なんとなくだが、レオンにはホレスの気持ちが分かる。もしかしたら、ベティの言う通り、2人が似たもの同士だからかもしれない。だけど、もっと根本的なもののように思える。

それがつまり、ベティとホレスの微妙な関係の要因。

これも難しい。

だけど、弓の真髄程ではない。

働き過ぎた為か、頭が変な熱を帯びてきた。

その脳に増援を送るべく、レオンは自然味豊かな特製サンドイッチを頼張った。

暗闇と炎

偶然なのか、それとも再挑戦させてやろうという誰かからの気遣いだったのか。

前と全く同じ大広間だった。

黄色混じりの不思議な石材で40メートル四方の壁面を埋め尽くした部屋。魔法の松明の灯りによって視界も十分確保されているが、その中身を見て驚いたのは失敗だった。

それでも、怪我をしなかったのは、不幸中の幸いだっただろう。

一週間前と全く同じように黒鳥目玉モンスターに奇襲され、同じように短剣を投擲して叩き落とした。ご丁寧に、数も全く同じで、行動パターンも同じだった。今回は普通の松明を持ち歩いていなかったが、さすがに慣れもあって、落ち着いて対処出来た。

その後、前回は見事に閉じこめられた。

だが、今回は違う。

レオンは右手で頬を搔く。本来なら、モンスターの前でこんな余裕を見せてはいけない。だけど、今はそれくらい余裕があった。そして同時に、こんな簡単でいいのかという、なんともやりきれない感覚で頭がいっぱいになった。

ほぼ直立姿勢。その無防備ともいえる体勢で、レオンが見下ろす先には、前回大苦戦した骸骨モンスターがいた。

ただ、身長が4分の3くらいになっているのだから。

もっと具体的に言うなら、この骸骨には膝から下がない。

それでも、膝立ちの状態でこちらに近づいてくる。だが、元から腕以外は緩慢なスピードでしか動けないから、はっきり言って、ほとんど移動出来ない。きつと、赤ちゃんのハイハイの方が速い。こうなってしまうたら、モンスターというよりも、障害物と同じ

である。

それでも、一応倒しておく事にする。

レオンは無造作に距離を詰めた。普通に歩いて近づいているだけである。

間合いに入った瞬間、骸骨は右手の剣を振り下ろしてくる。

それを盾で受けたレオンは、既に握っていた右手のショートソードを振るった。

骸骨の右手首を斬り落とす。離れた部分は、すぐに溶けるように消えていく。

これで、ほとんど無害。

その後、盾しかないモンスターを倒すのに、さほど時間はかからなかった。

だけど、素直に喜べないレオンだった。

今回が3回目のビギナーズ・アイである。だけど、前は下見のようなもので、すぐに出てきてしまったから、今回が2回目と言ってもいいかもしれない。

その間に一週間という時間が過ぎたが、レオンの実力がそれほど増したわけではない。剣ではまだアレンに勝てないし、投擲もまだ左手では難しい。弓もまだまだだし、火薬も勉強中。最初にここに来た時と、ほとんど同じ条件である。

それなのに経過は全然違う。前は限界だったこの部屋も、今はまだ傷ひとつ負っていない。それどころか、ほとんど武器を消費していない。まさに無傷という状態だった。

何故ここまで違うのか。

理由はいろいろ考えられる。だけど、端的に言えば、この場所に慣れてきたという事だろう。

最初に入った時は、とにかくおっかなびつくりという有様だった。一歩進む毎にびくびくしていたし、何も加減が分からなかった。そんな状態では、身体もそうだが、精神的な負担もかなりのものだったはずだ。

今なら、自分があの時、どれほど緊張していたのかがよく分かる。なぜなら、今なら考えればすぐ分かるような事に、あの時は全く気付きもしなかったのだから。

例えば、さっきの骸骨モンスターにしてもそうだ。前はとにかく頭ばかり狙っていた。そこが急所だと思い込んでいたからで、実際その通りだったのだが、よくよく考えてみてみれば、馬鹿正直に急所ばかり狙う必要はない。というか、急所は向こうだって分かっているのだから、そこを入念に防御してくるのは当たり前だ。そんな場所ばかり狙っても、全然効率的ではない。

そこで、今回はまず足下を狙った。理由は簡単で、相手の盾が届きにくいからである。これはアレンに聞いた知識だったが、普通に考えれば分かる事だろう。だが前回は、それを考えようとしなかった。

そして、今回やってみると、あっさりと相手の足を止める事が出来た。少し屈めば盾も届くはずだが、急所以外はどうでもいいのか、足を守ろうとしなかった。

その結果が、さっきの状態である。まず移動出来なくして、次に武器を使えなくする。徐々に相手の戦力を減らすようにしていけば、問題なく倒せる相手だったのだ。

気付いてみれば、あまりに呆気ない。

これが他人の話なら、笑って済むかもしれないが、前回は、一歩間違えれば生きて帰れなかったかもしれないのである。全然笑えない話だった。

それでも苦笑いが出てしまう。武器をしまつてからは、溜息が出た。

とりあえず、進もう。

入ってきたのとは反対の扉へと進む。これも前回と同じで、ツタのような装飾の施された金属製の扉。恐らく鉄製だと思うが、鉄よりも色合いが少し黒っぽい気もする。

罠に注意しながら鍵を開ける。その途中で気付いたが、向こうか

ら水の音がしない。どうやら前回と一緒になのはこの部屋の中だけで、向こうは違う構造のようだ。少なくとも、導きの泉ではない。

鍵を開けるのに10分はかった。

ゆっくりと扉を開ける。向こうは真っ暗だった。この部屋の灯りが、扉の向こうへと差し込んでいく。

レオンは扉を大きく開ける。体勢を低くして、右手に短剣を握っている。奇襲に対応する為である。

だが、何も起きない。

後ろに放り出していた松明を掴んでから、レオンはその暗闇を照らしながら進んだ。

この松明だが、全然熱くない。つまり、魔法の灯りである。魔法のアイテムという物は、便利だが、かなりの高級品で、普通ならレオンが手に入れられる代物ではない。

実は、これはダンジョン内に設置してある物を勝手に拝借した物である。

あるものは人様の物でも何でも使え。これはニコルの言葉だが、以前言っていた、普通の松明なんて使わなくてよかったという言葉も、要は同じ意味だった。つまり、わざわざ灯りを用意しなくても、そこら中に灯っているのを拝借していけばいいと言うのである。これも最初は考えもしなかった事だが、よく考えればその通りだった。魔法の松明はかなり高い位置にあって、普通は手が届かないのだが、ニコルの簡易トラップを壁に張って足場にした。取り外しは全く問題なかったし、魔法の効果も消えなかった。そのおかげで、光源は全く問題ない。熱を持たないから炎としては使えないし、壊す以外に灯りを止める方法がないから、一度消したら二度と使えない。それでも、普通の松明と違って制限時間もないし、ちよつとやそつとの事で灯りが消えたりしない。かなり便利な物と言える。

ちなみに、先日下見に来た時に、これをダンジョンの外に持ち帰ってみた。一応魔法のアイテムなのだから、もしかしたら高く売れるのではないかと思ったのである。だが、外に出た途端、モンスター

ーが消滅する時のように煙を出して消えてしまった。ギルド窓口のケイトに聞きに行ってみたところ、ダンジョン内でしか使えないアイテムで、さらに、どのダンジョンにもあるわけではないから、あまり当てにしないで下さいという事だった。

それでも、あつたのだから、使うに越した事はない。

魔法の灯りを照らしながら慎重に歩みを進める。幅2メートル程の廊下で、両側の壁や床はもちろん、天井にも注意を払うが、何もない。ただお馴染みの石レンガが並ぶだけである。

レオンの足音だけが小さく響く。思ったより長くて先が見えない。あまり広い通路とは言えないから、どこか圧迫感を感じる。

距離にして100メートル、もしかしたら200メートルは歩いたかもしれない。

それくらい歩くと、変わり映えのしない通路にようやく変化が訪れた。

まず気付いたのは、壁と天井に、人がよじ登れそうな程太い緑色のツタが蔓延っている事だった。だが、普通の植物ではない事は明らかだ。

そのツタは、かなり遅いながらも、壁を這うように怪しく蠢いているのだから。

もちろん、レオンはすぐに歩みを止めた。

モンスターに違いない。壁と天井をびっしりと、そして、途中からは床もだが、完全に覆ってしまっている。その根元というべきか、それが生えている本体は通路の奥の方にあつて、ここからは灯りが届かない。

緑色のツタはゆっくりとこちらに近づいてきているようだ。

とりあえず、レオンは後ろ足で後退する。

ツタはあまり動きが速くない。だが、ここを駆け抜けていく気にはならない。絡みつかれたら抜け出せないどころか、簡単に骨を折られそうな気がする。

ある程度離れると、ツタはこちらに近づかなくなった。どうやら、

長さの限界があるようだ。

そこでレオンは落ち着いて考える。

燃やすという選択肢を一番に思い付く。だが、生木はそう簡単に燃えないし、燃料があるわけではない。何より、ただの植物ではない。モンスターなのだ。何が起きるか分かったものではない。

次に思い付いたのが、撤退するというものだった。どうしようもないならそれしかない。他にも分岐があったから、そちらを進めばいい。だが、出来る事なら、通路の奥がどうなっているのかを確かめておきたい。もしかしたら、そちらに下り階段があるかもしれないのだ。

この松明を放り込んだら見えるかもしれない。だが、それをすればこの辺りが真っ暗になるに違いない。どこからかもうひとつ拝借してこようかと思っただが、そこでレオンは、普通の松明を使う事にした。

どうせなら、こちらを放り込んでみよう。

通路の奥も確認出来るだろうし、モンスターが火にどういう反応をするかも分かる。

背負い袋から取り出した松明に、発火用具と紙で火をつける。

熱い方の松明を右手に持ち、それをなるべくゆつくりと、奥へ放り投げた。

せめてモンスターの本体が見えて欲しい。

その程度の期待しかしていなかったのだが、その予想外の効果にレオンの目は釘付けになる。

松明がツタのカーペットの上に落下するなり、その炎があつという間に燃え広がった。

一瞬で通路内が昼間のようになる。

場違いにも、レオンは綺麗だと思ってしまった。

それくらい綺麗に燃えたのである。地面のツタに燃え移った火は、あつという間に壁と天井のツタに広がり、通路の奥まで走るように赤く染めていった。奥には予想通り、モンスターの本体らしきもの

がいたが、それも炎の中に包まれて確認出来ない。悲鳴を上げるでもなく、また身悶えるわけでもなく、ただのキャンプファイアが燃えているような、そんな光景だった。

そこで、レオンは気付いた。

燃え上がるモンスター。そのすぐ後方に下り階段らしき通路が見える。実際には階段は見えないのだが、通路が地下の方へと傾斜しているのが分かる。

もしかしたら、今日2階層目まで進めるかもしれない。

期待が膨らんだが、それも一瞬だけだった。

モンスターは倒せば消えてしまう。だから、燃え上がっていたとしても、消えた瞬間にまた暗闇になる。そう考えていたのだが、実際にはそうならなかった。

最初に気付いたのは、その違和感だった。

炎はもう消えている。それなのに、この通路内には薄明かりが灯っているように、うつすらと奥まで見渡す事が出来るのだ。

さらに、それだけではない。

ツタはほぼ消滅しているのに、奥に鎮座している本体が何故か消えないのである。どこか花の蕾のようにも見える黒い人間大の楕円形。

その正体が分かったのは、その直後だった。

漏れてくる閃光。

花が開花しているというより、むしろ、卵が羽化している感じである。黒い殻が剥がれるようにして落ちていき、中から溢れてくるオレンジ混じりの白色光が通路内を明るく照らしていく。

炎とは違うが、それもやはり綺麗だった。

殻の中から出現したのは、オレンジに光り輝く蝶。

だが、明らかに普通の蝶ではない。そもそも、普通の生物ではない。光が集まって出来たような、そんなぼやけた輪郭をしている。

モンスターと考えるのが自然だった。

蝶という事は、もしかしたらさっきのはサナギだったのだろうか。

いずれにしても、そこから漏れ出た光が薄明かりとなって通路を照らしていたのである。

それどころか、炎の力で羽化したようにすら思える。もしかしたら、ツタの方はその為の罠とまではいかないにしても、ある種の共生関係だったのだろうか。火を使わなければツタが、火を使えばこの蝶が戦うという関係。

とにかく、こいつを倒さないと下へは進めない。

攻撃には距離があり過ぎる。投擲は届かないだろうし、弓は届いても、恐らく命中しない。

まず距離を詰めるしかない。

だが、そこでモンスターが先に動いた。

蝶の輪郭は動かない。しかし、その少し手前で赤い光が小さく軌跡を描いている。

それは、レオンが人生で3度目に見る、魔法の発動兆候だった。

術者の前で光の文字が描かれる。それがあらゆる魔法に共通して見られる、発動前の兆候らしい。全く意味のない文字ではなく、ジーニアスが見れば、およそどんな魔法なのか分かるという話だ。だが、アスリートのレオンには分かるわけがない。

とりあえず魔法がくる。

距離を詰めようとしていたレオンは、それを思い留まって身構えた。

どんな魔法なのかは分からない。前と同じ目眩ましかったとしたら、今から目を逸らしておくべきに違いない。だが、前回とは文字の色も形も違う。

光の軌跡が止まった。

その次の瞬間、炎で出来た矢のようなものが、モンスターの目前から一直線に、レオンめがけて飛来してくる。

本物の矢よりは遅い。

それが判断出来るくらいの余裕はあった。

頭めがけてきたそれを、身体を右に逸らして避ける。右手が床に

触れた。

炎の矢はその熱だけを残して、先程までレオンがいた跡を貫いていく。

わずかに遅れて、遙か後方で音が響く。

落雷でもあったのかと思える程の爆音だった。

その音に一瞬静止したレオンは、首だけ捻って後方を確認する。入ってきた金属製の扉がない。

先程駆け抜けていった炎の矢は、その重厚な扉を吹き飛ばす程の威力を持っていた。

何かを呟きなくなったレオンだが、そんな場合ではない。

モンスターの方へ視線を戻すと、案の定、既に魔法の発動兆候が始まっていた。

先程と同じ赤い光。文字も同じに見える。

どうするか迷った。出来るなら逃げた方がいいと思ったが、向こうの扉までは相当な距離がある。そこにたどり着くまでに、何度さっきの魔法を避けなければならぬだろうか。

魔法を妨害する方法を、以前ニコルと話した事があった。火薬とか閃光弾とかいろいろあったものの、結局一番汎用性があるのは、術者を攻撃する事。傷を負わせればもちろんだが、その精神集中を乱すだけでも、魔法を失敗させられる可能性がある。

2発目の炎の矢が放たれる。

レオンはそれを左へ駆け出しながら避けて、そのままモンスターの方へ走り出した。そのまま右手にダガーを握る。左手に持っていた魔法の松明は、とつくに投げ捨てた。

蝶に迷いはない。既に3発目を準備し始めていた。

駆け寄りつつその赤い文字を見る。今までの発動時間から考えると、投擲の射程に収めるまでに、もう一度避ける必要がある。

だが、距離が近くなっている。近ければ近い程、当然避けるのも難しい。

もっと進もうと思えば進めるが、レオンはモンスターの40メー

トル程手前で止まった。避ける為には、これくらい距離が欲しい。次を避けた後なら、なんとか投擲の射程に収める余裕があるはずだ。その一呼吸後、3発目の炎の矢が飛来した。

さすがに、その姿は一瞬しか見えない。

だが、元から見て避けようとは思っていなかった。1発目も2発目も、矢はレオンがいた位置を正確に射抜いている。だがそれは、放たれる直前の位置なのだ。逆に言えば、発射するタイミングで横へ動きさえすれば、見えなくても避けられる。

今回も、なんとかタイミングを合わせる事が出来た。

脇をすれ違っていく熱の固まり。

それを確認して、レオンは駆け出す。

蝶型モンスターは一度も動いていない。やはり魔法の準備を始めているが、今度は間に合うはずだった。

距離は30メートル程。

もう少し。そう思った時、赤い光の軌跡が止まった。

驚いた。魔法が完成したのだと理解はしたが、いくらなんでも早過ぎる。まだ数秒しか経っていない。

だが、レオンはすぐ自分の勘違いに気付かされた。蝶は魔法の準備をしていたが、同じ魔法とは限らない。

赤い文字が一瞬輝いて消えると同時に、レオンの前方に火球が出現する。人の頭蓋骨くらいの大きさだと思ったのは、きつと少し前にそれを見ていたからだろう。

すぐに止まろうとしたが、走っているわけだから、急には止まらない。

火球が力を溜めるように、一瞬収縮した。

悪い前触れとしか思えない。咄嗟に左手を前方にかざす。盾は小さいが、ないよりはましだ。

その直後。

火球から放射状に放たれた熱波によって、レオンの身体は後方に吹き飛ばされた。

足が床から離れる。

宙を舞った後、床に叩きつけられたレオンは、その上を散々転がりまわってからようやく止まった。全身の痛みと焦げた匂いにせき込みながら、床に手を突いて、必死にモンスターの姿を探す。

その姿を確認したレオンは、正直嫌になった。

かなり飛ばされたらしい。距離がだいぶ開いてしまっている。また最初の位置に戻っていると言ってもよかった。まるでやり直しをさせられているような気さえする。

そして、さらに追い打ちをかけるのは、モンスターがもう魔法の準備を始めている事だった。

休む暇もない。

体勢を起こしながらレオンは考えた。これは勝てるのだろうか。敵はまさに遠近両用。どちらの魔法も威力十分。しかも、場所が悪すぎる。身を隠すような障害物がないし、逃げようにも出口が遠い。もしかしたら、この状況を狙った設計なのだろうか。

迷っている内に、炎の矢が発射される。なんとか避けたものの、よろめいてしまつて、壁に手を着いた。

後方で、炎が着弾する音が響く。

モンスターは再び魔法準備。疲労している様子はないし、そもそも疲労という概念があるとも思えない。

それを見て、レオンは決心した。

捨て身で行くしかない。長引けば長引く程、こちらが不利なのだ。決心すれば、身体は勝手に動いた。

もう一度距離を詰めるべく走り出す。

数秒後に放たれた炎の矢をやり過ごし、再び40メートル程まで距離を縮めた。

そこで立ち止まる。

再び発射された炎の矢を、タイミングを合わせて避ける。

だが、レオンはそこで距離を詰めなかった。逆に、そのままの向きで10歩程後退する。

モンスターはすぐに火球を発生させた。だが、その位置はレオンのかなり前方、前にレオンを吹き飛ばした時の位置とほぼ同じである。

すぐに収縮し、起爆する。

体勢を低くしてそれを防ぐレオン。この位置でもかなりの風圧を感じるが、この姿勢なら耐えられない程ではない。熱いのは熱いが、我慢するしかない。

モンスターは再び魔法準備を始めた。

レオンはその場から動かずに、発動されるのを待った。だが、心の中で数えたところで、自分の予想が正しかった事を半ば確信した。

遠距離の炎の矢。近距離の火球。どちらを使うのかを判断する基準は、こちらとの距離以外にない。そして、その距離をいつ計測しているのかといえば、魔法の準備を始めた時に違いない。相手との距離を見て使う魔法を決めているのだから、当然だ。

だから、先程の位置だと火球を使ってきたが、少し離れたこの位置だと炎の矢を準備している

のだ。まだ実際に放たれたわけではないが、準備時間の長さから言っても間違いない。

近距離用の火球は近くでしか使えない代わりに、準備時間が短い。だから、とてもじゃないが近づく余裕がない。だが、炎の矢の方はかなりの発射間隔がある。この魔法の準備中ならば隙をつけるはずだ。

つまり、炎の矢と火球の境界に見当をつけて、ギリギリの位置から距離を詰める。だいたい50メートルくらいではないかと思っていただのだが、それは正しかったようだ。だが、そこから距離を詰めて投擲距離まで持ち込めるかというと、かなりシビアだろう。

それでもやるしかない。成功しなければ、奥に進めないどころか、たぶん無事に帰れない。

そこで炎の矢が発射された。

しっかり避けつつも、レオンの目はモンスターから離れない。魔法を準備が始まるのを待ってから飛び出さないと意味がない。

蝶の前方に赤い点が発生する。

ここだ。心の中でそう叫んだのと、身体が走り出したのはほぼ同時だった。

赤い光が、もはや見慣れた軌跡を描いている。

この数秒が勝負。

両手にダガーを握る。最初に握っていた物は、吹き飛ばされた時にどこかへ行ってしまった。だから、あと2投しか出来ない。どうせこれが最後のチャンスなのだから、両方持っておいて損はない。

先程の40メートルの位置を越える。

意外に余裕があるような気がした。攻撃を避けるとき、思ったよりも体勢を崩されなかった。走り出しがよかったのだろう。

だが、ここでレオンにとって予想外の事が起きる。

文字を描いていた赤い光が、不意に消失したのだ。

その直後、新しい点が再び出現した。

自分でも驚くくらい、瞬時に理解出来た。つまり、炎の矢をキャンセルして、別の魔法を準備し始めた。恐らく火球に違いない。魔法知識のないレオンは、そんな事が出来るとは知らなかったが、予想出来なかったとは言えない。

火球の為の文字を描く光を見ながらも、レオンは足を止めなかった。

今から後退しても間に合わない。それに、今回は前回とは違う。相手の魔法準備は同じ地点からだが、こちらはもっと手前から走り出している。助走分だけ勢いがあるのだ。

30メートル地点でも、相手の魔法は完成しなかった。

ここで投げれば当たるかもしれない。だが、確実を期す為にも、もう少し近付きたい。

20メートルになろうというところで、火球が出現した。驚いた。

まさに目の前だった。熱が直に伝わってくる程の距離。

レオンは滑り込むようにしながら、その下を通り抜ける。

頭上の火球が、一度収縮する。

ダガーを持った両手で、頭を庇った。あまりの近さに、こんな防御をしても無意味に達いないと思ったが、身体が勝手に動いた。

その直後、爆風の風圧によって、身体が床を飛ぶ。

壁や床が分からなくなる程揉みくちにされながらも、レオンが考えていたのは唯一つだけだった。

武器を離してはいけない。

風が止んでから、周囲を見渡す。

気のせいかわ視界がおかしかった。ぼんやりとしたはつきりしない視界。

それでも、モンスターの位置は分かった。

真つ暗の視界の中にも、オレンジに光る場所がある。確か蝶の姿をしていたはずだが、今はよく分からない。

だが、場所さえ分かればいい。

倒れたままダガーを投擲した。身体を起こす余裕がない事を、直感的に理解していた。

実際のところ、本当に投げられたのかは自分でもよく分からなかった。

オレンジの光が消失した。

漆黒。

静寂。

倒したのか、それとも自分が葬られたのか、その直後はよく分からなかった。

それでも、音がした。

金属音。ダガーが床に落ちた音に聞こえた。

もちろん、それがモンスターを倒した証明にはならない。だけど、投げられたのはどうやら確からしい。その事実、何故かたまらなく安堵出来た。

その感情を笑みに乗せたまま、レオンの意識は身体から離れていった。

レッド・アライブ

白い背景。紅い双眸。

どうしてなのか、あの光景を思い出していた。

ダンジョンの中で、じっとこちらを見ている妖精。もしかしたら、あの妖精が自分の魂まで案内してくれる妖精なのか。魂の試練場の最下層で、アーツの場所を示すと言われているカーバンクル。その光景なのだろうか。

だとしたら、未来の光景を見たという事なのか。

それとも、もしかしてあれが自分の前世の記憶なのか。

前世の自分はダンジョンの中に行くような人間、つまり冒険者だったのだろうか。だけど、前世の記憶は寝ている時に夢として見るのが普通だ。あの時は、少し特異な状況だったけれど、寝ていたわけではない。

ただ、レオンは前世の記憶はおろか、夢自体を見た事がない。だから、夢と似ているのか判断出来ない。

寝ている時は、ただ真っ暗なだけ。

あのダンジョンの中のように。

オレンジ色の蝶と戦った、あの通路と・・・

そこで物音がした。

ドアが閉まる音。

レオンの視界が、日が昇るように明るくなった。

まるで背景の一部のようだった自分の身体に、感覚が戻ってくる。仰向けに寝ている体勢。

下は柔らかい。

ベッドの上。木の天井。

そして、足音が近づいてくるのを認識するや否や、視界に見知っ

た少女の顔が入ってくる。

ライトブラウンの髪と瞳。女性だというのは分かるが、男前な印象もある不思議な顔立ち。あまり彼女の笑顔を見ないが、仕事に一生懸命で、どこか充実しているように見える。

「あれ・・・リディア？」

自分の声が掠れているのに気付く。口の中が乾燥していた。

身体を起こそうとすると、リディアがそれを止める。

「まだ寝てた方がいいと思う。待ってて。イザベラさんを選んでくるから」

その言葉を聞いて、ここがビギナーズ・アイ横の診療所だという事に気付いた。

「・・・どうして僕はここにいます？」

蝶のモンスターと戦ったところまで覚えているが、その後の事が記憶にない。そのモンスターにしても、倒したのかどうかすら定かではない。覚えている一番新しい記憶は、確か、火球の魔法の熱波を至近距離から浴びて、床を這いずり回された事。とにかく、床との摩擦やら壁とぶつかったりやらで身体中が痛かったのだけはよく覚えている。

リディアは淡々と答える。

「私はよく知らないから。イザベラ先生に聞いた方がいいと思う」
レオンが何か言う前に、広間の奥のカーテンを手で退けながら、そのイザベラが姿を見せた。彼女とリディアは雰囲気がよく似ている。颯爽とした振る舞いもそうだし、髪も瞳も明るい。今日は2人とも白いブラウスを着ているから、歳の離れた姉妹と勘違いされそうだった。

イザベラはベッドの横に立つなり、こちらの顔を見下ろしながら真顔で言った。

「顔色がいいな。若い女の子が効いたか？」

その一言で急激に血圧が上がった気がした。取り乱したレオンは起きあがろうとしたが、背中に鋭い痛みが走って顔をしかめた。

女医の方はその慌てぶりに面食らったような表情をしたが、すぐに元の表情に戻った。

「そうか。いや、悪かった。レオンはそういう子だったんだな」

どうい子だと思われたのか少し気になったが、とりあえず一番聞きたい事を先に聞く事にする。

「あの・・・僕、どうやって帰ってきました？」

ダンジョン内に他の誰かが救出に向かうのは事実上不可能だから、自分で出てきたと考えるしかない。だが、その記憶が全くなかった。彼女の回答は簡潔だった。

「歩いて帰ってきた」

「え・・・僕がですか？」

歩いたどころか、起きていたとも思えない。ただ眠っていたらここに帰ってきていたような、そんな印象しかない。

イザベラは軽く頷いてから口を開く。

「まあ、朦朧とはしていたな。だが、誰か助けにいけるわけがないから、自分で歩いたと考えるしかないだろう？歩いたといっても、ここの勝手口の前までだ。そこで物音がしたから、行ってみたらレオンが倒れてた。それが今日の早朝だ。意識があるようなないような、そんな状態だったから、とりあえずベッドまで運んで治療して寝かせていた。頭を打っている可能性もあったから心配していたが、夕方になってやっと目を覚ました。それが今だ。理解したか？」

「えっと、すみません・・・僕がダンジョンに入ったのは、昨日ですか？」

「そう」

つまり、丸一日経って出てきたという事らしい。あの蝶型モンスターと戦ってから何時間後の事だろうか。ダンジョン内では時間感覚があやふやだから、はっきりとは言えないものの、1時間や2時間程度ではないはずだ。そんな長時間もかけて、自分はどうやってダンジョンから出てきたのだろう。

その記憶を何とか辿ろうとしているレオンに、イザベラが少し諭

すような口調で言う。

「私が思っていたよりも丈夫な身体だからよかった。だけど、全身傷だらけだったし、鎧もボロボロだ。頭からも出血していたし、鎧には焦げたような跡もあった。どんなモンスターと戦ったのかは知らないが、大怪我しなかったからいいとは思わない事だ。リディアもあの酒場娘も心配していた。まだ見習いなんだから、まず自分の身体を大事にしないさ」

「・・・はい。すみません。ありがとうございます」

逃げたくても逃げられる保証がなかったから戦ったわけで、そういう言い訳が出来ないわけではなかった。だけど、それでも逃げるべきだったかもしれない。少なくとも、戦う場所を選ぶべきだった。それを怠ったのだから、反省しなければならぬ。

イザベラは少しだけ表情を緩める。

「身体が動くようなら、もう帰ってもいい。それほど深刻な怪我はない。だけど、頭を打っている可能性もあるから、念のために明日は安静にしてなさい」

「はい。分かりました」

レオンが返事をする、用事は済んだとばかりに、彼女はカーテンの向こう側へと戻っていった。そちらが、イザベラ先生の居住スペースなのだ。3人も子供がいるから、きっと忙しさに違いない。こんな事を言っではいけないのかもしれないが、やはり、自分の為に早朝から仕事をさせてしまったのが、少し心苦しい。

イザベラの足音が聞こえなくなってから、レオンは身体を起こした。

「大丈夫？」

リディアが聞く。彼女は丸イスに腰掛けていた。

相変わらず表情には出ないものの、イザベラ先生曰く、彼女も心配してくれていたようだ。レオンは少しだけ微笑んで見せた。

「大した事はないです。リディアさんも、わざわざすみません。忙しいのに、見に来てくれたみたいで・・・」

だが、彼女はあっさりこう言った。

「仕事だから」

「え？・・・あ、仕事の次いでって事ですか？」

リディアは軽く頷いてから、すぐ脇に置いてあった布袋の中に両手を入れる。そこから取り出した物を、包んでいた布を取り払ってから、レオンに差し出した。

それはレオンが使っている物と同じスローイングダガーだった。

だが、明らかに新品である。

「・・・どうしたんですか？これ」

それを差し出す意図がよく分からなかったので聞いてみると、彼女は簡潔に答える。

「補充」

あまりに端的過ぎる言葉にすぐには理解出来なかったものの、しばらく考えてから、レオンははつとなった。

反射的にいつも短剣をぶら下げている辺りに手をやるが、そこには短剣どころか、それをぶら下げておく革ベルトもなかった。治療したのだから当たり前だが、鎧も着ていない。その下に着ているインナーウェアだけの状態である。

ふとりディアがベッド脇の方へと視線を送るので、そちらを見てみると、そこにある低い棚の上にベルトと短剣が置かれていた。新品ではなく、いつもレオンが使っているものだ。

だが、そこには短剣が2振りしかない。

回収し損ねた。ダンジョン内で回収し損ねれば、それは即ち、永久に見つからないという事と同義だ。

レオンは棚の上にある物を見つめながら、固まってしまった。

鍛冶師の父娘が丹誠込めて作ってくれた物を紛失してしまった。

しかも、長年使って壊れてしまったとかなら分かるが、自分の勇み足のせいで、一ヶ月もせずになくしてしまった。

どんな顔をして謝ればいいのかだろう。

だが、そこで聞こえてきたリディアの声は、いつも通りだった。

「投擲武器だから、なくなるのが普通」

彼女の方に視線を戻すと、やはりいつも通りの彼女の表情だった。当たり前だが、嬉しそうには見えない。だけど、その無表情に救われたような気がした。

「無理して拾わなくていいと思う。それよりも命の方が大事だから。もちろん、粗末に扱って欲しいわけじゃないけど」

淡々と述べる彼女。だけど、彼女が自分の作った武器に愛着を持っている事も、レオンはよく知っている。

差し出された短剣を受け取る。

リディアの瞳に視線を戻してから、レオンは言った。

「ありがとうございます。でも、大事に使わせて貰います」

彼女は少し顔を伏せただけだった。

心なしか顔が赤いような気もするが、理由がよく分からない。

そのまま、静寂が訪れた。リディアは何も言わないし、出て行くともしない。まだ何か用があるのだろうかと考えて、はたとレオンは気付いた。

「あ、そういえば・・・僕の鎧、もしかして修理に持って帰ってます？」

この部屋には見当たらないのだ。イザベラもボロボロだったと言っていたし、その可能性が高い。

リディアは顔を上げてから頷く。

「ちよつと時間がかかると思う。たぶん一週間くらい。だから、ダンジョンにはしばらく入れないから」

「あ、はい・・・分かりました」

何故か、再びの沈黙。

何か他に用事があるのだろうと思ったのだが、鎧の事ではなかったようだ。

今度は、リディアはじつとこちらを見つめている。だが、レオンの顔に何かついているわけではなく、考え中のサインだった。まるでこの顔に眼力で穴を空けようとしているかのように、一点を見つ

めて動かない。一旦気付けばそれほどでもないが、それまではさすがにドキドキする。

仕方ないので、受け取った新品の短剣の棚の上に置いた。

「どうしてレオンは冒険者になりたいの？」

唐突な質問だった。

どうしてそんな事を聞くのだろうと思ったが、彼女の瞳にからかっている色はない。そんな事をするような人でもない。

「えっと、ベティから聞いてないですか？ 僕の前世の話なんですけど・・・」

「聞いてる。でも、それがよく分からないから」

「え？」

「そんなに前世を知りたいの？」

言われてみれば、確かに他の人にはよく分からない動機なのかもしれない。

だが、簡単に説明出来る気持ちでもない。どうやって話したらいいだろうか。

リディアの言葉がさらに続いた。

「前世が見えなくても、レオンは十分生きていけると思う。見えなくてもいいんじゃない？ それで納得出来ないのはどうしてなの？」

「あの、すいません・・・どうして、急にそんな事聞くんですか？」

どうしても気になったので、レオンは尋ねた。あまり口数が多くない彼女だけに、尚更こんな事を聞いてくるとは思わなかった。

リディアは少し躊躇うような素振りを見せたが、それでも話してくれた。

「鎧を見たから」

「え？」

彼女の声が心なしか小さくなる。

「私はダンジョンに入った事がないからよく分からなかったんだけど、あの鎧を見て分かった。本当に命懸けの場所なんだって。私も作るのを手伝った鎧だから、どれくらいの力が加わったのかは見れ

は分かるから。だけど、どうしてそこまで頑張るのかなって。特に、レオンは1人だから。たった1人でそんな場所に行って戦うなんて、どうしてなのかなって思ったから。そんなに前世が大事？そんなに頑張れるレオンなんだから、前世なんてなくてもいいんじゃない？私もデイジーもラッセルもガイさんも、前世とはあまり関係のない仕事をしてる。そういう人だってたくさんいる。そう納得するのはダメなの？」

彼女の表情はいつもと同じ。つまり、真剣そのものだ。

対するレオンは少しはにかんだような表情で答える。真面目な顔では言えない。自分の弱いところを説明しているようなものだからだ。

「あんまり言いたくはないんですけど・・・やっぱり、僕は不安なんだと思います」

リディアの表情は動かない。

「結局僕は、前世を知りたいというよりも、前世がある事を確かめたいんだと思うんです。自分のルーツがちゃんとあるんだって事を、この目で見てみたい。他の人がみんな持っているものだから、余計に気になるんです」

「命懸けでも知りたい事なの？」

レオンはそこで照れたように頬を掻く。

「リディアさん。それは違うんです」

首を少し傾けた彼女に、自信なさげなレオンの声が伝わる。

「こういう言い方もなんですけど、結局、僕も冒険者になりたいだけなんです。そもそも、僕の前世が分かるとしたら、魂の試練場をクリアした時です。それは、冒険者にとってゴールではなくて、スタートです。そこをクリアして終わりなんて、さすがにそんな事は思っていないですよ」

「どういう意味？」

「つまり、僕が命を懸けてるのは、冒険者になるためですよ？他の冒険者見習いの人と同じです。その為に命を懸けるのは普通の事

ですよ。僕が言うのもなんですけど、命を懸けた事がない冒険者なんて頼りないですから。ただ、前世を知らないっていう不安を抱えたままだと、頼れる人間になれないと思っただけです。自分に自信のない人間が、人から頼られる人間にはなれっこないですから」

リディアの視線は動かない。よく見ると、どうやら考え中らしいと分かった。レオンはあまり説明が上手くないだけに、理解する方も大変だろう。

「・・・つまり、前世を知りたいのはついで？」

ついでというのもあんまりない方だが、全く見当違いではない。「なんというか・・・前世を知りたいのは確かです。それを知る事で、自分の足元がしっかりするような気がするんです。ですけど、冒険者になりたいっていう気持ちも確かなんですよ。両方あると思って貰えばいいです。最終的には、人の期待を背負えるような人間になるのが僕の夢というか、憧れなんです」

彼女の視線がこちらの目を捉える。今度は考え中ではないようだ。何度か瞬きしているからである。考え中の場合、まるで時が止まったかのように静止するから、独特の違和感があって分かり易い。

そんな事を悠長に分析していたレオンだったが、よく考えると、それはつまり見つめられているという事だった。その事に不意に気付いた途端、気恥ずかしくなって視線を逸らした。

こうなると、気まずい沈黙でしかない。

そこで、勝手口のドアがノックされる。

その音で固まりかけていた空気から解放されたレオンは、リディアの方を見る。その表情はほとんど変わらないものの、彼女も訪問者に心当たりがないのはよく分かった。

どちらかが返事するよりも先に、勝手口が開く。入ってきたのは、レオンの知らない男性だった。

この町では一般的な、ダークブラウンの短髪に瞳。ブルーのシャツに象牙色の上着とズボン。その服の組み合わせはあまり見かけない感じだが、スッキリとした顔立ちに不思議と似合っているし、結

構上等な服のようだ。だが、気のせいかな、サイズが少し窮屈なようだ。身長はそれほどでもないが、体格はいい。というより、物腰から言っても、明らかに荒事の経験者である。

根拠はないものの、レオンは直感で、この人は冒険者だろうと思った。

男はこちらを一瞬だけ見たものの、リディアを見るなり笑顔になつて親しげに話しかけた。

「やあ、リディア。お久しぶりだね」

にこにこしている男に対して、無表情なままのリディア。イスから立ち上がったから、挨拶を返すのかと思つたがそうではなく、訝しげに質問した。

「・・・いつ帰ってきたの？」

結構辛辣な物言いのような気がした。彼女は基本的に無愛想と言えるかもしれないが、言葉が刺々しいわけではない。それなのに、挨拶を返さないのは珍しい。

勝手口から数歩進んだ位置で立ち止まり、男は答える。

「今日だよ。決まつてるだろう？ 今日帰ったから、こうして挨拶に周っているんだ。さつきリディアの店にも行ってきたんだけど、会えなくて残念だと思つていたところさ。だけど、ここでこうして会えたんだから、僕の運も捨てたものじゃないね」

大袈裟な言い方だと思つたが、彼なりのジョークなのだろうか。

リディアはくすりとせすに言葉を返す。

「じゃあ、ベティにも挨拶したら？ ここで待つてたら来ると思ふけど」

その一言で、男の笑顔は固まつた。

「・・・悪いけどここで失礼するよ。イザベラ先生によく伝えておいてくれないかな」

依頼口調だったが、彼は答えを待たずに勝手口からそそくさと出て行つた。

本当に顔を見せただけという訪問だった。もっとも、イザベラ本

人には顔すら見せていないのだが。

とりあえず、さっきの男が誰だったのか聞こうとした時、勝手口の外の方から声が聞こえた。

「あつれー。ブレットだね。いつ帰ってたの？」

ベティの声だった。

答える男の声は、明らかに取り乱していた。

「や、やあ、ベティ。ご、ご機嫌いかがかな？」

強いて言うなら、尋ねた本人よりはいいだろう。本人の声はどう聞いても、機嫌がよさそうには聞こえない。

「お陰様で元気だよ。そういうブレットは、ちょっとくらい強くなつた？」

話している光景を直接見られないレオンだが、雲行きが怪しいのは分かった。ベティの場合、そんな質問をした時点で、それを実際に確かめる事が半ば決まっているのだ。

「そ、そうだね。だから、ベティも、もう・・・うわ！ちよっ！待った！！」

待つて貰えなかったようだ。地面に小麦袋を叩きつけたような音が響いたからである。

「うーん・・・だめだなー。ちゃんと訓練してる？まだレオンの方が倒しがいがあるなー」

喜んでいいのか悪いのか、判断しにくい言葉である。

やがて、服を払うような音がしてから男の声が聞こえた。

「・・・と、とにかく、これで失礼するよ」

颯爽というより、明らかに走って逃げていくのが、足音で分かった。

今のやりとりはなんだったのだろうか。そう考えているうちに、勝手口のドアが開いてベティが入ってくる。彼女はノックしなかったが、よくある事だった。

彼女はこちらの顔を見て、少しだけ瞳を大きくした。

「あれ、もう起きてても平気なの？」

彼女にも心配をかけたのだ。そう思って、レオンはなるべく明るく微笑んだ。

「はい。明日は安静という事ですけど、もう帰ってもいいそうです。すみません。ベティさんにも心配かけたみたいで・・・」

彼女の普段着とも言えるエプロン姿だが、仕事中的なのは間違いない。

ベティは笑って手を軽く振る。

「いいよいいよ。ちゃんと帰ってきたんだから。それより、リディアもいたんだねー。ブレットも来たみたいだけど、平気だった？」

その質問の意味がレオンにはよく分からなかったが、聞かれたリディアは小さく頷く。

「最初にベティの名前を出したら逃げていったから」

「そっかー。でも、リディアがいるって分かってたら、もう何発かおまけしてたんだけどなー」

そう言ってウインクしてみせるベティに、内心レオンはぞっとしたが、リディアは小さく頷くだけだった。珍しく、どこか嬉しそうな表情に見える。

「あの・・・さっきの男性がブレットさんですか？」

ポニーテールの少女2人がこちらを見たが、答えたのはやはりベティの方である。

「そうそう。レオンにとっては冒険者の先輩だね。でも、さすがにレオンにはちよっかい出さなかったでしょー？」

「ちよっかい？」

それどころか、挨拶すらなかった。

「あいつは女の子を見たら、見境なく口説くんだよねー」
「女の敵」

リディアの呟きに、ベティは苦笑した。

「敵は言い過ぎかもしれないけど、でも、結構鬱陶しいんだー。私とかはまだいいんだけど、リディアはあんまりそういうのに慣れてないから困ってたんだよね。だから私がちよっと懲らしめてやった

んだよ。あれは・・・何年前だっけ？」

「4年前」

「もしかして、この町の人ですか？」

2人ともいつ帰ってきたのかと聞いていたし、4年前なら、ベティとリディアはもちろん、先程の男性も恐らく、16歳未満の未成年だろう。

遠い目をしながら、ベティが答える。

「そう。あの時はまだ、ブレットもリディアも13歳か。普通は誰か好きな女の子が出来て、その子を一途に想うんだろうけど、あいつは最初から見境なく口説いてたよね・・・うん、やっぱり、あの時ちゃんと頭を押さええという正解だったな」。あのまま調子にのつてたら、たぶん本物の女の敵になってたよね」

その結果、ブレットは名前を聞くだけで逃げ出す程、ベティの事が苦手になっただけ。いったい何をしたのか、想像するのも恐ろしい。

ベティは口元に笑みを浮かべながら言った。

「レオンもリディアに鬱陶しいって思われたら、私がきっちり成敗してあげるから」

「・・・思われないように努力します」

口説くとかそんなつもりはないから大丈夫なはずだが、気を付けるに越した事はない。

だが、そこで意外にも、リディアから不満の声があがった。

「鬱陶しくはないけど、レオンはちよつと他人行儀過ぎると思う」

他の時なら普通に聞けただろうが、今は、直前のベティの発言のせいで、彼女の言葉は重みが違う。

「いえいえ！そんな事は・・・」

面白そうな口調で、ベティが言った。

「そうかもね」。もうすぐユースアイに来て1ヶ月になるわけだし」

「それに、ニコルには敬語を使っていってラッセルが言ってた」

意外なところから、余計な情報が伝わっていたようだ。この時は

かりは、ラッセルを少し恨んだ。

「何でー？あ、そうか。同い年だから。じゃあ、シャーロットにも敬語使わないって事になるよね・・・うん、それはちよつとまずいような気がする」

「・・・何がですか？」

ベティはその質問を無視した。

「よし！じゃあ、これからレオンは敬語禁止」

突然の言論規制に啞然となったが、すぐにそれは翻された。

「・・・は可哀想だから、そうだなー、じゃあ、まずは、さん付け禁止。呼び捨てに挑戦」

それも結構厳しい。

レオンはしばらく待ってから、怖ず怖ずと申し出る。

「あの・・・例えば、ガレットさんとかフレデリックさんとかは、さすがに呼び捨てには出来ないと思うんですけど」

特に前者は、呼び捨てにした瞬間拳が飛んでくるだろう。

腕を組んでしばらく考えていたベティは、小さく頷いてから口を開いた。もっとも、表情は笑みが浮かんでいたから、真面目に考えていたとは思えない。

「仕方がないなー。じゃあ、10代の知り合いは呼び捨て。これでいいでしょ？」

10代。ベティ、リディア、ラッセル、デイジー、ニコル。後は、まだ知り合いとは言えないと思うが、ブレットとシャーロット。思ったよりまとまな条件だった事に驚いてしまった。何か罣があるのだろうかと思つたが、疑つたところで、どうにかなると思えない。

「はい。リディアで練習」

いつの間にか、リディアの両肩を掴んだベティが、彼女とレオンを向き合わせるようにしながら言った。

「・・・何で私なの？」

リディアの疑問にベティは満面の笑みを返す。訳が分からない。次に彼女はこちらに視線を送ってきた。早くしろという催促だと

いうのは分かったが、何とも不条理な気がしたのは、きっと気のせいではない。

仕方なくリディアの方を向く。目が合うと、何故か緊張してきた。息を落ち着ける。自分はどうしてこんな事をしているんだろうと思いつながら。

「よろしくお願いします・・・リディア」

同様せずに言えたと思ったが、彼女の頬が朱く染まるのを見て、こちらも顔が熱くなった。

耐えきれずに視線を逸らす。

遊ばれていた。気付くのに遅過ぎたけれど。

「2人とも顔が朱いねー。ベッドで休んでいったら？」

ベティの追い打ちが自分にとっては強烈だった。顔が真っ赤になったに違いない。

分かりたくもなかったが、なんとなくレオンは、ブレットが彼女を恐れる理由が分かったような気がした。

孤独と夢

身体は心を映す鏡。

そんな言葉を思い出したのは、青空を背景にくるくると舞う剣を見ていた時だった。

その剣自体には、何か特別なものがあるわけではない。ただの剣。訓練用だから、剣先や刃は潰してある。

だが、それは自分が握っていた剣だった。

自分の武器を弾き飛ばされたという事は、自分は今丸腰の状態。だというのに、呑気に飛んでいった物を見ている場合ではない。いつもなら、すぐに間合いをとるか、それとも相手の懐に飛び込むか考えているはずだ。まさか、自分はその飛んでいく剣を空中でキャッチするつもりだろうか。それはそれで奇策かもしれないが、現実味がこれっぽっちもないし、そんな余裕を相手が与えてくれるわけがない。

ただ、どちらかというと、そんな行動をしている自分よりも、この行動に対して全く危機感がない自分に驚いていた。戦術を間違える事はよくある。だけど、それに対して何とも思わないのは初めてだった。

何を諦めているのだろう。

諦める。

その一言が思い浮かんだ時、レオンの脳裏に先程の言葉が閃いた。身体に危機感がない。訓練に身が入っていない。

この時初めて、自分の心が思ったよりも重傷な事に気が付いた。それとほぼ同時に、レオンの頭めがけて剣が振り下ろされてくる。十分な速度。場所が場所だけに、当たれば怪我どころか、死を誘発してもおかしくはない。

だが、レオンはそれに対しても、一步も動けなかった。いつもなら避けられるはずだと頭では分かっていたが、身体は家畜の牛のようには鈍いままだった。

レオンの髪を撫でるようにして、それは寸前で止まる。

その剣の主であるアレンは、そんな無防備なレオンを見て溜息を吐いてから、剣を肩口に戻した。いつもリアクションの薄い彼が溜息を吐いたという事は、よっぽど呆れたに違いない。それを頭では理解していたレオンだが、何故かどうしても本気で反省しようとは思えなかった。

「休憩だ。少し休んだ方がいい」

素っ気ないようだが、労っているようにも聞こえるアレンの声。

「・・・はい。すみません」

その言葉を返すのが精一杯だった。

アレンはそのまま小屋の方へと歩いていく。だが、レオンはあまり動く気になれなかった。何をしてもなく、ただ土の上に突っ立ったまま、遠くに見える山と空の境界を眺めていた。

イザベラ先生は何か身体に後遺症が出ないか心配していたようだが、幸い何もなかった。一日安静をとった後の、今日はその翌日。こうして訓練にも出て来られたし、体力トレーニングも問題なくなせた。

だが、いざ剣を握ってみるとあの有様だった。

最初から、なんとなく動きが鈍いような違和感があった。訓練に間が空いたから、きつと身体が鈍ったのだらうと思っていたが、どうやらそれだけではなかったようだ。

心の中の何かが欠けてしまったようだった。

原因は何だろうか。

そんな前置きを心の中でしたもの、実のところ考えるまでもない。やはり、蝶のモンスターとの戦いだらう。

死闘というよりも、はっきり言って、死にかけていたのはこちらだけだった。今こうして生きているという事は、恐らく倒せたとい

う事だとは思うが、その記憶がないばかりか、実感すらない。どうやって勝ったというのか。

今回こそ、本当に運があっただけなのである。自分は攻撃を避けて間合いを詰める事に精一杯で、モンスターの弱点を探ろうともしなかった。攻撃さえすれば勝てると思いこんでいたが、それはこちらにとって一番都合がいいケースに過ぎない。

光が集まったような不可思議な形態のモンスターに対して、ダガーをぶつけたところで本当に効果があっただろうか。あつたとして一撃で倒せたのだろうか。攻撃すれば魔法を妨害出来ると思っていたが、それだつて絶対ではない。もしかしたら、こちらの攻撃は何も効かなかった可能性もある。

それだけなら逃げればいい。だけど、仮に逃げようとしたとしても、自分は逃げられただろうか。

結局、自分は何も勝っていない。

何も出来なかった。

どうしようもなくなって、否応なく溜息が出てしまう。そうやって逃げようとしているような気もする。真剣に悩むべきなのに困った振りをしているだけのような、そんな冷めた目で見ている自分が、心のどこかにいるような気がした。

そんなに自分の前世が大事なのか。

リディアに聞かれたその言葉を思い出す。

彼女に答えたように、立派な冒険者になる為に、或いは自分自身に自信を持つ為に、この道を進もうと決めた。だけど、彼女の言う通り、ここでこの道を諦めたところで、自分が失うものは何だろうか。

前世なんてなくても生きていける。それは、村にいる時から皆が言ってくれた言葉でもある。当然ながら、皆の優しさからかけてくれた言葉だ。

だけど、その言葉に甘えて生きるのは嫌だった。それに、いくら目を瞑ったところで、時折訪れる空虚さを無くす事は出来なかった。

自分は何故人とは違うのか。何故人にはあるものがないのか。ある日突然自分が消えてしまうのではないか。子供心にそんな事を考えて、父や母に甘えなくなつたのは、一度や二度ではない。

父も母も慈しむように自分の頭を撫でてくれたが、そんな両親ですら、自分とは違う。成長するにつれ、その事に漠然と気づき始めた頃は、そんな自分に嫌気がさした事もあった。両親の愛を疑っているような気がして、自分が情けなくなつたのだ。

だけど、いつしか、これがきつと孤独という事なんだと思いつた。

誰にも分かつて貰えない気持ち。世界中の人に会って確かめたわけではないけれど、事実がどうかではなく、もしかしたら一人きりかもしれないと考えた時の言いようのない不安の方が、自分の心にとつてはずつと重要で大きい。

この思いだけは、今まで誰にも話した事がない。ベティに個人情報を暴露させられた時も、一昨日リディアが心配してくれた時も、そして、両親にだって、誰にもである。こんな格好悪い話はしたくないし、それに、聞けばきつと、相手が悲しい顔をするだろう。そんな表情は見たくない。だけど、両親はきつと気付いていただろうと思う。だからこそ、自分が冒険者になりたいと言つた時、何も反対しないで送り出してくれたに違いない。

その思いを胸に潜めながら、そしてそれを力に変えながら、今までやってきた。それは今も変わらない。この孤独を克服したいという思いは、消しようがない。

だけど、思いだけではどうにもならない。

その言葉が心にかつてない程大きくのしかかっているのを感じて、今まで自分が、漠然とどうにかなると考えていたのだと思い知る。

自分みたいなのが、本当に冒険者になれるのだろうか。そう考えた事が全くなかつたわけではないが、答えはいつも、やってみなければ分からないだった。

少しだがやってみた。果たしてどうだろうか。

もしかしたら、自分は無茶な事に挑戦しているのだろうか。
また溜息が出る。

頭が働かないというよりも、さっきから同じ事を繰り返して考えているだけだった。何も答えが出ない思案。疲れるだけである。

ちょうどそこで、アレンが小屋の方から戻ってきた。剣はなく防具だけ。どうやら訓練は終わりという事らしい。まだそれほど訓練していないが、自分が腑抜けているのが原因だろう。

「・・・休む時はしっかり休め。突っ立っているだけだと、何事かと思われる」

「そうですね・・・すみません」

「子供達が心配して見ている」

「え？」

振り返ってみると、少し離れた場所で訓練中の子供達が、確かにこちらを見ていた。向こうも休憩中なのだろうか。教師の男性と10歳前後の子供が3人、固まって座って話をしている。

「・・・すみません」

アレンに視線を戻しながら謝ると、彼は小さく息を吐く。

「実は、デイジーが来ている。小屋の前で待っているから、会ってこい」

デイジーがここに来る事自体は珍しくない。だけど、差し入れのついでにとかならともかく、自分を直接訪ねてくるのは珍しい。

「僕に用事ですか？」

「ハルクもいる」

聞いた事のない名前だった。だが、アレンはすぐに言い直す。

「フレデリックさんのカーバンクルの名前だ」

それならば見た事がある。焦茶色の毛で深緑の瞳のカーバンクルだ。最初にお屋敷を訪ねた時以来見ていないが、よく覚えていた。

子供達の方を見ながら、アレンは言った。

「しかし、レオンは見かけによらず芯の強い人間だと思っていたが・・・」

その言葉につい視線を逸らしてしまう。

「・・・すみません」

「いや、むしろ安心した」

「え？」

視線を戻した時は、アレンは既に小屋の方を向いていた。

「行つてこい。悪いが俺は他にする事がある。デイジーによろしく伝えておいてくれ」

そう言うなり、彼は小屋の方ではなくて、さっき見ていた子供達の方へと歩いて行つた。指導の手伝いをするのかもしれない。彼が受け持っているのは、自分1人だけではない。

なんとなくそちらを眺めていたレオンだが、やがて小屋の方へと歩を進めた。

何の用事だろうかという疑問があつたものの、その推測に集中出来なかった。先程から堂々巡りしている思いが、思考力を半ば奪つてしまっている。

結局、何も考えていない状態で小屋の入り口まで着いたが、意外な事に、そこにいた人物はデイジーだけではなかった。

確か、ブレットという名前だった。今日は全身グレイで統一した服装だが、体つきと短髪から見ても間違いない。彼とデイジーは向かい合つて、親しげに話している様子だった。

もしかして、今行つたら邪魔だろうかと思つたが、デイジーの方がすぐにこちらに気付いて、優雅に会釈した。薄紫のブラウスに長い黒髪がかかつていて、下は白が基調の柔らかなロングスカート。さらに、白い高そうな日傘を差している、彼女らしいファッションだった。

そして、聞いていた通り、左肩に茶色のカーバンクルが乗っている。しがみついているのではなくて、礼儀正しく座っている感じだった。もしかしたら、相手によって乗り方を選んでいるのだろうか。近づいていくと、デイジーは笑顔のままだが、ブレットは不満そうな表情だった。やはり邪魔だったのかもしれない。

「レオンさん。お忙しかったでしょう？訓練中のところを呼びつけてしまつて、申し訳ありません」

いきなり謝られたので、レオンは恐縮して両手を振る。

「いえいえ！そんな事は・・・」

そこでデイジーは、少し首を傾げてこちらを見つめたまま動かなくなつた。リディアならともかく、彼女にしては珍しい事だつた。どうしたんだろうと思つたところで、ブレットが口を開く。

「君がレオンか？」

かなり冷たい声だつた事に驚いたが、レオンはそちらを向いて答える。

「あ、はい。ブレットさんですよ。初めまして」

軽く頭を下げたが、彼の視線は心なしか冷たい。もしかしたら、これが彼の普段の表情なのかもしれないが、デイジーやリディアと話していた時とは正反対の表情と言つてもいい。

「見習いなんだつて？剣を下げてゐるけれど、ジーニアスじゃないのか？」

「ええ、まあ・・・魔法はさっぱりなので」

「ふうん・・・弱そうだけど、大丈夫なのか？」

何度も言われているので、さすがにその言葉にも慣れた。レオンは苦笑いしながら答える。

「大丈夫とは言えないかもしれませんが・・・でも、なんとか頑張っているつもりです」

「頑張つたからつて、どうにかならぬ事もあるだろう？」

「・・・そうですね」

その言葉は、今のレオンには重かつた。だけど、落ち込んでも仕方ない。ただ淡々と、その一言だけ返した。

ブレットは少し目を細めたが、彼もそれっきり何も言わなかつた。気まずい沈黙の訪れを制するように、デイジーが微笑みながら言つた。

「立ち話もなんですから、小屋の中をお借りしませんか？レオンさ

ん、お時間は平気ですか？」

「あ、はい・・・今日はもう訓練は終わりですから、大丈夫です」
普通はこんな時間に訓練が終わるわけがない。その事は、ここによく差し入れを持つてきてくれるデイジーもよく知っている。

だから、理由を詮索されたら困ると思っていたのだが、デイジーは何も聞かずに微笑んだままだった。

「僕も同席させて貰う」

ブレットが唐突に言った。

その言葉を受けて、デイジーが少し困った表情で聞いてきた。

「よろしいですか？本当は2人きりの方がいいんですけど、ブレットがどうしてもって・・・」

「当然だ。こんな場所でデイジーと男が2人きりなんて・・・そんな状況を見過ごせるものか」

「・・・という事らしいんです。すみません、レオンさん。大袈裟だと思うんですけど、少しだけ付き合っただけだけませんか？」

別に断る理由はなかった。いまいちブレットの思考が理解できなかったのだが、彼なりに見過ごせない何かがあるという事だろう。

「構いませんけど・・・あの、そもそも今日はこういうお話ですか？」

彼女は答えなかった。微笑んだまま小屋の中へと入っていく。実際には、彼女がドアを開けようとしたら、ブレットが微笑みながらそれを制して、代わりに開けた。女性に対する気遣いという事らしい。そんな作法をレオンはよく知らないので、素直に感心した。

小屋のテーブルを借りて、その周りに3人が腰掛ける。レオンとブレットが並んで座り、向かいにデイジーが座るという配置だった。どちらの正面というわけでもなく、どっちつかずといった中間の位置である。

彼女の肩のカーバンクルは、その緑の双眸でじっとこちらを見ている。その事がレオンは気になった。

「実は、昨日リディアから話を聞きました」

その言葉から、デイジーの話は始まった。

「いろいろレオンさんに言ってみたみたいです。リディアはそれを後悔していたみたいです。言い過ぎてしまったと……ですから、リディアの事を悪く思わないで下さいね」

「いえ、悪く思うなんてそんな事は……」

反射的にそう答えたが、デイジーはじつとこちらを見てから尋ねた。

「そうですか？でも、今、そのせいでお悩みではありませんか？」

ずばり言い当てられて、レオンは声も出なかった。

見て分かるほど、自分は暗い顔をしているのだろうか。

「情けない。女の子に何か言われた程度の事で」

その声にそちらを向くと、ブレットが腕組みしてつまらなそうな表情をしていた。

「デイジーもそんな事でわざわざ来たのかい？いくら伝承者の手伝いとはいえ、そんな事まで面倒をみなくていいだろう？」

言われたデイジーはブレットに微笑みを向ける。気のせいか、いつもより凄みが増しているような気がした。

「黙っていて貰えませんか？今は大事なお話をしているんです」

ブレットはあからさまに視線を逸らした。

「そ、そうか……いや、済まない。話の邪魔をする気はないんだ」
彼の声はこもり気味だった。何かレオンの知らない力関係があるようだ。すっかり忘れそうになるのだが、デイジーもいろんな意味でただ者ではない。

彼女の視線がこちらに戻ってくる。

「言い方は悪いですけど、ブレットの言う事も間違いではないと思います。普段のレオンさんなら、きっとそこまで悩まなかったと思いますから。ですけど、リディアの言葉はタイミングがタイミングでしたから……今日お話に来たのは、リディアの気持ちを少しだけお伝えしておこうと思ったからなんです」

「気持ちだつて!？」

まさしく大袈裟に反応したブレットだったが、デイジーが一瞥すると大人しくなった。

「リディアの気持ちと言っても、最初にリディアが口にしたただけなんですよ。この町でレオンさんが知り合った人全てが、きつと同じ気持ちだと思います。ですから、差し出がましいようですけど、私が代表して説明するだけなんです。それをまず分かっていただけですか？」

レオンが頷くと、彼女は優しく微笑んだ。

「それでは・・・まずお聞きしますけれど、レオンさんは、冒険者になるのが夢という事ですよね？冒険者は立派な方々だから、その横に自分も立ってみたい。そういう気持ちでこの町に来られたのですよね？」

「はい。そうです」

デイジーは変わらず微笑んでいたが、少しその性質が変わったような気がした。曇った表情を笑みの下に隠して抑えているような、複雑な表情だった。

「それでは、いずれ分かる事ですから、はつきりとお伝えしておきます。レオンさんのような動機でこの町にやって来られる方は、実はほとんどいないのですよ」

「え？」

驚きの声を上げると、彼女はブレットの方を見た。

「例えばブレットの場合・・・どんな動機でしたかしら？言ってみて下さい、ブレット」

珍しくからかうように聞いたデイジーに、バツが悪そうな表情を浮かべたブレットはそっぽを向いて答えた。

「そんな人に話すような、大した動機じゃない」

「そう。つまらない動機なんです」

まるでブレットの回答を予測していたかのような早さで、デイジーはすぐにこちらを向いて説明した。

そんな彼女に、ブレットは何か言いたげな視線を送ったが、それも一瞬だけだった。

置いてきぼりのレオンに、デイジーは補足してくれた。

「この付近には初心者向けダンジョンが揃っていますから、毎年ユースアイには見習い冒険者の方々がいらっしゃいます。ですけど、そうですね・・・その半分くらいの方は、なんとなくやってくるだけなんですよ」

「・・・なんとなくですか？」

これ以上ないくらい曖昧な動機だが、デイジーは躊躇なく頷いた。「なんとなく、ただ剣が上手く使えるからとか、魔法の才能があるからとか、要は向いていると思ったからなんです。後の半分は、もっと単純です。ただ、お金が儲かると思ったから。それだけの理由です」

冒険者とは儲かる職業なのだろうか。まず、レオンにはそんな認識がなかったが、いずれにしても、自分が持っていた冒険者のイメージとは全然違う。

「他にも、例えば、ここはサイレントコールドの故郷に近いですから、彼女に憧れてこの地までやってくる方々もいらっしゃいます。レオンさんのような方も、もちろん全くいらっしゃらないわけではないです。ブレットのような方は・・・さすがに聞いた事はありませんけれど」

最後は失笑が混じっていた。いったいどんな動機だったのか気になつて、ブレットの方を向いてみたのだが、彼は気まずそうに視線を逸らした。

「でも、そういった方々は、ほんの一握りです。そうですね・・・毎年1人いらっしゃるかどうくらいだと思います」

「え・・・本当ですか？」

「ええ。私がお会いするのはガレットさんのお目になつた方々だけですけど、100人に1人はいないと思います。私の想像よりも遙かに厳しい選考基準かもしれせんから、もしかしたら、10

00人に1人という事もあるかもしれませんね」

お金儲けの為に冒険者になって悪いというわけではない。だけど、そこまで偏っているとは思わなかった。少なくとも、イブはそんな人物ではない。レオンの村出身で、サイレントコールドと呼ばれる彼女は、人と自然を愛し、世界の為に災厄級のモンスターに立ち向かったと言われている、強くて優しい女性だったと言われている。

だがよく考えてみると、レオンにはそれ以外の冒険者像がなかった。村には元冒険者が1人もいないし、前世が冒険者だった人は母親を含めて数人いるが、その記憶も断片でしかないから、曖昧な情報が多い。

啞然としていたレオンに、デイジーが淑やかに首を傾げる。

「驚かれましたか？」

「・・・はい。僕が世間知らずという事がよく分かりました。あ、いえ、元々分かっていたつもりですけど、なんというか、思い知りました」

彼女は微笑んでから、こちらを見つめて居住まいを正した。

「それで、レオンさん。つまり私が言いたいのは、この町の人にとって、冒険者がどういう風に思われているのかという事なんです」「どういう風、ですか」

考えてみようとしたが、ブレットがすぐに口を出す。

「僕が言うのもなんだけどね、冒険者っていうのはろくな奴がいない」

デイジーが苦笑して頷いた。

「あくまでもこの町ではですけど、そう思っている方が多いんです。特に見習いの方々は、まだ若い方も多いですから、乱暴な振る舞いをしたり、迷惑をかけたり、そういう方も多いんですよ。この町はそういう人達とずっと接してきているんです。特に、私やリディア、ベティやラッセルは、幼い頃から仕事を手伝っていますから、冒険者をずっと直に見てきているんです。そんな中でもリディアは、あまり人付き合いが上手ではありませんから、冒険者を毛嫌いして

いるところがあるんです。その・・・リディアは目立つ容姿ですから、そういった方々の振る舞いに嫌な思いをさせられる事が多かったですから」

「実際、そういう冒険者は多いよ。ちょっと腕が立つからって、いい気になってる奴も多い。特に見習いの中には、何か勘違いしてる奴もいるね。自分が世界で一番強くなるとか、そういう事を本気で信じてる奴もいる。信じるだけならいいんだけど、それで大きな態度に出る馬鹿もいるんだ。自分は特別だから、それらしく周りが振る舞う事を要求する馬鹿がね。リディアだけじゃなくて、デイジーだって、そういう馬鹿から言い寄られた事があるだろ？」

満面の笑みを浮かべながら、彼女は答えた。

「ええ。今、目の前にもいます」

どうやら皮肉のようだが、今回はブレットも涼しい顔をしていた。

「デイジーやベティはそういう馬鹿をあしらう事くらい、なんて事ないんだよ。けどリディアは慣れてないから、いい気になった馬鹿がつけあがるんだ。まあ、つけあがったらあがったで、そこでベティが出てくるから、二度といい気になれないような思いをさせられるんだけどね」

何とも末恐ろしい話だが、それもリディアを守る為なのだろう。

よく考えてみれば、ガレットといいベティといい、この町の人々が冒険者達と付き合っっていく上で、結構重要な役割を果たしているようだ。あの父娘がしっかり面倒を見てくれるというか、問題があっても処理してくれるわけだから、いるといたないとは安心感が違うだろう。

それはそうとして、レオンにはまだ話が見えなかった。

「とりあえず、冒険者がどう思われているのかは分かりましたけど、それが一昨日の事とどう繋がるんですか？」

デイジーは軽く頷く。

「つまりリディアも含めたこの町の人達にとって、レオンさんは冒

険者見習いとしては珍しい方なんです。特にリディアは、ある種の偏見を持っていたと言ってもいいです」

「偏見ですか？」

そんなものを持たれていただろうか。そんな感じはしなかったのだが。

少しだけ笑ってからデイジーは言った。

「付き合いが短い人には分かりにくいと思いますけれど、今はリディアも、レオンさんにだいぶ心を開いているんです」

「・・・そうですか？」

全然気付かなかった。ずっと変わらないというか、基本的に表情に出ないから分からない。究極のポーカーフェイスと言ってもいい分かる事といえば、考える時の癖と、どうやら赤面症らしいという事だけだった。その赤面症にしても、一昨日気付いたばかりである。

そこでデイジーは真面目な表情に戻った。

「ですから、どうか分かって下さい。リディアがあんな事を言ったのは、レオンさんを心配したからなんです。今までのリディアにとって、武器や防具を作るのは、ただそれだけの仕事だったんです。

どんな人が使うとか、そんな事はどうでもいい事でした。考えもしない事だったんですよ。冒険者なんてどうなってもいい。自分はただ注文通りに、出来るだけいい仕事をするだけ。リディアはもちろん仕事が好きですけど、人一倍没頭出来るのは、他の事を忘れたいと思っているからなんです」

「え・・・」

そんな風にリディアを見た事はなかった。ただ仕事が好きなんだと思っていたのだが、どうやらそれだけではなかったらしい。

デイジーは真摯な瞳で話を続ける。

「ですけど、レオンさんは今までの冒険者と全然違う人なんです。少なくとも、どうでもいい人間とは思えなかったんです。ですから初めて、自分が作った防具の向こうにそれを着ている人を連想してしまって、それで怖くなったと言っていました。前はただの壊れた

鎧でしかなかったんですよ。でも、レオンさんの鎧を見て、傷つく場面を連想してしまっただけです。リディアは一昨日初めて、ダンジョンがどれほど恐ろしい場所なのか分かったんですよ」

「・・・つまり、僕はどうでもいい人間だったのか」

一昨日が初めてなら、確かに例外がなければそういう事になってしまうだろう。

だが、ブレットの呟きはあっさり無視された。

「ああ見えても、リディアは思いやりのある子なんです。レオンさんにあんな事を聞いたのは、ダンジョンの怖さを知って、つい心配で、居ても立ってもいられなくなっただけだと思います。リディアにとつては初めての事ですから、動揺したんだと思います。最初に言いましたけれど、今はリディアも後悔しています。きっと近いうちに謝りにいくと思います。ですから、どうか分かってあげていただけませんか？」

レオンは両手の平を見せる。

「いえ、そんな。僕も最初に言いましたけど、悪くなんて思っていないですから。むしろ、そんなに心配させてしまって・・・僕が謝らないといけないくらいです」

逆にこちらが申し訳ない。自分はそんなに心配して貰えるような人間だろうか。ただ無謀な夢を抱いているだけの、愚かな人間なのかもしれないのに。

デイジーは真面目な表情のまま、話を続ける。

「これも最初に言いましたけれど、その気持ちはリディアに限った話ではないんですよ。ですから、今日こうして私が来ました。他の方々はともかく、私は伝承者である祖父の手伝いをしているだけですから、こういう時にお役に立たないといけませんから」

「え？お役って・・・」

そんなたいそうな身分ではないから戸惑ったレオンに対して、デイジーは落ち着いた笑みを見せる。

「私にとつても、レオンさんは他の見習いの方とは違います。もち

るん、他の方を差し置いて特別扱いは出来ません。ですけれど、出来る範囲で、レオンさんが立派な冒険者になれるようにお手伝いさせて下さい」

しばらく、レオンは言葉が出なかった。

そんな言葉をかけて貰って、嬉しくないわけがない。だけど、自分は本当にそんな人間なのだろうか。ダンジョンの中で自分がどれだけ弱い人間なのか、見ている人は誰もいないのだ。

それでも、数分前とは何かが違う。そんな感覚があった。

「・・・僕なんかがなれるでしょうか」

絞り出すようなその声を聞いて、デイジーは微笑んだ。いつになく優しい、本当に花のような笑顔だった。

「私はなれると思いますよ。レオンさんは、ご自身で思っているよりも、ずっと素質があると思います」

そうは思えない。それなのに、レオンは自然に微笑む事が出来た。今まで心にあつたわだかまりが、根こそぎ消えていったわけではない。

だけど、確かに変わった。昼と夜が入れ変わるように。

何を悩んでいたんだろう。

何が変わったのだろう。

それでも、まだ頑張れる。

根拠はない。論理もない。だけど、そう思えただけで十分だった。そこでブレットが口を挟む。

「こう言っちゃんだけど、この辺にある初心者ダンジョンに苦戦してるようなら、才能があるとは言えないと思うよ。よく知らないけど、鎧が壊れるような戦いをしたんだろう？初心者ダンジョンでそんな羽目になるようなら、今からでも考え直してみたらいい」

抑揚のない口調。だけど、彼にしては穏やかな物言いに聞こえた。「・・・そうですね。無茶をしたと思います。もっと慎重にならないといけませんよね」

はにかむようにして答えたレオンを見て、ブレットは面食らった

ような顔になった。

その言葉に、余裕の笑みを浮かべたデイジーが続く。

「ブレットは最初から慎重でしたね。仲間が集まるのを待っていたくらいですから」

やや目を逸らしながら、ブレットはぶっきらぼうに答える。

「別にいいだろう？ 大人数の方が安全だ」

「そうですね。別に構いませんよ。ですけど、レオンさんはまだ仲間がいませんから、あまり参考にならない意見ですね」

物凄い勢いでブレットがこちらを向いたので、思わずレオンは気圧された。

「・・・仲間がいない？」

呟くような声で聞かれたのでたじろいだものの、すぐに答える。

「ええ・・・まあ」

「仲間がいないのにダンジョンに入ったのか？」

「そ、そうですね・・・」

尋問しているような目で、彼がじっとこちらを睨んでくる。何か悪い事をしただろうか、身に覚えもないのに確認してしまった。

やがて彼はデイジーに視線を戻す。彼女はいつもの微笑みを返すだけだった。

唐突に、彼は立ち上がった。

「・・・失礼する」

「え、あれ？」

急に帰ると言い出した事に対してつい妙な声を出してしまったレオンだが、即座にブレットがこちらを睨みながら聞いてきた。

「何か文句があるのか？」

「いえいえ！別に・・・」

「レオンと言ったな」

名前を確認される。今日既に二度目だから、いい加減覚えられているのではないだろうか。もしかしたら、その台詞が言いたいだけかもしれない。

「あ、はい」

「ガレットさんのところにお世話になっているのか？」

「そうですけど・・・」

彼は少し考えてからこう言った。

「・・・ベティには気を付けろ」

理由が分かるだけに、重みのある言葉だった。今更聞いたところで、もう遅いかもしれないけれど。

「・・・ご忠告、ありがとうございます」

するとブレットは、今度は真っ直ぐにこちらを見下ろしてきた。

「いずれ決着をつける。だけど、今はまだひよっこのようだし、奇襲は趣味じゃない。いずれ正式に決闘を挑もう。その時を覚悟しておけ」

「・・・何ですか？」

何故決闘なんてしないといけないのか。その理由に見当も付かない。

彼は無言で歩き始め、去り際に一言だけ言った。

「リディアの為だ」

意味不明だった。

ブレットがいなくなった小屋の中でしばらく考えてみたが、理解出来そうもなかった。いったいどういう意味なのか。そもそも彼は何を考えているのか。

「面白いでしょう？」

不意にデイジーが聞く。いつか聞いたような気がする台詞だが、やはり答えにくい。

「・・・よく分かりません」

無難な答えを返すと、デイジーは少しだけ笑みを控える。

「変わった人ですけど、悪い人ではないんですよ。リディアやベティは鬱陶しいなんて言いますけれど・・・もしかしたら、少し鬱陶しいかもしれません。ですけど、慣れればそれほど困るわけではないと思います」

結局鬱陶しいらしい。

「えっと、とりあえず、悪い人ではないのは分かりました」

それ以上の事は全く分からなかったが。

デイジーは微笑む。こちらもつられて微笑んでしまうような、柔らかな笑みだった。

「・・・デイジーさん、今日はわざわざありがとうございます」

彼女は笑顔のまま首を横に振った。

どういう意味だろうと訝しんだが、すぐに思い至る。

「・・・デイジー。本当にありがとうございます」

ベティとの誓約は、1日もあれば完全に定着してしまうのである。彼女が満足そうに頷くと、今まで肩に乗って大人しくしていたカーバンクルのハルクが、音もなくテーブルの上に飛び降りた。

「私の用は済みました。あとは、この子の用に付き合っただけで下さい」

「え？あ、はい・・・」

カーバンクルの用事とは何だろうか。

茶色の中に沈み込むような深緑の瞳。その双眸で、こちらをじっと見つめてくる。

何故か、そのまま動かない。

しばらく待っても何も起きないので、レオンはデイジーに尋ねる。

「あの、用事っていろいろなの？」

彼女は笑って首を振る。

「私には分かりません。この子が勝手についてきただけですから」

「え、勝手にですか？」

「はい。祖父が頼んだわけでもないですよ。皆さん、よく勘違いされているのですけれど、カーバンクルは、頼んだからといっていつでも力を貸してくれるわけではありません。どちらかというと、自分の意志で力を使う事が多いんです。それに、凄く頭もいいんですよ。もしかしたら、人間よりも、力の使い方をわきまえているかもしれない。先の未来まで見通しているような、そんな思慮深さを

感じる時もあるんです」

「へえ……」

そんなに優秀だとは意外である。村にいたあのペット同然のカーバンクルは、いったい何だったのだろうか。

レオンの感心した声が合図だったかのように、突然ハルクがこちらの肩に飛び乗ってくる。本当に軽い。大きさはリスより大きいはずだが、重さはその半分もないのではないだろうか。

最初は肩に乗ったカーバンクルだったが、すぐに頭上に飛び移ってくる。

その一瞬後には、周囲に変化が起き始める。

戸惑いつつも、レオンは驚かずにはいられなかった。

時間が遅くなっていくあの感覚。以前、あの蒸留所で経験した感覚とよく似ている。

デイジーは動いていない。だけど、時間の変化は音で分かる。最初は多少気になる程度だったものの、次第に、放たれた矢を楽々手掴み出来そうな程、スローモーションになっていく世界。

やがて、時が止まった。

その一瞬と言ってもいい時間で、レオンは長い時を見た気がした。場所は屋外。

ここよりももっと人が多い町。その一角の訓練場。ここのもものりも狭いが、中で剣を振っている人間は多い。そのほとんどが子供だった。

皆笑っている。

剣を振っているのは男の子がほとんどだ。女の子は奥に見える建物で、何か料理している様子だった。そちらも楽しそうだった。

自分も楽しい。

幸せな気持ち。その気持ちが流れ込んでくる。

やがて、自分の腰の辺りにまわりついてきた男の子が、こちらの顔を見ながら言った。

僕もお兄さんみたいな冒険者になる！

自分が体験している彼。伝説の男の気持ちが分かった。
言いようのない程、嬉しい。

溢れ出してくる優しい気持ち。

その子供の笑顔が最後だった。

気付くと、レオンの意識は小屋に帰っている。

静かだった。

だけど、心は感情でいっぱいだった。その感情に身を任せるようにして、レオンはじっと目を瞑った。

しばらくして目を開けると、デイジーは首を少し傾けて聞いた。

「・・・いかがでしたか？」

相応しい言葉を選ぶ。だけど、すぐに諦めざるを得なかった。あんなに大きな感情を経験したのは初めてだったのだ。

結局、口から出たのはこの一言だけだった。

「・・・僕も負けてられないですね」

偉大なるソードマスターにも。その彼に憧れた少年にも。

だけど、何より、見た光景そのものが羨ましい。

夢だけで出来ている。そんな場所だった。

伝説となった男の夢。その彼を夢にした子供達。今まで見た事がないくらい、夢で溢れている場所。

自分もいつか、その場所に立ってみたい。

デイジーは一度だけゆっくりと頷いた。

「本当に今日はありがとうございました」

頭を下げると、頭の上にいたハルクが音もなく目の前のテーブルの上に降り立ってくる。

何か言いたげにこちらをじっと見る緑色の瞳。

レオンは貰った気持ちそのままに、その焦茶色の妖精の頭を優しく撫でた。

「ハルクも。本当にありがとう」

気持ちよさそうに目を細めたカーバンクルは、どこか優しく微笑んでいるようにも見えた。

通過点の価値

振り返って、弾む息を整える。

ビギナース・アイの通路。ここ数日間、毎日のように見ているこの光景に、馬の蹄の音が響きわたる。

近付いてくるその音を身構えて待ち構えていると、やがて奥の曲がり角から、ほぼ実寸大の馬型モンスターが姿を見せた。ただし骨だけの状態である。

ここは基本的に、比較的小型の生物か、或いは大型でも骨だけになっているか、そのいずれかの形態をしたモンスターがほとんどだ。この間のツタのような例外がたまにあるものの、その場合、どちらかというと、モンスターというよりも罠という印象が強い。近付かなければ襲ってこないからである。

それはそうと、今はこの馬型モンスターの相手をするのが先だ。レオンが待ち構えているのは、あまり幅のない通路だった。せいぜい3メートルくらいの幅である。モンスターはかなりの勢いでこちらに駆けて来ているが、突進を避けるのには向かない場所である。骨だけとはいえ、馬の脚力には馬鹿に出来ない威力があるはずだ。

それでもこの場所を選んだ。ここでないは無理だったのだ。身を落として待ち構えるレオンまであと少しといった場所で、モンスターは突然体勢を崩す。まるで見えない糸にひっかかったように。

実際、その通りである。

通路に仕掛けられていた罠に気付かず、盛大に倒れるモンスター。突進の勢いが強過ぎたせいなのか、骨格が何本か外れてしまったようだ。積み木が崩れるように、脚の骨が床に散らばる。

この時を待っていたレオンが、その隙を逃すはずがない。

牽制にダガーを投擲し、さらにショートソードを抜いて近付く。一撃で倒せる保証はない。隙を作って、そこに近接武器でとどめを刺す。これがセオリーだった。

だが、今回はその必要はなかった。

短剣を頭にもらったモンスターは、空気に溶けるようにその姿を消滅させていく。勝負がついたのだ。

その姿が完全に消えると、ダンジョン内は再び、音をも飲み込むような静寂に戻る。

レオンは息も吐かなかった。

本当に慣れてきたようだ。

周囲の気配に注意しながら、レオンは装備を回収していく。この手順も、身体はすっかり覚えてしまっている。頭は周囲に感覚を研ぎ澄ませつつも、身体はいつもの手順を勝手に行ってくれる。効率が良くなってきたと特に実感するのは、大抵こういう時である。

回収を済ませてから、レオンはモンスターが駆けてきた方へと踵を返す。さっきのモンスターは、この曲がり角の先の小部屋の中にいたのだが、こちらまでおびき寄せたのだ。その部屋で戦う事も出来たのだが、それでは室内に罠がないかどうかを確かめられない。安全な場所を選んで戦うのが基本だ。

その心得も、ようやく身についてきた。

蝶のモンスターと戦ったあの日から、既に2週間が過ぎた。最初にビギナーズ・アイに挑戦してから、もう3週間は経過している。イザベラ先生は、1人でクリアするのに2週間以上かかると言っていたが、下手をすると1ヶ月はかかりそうである。それでも、最初の頃はいざ知らず、今はその事に対して、焦りのようなものは全くない。

あの頃の自分が焦っていたと自覚出来るようになったのも、つい最近の事だ。

ユースアイでは自分は余所者だという思いが、どこかにあったのかもしれない。だから、早く強くなれないといけないと思っていた。

それどころか、強さを証明出来なければ、ここから追い出されてしまふと考えていたのかもしれない。いつまでもここにいられるわけではない。もつと頑張らないと見限られてしまふ。そんな思いが、自分を先へと先へと、追い立てるように歩みを進ませていた。退ける時に退かなかったのは、その思いが邪魔をしたからだ。目の前の危険よりも、町の人に見限られる方がよっぽど怖かったのだ。

だけど、もうその恐怖はない。

今では、危険に飛び込む事だけが勇氣ではないと分かる。退き際を見極められるのが強さの一部だという事も分かる。それを冷静に見つめる事が出来たのは、ユースアイの町の人達が自分を受け入れてくれたからだ。もう何にも追い立てられていない。ゆっくりとでも、一步一步先へ進む事が出来るのは、その支えがあるからこそである。

鎧の修理が終わってから毎日、レオンはビギナズ・アイに通い続けた。だが、その滞在時間はとても短い。新しいモンスターに遭遇した場合、戦いはしても無理に倒そうとはしない。だから、1時間もしないうちに出てきた事もあった。だけど、それでいい。剣や弓の訓練、道具や知識の勉強等、外で他にする事がいくらでもある。ダンジョンに入るのはクリアの為ではなく、実戦経験を得る為なのだ。

本当に、少しずつ少しずつ、ここの空気に慣れる事に時間を費やしてきた。

先日の蝶型モンスターには再遭遇していない。しかし、仮に遭遇したとしても、今度は正しく対処出来る自信がある。少なくとも、逃げるべきだと思ったら、迷いなく逃げられる。それはダンジョンで生き残る上ではとても重要な事だ。

しばらく歩くと、先程のモンスターが待ち構えていた部屋にたどり着く。入ってきたドアは、馬が通るのを考慮した為なのか、かなりの大きさだったが、部屋自体は対して広くない。馬小屋だと考えると、せいぜい2頭が限界だろう。

調べてみたが、他のモンスターや罠はないようだった。そもそも、何も置いていない、飾り気のない部屋なのだ。それでも灯りはあるから、視界には困らない。

ただ、入ってきたのとは別に、向かいに扉がひとつだけある。こちらはあまり大きくない。人間用の普通サイズだった。金属製のドアで、いつかの広間と同じように、ツタのような装飾に鍵穴が隠されている。

嫌な予感がしつつも、とりあえず解錠する。鍵のタイプも以前と同じだった。だから問題なく開けられたが、嫌な予感はますます募る。

それでも、開けないわけにはいかない。ゆっくりと、ドアを少しだけ開いて、向こう側を覗き見る。

向こうも灯りがあるようだ。かなり明るい。

さらに、慎重にドアを開いていく。

そうして明らかになった光景を見て、レオンは少し面食らってしまった。

下り階段があった。

ほんの数メートル通路が続いた先に、確かに階段が下へと続いていたのだ。

これはつまり、2階へと進めるという事だった。

別におかしい事ではない。むしろ先に進めるのを喜ぶべきなのだ。けど、あまりに容易にここまでたどり着けたので、つい驚いてしまった。以前は、この階段があまりにも遠く感じたものだが、今日は、ここまで進もうとすら考えていなかったのにたどり着いてしまった。そのギャップに戸惑ってしまったのだ。

複雑というか、変な気分になったが、レオンはその階段を進んだ。階段は意外と長い。だが、下には部屋の灯りが見える。入り口にあった階段と同じくらいの道のりのようだ。

何事もなく階段を下りきつてみると、そこには、白い泉とカーバンの像。つまり、導きの泉である。妖精の像はこちらを向いて

いた。

立ち止まって考えてみる。今下りてきた階段は、確かに地下1階から2階へと下りる階段だったはずだ。だけど、泉の像がこちらを向いているという事は、ここを上ったら地上に出るという事なのか。自分で考えておいてなんだが、本当だろうか。だが、試して地上に出たら、それはそれで馬鹿みたいである。

見るだけ見てみようと思ひ返つて、階段の先を見上げてみる。遠いからはつきり見えないが、確かに外の明るさだとしてもおかしくない。

地上にすぐ帰る事が出来るのはありがたいが、よく考えてみると、先程までいた1階の部屋に戻る事は出来ないようだ。こういうケースもあるのなら、階段を下りる時は忘れ物に気を付けなければならぬ。拾いに戻ろうにも、もう二度と戻れないのだから。

何はともあれ、レオンはそこで少し休憩する。しばらく考えた後、もう少し進んでみる事に決めた。今日はまだあまり戦闘していない。体力も装備もほとんど消費していない。それに、退路もこれ以上ないくらい確保出来ている。すぐそこに帰り道があるのだから、万が一怪我を負ったとしても、診療所まで徒歩5分もない。

進める道は、階段の向かいの壁にあるドアだけのようだった。ここも金属製。ただし、装飾も何もなく、鍵も付いていない。

気を付けながら開けてみると、そこは通路だった。ただし、今度は結構広い。長細い大部屋と言つてもいいかもしれない。

奇襲や罠に注意しながらその道を進む。灯りは十分だった。だから、道の先にあるものが最初から見えていた。

大扉である。

もちろん遠くからでも分かっていたが、すぐ近くに立ってみると、その巨大さに圧倒される程だった。両開きの扉だが、その片方だけでも床に倒せば、大人が30人は横になれそうだ。それは誇張でもなんでもなく、もし持つて帰れたら、これ1枚で家の床や壁として成立しそうである。黒光りしているがどうやら木製らしく、表

面には植物が絡み合ったような彫刻が施されている。その中心に目玉のような物が描いてあるから少し不気味な感じだが、芸術作品としても申し分のない風格があった。

これ以外に扉のようなものはない。だから、進もうと思ったところを開けるしかないのだが、畏云々以前の問題で、まず、この重そうな扉が人間の力で開くのかどうか疑わしかった。

それでも、とりあえず挑戦してみるしかない。

軽く押してみたがびくともしないので、両手に体重をかけて押してみる。すると、わずかだが両扉の間に隙間が出来た。扉の向こうも暗くはない。

身体を押し当てるようにして、さらに体重をかける。隙間がある程度広がったところで、レオンは向こう側を観察した。重い扉を支えながらだから辛い体勢だが、不用意に入るわけにはいかない。入ってから向こうにモンスターがいる事に気付いたら、簡単には逃げられない。この重い扉を開けなければならぬからである。モンスターに襲われながらここを開けるのは、事実上不可能と言ってもいい。

扉の向こうは、いつか骸骨モンスター達がいたのと同じような大広間だった。ただし、それよりも一回り広く、さらに、中には何もいない。もちろん、見える範囲ではだが、気配も何も感じない。

部屋の向こう側の壁に、こちらと同じくらい巨大な扉がある。

意を決して、レオンは部屋の中に飛び込んだ。

身体で支えていた扉がゆっくりと閉まっていく。音はほとんどしない。完全に扉が閉まった時もほぼ無音で、まるで吸い込まれたかのようなだった。

完全な静寂。何もいないとはいえ、閉じこめられたに等しい状況だから、居心地がいいものではない。

とりあえず、向こうの扉まで歩く。

畏を張るうにも、何も無さ過ぎる空間である。何かスイッチを用意したとして、せいぜい床に仕掛けるくらいしかないだろう。壁も

天井も遠すぎるし、明るいから妙な物があればすぐに気付く。第一、本当に何も無い部屋なのだ。

だが、それはレオンの思い込みだった。

広間の中央辺りに差し掛かった時、突然その異変は起きた。

レオンが目指していた扉。その黒い一枚板が一瞬で粉々に砕けてしまったのだ。

というより、扉ではなかったというのが正しい。少なくとも、レオンが入ってきた扉とは明らかに違う。ボロボロと崩れ落ちていく破片は、まるで羊毛のように、全く落下音がしなかったからである。その黒い破片は瞬く間に消えていく。紫の煙を上げながら。

擬態。別の植物や昆虫に姿を偽装できる生き物は多いが、さすがにモンスターともなると、人工物にも擬態出来るらしい。

呑気に感心していたレオンだが、身体はしっかり動いていた。その異変に気付いた瞬間に、既に背中 of 弓に手をかけている。距離から考えれば、弓が一番有効だ。

だが、擬態を解いたモンスターの姿は、レオンのどんな予想とも一致しないものだった。

目玉が中央にある。これはまだよくある事だった。しかし、それ以外は何かの生物に似た形態をしているものが普通だった。人だったり、鳥だったり、蝶だったり、馬だったり。いろいろなバリエーションがあるものの、一目見て分からなかった事はない。

しかし、今回は分からなかった。

そもそも、生物の形状をしていないというのが正しい。

八面体。綺麗にカットされた宝石のような形状をしたそれは、その半透明の器の中に大きな目玉を宿し、ただ床の少し上の空間を浮いていた。飛んでいるとかではなく、本当に空中で微動だにしない。人の大きさ程もある赤い結晶の中で、ギョロギョロと動く目玉。あまりに予想外の姿に、レオンも呆気にとられてしまった。

その為、モンスターが先手をとった。

突如出現した赤い光が、モンスターの目前で文字を描き始める。

魔法の準備だが、レオンはあまり驚かなかった。あんな形状だから、魔法でも使わないと攻撃出来ないだろう。他の手段といえば、体当たりくらいではないか。

冷静に矢を取って、弓を構える。

躊躇なく、一瞬で矢を放つ。

ホレスが教えてくれた弓の神髄はまだ理解出来ていない。だが、それなりに腕が上がっているのも確かだった。

的が大きいのもあって、その矢はモンスターに命中する。

しかし、本当にただそれだけだった。

レオンは顔をしかめる。矢があっさり弾かれてしまったのだ。とつもなく硬い。モンスターの体というか、結晶体には傷ひとつ付いていないように見える。

続けてもう1本射てみるが、結果は同じだった。傷つけるどころか、魔法の準備を妨害する事も出来ていない。

弓を諦めて捨てる。次の手を思案していたところ、モンスターの反撃がきた。

赤い文字が消える。

魔法の襲来に対して準備するレオンだったが、その規模に度肝を抜かれた。

いつか蝶が放ってきた炎の矢。それと同じ形態の魔法だが、その数が尋常ではない。

20本。いや30本はある。モンスターの目前を埋め尽くすように出現したそれらは、その全ての鏃をこちらに向けている。

確かに驚いたが、それでも身体は動いた。誰だって同じ状況に立たされれば、嫌でも身体は動くだろう。動かないと、最悪の事態になるのは必至である。

タイミングがどうこうなんて言ってられない。レオンはただ闇雲に、左へ、モンスターを中心に弧を描くように駆けた。

その直後、矢の雨が一斉に飛来する。

床や壁。レオンの足跡を辿るように着弾していくそれらは、その

度に爆炎と轟音をまき散らしていく。その衝撃で部屋が崩壊するのではないかと思える程だった。

とにかく、必死で走るしかない。

最後の一矢がすぐ脇の床に落ちた後、最近では一番かもしれない程安堵した。しかし、息を整えながら自分が走り抜けた跡を確認してみても、レオンは絶句する。

ニコルがとんでもない実験をしたのだろうか。そう思えるような、荒れ果てた惨状。

よく生きていられたな。

その感想を抱くのがやっとだった。

だがもちろん、モンスターの攻撃はそこで終わりではない。

結晶がくるつと回転し、目玉がこちらを捉えるや否や、再び魔法準備が始まる。今度の光も赤色だった。

またさっきのような、命からがらの事態になるのは堪らない。しかし、ここで距離を詰めるのは躊躇したレオンだった。以前の蝶との戦いを思い出す。近距離用の魔法だって、当然使えるはずなのだ。不用意に近付けば、その餌食になる可能性もある。それに、そもそも近付いたところで、何か有効な攻撃手段があるだろうか。放たれた矢を軽々と弾くあの硬度は、相当なものに違いない。

一度撤退するべきだろう。だが、あの重い扉をどうやって開けるか。モンスターが擬態していた扉は完全に偽物だったらしく、元あった場所には、ただの壁があるだけである。この部屋から出ようと思ったなら、入ってきた扉から出る以外にない。

そうこう考えている間にも、魔法の準備は進んでいく。だが、準備時間がかかり長い。先程の魔法もそうだったが、どうやら威力のある魔法程、そして射程がある魔法程、準備時間が長く必要であるらしい。

逆に言えば、これだけの大技を使うだけの余裕があるという事だろう。準備中に仮に攻撃されたとしても、防御に絶対の自信があるか、或いは瞬時に別の魔法が使えるのか。

高威力の魔法と強固な防御。それらを併せ持っている。

そこでレオンは、扉を開ける手段を思い付く。

思い付いたと同時に、その扉の方へと駆けだした。

モンスターは追ってこない。魔法の準備中だからなのか、或いは動く気がないのか。広間の奥に陣取ったままだ。

扉の前にたどり着いた時、再び無数の炎の矢がモンスターの前に出現する。

レオンはそこで立ち止まらずに、そのまま駆け抜ける。

直後に、一斉に矢が襲来してきた。

響きわたる轟音。だが、それが狙いである。

自分が避けた炎の矢のうち、そのうちの幾つかが扉に着弾しているはずだった。それで壊して貰おうという算段である。

だがもちろん、いちいち扉に当たったか確認する余裕なんてない。目論見はあっても、レオンが実際にしている事は、ただ必死に炎の矢から逃げ回っているだけである。

しばらくして、轟音が止んだ。

また魔法準備を始めるモンスターを尻目に、レオンは扉の方を振り返る。

なんというか、ちょっと感心した。全く無傷というわけではないが、その漆黒の壁は泰然として残っている。その周囲の壁や床は散々な惨状なのに、その丈夫さは見事としか言いようがないだろう。

いずれにしても、簡単には壊れてくれそうにはない。

よく考えてみれば、それも当然かもしれない。経験則から言つて、ダンジョンの構成とそこに潜むモンスターの間には、確実に作戦みたいなものがある。今回で言えば、重い扉はこちらを閉じこめる為の物なのだ。それが簡単に壊れてしまつては意味がない。

そこから考えを広げれば、逃げられなくなつた冒険者達が捨て身で攻撃に出てくるのも計算済みだろう。

つまり、まだ切り札を残しているはずだ。

どんな切り札だろうか。この間の蝶のように、近距離魔法だろう

か。

それくらいは使えると考えるのが自然だった。

だが、そこで少しレオンは違和感を感じた。そんな切り札があるのなら、近付いてきて使えばいいのではないだろうか。実際、そうされるのが一番困る。こちらを追ってこないまでも、例えば部屋の中央で火球を爆発させるだけでも、被害は甚大だろう。向こうは防御も鉄壁なのだ。それで問題ないのではないか。

もしかして、近距離魔法は使えないのだろうかと一瞬考えた。だが、信じて懷に飛び込む気にはなれない。その予測が外れていたら大怪我では済まないのだ。せめて魔法発動の文字が解読出来れば、飛んでくる魔法が分かるはずなのだが、それも出来ない。そのお陰で、不用意に扉を開けようとも出来ない。準備時間が長いなどと高をくくっていて油断したところを、不意打ちされないとも限らないのだ。

再び放たれた炎の矢を、部屋中を走り回って避ける。もう、炎の雨と呼んでもいいくらいだった。床の大部分が、焦げて陥没してしまっている。そのうち走り回るのも難しくなるかもしれない。

ぐずぐずしてはいられない。

炎の雨が止んでから、レオンは距離を詰めた。

だが、モンスターの40メートル程手前で立ち止まる。前回の経験から言って、これ以上近付くと、火球を使われた時に避難が間に合わない。

モンスターは特にリアクションしなかった。既に準備し初めていた魔法の赤い光も、変わらず文字を描き続けている。

レオンは数歩後退する。そろそろ危ないという予感があった。

予想通り、炎の雨が飛来する。

雨とは言っても、実際には矢だから、その軌跡は床と平行に近い。1本ならともかく、避けながら距離を詰めるのは難しい。

否応なく後退させられながらも、レオンはなんとか走り回って回避出来た。

最後の矢が壁に当たって爆炎を上げるや否や、モンスターの魔法準備は始まった。

さすがに息が上がっている。早く攻撃に出てしまいたい気持ちを抑えながら、レオンは必死に考える。

相手が近付いてこないのは何故なのか。近距離魔法が、つまり火球が使えないからなのか。だがそうになると、相手が別の切り札を用意している事にならないだろうか。その切り札と、このモンスターが動かない事には何か関係があるのだろうか。

自分なら、どういう切り札を用意するだろうか。

思い付かない。だが、切り札があるのは確かなのだ。自分に予測出来ないのは、何か先入観を持っているからではないか。

もしかしたら、魔法ではないのかもしれない。

そこで、レオンはようやく閃いた。

その仕組みを予測する。それを意識しながら、よく目を凝らして床を観察した。そのわずかな痕跡によくやく気付いたが、そこで意外な収穫もあった。

この結晶型モンスター。どうやら、一応生物を模していたらしい。右手でダガーを握る。距離はかなりあるが、威力はそれほど問題ではない。

しっかりと狙いをつけてからの投擲。

モンスターが浮いている、その上の空間をめがけて。

ダガーがそこを通り抜けた時、確かに糸が切れるような音がした。それと同時に、モンスターの角張った身体が傾き、床に横倒しになる。

だがそれだけではなかった。ここまでは予想通りだったが、それ以上の効果があったのだ。

床に倒れたモンスターは、先程までの硬さが嘘のように、ガラスの如く砕け散ってしまったのだ。

目玉が不気味に蠢いた気もしたが、ただそれだけだった。

あっという間に、紫の煙と共に消え去ってしまう。

なんとも呆気ない幕切れだった。

しばし啞然となるレオンだったが、すぐに気を取り直して、腰のショートソードを抜いた。それを右手に少し前進し、その剣で前方の床を少し撫でてみる。

確かに、非常に細い粘着質の糸が、剣にまとわりついてきた。引っ張ってみるが、なかなか強度もある。

その付近にも、よく目を凝らして見れば、同じような糸が張り巡らしてあるのが分かる。気付かずにここを通り抜けようとしていたら、完全に足止めされていたに違いない。

蓑虫という虫がいる。言ってみれば蛾の幼虫なのだが、さっきのモンスターは形こそ違ったものの、どうやらその蓑虫を模したものらしい。というより、蓑虫そのままの姿だったら、さすがに一瞬でばれてしまっただろうから、敢えて形を変えていたのかもしれない。最初は扉の姿に擬態していたが、もしかしたらそういうのが得意だったのだろうか。

蓑虫は粘着質の糸を使って蓑を作ったり、ぶら下がったりする。さっきのモンスターも浮いているように見えたが、実際は糸で吊っているだけだった。矢で射つても揺れなかったのは、モンスターが重かったからだろうか。それを支えられる程なのだから、糸の強度も相当なものだ。

そして、その同じ糸を自身の周囲の床に張り巡らせていた。これが切り札だったのだ。言ってしまうえば罠である。その罠にかかって動けなくなつたところに、あの炎の雨を浴びせる算段だったのだ。

さらに言うなら、あのモンスターが動かなかつた理由も、火球を使わなかった理由も予想がつく。動かなかつたのは、そもそも動けなかったのだろう。火球を使わなかったのは、使えなかったのかもしれないが、きっと張り巡らせた糸が吹き飛んだり燃えたりするのを嫌ったのだろう。床すれすれに張った糸だから、炎の雨なら上を通るから問題ないが、火球は全方位に影響が及ぶから使えなかったのだ。

最後は、まさかあれだけで勝てるとは思っていなかったが、せめて驚いてくれれば魔法を失敗させられるかもしれないと思っていた。最後の呆気なだけは、本当に予想外である。

何はともあれ、生き残れてよかった。それに、ちゃんと相手を分析する事が出来た。自分の成長を実感出来たような気がして、それが何よりの報酬である。

投げたダガーを回収すべく、レオンは剣を使って張り巡らされている糸を切断していく。この糸は何故か消えない。モンスターがまだいるかもしれないから、油断は出来ない。

それでも何事もなく、短剣の落ちた場所までたどり着いた時、レオンはようやくそれに気付いた。

この時ばかりは、レオンの警戒心も吹き飛んでいただろう。モンスターが消滅した場所。

そこに小さな赤い石が落ちていた。

幽霊を見つけたような表情で、レオンはその石を拾った。

中を水流のようなものが渦巻いている。

呆然としながらも、頭は申し訳程度には働いていた。確かに、ここは2階層のダンジョンだと聞いていた。そして、確かにここは2階層だ。最初の導きの泉を除けば、1部屋目と言ってもいいが、とにかく2階層なのは間違いない。というか、よく考えてみれば、これ以上先の部屋はないのだ。ここに見えていたはずの扉はモンスターの擬態だったのだから。だから、言ってしまうば、ここがこのダンジョンの最深部だと言える。

だから、さっきのがボスだったとしても、不自然というわけではない。

レオンの心中では、まさに今摘んでいる魔石のように、言いようのない感情がぐるぐると渦巻いていた。

これは喜んだらいいのだろうか。だが、何か損をしたような気がするののは気のせいだろうか。

心の整理は簡単ではなかった。

それでも、それを完了出来た時、レオンの口から自然と声が漏れた。

「・・・やった」

その一言があまりにも大きく聞こえた。自分で慌てた程だった。他に聞いている人間は誰もいないというのに。

胸に手を当てて呼吸を整える。

落ち着こう。まだダンジョンから出られたわけじゃない。

結局レオンはそれっきり、ダンジョンから出るまで一言も言葉を発しなかった。何か口にしてしまうと、我を忘れてしまいそうだった。ここで我を忘れてしまつては、せっかくの成功に傷を付けてしまう気がしたのだ。

それでも、やはり抑えきれず、表情には満面の笑みが浮かんでしまっていたが。

村から出て1ヶ月半。春真つ直中といったある日。

レオンはダンジョンをクリアする喜びを、初めてその胸に仕舞い込んだ。

微笑みの夜

ビギナース・アイを出た頃には、既に夜が更けていた。

ダンジョン内では時間の感覚が曖昧だ。太陽が今どの辺りにあるのか、確認する術がないからである。自分では数時間程度だと思っていたが、いざ外に出てみると半日以上経っていたというのも珍しくない。今日も、出る前まではまだ夕方だろうと思っていたが、実際は完全に日が沈んでしまっている。

いつもこのギャップを認識する度に、急にお腹が減った気になる。確かにほとんど何も食べていなかったのだが、さっきまでは全然空腹感がなかったのだから不思議である。時間の感覚というものは、目で見ないと実感出来ないものなのだろうか。

闇にうつすらと浮かぶ石畳の上を、レオンは唯1人歩いている。

うら寂しい光景だが、そんな事は全く気にならない。それを忘れる程の嬉しさが、自分の身体から光として溢れ出ているような気さえする。

帰り道がいつもより明るい。

本来なら、この足ですぐにギルドに向かうべきだった。魔石の鑑定は、原則ギルドでしか行えない。持っけていても役に立つわけでもないし、金銭的にも価値があるものだから、盗難に遭う可能性もある。

だけど、実はギルドにも営業時間がある。冒険者達は、規則正しいとは正反対の生活をしているにもかかわらず、意外にも、ギルドには夜間営業なんてものはない。もしかしたら、もっと大きい町のギルドにならあるのかもしれないが、少なくともユースアイのギルドにはない。従業員が少ないから、そこまでするのは無理なのかもしれない。

そういうわけで、こんなに日が沈んでしまっただけでは、ギルドを訪ねても誰もいない。カーバンクルのシニアはあの建物に居ついているという事だが、いくら優秀でも、さすがに魔石の鑑定までは出来ないだろう。

ふと、シニアの姿が脳裏を過ぎった。イエローの毛並みに藍色の瞳をしている。レオンがギルドを訪ねる事があると、大抵受付のケイトの頭の上で寝ている。小振りな帽子だと見間違えそうなくらい、綺麗に丸まっているのが常である。もしかしたら、ケイトも半ば帽子だと思っているかもしれない。実際、ファクションの一部みたいに思える時もある。

今頃はどこに寝ているのだろうか。

事務所のどこかで丸まっているシニアを想像して、ちよつと心が和んだ。こんな無駄な想像をしている時点で、相当機嫌がいいのが自分でも分かる。

そんな事をしているうちに、ガレット酒場の入り口に到着した。さすがにまだ灯りは消えていない。こちらはまだまだ営業時間中である。

だが、扉の前に立った時、レオンはいつもと違う事に気付いた。いつもなら、ここに立った時に、中の喧騒が嫌というほど聞こえてくるはずなのだ。特に、夜といえば、酒場にとって一番繁盛する時間帯である。この酒場は冒険者が客の大半を占めているから、そういった常識が丸々通用するわけではないものの、基本的には、こも夜が一番込み合う。酒場店主の目が届いているから、どんな騒ぎという程ではないものの、それでも十分過ぎる程賑やかになるのが、毎晩の定番だった。

それなのに、今日は喧騒が聞こえてこない。全く物音がしないというわけではないものの、どこか静まりかえったような空気が、中から伝わってくる。

もしかして、思ったよりも深夜になってしまっているのだろうか。だから、お客も大半が帰ってしまった後なのだろうか。

そう考えながらも、レオンは扉を開けて、中に一步足を踏み入れる。

だが、そこで足が止まってしまった。

店内はいつも通り、満席という程ではないが、テーブルの多くが屈強な男達で埋まっている。そのテーブルも床も壁も、両奥にある階段も、毎朝店主が手持ち無沙汰に掃除しているからなのか、キラキラと輝いて見える。照明が多いのもあるかもしれない。手入れの行き届いた内装がその光をしっかりと反射している為、光が乱舞しているような印象である。

ただ、レオンが足を止めたのは、そういった内装云々が問題なのではない。

自分が店内に足を踏み入れた瞬間、店内の男という男の視線が、一斉にこちらを向いたからである。

しかも、全然友好的な視線ではない。

この眼力があれば、それだけでモンスターを倒せる。

そう思わせるくらいの迫力があつた。

もちろん、レオンは指1本すら動かさなくなった。ここで何かが終わるような、そんな予感までした。

どういうわけか、誰も何も言わない。

何か聞こうと思ったが、身体がその命令を完全に拒否していた。きつと防衛本能が働いていたのだろう。

動いたらまずい。何も分からなくとも、それだけは確かだった。

そんな熊をも殺せそうな沈黙が、十数秒だけ続いた。レオンの体感時間では、十数時間だったかもしれないが。

その時間に終わりを告げにきた人物は、レオンの正面から歩いて近付いてきた。

「よう、レオン。少し遅しくなつたんじゃないか？」

この場の雰囲気をもともせず話しかけてきたのは、少し顎髭を伸ばした親しみ易そうな男性。上下グレイの一見上等そうなファッションだった為、一瞬分からなかったが、その声でレオンはやつ

と気が付いた。

「あれ・・・ガイさんですか？」

行商人のガイ。この町までレオンを乗せてきてくれたのが縁で知り合った人である。その時は名前を覚えてくれなかったものの、最近また会う機会があつて、その時にベティから名前を覚えて貰っていた。ただ、ガイという名前は商売上の通り名らしく、本名は違うらしい。

ガイは微笑んではいたものの、ほとんど口元だけだった。

「遅い帰りなんだな。ビギナズ・アイに挑戦中なんだって？」

様子が少しおかしいような気がするものの、レオンは頷いた。

「はい、一応・・・あ、でも、今日なんとかクリア出来ました」

彼はそれには無反応だった。

「疲れて帰ったところ申し訳ないんだけど、ちょっと出てくれるか？」

「・・・はい？」

帰って来たのに、いきなり出るとは何事だろうか。

その戸惑いの声も無視して、ガイはレオンの身体を反対向きに振り返らせる。そのまま背中を押してくるので、仕方なくレオンはそれに従う。ちゃんと足が動いたのが、自分でも不思議だった。

2人とも外に出てから、彼は酒場の扉を閉める。言いようのない開放感があつた。

そこでようやく、ガイはいつもの笑顔を見せる。それでも、いつもよりは控えめな笑みだったかもしれない。

「タイミングが悪かったな。実は、ちょっとした騒ぎがあつてな」
「騒ぎですか？」

ガイはそのまま歩き出した。レオンもそれに着いていくと、酒場のすぐ脇の路地へと進んでいく。どうやら、酒場の勝手口を目指しているようだ。普段はほとんど使わないが、たまに酒場の手伝いをする時に通る事がある。ガイも、商品の搬入をする時に使っているのだろう。

彼は唐突に口を開いた。

「レオンは見た事ないんだろうな」

「・・・何をですか？」

「ひねくれた冒険者見習いが来た時なんか、結構見物なんだけどなあ」

話が飛び過ぎてよく分からないが、冒険者見習いという言葉に、レオンは反応した。

「もしかして、冒険者見習いの人が来たんですか？」

勝手口の扉にたどり着く。こちらを横目で一瞥してから、ガイはその扉を開けた。

その中は資材置き場のような場所である。数メートル先の正面にまたドアがあつて、そこを開けると、右側に部屋が並ぶ廊下にたどり着く。そこがガレットやベティの居住スペースなのだ。ここからなら、少し先の通路を右に行けば調理場に出られるし、すぐ近くの階段を上げれば2階の宿場にも出られる。

ガイはその階段を上がっていく。

「まあ、あれだ」

急に口を開いたかと思えば、彼の口調は歯切れが悪かった。

「・・・何ですか？」

一瞬だけ口元を上げてから、ガイは答える。

「見習いは来た。というか、俺が乗せてきた。だけど、まあ、その後だよな、問題は。俺も道中一緒にいる時、大丈夫かなって思ったんだけど・・・」

本当に歯切れが悪い。だが、なんとなくレオンは思い当たる事があつた。

「もしかして、不合格だったって事ですか？」

この町に来たその日の事を思い出す。ガレットの役目は、見習いとしてやってきた人間を見定めて、必要なら追い返す事らしい。しかも、追い返す手段は選ばないというか、むしろ、明らかにバイオレンスな手段を選ぶ。

階段を上がった先は、掃除用具等が閉まってある倉庫である。奥にある扉を開ければ、そこから先は全て宿場用のスペースだ。

彼はその扉に手をかけたが、すぐに開けなかった。

こちらをじっと見てから、真面目な表情で口を開く。

「レオン」

今日の彼は、やはり少し様子がおかしい。そう思いながらも、レオンは返事をする。

「はい」

ガイはにこりともせず言った。

「男に生まれた事を後悔する覚悟はあるか？」

時が沈黙した。

まず、言葉の意味が分からない。さらに、その意味を推測しようとしても、そんな後悔をする状況が想定出来なかった。

「・・・えつと、どういう意味ですか？」

彼はドアから手を離して腕を組んだ。

「いいか、レオン。心して聞けよ？」

「え？あ、はい」

「世界にはな。もうこれでもかっていうくらい、美人が大勢いる」
一瞬にして、聞く気が失せてしまった。

「・・・いえ、もういいです」

だが、ガイは話を止めなかった。

「だからな、たまに理不尽な性格をした美人もいる。例えば、もつと背が高くないとダメとか、目がもつと大きくないとダメとか、行商人なんかダサイとか、前世が料理人なんてつまらないとか・・・とにかく理不尽だけだな。まあ、それは仕方ない」

「・・・仕方ないですね」

後半はかなり具体的だった。その内容が目の前にいる人と完全に一致しているのは、きつと気のせいではない。

「そう。仕方ないんだけど、でも、やっぱり言われたら傷つくだろう？傷つくんだ、これが。それを忘れるなよ、レオン。お前は1人じ

やない」

ガイは1人で勝手に何度も頷いている。

「いや、あの・・・何がですか？」

「さあ、とにかく行くか。心配しなくても大丈夫だ。俺がついてやるから」

全然人の話を聞いてなかった。

レオンは何か言うよりも早く、ガイは目の前の扉を開けた。

さつさと歩いていく彼に着いて廊下を進んでいくと、奥にドアが開け放たれた一室があるのに気付く。その扉の陰からはみ出しているのは、山男をさらに少し強化したような、筋骨隆々とした逞しい身体だった。

顔は見えないが、もちろん誰かは分かる。ここの主人のガレットである。

2人がある程度の距離まで近付くと、気配で分かったのか、彼はドアをさらに開いてこちらを確認してきた。

そこでレオンは気付いた。最初はドアに隠れていて見えなかったのだが、その部屋の入り口付近、ガレットが立つすぐ近くに、誰かいる。顔等はほとんど見えなかったものの、服装から、どうやら女性らしいというのは分かった。

ドアの陰から出てきたガレットが、部屋の手前でレオンとガイを出迎えた。

「帰ったか、レオン。明日になるかと思ったが」

「え？」

そこで、扉の向こうから声が聞こえた。

「あ、レオン帰ったの？」

ベティの声である。だけど、いつもの彼女よりも、声のトーンを抑え気味だった。夜だから周囲に気を遣っているのだろうか。

娘の質問に答える代わりに、ガレットは振り返りながら言った。

「とりあえず、部屋に入って、そこで・・・」

だが、すぐにベティの声が割って入る。

「それはちよつとなー。どう考えても、お父さんと同じ部屋なんて耐えられないだろうし」

よく分らない答えだった。何が耐えられないのだろう。

しかしそこで、新しい人物の声が聞こえた。

「いえ、私、大丈夫です」

全く聞き覚えのない声。ただ、女の子の声らしいとは分かった。どうやら、先程少しだけ見えたのが、その女の子の服だったようだ。

ベティの声がそれに答える。

「本当ー？無理しなくていいよ。レオンはともかく、私のお父さんは普通に怖いと思うし」

レオンにとって、嬉しいような悲しいような、何とも言えない評価だった。

怖ず怖ずといった女の子の声が返事をする。

「大丈夫です・・・たぶん」

「説得力ないなー。まあ、目の前にあんな大男がいたら、普通は怯えるのかな。私にとってはお父さんだから、さすがに慣れてるけど」
ベティは見えないから良いだろうけれど、本人が目の前に立っているレオンは内心戦々恐々である。

「いえ、そんな事ないと思います。ただ、私が、その・・・」

「じゃあ、レオンならいけるんじゃないー？なんていうか・・・そう、あんまり強そうじゃないから」

「えっと・・・」

困ったような女の子の声だった。本人が近くにいると分かっているわけだから、返事に困っているのだろう。

それを気にする様子もなく、ベティの声がこちらに響いてくる。

「というわけだから・・・レオン！ちよつとこっちまで来てみてー。お父さんはそこで待機」

状況が掴めない為、ガレットの方に視線を送ってみると、彼は黙って頷いた。

歩き出そうとしたレオンだったが、そこで隣にいたガイが片手をこちらの肩に乗せてくる。

「俺がついてる。心だけは強く持てよ」

相変わらず、意味不明な発言である。

その声が向こうにも届いたのか、ベティの声がまた響く。

「ガイさんも待機ねー」

視線を送ってみると、彼は肩から手を退けて、ゆっくりと首を横に振った。珍しく、少し寂しそうな表情だった。

何も分らないものの、レオンはとりあえず歩みを進める。

開け放たれたドアの前で足を止めて、そつと身を乗り出して室内の方を覗き見た。

やはり、見慣れない少女がそこにいた。ベティに寄り添われるようにして立っている。

目を引くという言葉が、まさに彼女を言い表していた。黒や茶色の髪が多いこの地域ではほとんど見かける事がない、真っ直ぐで流れるような金色のショートヘア。そして、宵闇に一瞬だけ現れるような、深みのある青色を宿した瞳。珍しいという意味でもそうだが、彼女の髪と瞳は、芸術品だとしてもおかしくない程、繊細かつ深みのある色合いをしている。明るい髪や瞳が一般的な町の人々が見たとしても、きつと目を引かれるに違いない。そんな確信が出来る程だった。

だが、髪はともかく、瞳に関して言えば、レオンは見慣れていた。むしろ懐かしさを覚えたと言ってもいい。何故なら、レオンの母親も同じ瞳の色をしているからである。その色はさっぱり遺伝しなかったが、縁がある色だと言えない事もない。

そのお陰なのか、レオンは彼女を見てもそれほど驚かなかった。むしろ、隣にいるベティを見て驚いたくらいだった。寄り添っているというか、彼女は少女の肩に手を回して、横から抱きついていると言っても過言ではない。だが、驚いたのはそこではなかった。

部屋の中が、見るも無惨に荒らされた状態である。それも、ただ

散らかっているだけならともかく、所々に氷の固まりが落ちている。冬の嵐が去った後のような、そんな惨状だった。

それが気になって仕方がなかったが、とりあえずレオンは黙っていた。どうしてなのかは分からないものの、ベティと少女がじつとこちらを見ているから、なんとなく喋り辛かった。

しばらくして、何かの観察が済んだのか、ベティは少女の方を向く。

「・・・どう？平気？」

少女はこちらから目を離さないものの、やがて小さく頷く。

「は、はい。一応・・・」

ベティはほつとしたように微笑んだ。

「そっかー。よかったよかった。レオンでダメなら、ちょっとお手あげだったなー。他はもう女の子を探すしかなかっただろうし」

どういう基準で自分が選ばれたのか、なんとなく分かったような気がした。

文句を言いたいのは山々だが、とりあえずレオンは、最大の疑問点を聞く事にする。

「あの・・・何があつたんですか？」

この部屋の中は、明らかに普通の状態ではない。吹雪いている時に窓を開けっ放しにしていたらこうなるかもしれないが、今はもう春だから、それもあり得ない。

その質問をした時、明らかに少女が動揺した。見に覚えがあるのだろうか。しかし、怯えているようにも見えたので、なんとなく聞き辛い。

少女の身体から手を離して、ベティはこちらに向き直った。表情はいつも通りだが、彼女も珍しく言い辛そうだった。

「話せば長いんだけどね・・・とりあえず入って。あと、自己紹介してあげて」

そう言えば、まだちゃんと名乗ってもいなかった。

レオンは室内に数歩踏み入れて、2人から微妙な距離を残したと

ところで止まった。少女が怯えている気がしたから、近付き過ぎるのも悪いと思ったのだ。

「初めまして、レオンと言います。一応、冒険者見習いとして、ここでお世話になっています」

そんなつもりはなかったのだが、いつもより声が大きかった気がした。場の雰囲気暗いように感じて、無意識に気を遣ったのかもしれない。

簡単にそれだけ言うと、少女もやや躊躇ってから口を開いた。

「ステラです。よ、よろしくお願いします・・・」

尻すばみに小さくなっていく声。

何か小動物を怯えさせているような、そんな罪悪感があった。いたたまれなくなってきた、レオンはベティに視線を送って助けを求める。

その視線を受けて彼女は一度大きく瞬くと、室外の人物を大声で呼んだ。

「お父さん！どうするのー？」

娘から呼ばれたガレットは、姿を見せないまま答える。

「レオンとステラに聞けばいいだろうが！」

「アドバイスとかないわけー？」

「そう言われてもな。ステラはギルドの登録もまだだろうが。まだそんな段階でもねえ」

「それでも、ここでちょっと良い話を捻り出すのが、元冒険者ってものじゃないのー？」

呆れたようなガレットの声が返ってくる。

「どこの詩人だ？それは・・・そんな事より、後はお前に任せていいか？」

父親には見えなかっただろうが、ベティの顔には笑みが浮かんでいた。

「私の自由にしていいって事ー？」

彼女の自由と言われると、どうしても穏やかに聞けない。だが、

ガレットはすぐに否定してくれた。

「言っただろうが！本人に聞け！」

「はいはい。あ、でも、ステラの部屋は自由にしていいでしょー？」

「どうする気だ？」

「私の部屋はー？」

「許す」

それだけ言い残すと、まるで丸太を突いているような足音が遠ざかっていく。どうやら、1階の酒場へと戻るようだ。そういえば、ガレットもベティもないわけだから、店内には誰もいなにのだろうか。ガレットには奥さんがいるにはいるのだが、接客はらしく、ほとんど調理専門と言ってもいい。

もつとも、例えば誰も店内にいなかったとしても、盗みを働こうとする人はいないだろう。そんな事をすれば後が怖いし、それに、客の何人かは店長と顔馴染みだから、見つければ代わりに成敗してくれる事は間違いない。

何はともあれ、父娘の間で何かしらの合意が成されたらしい。その詳細は不明だが、新たに判明した事もあった。

「ステラさんも冒険者見習いなんですか？」

そう本人に聞いたが、隣にいる酒場娘が笑って言った。

「だいたい見て分かると思うけど、ステラはレオンと同年だってー」

彼女が何を言いたいのかはすぐに分かったが、一応控えめに反論する。

「ついさっき初めて会ったばかりですから、知り合いとは言えないと思うんですけど・・・」

「自己紹介したでしょー？私くらいになると、会って数分くらいでもう親友だと思うなー」

「・・・さすがですね」

いろんな意味で勝ち目がなさそうなので、レオンは大人しく従う事にした。ステラの方を向いてから、少し苦笑する。

「えっと、すみません。いろいろ諸事情があつて、呼び捨てにする事がありますけど、嫌だったらすぐに言つて下さい。その・・・ステラが言えば、たぶんベティも許してくれると思うので」

彼女は青い瞳をパチクリさせたが、すぐに思い出したように頷いた。

「あ、はい・・・あ、いえ。嫌つて事はないと思います」

少し弱気過ぎるような気もするが、割と常識的な人のようだ。ただほとんど何も知らないとはいえ、とりあえずその部分があっただけでも、レオンは結構安心した。

それはそうと、質問の中身の方は完全に忘れ去られているようだった。

「それで、ステラも冒険者見習いなんですか？」

答えたのはベティだった。

「そうそう。今日つていうか、本当についさつき来たんだよねー。」

もう夜だったからギルドも開いてなくて、ガイさんがここまで案内してくれたんだよね」

「へえ・・・」

そういえば、ユースアイまで見習いを乗せてきたと言つていた。

こんな夜中に連れてきて、そのままほったらかしというのは、さすがに嫌だったのだろう。

「それで、お父さんに会つて合格つて事になつて、そこまでは良かったんだけど・・・」

「何があつたんです？」

この部屋の惨状と、何か関係があるのだろうか。

ベティはステラの方へと視線を向ける。それに気付いたステラは、少し躊躇したものの、小さく頷いた。

「ステラをこの部屋まで案内してたんだけど、その時に酔っぱらいが絡んできて、まあ、なんていうか、それが行き過ぎだったんだよね。完全に悪酔いしてたし、下心見え見えだったし。それに相手が多かったから、これはとつと成敗しておこうと・・・」

「・・・成敗したんですか？」

彼女流の成敗は、明らかに一般的な成敗ではない。想像を絶するような技が乱舞するのだ。

だが、ベティはあっさりと言った。

「ステラがね」

「・・・はい？」

なんとか聞き返したレオンだったが、ベティは腕を組んで、視線をあさつてにやる。

「あれはなかなか凄かったなー。私も見るのは初めてだったから」
レオンはゆつくりと首を動かして、ステラの方を見る。彼女はあからさまに視線を逸らした。

あのベティに凄いと言わせるような技を、この少女が繰り出したというのだろうか。どこからどう見ても普通の、それどころか、少し小柄で華奢な少女だと言ってもいい。そんな奥義が使えるとは、露ほども思えない。

だが、よく考えてみれば、ベティだって普通の少女だ。特に大柄なわけでも、体格がいいわけでもない。そう考えると、ステラが想像を絶する武闘派だとしても、不思議ではないのかもしれない。人は見かけに寄らないという言葉だってあるではないか。

そんな結論で納得しかけていたレオンの耳に、ステラの言葉が入ってきた。

「私もあんな技を見たのは初めてです。ベティの方がよっぽど凄いやうな・・・」

また分からなくなってきたレオンだったが、ベティはその言葉に嬉しそうに返事をする。

「そうかなー？でも、ステラを絶対守らないといけないって思ったから、久しぶりに力が入ったなー。あの技を出したのはいつ以来だっけ・・・確か前使った時は、勢い余って壁を壊しちゃったんだよね。だけど、今回は上手く決まったから、その分の衝撃が本人にいったはずだなー。そうそう。だから、あの客もしばらく歩けないは

ずだから、ステラも安心してねー。まあ、もう金輪際この店に近付かないと思うから大丈夫だと思うけど」

満面の笑顔のベティだが、ステラは表情に困っているように見える。

その表情を見て、ますますレオンは分からなくなった。どうしても、彼女がそんなに戦い慣れているようには思えない。

「あの、すみません・・・結局、具体的に何があったんです？」

ベティとステラは同時にこちらを向き、そして、しばらくしてお互いに視線を交わした。

「だから、そいつらをやつつけたんだけど」

「それは分かりましたけど・・・そこをもう少し具体的に」

「私の使った技の事？なんなら、教えてあげようか？」

彼女にとって教えるとは、その身に叩き込むという事と同義である。

「い、いえ！それは遠慮します！」

「そう？遠慮なんていららないのに」

ベティは悪魔的に微笑んでいるが、ステラはきょとんとしている。確かに傍目から見れば、よく分からない会話かもしれない。

「まあ、それは置いておくとして・・・その後よくよく聞いてみたら、どうも、ステラは男の人が苦手らしいんだよね。だから、大男達に囲まれて動揺したみたいなんだ。それで思わず、本気が出ちゃったみたいなんだよ」

「え？あ、そうなんですか・・・」

少し理由が気になったものの、あまり突っ込むべきではないと思い留まる。何か辛い経験をしたのかもしれないではないか。そのくらしいの苦手は、誰にだってある。それに、ステラの表情はお世辞にも明るいとは言えない。

若干陰鬱になりかけた空気を、ベティの明るい声が吹き飛ばした。「というわけで、よかったね、レオン。最初の仲間が来て」

その言葉にすぐに反応したのは、ステラの方だった。

「いえ、あの・・・やっぱりいいです。私、迷惑をかけると思うし」
答えるベティの声は、少し優しくかった。

「いいのいいの。レオンも仲間募集中だったし。それに、女の冒険者は少ないから、待つてても望み薄だと思うよー。だったら、今のうちからレオンで慣れておいた方がいいと思う」

「でも、その・・・大丈夫ですか？」

何を聞いているのか、レオンには分からなかったが、ベティはすぐに答えた。

「大丈夫大丈夫。ちゃんと私が頭押さえてるし、それに意外と丈夫だから、ちよつと手が滑ったくらいなら問題ないし。そもそも、レオンくらい無害そうなお見習いを探そうと思ったら、なかなか大変だと思うなー」

「無害そう・・・」

自分が有害であるつもりはないが、気になってしまって、レオンはつい呟いてしまった。

ステラはちらりとこちらを見る。

「そ、そうですね・・・」

どうやら無害そうなのは納得されたらしい。喜んでいいのかわからなかった。

ベティは満足そうに頷いてから、こちらを見た。

「レオンもいいでしょ？」

一応自問してみたものの、答えは決まっていた。

「はい。もちろん、ステラがよければですけど」

本人の方を見ると、彼女は怖ず怖ずと頷いた。

いつからかは分からないが、今のレオンの心はあまり仲間を求めているようだった。仲間がいらないという意味ではなく、仲間探しに焦っていないという意味である。心に余裕があるという事なのかもしれない。

だけど、この町に来た最初の頃は、酒場の手伝いをするたびに、無駄とは知りつつもダンジョンに連れて行って貰えないか頼んだも

のだった。それくらい不安だったのだ。仲間がいないと先が見えない。仲間とは、それくらい比重が大きいものだったのである。

その頃の事を思い出すと、今のステラの気持ちがかかるような気がした。

「よろしく。ステラ」

笑顔で右手を差し出す。いつの間にか、その右手にも傷が増えていく。

彼女はその手をじっと見つめた後、同じ右手でそっと触れるようにして握った。少し冷たい手だった。

何か小動物を餌付けているような、微笑ましい感覚。

ステラは顔を上げると、こちらを見て遠慮がちに微笑んだ。

初めてちゃんとした笑顔を見たような気がする。なんというか、妙な達成感があった。

「よろしくお願いします」

彼女の声に頷いたところで、ベティが口を出す。

「名前呼んであげたらー？レオンは真っ赤になって喜ぶから」

いつかの診療所での事を思い出して、あの時の恥ずかしさで顔が熱くなった。

「呼ぶ前から真っ赤だねー。いけ！ステラ！ここでトドメだー！」

可笑しそうに笑いながら言うベティだが、ステラは話についていけないらしく、戸惑い顔である。正直、その方がありがたい。

手を離してから、レオンは無理矢理話題を変えた。

「そういうええ、酒場の方の様子が変だったんですけど・・・」

そのせいで寿命が縮まったに違いないレオンとしては、聞いておきたい事だった。

ベティは両の拳を胸の前に持ってきてから、こちらを見てウィンクした。レオンの背筋を冷たいものが駆け抜けていった。

「まあ、あれだよ。倒したのは私達でも、後始末するのはお父さんなんだよ。その始末が済んだ後、酒場の方を通って放り出しに行ったんじゃないかな。勝手口は狭いから、その方がやりやすいと思

うし」

「・・・それは分かりましたけど、それでどうしてあんな空気になるんです？」

「そんな空気になるようなものになってたんじゃないかなー。お父さんが処理したわけだから、人間だとは分かっても、人相は分からなくなってたかもしれないねー」

聞くんじゃないかと、一瞬で後悔した。

「まあ、元々素行が良くない連中だったんだよね。ステラも全然気にしないでいいよー。氷漬けにしてやった程度なら、まだまだ又ルいくらいだから」

そのベティの言葉で、レオンはやっと気付いた。

「氷漬けですか？あ、そうか・・・」

ステラの格好を見る。藍色のワンピースだと思っていたが、どうやら違っただけらしい。

これがローブという物なのだ。

もう廃れてきた文化らしいが、ジーニアスでも優秀な人達は、その証としてローブを着用していたらしい。幼い頃に、母親がサイレントコールドの記憶を話してくれた時、そんな風習を聞いた覚えがあった。

よく考えてみれば、この部屋にその痕跡も残っているではないか。所々落ちている氷の固まりは、自然の物ではなく、魔法の産物だったのだ。

勝手に一人で納得しているレオンを見て、ベティとステラは顔を見合わせる。さすがに付き合いの長さが違うのか、最初に気付いたのはベティの方だった。

「あ、もしかして・・・ステラがジーニアスだって気付かなかった？」

「え？あ、はい。何かおかしいとは思ってたんですけど」
ベティは笑った。

「普通気付くと思うなー。だって、ステラはどう見てもアスリート

じゃないでしょ？私じゃないんだから」

堂々と自分で言えるところは、さすがベティである。

彼女は瞳だけ真面目な表情になる。

「ジーニアスなんだから、アスリートのレオンが守ってあげないといけないんだよ。それに、レオンは先輩でもあるんだから」

普段の言動や行動に惑わされるが、ベティも思いやりのある女の子なのだ。

レオンは頷く。

「はい。分かってます」

元の笑顔に戻ったベティは、ステラの肩に手を置く。

「それと、いくらステラが可愛いからって変な真似をしたら、あの世よりももっと遠いところに送ってあげるから」

「・・・はい」

ステラの方を向いたベティは、その頭を軽く叩く。妹の面倒をみている姉のようだった。

「まあ、レオンだから心配いらないけどね。それでも、普段から手懐けておくのが安心かな！。後で、いろいろコツを教えておいてあげる」

「コツって・・・」

そんなものを見切られていたのだろうか。もしかしたら、いつの間にか手懐けられていたのかもしれない。

「何？教えてあげようか？」

ベティの微笑みに、レオンは力なく両手を振った。

「いえいえ・・・遠慮します」

「遠慮しなくてもいいよ？そんな手間じゃないし」

「・・・僕のコツは、そんな簡単なものなんですネ」

「そんな言い方されると、試して欲しいのかと思っちゃうよね」

「いえ！そんな、滅相もないです！」

滅多に使わないような言葉を使ってしまったが、内容自体はいつもの会話とほとんど同じだった。

しかし、このやりとりには意外な効果があった。

ステラが笑っていた。

なんというか、その笑い方が物凄く上品だった。手で口を隠しているのは当然だが、それだけではなくて、物腰というか、仕草が凄くお淑やかだった。彼女の瞳や髪に相応しい気品が、確かにその仕草にはあった。

それにはレオンだけではなく、ベティも目を丸くしていた。

やがて、ステラはその視線に気付いて笑みを止めた。

「あ・・・すみません。つい笑ってしまっただけ」

前と同じ口調だが、気のせいか上品な口調に聞こえた。

「うーん・・・そっか、なるほどね」

何かに納得したように頷くベティ。レオンは何も気付かなかったが、彼女は何か分かった様子だった。

「なるほどって何がです？」

ベティは、ある意味で完璧な笑顔になってこちらを向く。

「聞きたい？」

「・・・いえ、いいです」

早めの撤退が賢いのだ。

「まあ、あれだよ」

不意に、彼女の笑顔が優しい色になる。

「私にとってはもう親友だから。どんな所から来ても、どんな身分でも、この町ではステラはステラって事なんだよ」

急な発言に驚いたものの、その言葉自体は、レオンにも異論はなかった。

確かに、この町では自分は自分だ。田舎から来ても、才能がなくても、誰も差別したりはしなかった。ありのままの自分を見てくれたのだ。

「・・・そうですね。そうだと思います」

きつと優しい表情になっていたと、自分でも思う。

その表情のまま、ステラを見た。

彼女は困惑の中に不安が混じったような表情だった。何か事情があるのだろうという推測くらいしか出来ない。

「だけど、それでいい。」

「ようこそ、ステラ」

「そうだねー。ようこそユースアイへ。これからよろしく」

青い瞳の少女は戸惑いつつも、2人の表情が移ったように笑顔になった。

「よろしくお願いします」

その顔に浮かんだ笑顔こそ、何よりこの町を象徴するものだと、レオンは確かにそう思った。

青年達の静かな昼

のどかな時間が嫌いなわけではない。

アレンは腕組みをして、遠くの空に浮かぶ雲を見つめながら、そんな事を考えていた。

晴れ晴れとした春空には、その雲しか浮かんていない。掛け値なしの快晴の中、ただひとつだけ漂っている丸い雲。何もする事が無い為、ついあんな物を眺めてしまう。何も考えずに、ただ見つめるだけ。その為だけにあの雲は存在していると言っても、もしかしたら過言ではないかもしれない。

ここは、町の西口と呼ばれる場所だった。

大通りの石畳が途切れる境界。町の内と外を分けている場所。ここから町の方を見れば、多くの建物と人々が、反対を向けば、平原と林、そしてその向こうの山々が見える。そんな場所である。

自分がここに居るのは、一応仕事である。その仕事の内容を一言で言うなら、それは警備という事になるが、実際には見張りと言った方がいい。警備しなければならぬような事態が、この町で起きた事がない。もっと言えば、見張りが必要だった事もない。本当に名ばかりの見張り番である。大きい町では衛兵と言うかもしれないが、ここは自治都市である為、兵という言葉は使われない。戦力を持つていると見なされると、いろいろ面倒らしいのだ。

一応と言ったのは、本来なら、アレンがここで見張り番をする事はないからである。アレンの本業はもっぱら訓練所の教師であり、こちらは片手間の仕事と言ってもいい。今までほとんど見張りをする事はなかったのだ。訓練所の仕事の方が忙しいのは周知の事実だし、この見張りなんて飾りだということも皆知っている。ただ、何かあった時の為に、名前だけでも腕の立つ人間がいた方がいいと

いう理由だけで、アレンは名目上警備員という事になっている。

だが、最近になって少し状況が変わった。

ここから見て右手。ユースアイから北西の方角には険しい山脈が広がっているが、そこで最新なダンジョンが発見された。その山脈を越えた向こうの町では、モンスターが度々襲来してきて、結構な騒ぎになっているらしい。

そうになると、反対側のこちらにもモンスターがやってこないとは限らない。実際、自分が指導している冒険者見習いのレオンが、西の平原でモンスターと遭遇した事もあった。つまり、この西口を出た先である。

アレンがここに駆り出されているのは、町の人々が不安になったからだ。要するに、見張りがただの飾りでは、モンスターが来たらひとたまりもないという事である。その不安を和らげる為に、アレンが週に1日程、暇を作ってはここに立つ事になった。自分から申し出たというわけではないが、誰から頼まれたというわけでもない。なんとなく無言の圧力があつたというのが正しいかもしれない。

その事自体には、特に不満があるわけではなかった。自分が剣の腕を磨いているのは、言ってみれば町の人々の安心の為であり、今の状況はその目的を果たしていると言ってもいい。訓練所の方も忙しいのだが、同僚が手伝ってカバーしてくれている。指導しているレオンも、休みが少な過ぎるかもしれないと思っていなくらいなので、ある意味ちょうどよかったとも言える。

それでも、困る事がひとつだけあった。

暇過ぎるのだ。

汗水垂らして働いていたというのは少し違うが、アレンは子供の頃からずっと訓練に明け暮れていた。毎日身体を動かすのが普通だったのである。晴れの日はもちろん、雨の日も雪の日も嵐の日でさえも、トレーニングは欠かさなかった。時間があると思った次の瞬間には、剣を握るか筋トレか、とにかく身体を動かしていた。

だが、訓練所の教師になつてからは、それ以外にも事務的な仕事が増えた。それでもなるべく訓練を続けていたものの、いつしか身体を動かさなくても平気になっていた。その時は代わりに頭と手が働いているのだ。しかも、そういった仕事はこなしてもこなしても減る事がない。次から次へと新しい仕事が出てくる。仕事を始めてから、暇だと思つた事はほとんどなかった。

そんな時に、この見張りの仕事である。

仕事とは名ばかりの、手持ち無沙汰の時間。仕事という名前がついているだけで、実際には何もしていないに等しい。しかも、ここで事務作業をするというわけにもいかない。机とイスがあればやれない事はないのかもしれないが、見張りの仕事を完全に疎かにしているわけだから、町の人達が余計不安になるだろう。ここで筋トレを始めるのも同じ事だ。それならば、自分以外の人間が立っていた方が数倍ましに違いない。

そんなわけで、人生でかつてない程、暇を持て余しているアレンである。

何もする事がない。こんな時間があるとは思わなかったし、この時間がこんなに苦痛だとも思わなかった。暇で仕方ないという言葉を聞く事はあつたものの、こんなに深刻な悩みだとは思わなかった。自分は何をしているのだろう。

哲学的な意味ではなく、単純な意味である。もしかしたら、結局は同じ意味なのかもしれないが。

何だろう、この時間は。

そんな馬鹿みたいな疑問まで浮かんでくる。

そこで、不意に馬の駆けてくる音が近付いてきた。音がはっきり聞こえるという事は、肉眼で十分見える距離である。ぼんやりと空を見ていなければ、もっと早くに気付いただろう。見張り役としては完全に失態である。

それはそうとして、アレンは音が近付いてくる方角に視線を向ける。

西の平原を駆けてくる馬とその上に乗る男。顔がはっきり見えたわけではないが、その男が誰なのか、アレンには分かった。

やがて、この場所までやってきたその男は馬から降りて、こちらをじっと見つめてくる。相変わらずの、ワイルドを超越したような身だしなみだが、その右目の碧色だけは、いつ見ても不思議な力がある。

「・・・アレンか」

ホレスの声はあまり大きくないが、不思議と聞き取りやすい。

「そうだな」

「見張りか？」

「ああ」

「珍しいな」

「そうでもない」

「そうか」

それっきり会話は続かなかった。

2人とも、基本的に無口な人間である。必要だと思った事以外は話さない。つまらない会話をするくらいなら、黙っていた方がいいという人種なのである。

静かに風が吹いていた。それが草を揺らす音の方が、ここにいる男達よりも騒がしいくらいである。

結局、20分程度は待たただろうか。やがて、町の方から、ホレスの待ち人達が歩いてやってきた。アレンもそのスケジュールを知っていた為、わざわざ聞かなかったのである。ホレスも確認しなかったから、こちらが知っている事を察していたのだろう。

だが、待ち人の人数は、予定の人数よりも1人多かった。

「ごめんねー、ホレス。ちょっと別の用事に手間取っちゃって」

ブラウンのポニーテールの少女、ベティが明るく言った。

その横に立っているレオンは予定通りである。彼らが時折ホレスと弓の訓練をしている事は、彼らを知っている人間なら周知の事実だった。

だが、もう1人少女がいた。この辺りでは滅多に見かける事が無い、ブロンドのショートヘアと青い瞳。この町ではかなり目立つに違いないが、アレンも見覚えはない。

その少女は2人の少し後ろに控えるように立っている。気のせいかな、こちらを警戒しているような気配を感じた。

「いや・・・その用事は済んだのか？」

ホレスが聞いた。物静かというか、事務的な声である。

対するベティの返事は、対照的に親しげで活力に満ちていた。

「まあねー。だけど、私はまだちよつと用事があるから、今日はレオンと2人で訓練してくれないかな」

「その子は？」

唐突な質問だが、ベティは慣れた様子で答える。実際、彼女はホレスと付き合いが長いから、彼の脈絡のない質問にも慣れていているだろう。

「ステラだよー。昨日来た見習いなんだ。だから、いろいろ町を案内しておこうと思って」

彼女の声は明るかったが、ステラと呼ばれた少女の方は、心なしか不安げだった。

「仲間か？」

またもや唐突なホレスの質問。これはレオンに向けられたものである。彼はまだ短い付き合いだが、戸惑ったのは少しだけだった。

「あ、はい」

「なら、今日はいいい」

「え？」

ホレスは既に視線を遠くに外していた。

「昨日来たばかりなら、仲間を知る時間が必要だ。今までの戦術を見直す必要もある。それはなるべく早い方がいい」

「そうですか・・・そうですね、分かりました」

あっさりと引き下がるレオン。ここで変な気遣いをする、ホレスは余計困る。それが分かるくらいには、2人の親睦も深まったと

いう事らしい。

「ゴメンねー、ホレス。また今度お詫びするから」

「別にいい」

「相変わらずつれないな」

「それより、時間はいいのか？」

「ベティは肩をすくめたものの、やはりすぐに引き下がった。

「じゃあね、ホレス。今度また美味しい物を作っていくから」

「ああ」

やけに素直だが、彼は以前に生死の境をさまよった事がある。その時の原因がベティの手料理だったらしい。その事があるから、彼は彼女の手料理を断つたりはしない。気を遣っているとも言えるが、その逆ともとれる。

軽く手を振ってから、ベティは去っていった。レオンはこちらにも頭を下げたが、ステラの方はベティに背中を押されるようにして行った為、挨拶らしき動作はなかった。それどころか、結局彼女は一言も喋らなかった。初対面だから緊張していたと言えない事もないだろうが、そもそも、自分達のような無口な男を相手にする人というのは、結構喋りにくいものらしい。だから、一言も発せず去っていく人というのは、実は珍しくない。

「よかったのか？」

3人が去ってから、アレンはホレスに聞いた。

「何がだ？」

「せっかくここまで来たんじゃないのか？」

「さっき言った通りだ」

「代わりにベティに付き合えばよかった」

「俺がいても邪魔なだけだ」

「自分で言うのか？」

「誰が見てもそう言う」

もしかしたらそうかもしれない。そう思った瞬間に、この会話が終わる事が決定している。

また静かになった。

このまま帰るだろうと思っていたが、何故かホレスはその場から動こうとはしなかった。

「・・・帰らないのか？」

気になつて聞くと、ホレスは少し間を空けてから聞いた。

「少し話をしないか？」

驚いた。

珍しいというか、予想だにしなかった。年が近いとはいえ、幼なじみというわけではない。多少親しいとはいえ、傍から見ればただの知り合いにしか見えない。その程度の間柄なのだ。

「・・・そんなに意外か？」

表情から見抜かれたようだ。彼はその変わった瞳そのままに、なかなか優れた洞察力を持つている。

アレンは質問に答えなかった。訂正する必要のない事だったからである。その代わり、こちらからも質問をする。

「何を話す？」

ホレスは即答した。

「いや。特に考えていない」

「・・・本気か？」

「たまにそういう気分にならないか？」

「ならないな。なるのか？」

「ああ」

「孤独過ぎるんじゃないか？」

「前よりは孤独じゃない」

会話が途切れた。

当然だが、何か話さなければならぬとは考えない。だが、不思議と今は、この生粋の狩人の事を考えなくなった。

ホレスと初めて会った時には、自分は既に教師だった。しかし、自分とは逆に、彼は仕事なんてものに従事していない。ウイスキーの蒸留所の手伝いをしているが正式に雇われているわけではなく、

彼曰く、ベティの祖父に対する義理を果たしているだけらしい。自分から頼み込んで、手伝わせて貰っているという感覚のようだ。だが実際には、あの蒸留所はこの男なしには運営出来ない。ほとんど全ての仕事を彼がこなしていると言っても過言ではないはずだ。それでも彼は給料を受け取らないので、ずっと貯まる一方だというのを、以前ベティから聞いた覚えがある。

この男が何を考えているのか、全く分からないというわけではないが、完全に把握しているとは言い難い。

最初に会った頃と比べると、確かに彼の瞳は穏やかになった気がする。以前は、見る物全てを疑うような視線をしていた。それに、身のこなしがもつと颯爽としていた。今は視線も丸くなったし、以前程身体にキレがない。どうやらそれは、死にかけた時に変わったようだが、後遺症というわけではないらしい。実際、彼の戦闘能力は、以前よりも落ちるどころか、逆に増している程である。

そんな事をたっぷり考えていられるくらいの時間、2人は一言も喋らなかった。

すると、再び町の中から、この西口を訪れる者がいた。

荷馬車の前に座っている人物。ダークグレイの服を来た顎髭の男は、名前をガイと言う。実を言うと、アレンと同年である。

「よう、お2人さん。暇そうだな」

ゆっくりと馬を歩かせながら、ガイは声をかけてくる。実際その通りだったが、仮に違ったとしても、2人はいちいち訂正しなかったかもしれない。相手の発言が正しい場合は、尚更相槌を打ったりはしない。

アレンの前で荷馬車を止めてから、ガイは少し苦笑したようだった。

「一言くらい返事しろつて。俺が1人で喋ってるみたいだろ？」

「そうだな」

答えたのはアレンだけだった。ホレスはガイには興味なさげに、山の方を見ている。

「・・・いいよなあ、ホレスは。あんなのでも、ベティちゃんが構ってくれるんだから」

ホレスはこちらを見ないまま返事をする。

「構って貰ってるわけじゃない」

「・・・なんだろ。無性に腹立つな」

「どうしてガイが怒る？」

「お前には分からないだろうな。俺の気持ちは」

「孤独だな」

「やめろつて。今はちよつと悲しくなるから」

本当に悲しそうに見えたわけではないが、アレンは気になったので聞いた。

「どうした？昨日来たばかりじゃなかったか？」

「そうなんだけどな。たまたま見かけた女の子がユースアイに行きたいって言うから、乗せてきたただけなんだよ」

「ああ・・・ステラとかいう」

ガイは少し驚いたようだった。

「あれ、何で知ってるんだ？」

「さっきここまで来た」

「ここ？あ、そうか・・・ホレスに用があつたわけか。だったら、何でホレスはまだここににいるんだ？」

素っ気なく本人が答える。

「町の案内をすつていたから、今日は休みにした」

にやりと笑つてから、ガイは答える。

「へえ・・・まあ、別にいいけどな」

「なら聞くな」

一度笑つてから、ガイは答えた。

「それは残念だったな。あの子にベティちゃんを取られたわけだ」

いろいろ間違っているのは明らかだが、ガイ流のジョークだろう。彼の場合、沈黙に耐えられないからなのか、必要以上にジョークを交えて話す事が常である。

それが分かっているホレスは、無表情で答える。

「俺のものじゃない」

「いや、いいんだって、無理しなくても。というか、あのステラって子、ここに来たのか？」

彼がこちらを向いて聞くので、アレンが答える。

「そうだな」

「いや・・・何もなかったか？」

質問の意味が分からなかったが、とりあえず思ったまま答えた。
「なかったな」

ガイは一人で何かを納得しているようだった。

「どうした？」

「いや、ちょっとな。あのステラって子なんだけど、ちょっと変わってる子でさ。男が苦手とかで、昨日も、絡んできた男を氷漬けにしてたんだ」

「ジーニアスなんだな」

「そこか？感想は・・・まあ、それはともかく、そんな子に攻撃されなかったって事は、お前らは男として認められなかったって事になるな」

馬鹿馬鹿しいとアレンは思ったが、それよりも早く、ホレスが具体的な行動に出ていた。気付いた時には、既に彼は馬に跨がっている。

「・・・アレン。次に会った時には、もう少しまともな話が出ると思う」

「そうだな。今より下らない話はそうそうない」

さすがに、ガイも黙ってはいられなかったらしい。

「お前らな・・・場を和ませようっていう俺の気遣いだろうが」

ホレスは申し訳程度にガイを見る。

「気遣いだとしても、それなりに会話の質が求められると思うが」

「・・・お前にだけは言われたくないな」

「だいたい、お前の話はおかしい。そんな危険人物だしたら、今

頃町中が氷柱で溢れている」

実際、アレンもそうだと思った。

「いや、まあ、そうなんだけどさ。でも、俺はちゃんと、男だから怖いって・・・ああ、思い出したらへこんできた」

ガイはうなだれる。

どうやら、ステラから怖いと言われて傷ついたらしい。理解し難い心理だが、女性に一所懸命な彼にしてみれば、結構ショックだったのかもしれない。

だが、そこで同情するような2人ではなかった。

「どうせ強引な真似をしたんだろうな。そんな真似をされれば、女性なら誰だって怖がる」

アレンの言葉にホレスが続いた。

「あのステラという娘はまだ若く見えた。そんな娘に手を出そうとしたのは、自分の神経を疑った方がいい」

「・・・それも、お前にだけは言われたくないな。ベティちゃんは18で、ステラは16。その事実があつて、何で俺だけ犯罪者みたいな言い方が出来るんだよ」

「俺は手を出してない」

「こっちは手を出したみたいに言うなって！俺だって出してないし！」

「説得力がない」

言い返そうとしたガイだったが、やがて諦めたように大きく溜息を吐いた。

「・・・もういい。じゃあな。せいぜい幸せになつてくれ」

ゆっくりと動き出した荷馬車にアレンは声をかけた。

「そんなに幸せになりたいなら、前言っていたように、そろそろ身を固めたらどうだ？」

ガイは一瞬だけ振り向く。表情は思いの外明るかった。

「結婚なんてまだ無理だな。せめて、手に職がないとなあ」

「この町で働いたらどうだ？」

その言葉に一笑して、ガイは片手を挙げて答えた。

「ここにいい奥さんがいたらな。結局、いい人が見つからないと、そんな気にもなれないって事だな。そんな人を見かけたら、今度会った時に教えてくれ」

ホレスの横を通る時も、彼は声をかけた。

「じゃあな。ベティちゃんと仲良くな」

「そうだな」

そのままゆつくりと、馬車はユースアイを後にした。

アレンはその後ろ姿をなんとなく眺めていたが、ホレスは北の山を見つめたままだった。

高原の風が吹く。

結局、ガイの荷馬車が見えなくなるまで、2人は一切口を聞かなかった。

「・・・まだ話をするのか？」

一応聞いたものの、ホレスは馬に跨がったままだったし、何か話題があるとも思えなかった。

案の定、ホレスはこちらに背を向けた。

「いや、また今度でいい」

「今度があるのか？」

「酒は飲めるか？」

急な質問に、アレンも慣れている。

「ああ」

「今度持ってくる」

「見張り中だ」

「終わった後でいい」

「ガレットさんの酒場へは行かないのか？」

「まだ行かない」

「そうか」

馬が走り出した。

ガイが消えたのと同じ方向。だが、あの速度ならすぐに追いつい

てしまっただろう。そこでまた何か言葉を交わすのだろうか。

空を見上げると、丸い雲の位置は変わっていなかった。

正直、得るものの少ない会話だったと思う。だが、よく考えてみれば、あの2人は自分よりもずっと多くの時間を、たった1人で過ごしている。何もする事がない時にどうするのか、聞いておけばよかったと、今更ながら気付いた。

今度会った時に聞けばいい。

だが、次がある保証はどこにもない。ホレスもガイも、モンスタ―がいるかもしれない方角へと向かって行ったのだ。それはある意味で、冒険者と同じと言えない事もない。彼らがわざわざ危険なダンジョンに向かうのと、どこか似ている。危険を引き替えにしても、得たい何かがある。危険を省みずに、自分の生き方を貫いているのだ。

だから、ある日突然彼らが帰ってこなくなっても、全く不自然ではない。

自分が考えても仕方のない事だが。

こんな事を考えてしまう程暇だ。

適度ならいいが、暇があり過ぎると、きっと考え過ぎて疲れてしまっただろう。

本当に、今度会ったら聞いておかなければ。

お前達はいつたい何を考えているんだと。

そうかとアレンは気付く。

意外と意味のある質問なんだな。

聞いたただだと馬鹿な台詞に思えるが、その実は結構深い言葉なのかもしれない。

それにしても暇だ。

結局、この日にアレンの暇が解消される事はなかった。

その先に解消される事があったのか、それも今は定かではない。

フレキシブル・ブルー

「冒険者にしておくのが惜しいな」

両開きの酒場のドアを蹴破るようにして出てきたポニーテールの娘は、レオンの姿を見つけるなり、そう言い放ってきた。

汚れた雑巾を、やたらへこみが目立つバケツの中に放り込んだところで、ようやくレオンは返す言葉をみつけた。

「・・・そんな開け方したら、ドアが開かなくなりますよ」

その前に、蹴破るという文字通り、蹴った箇所には穴が空くかもしれない。

ベティは笑った。本当に、彼女はいつも明るい。

「そうだねー。でも、ほら、今両手が塞がってるから」

確かに彼女は両手で大きなバスケットを抱えていた。彼女が手料理を作った時、よくそれを持ち運ぶのに使っている、特大の代物である。

外からでは重さは分からないが、とにかく大きいので大変そうだった。

「僕が持ちますよ。あ、すみません。その前に、これ片づけてきます」

バケツを持ち上げながら言うと、彼女はレオンが立つすぐ脇の壁を見る。先程までそこを掃除していたから、まだ少し濡れている。

「掃除なんかしないでいいのにー。今までに、そんな事してた見習いの人いないよ？」

「そうですね？でも、じつとしてるのも落ち着かないので」

にやりと微笑むベティ。悪い前兆以外の何者でもない。レオンは一歩たじろいだ。

「もしかして・・・レオンは何かアピール中？」

「アピール？」

「例えば、まずお父さんに気に入られておいて、外堀から攻めようとか、そういう事？」

「外堀？」

よく意味が分からなかった。自分はどこに攻めると思われているのだろう。

こちらの顔をじっと見ていたベティは、やがて苦笑する。

「ダメだなー。意味分らないって感じだよな」

「あ、はい・・・何を攻めるんです？」

「言ってもいいけど、レオンは卒倒するかも」

「・・・片づけてきますね」

早めに避難しておく事にする。

ベティの横を抜けて勝手口の方へ向かおうとしたが、そこでレオンは気付いた。

「そういえば、ステラはどうしたんです？」

一緒に出てくると思っていたが、出てきたのはベティだけだった。彼女は片目を瞑ってから答える。これも、全然いい前兆ではない。思わず一歩距離をとってしまった。

「いろいろね、準備があるんだよ」

「・・・分かりました」

ここで聞き返したらまずい事になる。そう直感が警告していたので、レオンはそこで切り上げて勝手口に向かった。

片づけをしてから、手を洗う。再び正面入り口の方へ戻ってくると、今度はステラが出てきていた。繊細な金のショートヘアに、吸い込まれるような深みのある青い瞳。最初に会った時は怯えているような印象しかなかったが、彼女が幾分慣れてきた為なのか、今はそうでもない。

レオンが抱く彼女の印象を一言で言うなら、どこかアンバランスな少女だろうか。やや小柄で華奢なのに加え、大きな瞳が目を引きから、実年齢よりも多少子供っぽく見えるのは確かなのだが、基本

的に物静かで落ち着きがあつて、不思議と大人っぽくも感じる。それらが合わさつて、どこか浮き世離れた幻想的な印象を感じるのだ。まだ会つて3日目だから分らない部分が多いとはいえ、今まで会つた事がないタイプの人間なのは間違いない。

改めて2人に挨拶してから、レオンはバスケットを受け取った。中から小麦と肉のいい香りが漂ってくる。その匂いに食欲をそえられるが、かなり詰め込んだのか、結構重かった。

3人はユースアイの暖かい大通りを歩き始める。

町も春本番といった様子で、道行く人も明るい色の服が多い。レオンはブラウンが中心の冴えない服だが、ベティは淡いピンクのワンピースを、ステラは茜色のローブを着ている。

昨日もこの3人で町の中を闊歩したのだが、正直注目の的だったと言つてもいい。当然だが、ステラが目立つのである。金の髪も青い瞳も、この地域では一般的ではない。本人はその視線が気になつて仕方がなかったようだが、ベティの方は気にかける様子もなく、行き交う町の人達と挨拶を交わしては、律儀にステラの事を紹介していた。どうやら、彼女の事を周知させるのが目的だったらしい。顔見知りを増やしておけば、窮屈な思いをしなくて済むという事のような。それに1日使うというのも、彼女らしい豪快な手法だが、彼女らしいエスコートと言えるかもしれない。

その反動というのもなんだが、結局昨日はあまり冒険者らしい事が出来なかった。ギルドでステラの登録は出来たのだが、それ以外はほとんど町を歩いただけだった。レオンはホレスに弓を教えて貰う予定だったのだが、気を遣われたらしく、あつさり中止になった。だから、この2人に着いていったのだが、それはそれでなかなか大変だった。

ホレスとアレンはあつさりしていたのだが、途中でリディアとデイジーに会つた時が凄かったのだ。とにかく話が長いのだ。

どれくらい長かったかというと、4人の女子が話し始めてしばらくしてから、たまたまラッセルが通りかかり、する事もないので彼

の仕事を手伝い、その一環としてニコルのガレージまで商品の配達に行き、そこで勉強していて分からなかった事のアドバイスを貰い、思わぬ長話になったから急いで帰ろうとしたらブレットと出くわし、そこで謎の因縁をつけられながらも無視するのも悪いと思って付き合い、彼の気が済んで解放されるのを待ってから4人の所まで戻ったものの、それでもまだ会話が続けていた程だった。しかも、全く飽きる様子もなく。

このまま止めなかったら本当に日が暮れる気がしたので、レオンがそれとなく進言すると、ようやくそこで会話が打ち切りになった。デージーは笑顔で、また今度続きを話しましょうと言っていたが、これ以上話す事があるなんて信じられなかった。

そんな時間の使い方をしていたわけだから、伝承者を訪ねるような余裕もなかった。昨日行けたのは、ギルドと診療所くらいなものである。

ただ、ステラはジーニアスだから、鍛冶屋を訪ねる必要はない。武器を使う人はいるが、鎧を着た上で魔法を使うというのは、実質不可能な事らしいのだ。魔法が使えないレオンにはよく分からないものの、魔法を制御する為には周囲の環境を肌で感じる必要があるらしい。鎧を着ているとそれが上手く感じ取れないのだ。ステラが着ているローブは、ジーニアスの身分証明みたいな物でもあるが、元々はその感覚を阻害しないように考案された物らしい。

この話も、昨日ステラから直々に教えて貰ったばかりだった。母親に才能が少しあったとはいえ、レオンは魔法の事をほとんど知らない。これから一緒に戦うのだから、さすがにそれではまずいに違いない。多少は知識を得ておくべきだと思い、今日もこうして着いてきたのである。

今日の目的地は3力所だった。

まず、魔法用品を扱うというシャールロットの店。そして、ジーニアスの伝承者であるフィオナとハワード。シャールロットとフィオナは聞いた事のある名前だが、ハワードは初めてだった。どんな人な

のか聞いてみると、意外にも、ブレットの父親だと言う。

昨日初めてその事実を聞いたレオンは、思わずベティに尋ねていた。

「という事は、ブレットさんって、実はジーニアスなんですか？」

見た目はどう見てもアスリートだった。だけど、よく考えてみれば、ジーニアスが身体を鍛えていたとしても、別に問題はない気がする。

ベティは笑って首を振った。

「全然。というか、ハワードさんもほとんど魔法が使えないんだよ」「え？それって・・・」

そんな伝承者でいいのだろうかと思ったが、ベティはそれ以上は説明してくれなかった。

「実際に会ってみた方が早いと思うな。ブレットとは違って立派な人だから」

最後の一言が気になったものの、一応頷いたレオンである。

というわけで、3人は最初の訪問先であるシャーロットの店を目指して歩いていた。道案内をしているのは、当然ベティである。訪問の順番を決めたのも彼女だった。

大通りを離れ、狭い路地に入っていく。それでも、うら寂しいというわけではなく、むしろ活気があって賑やかである。この道は小さな商店が軒を連ねているようだ。木材が並んでいる店もあれば、パン屋や小物雑貨屋、寝具店やクリーニング店もある。レオンの村にはこういう店舗はほとんどなかったから、看板から推測しただけなのだが。

「こんな場所があったんですね」

周囲を見回しながらレオンが言った。この辺りには初めて来るのだ。町をゆっくり歩くような事がなかったし、そんな必要もなかった。衣食住、ほとんどが宿屋で間に合っていたのだ。

誰の返事もなかったが、ふと気付くと、ベティとステラは道を歩くお婆さんと親しげに話している。2人も笑顔だが、お婆さんの方

も目尻に笑い皺が寄っている。こういう光景を見ると、レオンもついつい顔が綻んでしまう。

お婆さんが挨拶をして去っていくと、ベティが聞いてきた。

「何か言った？」

レオンは微笑む。

「大した事じゃないです。それより、シャーロットさんのお店はどの辺りなんですか？」

ベティは腰に手を当てた。顔は笑っている。

「シャーロットさんじゃないでしょ？シャーロット」

「・・・まだ知り合いでもない人を、呼び捨てには出来ません」
そこでベティは少し首を傾けて苦笑した。

「というかね・・・シャーロットをさん付けで呼ぶ方が、ちょっと無理があるんだよね」

「はい？」

彼女は返事をしなかった。ステラの肩を軽く叩くと、2人で先へと進んでしまう。

どういう意味だったのかは分からないまま、レオンも特大バスケットを両手にその後を追う。

その後も、ベティとステラは時々立ち止まり、道行く人や店員と会話しながら少しずつ進んで行った。レオンは少し遅れてその後を着いていく。もちろん挨拶は交わすものの、基本的に話しているのは、前に行く少女2人だった。

昨日よりも慣れてきたのか、ステラも少しずつだが笑顔が目立つようになってきた。ただ、最初に感じたように、どこか気品のある微笑み方なのだ。デイジーも上品な仕草をするが、それよりももっとである。否応なく、自分達と違う身分なんだと思い知るのだ。それを最初に見る人が面食らった表情をする程である。

そして、それはステラにとって嬉しくない事らしい。その表情を見る度に、彼女は笑みを引っ込めてしまうのだ。優しいこの町の人々は、気を遣って微笑んでくれるのだが、彼女はぎこちない笑みを

返すのがやつとなのである。彼女の本来の笑みを隠すように。

それがステラのどういう心理によるものなのか、レオンには断定出来ない事だと思う。自分の生まれを知られたくないのか、或いは町の人と壁が出来るのが嫌なのか。もしかしたら、他の全然違う理由かもしれない。

仲間として、先輩として、彼女に直接聞いておくべきなのかもしれない。だけど、レオンは聞かない事になっている。彼女が必死に隠そうとしている事を、会って数日程度の間柄で聞き出そうとしても、その後いい関係が築ける気がしないからだった。それに、自分だつて人に見られたくない部分がある。それを直接口に出してはいないが、それでも、今はこの町の人に受け入れて貰えたと思えるのだ。

だから、彼女が秘密を言おうと言つまいと、そのままの彼女を受け入れればいいのだと思う。彼女の秘密も含めて、丸ごと受け入れればいい。この町の人達が自分にくれたように。

そんな事を考えているうちに、先を歩いていた2人の足が止まった。

彼女達が正面に立って見ているのは、普通ならただの民家にしか見えない家だった。

木造2階建てというのはこの町では一般的だが、この家はまさにその典型と言つてもいい。だが、この辺りは周りが商店だらけなので、そういう意味で浮いていた。他の建物は看板があったり、中には路上に商品を陳列している店もあるから、外見でだいたいどういう店かは分かる。だと言うのに、この店はそれらしき看板もないどころか、人氣が全くない。この建物の前だけぽっかりと空白が出来ているような、そんな感じである。

「ここですか？」

「そうだねー」

レオンの質問に、ベティは軽く答える。

「あ、そうだ。ほら、向こうがラッセルの店だから」

彼女がそちらを見もせずに指さした場所はすぐ隣の建物である。

同じ様な2階建てだが、こことは違い、外からでも商店だと分かる。具体的には、商品が多過ぎるのか、雑多な物が木箱に入れられた状態で屋外に置かれているので、一目で雑貨屋だとは分かるのだ。ただ、ここも人気がない。ドアは開けっ放しだが、中に誰がいるとは思えなかった。配達か何かに出かけているのかもしれない。

少し覗いてみようかと思ったレオンだが、ベティにはそんなつもりはないらしい。ステラの手を握って、目的の建物へと入っていく。ノックどころか、挨拶もしなかった。

その後を追って、レオンも中に入る。

入ってみて、とりあえずここが商店だった事に安心した。あまり広くない部屋だが、確かにそれらしい品が陳列されていたからである。

ここの店主は几帳面な性格のようだ。正面に大きなカウンターがあり、部屋の左右の棚に商品が並んでいるのだが、凄く綺麗に整頓されている。左手には怪しげな植物や見慣れない鉱石が、右手には織物や書籍がというように、きちんと種類毎に分類されているようだ。

ただ、その店主らしき人間が見当たらなかった。誰もいないのである。もしかしたら、出掛けているのだろうか。あるいは、奥に見えるドアの向こうで休憩中なのか。

「留守ですか？」

レオンの質問に答えず、ベティはステラの手を離してから、つかつかとカウンターまで歩いていく。そして、カウンターの陰を覗き込んだ。

「シャーロット。お客さんだよ」

どうやらそこに店主が隠れていたらしい。なんでそんな場所にいるのかは不明である。

ベティに見つかったらしい店主だが、こちらに顔を見せようとはしなかった。ただ、彼女の声だけが聞こえた。

「・・・今ちよつと忙しい。また後で来て」

冷たいというわけではないが、淡々とした口調だった。どこかの空にも聞こえる。

だが、問題はそこではない。まさかの職場放棄である。レオンは啞然としたが、もつと驚いたのはステラだっただろう。

当然と言っべきか、ベティが素直に帰るわけがない。どこからかうような口調になる。

「いいのかなー？そんな事言って」

「何を言おうが、私の勝手」

「お客さんだよ？普通はもっとサービスするでしょー？」

「うちは普通じゃないから」

結構難敵だった。ベティにここまでの口が聞ける人は珍しい。

だが、どうやら彼女には切り札があったようだ。

「そっか。仕方ないなー。これからフィオナさんのところに行くんだけど、じゃあ、私達だけで行くね」

この時確かに、何かが変わった。そう思わせるのに十分過ぎるくらいの沈黙があったのだ。

それを確かめたのか、しばらく間を空けてから、ベティは言葉が続ける。完全に余裕いっぱい口調で、カウンターに両肘を突いて片足をぶらぶらさせている。

「私差し入れ持ってきたんだよねー。もしかしたら、フィオナさんと一緒にお昼かも」

その直後、積んでいた本が崩れるような音がして、カウンターの陰から店主が姿を見せた。

ただ、見えたのは顔だけだった。

この時レオンの脳裏には、いつか聞いたニコルの言葉が蘇っていた。ニコルに、シャーロットとはどんな人物か聞いた時の返答である。

僕に似てるよね。

見るまではどういう意味が分からなかったが、見たら一目瞭然だった。

本当にニコルそっくりだったのだ。

大きい瞳が幼く見える顔立ち。今はカウンターに隠れていてその顔しか見えないのだが、顔だけならまさに瓜二つである。違いと言えば、ニコルはショートヘアだが、今見ている少女は肩まで髪があるという事くらい。その髪も色は同じ黒なのだ。双子というか、本人の変装だと言われても疑いようがない。ニコルは変装の達人だといふから、余計ややこしい。

ただ、変装というのは容姿が変わるから変装なのであって、仮にこれがニコルだったとして、変装だと言い張るのは無理がある気がする。はつきり言つて、開き直っているも同然だろう。ただ別人だと言い張っているだけに等しい。

そんな事を考えている間に、シャーロットと呼ばれた人物は、こちらとステラの顔を数秒ずつ見つめてから、カウンター奥のイスに腰掛けた。腰掛けたというか、よじ登ったという方が正しいかもしれない。とにかく、そこでようやく本人の胸から上が見えた。

そこでまたひとつ、ニコルとの違いに気付いた。ニコルも小柄だが、彼女はもつと背が低いようだ。明らかに子供にしか見えない。10歳か下手するともつと幼いかもしれない。着ている服もフリルの多いブラウスで、完全に子供服に見える。胸の中心辺りにある、イエローの宝石が印象的だった。

そうなると、ニコルが彼女に変装するのは無理がある。体格が大きい者が、小さい者になるのは難しいだろう。

だが、よく考えると、ニコルの姿の方が変装の場合だつてあるのだ。考えていると頭が混乱してきたレオンである。今からニコルのガレージまで行つて、本人がいるかどうか確かめたくてくる。

彼女は再びこちらの顔を見回す。

「・・・仕事はどっち？」

無感情な声。本当に子供みいだ。こういうところは、ニコルとは全然似ていない。

「あ、私です」

そう答えてから、ステラはカウンターの前まで行く。そして、首の後ろに手を回す。どうやらネックレスを外しているようだ。外したそれを、シャーロットに手渡す。金色の鎖のネックレスだった。

シャーロットは首に下げていたモノクルを着けて、そのネックレスを観察する。その容姿のせいで、子供が遊んでいるように見えてしまうが、本人の表情は真剣だ。ネックレスを見ているというよりも、飾り部分に付いている大きな宝石が重要らしい。ステラの瞳を映したような、青い宝石だった。

いったい何をしているのか聞きたかったが、どうやら仕事が始まったようだから、邪魔をするのも悪い。だから、レオンは何をするでもなく、店内に陳列されている物をなんとなく眺めていた。しかし、不意にシャーロットから声がかかる。

「置いたら？」

声が大きかったが、自分に対する発言だと認識するのに、レオンは数秒を要した。

「・・・あ、はい？」

シャーロットは観察中の目を一瞬だけこちらに向ける。

「重そうだから。カウンターに置いて」

どうやらレオンが抱えているバスケットの事らしい。

「え、いや・・・」

「置いて」

なかなか強情である。

「じゃあ、お言葉に甘えて・・・」

カウンターに歩み寄って、その上にバスケットを置かせて貰う。

3人の少女は、一言も口を聞かずに青い宝石を見つめている。

その沈黙が数分程続いたところで、シャーロットが呟いた。視線は宝石に向けたままである。

「まだ生きてる」

何の事か分からなかったが、仕事を依頼した本人は当然分かっているようだ。ステラはすぐに答える。

「調整出来ますか？」

「出来るけど、これ、貴女の物？」

「はい」

「全然貴女に馴染んでないけど」

「その・・・贈り物なんです。ですけど、装飾品としてだったのでシャーロットの瞳が一瞬大きくなる。

「・・・本当？」

「はい。ただ、その・・・」

口ごもるステラだったが、シャーロットはまるで気にする様子もなく、宝石を睨んだまま言った。

「本当なら、それで問題ないけど」

逆にステラの方は、その言葉に驚いたらしい。表情だけでも分かる程だった。

「え？あ、その・・・」

「盗品じゃないなら問題ない」

「でも・・・」

「名前は？」

前置きも何もなかったので、すぐに反応出来なかったステラだが、躊躇うようにしながら答える。

「ステラです」

「見習い？」

「はい」

「サイレントコールド？」

今度は相当驚いたらしい。ステラは絶句して固まった程だった。しばらく待っても何も言わないので、シャーロットとステラをキョロキョロと見比べていたベティだが、やがてシャーロットに質問した。

「ステラの前世の話？」

今度はレオンが驚く番だった。

「え？本当ですか？」

ベティがこちらに振り向く。

「そうじゃないの？今の話の流れから言って」

今の話の流れなんてあったらどうか。だが、どうやらベティも、ステラの前世を知らないようだ。それはつまり、ステラが秘密にしていたという意味である。彼女がそんなポピュラーな話題を聞かなかったわけがないのだから。

シャーロットはようやく宝石から目を離し、モノクルも外してこちらを見た。

「・・・誰？」

今更な質問だが、彼女は真顔そのものだった。あまり愛想がない店長のような。本当に子供にしか見えない。

それはそうと、そういうえば、まだ名乗っていなかったレオンである。

「レオンです。初めまして」

一応微笑んだレオンだが、相手の表情に変化はなかった。

「もしかして、最近来たっていう、噂の？」

どんな噂なのか気になったが、とりあえず頷く。

「一応・・・」

こちらの身体を上から下まで見て、シャーロットはただ一言だけ呟いた。

「・・・まあ頑張って」

全然応援している口調ではなかった。暗に、見込みがなさそうと言われている気さえする。しかし、これがいい事なのかは分からないが、レオンは既に慣れてしまっている。

それでもつい苦笑してしまったが、控えめに答えた。

「はい。ありがとうございます」

すると、意外な事にシャーロットは頷いてくれた。無視されるかと思ったが、もしかしたら、さっきのは本当に激励の言葉だったのだろうか。

それはそうと、そこでようやくステラが復帰した。

「あの・・・どうして分かったんですか？」

そちらを向いて、シャーロットは簡潔に答える。

「ルーンを見たから」

「それは・・・分からないでもないんですけど。でも、見ただけで分かるものですか？」

「普通は分からないと思う。でも、私は慣れてるから」

「慣れてる？」

「フィオナのルーンを調整してるから」

レオンには不十分な説明だが、ステラはそれで分かったらしい。一度瞳を大きくしてから、やがてゆっくりと頷いた。

それでこの話題は終わったようだ。シャーロットが別の質問をする。

「他のルーンは持ってない？」

その言葉でようやくレオンは、その青い宝石がルーンと呼ばれる物なのだと分かった。ボスモンスターを倒すと得られる魔石を加工した魔法具である。

「あ、はい」

頷くステラを見てから、シャーロットはカウンターの下に両手を入れて、何かを探し始める。イスに座ったまま身を乗り出しているから、バランスを崩して倒れてしまいそうで、レオンはそれが心配だった。

彼女がカウンターの下から取り出したのは、片手に軽々と乗る程度の大きさの、透明な水晶玉だった。

それを黙って、ステラに差し出す。

とりあえずといった様子でそれを両手で受け取ったステラだが、意味がよく分かっていないようだった。

「あの・・・これをどうしたらいいですか？」

シャーロットは小さく頷いて、やはり端的に言った。

「その中に魔法を使って」

水晶に目線を落としてから、ステラは聞く。

「・・・どんな魔法を使えばいいですか？」

「全力で」

その言葉に反応したのは、カウンターにもたれ掛かっていたベティだった。

「えー、それはやめた方がいいんじゃない？この部屋が氷漬けになっても知らないよ？」

シャーロットはそちらを向いた。

「水晶の中だから平気」

「万が一って事があるんじゃないの？シャーロットは知らないだろうけど、ステラの本気は伊達じゃないよ？酔っぱらい4人をあつという間に動けなくしたんだから」

ステラに向き直って、シャーロットは少し考えてから言った。

「・・・制御出来る範囲で」

少し怖い気付いたようだ。

水晶を持ったステラはカウンターから少し後退した。部屋の中心辺りに立ってから、こちらに告げる。

「あの、たぶん大丈夫だと思いますけど、凍り付きそうだったら言っして下さい」

レオンとベティは顔を見合わせた。特に何か確認出来たわけではないのだが、ベティはすぐにステラに向き直ると、こう言った。

「平気平気。危なそうだったらレオンを盾にするから」

当然みたいな口調だった。だが、反論しても無駄なので、レオンは溜息を吐いてからステラに言った。

「・・・危なそうだったら盾が言いますから、気にせずどうぞ」

ステラは困ったように苦笑してから、正面に向き直る。そのまま少し俯いてから目を瞑った。

しばらくすると、彼女の顔と水晶の中間辺りに青白い光文字が軌跡を描いていく。幼い頃に母親が一度だけ使って見せてくれた魔法と、同じ光の色だった。

光は忙しなく動き、文字はどんどん連なっていく。ビギナーズ・

アイのボスが使った魔法と、文字の色は違うが、文字の数では負けていないように思える。

もしかしたら、本当にとんでもない大魔法を使う気かもしれない。そう思った瞬間、光の文字が青く輝いて消失した。

その直後、部屋を冷たい空気が駆け抜けていく。春の風とは全く違う、冬の風。

一瞬身構えたレオンだが、結局それだけだった。しかし、ふと気付くと、水晶が真っ白になっている。氷の塊のように見えなくもない。

しばらくして目を開いたステラは、カウンターまで歩いて行って、シャーロットにその白く変色した水晶を手渡した。

「これでいいですか？」

シャーロットは少し目を見開いていた。

「・・・いけると思う。でも、ここまで強いとは思わなかった」

感心したように呟く彼女に、ステラは照れたような笑みを返した。やはりどこか、抑制されたような表情だった。

それは特に意に介した様子もなく、シャーロットは淡々と告げる。「調整自体は数日あれば終わるけど、でも、ステラはその格好でダンジョンに入るの？」

「え？」

ステラは自分の服を見た。ローブと言われる服だが、言ってしまうえば、ロングスカートのワンピースである。

その言葉に、ベティが便乗する。

「そうそう！もっとお洒落しないと！」

ダンジョンとは全く関係ない言葉である。

そんなベティを一瞥してから、シャーロットはステラに言った。

「ルーンは単体でも意味があるけど、他の素材と組み合わせた方が効率が上がる。同じルーンでも、取り付ける服の生地やアクセサリの素材を選べば、魔法補助にも出来るし、防御用にも出来る。自分に合わせてカスタマイズするのが、ルーンの基本」

「そうなんですか？でも、どうしたら・・・」

シャーロットはこちらを見る。だが、それも一瞬だけで、すぐに視線はステラに戻った。

「・・・レオンと一緒に入るの？」

ステラもこちらを一瞥してから頷いた。

「もう入ってみた？」

「ダンジョンですか？いえ、まだ全然そんな・・・」

「じゃあ、当たり障りがないところで、魔法補助にしておく。効果が強くなるから、レオンを巻き込む時は注意」

自分は巻き込まれるのだろうか。そんな事態は避けたいが、案外ある事なのかもしれない。

「後で工夫したくなったら、またここまで来て。それでいい？」

「あ、はい。じゃあ、それで・・・」

そのステラの返事を聞くなり、シャーロットはイスから飛び降りて、歩いてカウンターの奥から出てきた。白いブラウスの下は、意外にも、紺色の固そうなスカートだった。

彼女は無言のまま、さも当然と言わんばかりに、堂々と玄関から出て行くとする。

だが、誰も着いてこないのが不思議だったのか、ドアに手をかけたところで振り返った。

「・・・行かないの？」

あまりに端的過ぎて訳が分からないレオンとステラだったが、ベティは分かっていたようだ。にこにこしながらシャーロットのところまで歩いていくと、彼女の手を引く。なんというか、母娘まではいかないが、近所の子供の面倒を見ているような光景だった。

ベティは一度だけ振り返った。

「レオン。バスケット忘れないでね。あと、鍵は気にしなくていいから」

それだけ言い残すと、彼女はシャーロットの手を引いて店の外へと出て行った。

店内には、文字通り置いてきぼりの2人が残る。

「・・・出ましようか」

ステラの呟きで、レオンは我に返る。

「あ、そうですね。本当に置き去りにされそうだし」

最後に言われたように、バスケットを忘れないようにしないといけない。カウンターに置かせて貰っていたそれを両手で抱えたところで、ステラが尋ねてくる。

「重くないですか？よかつたら手伝いますよ」

レオンは微笑む。

「大丈夫ですよ。そんなに重くないので」

「凄い大きさですけど」

「大きさは確かに・・・でも、食べ物ですから、大した事はないです」

それでもステラは気を遣っている様子だったので、レオンは話題を変えた。

「それよりも、前世が伝説の冒険者なんて、ステラは凄いですね」

一点の曇りもない笑みで言ったレオンだったが、相手の表情が沈んだので、慌ててしまった。

「じ、実は、僕の母もそうなんですよ！だから、なんていうか奇遇ですよね！」

少し目を見開いて、ステラは聞く。

「え、お母さんですか？」

興味を持ってくれて、内心レオンは助かったと思った。理由は分からないが、落ち込ませたままにしておくのは気分がよくない。

「そうなんです。小さい頃に、よくイブ様の話をして貰いました」

「イブ様？」

「えっと、サイレントワールドの本名というか・・・って、知らないんですか？」

「いえ。イブという名前は知ってますけど、どうして様を付けてるんですか？」

レオンは少し首を捻る。そう言われると、例えばソードマスターやスニークの本名を知っていたとして、様を付けて呼ばない気がする。

「そういえばそうですね。まあ、僕の村では、イブ様は守り神みたいなものなので、みんなそう呼んでたんですけど・・・」

そこから先は言葉が続かなかった。

ステラが瞳を大きくしたまま、じっとこちらを見つめていたからである。驚きの度が越えてしまったのか、人形の様に微動だにしない。

何事だろうかと驚いていると、急にステラが顔を綻ばせてこちらの手を両手で握ってきた。その手でバスケットを支えていたので一瞬落ちそうになったが、咄嗟に腕の内側を押し当てて難を逃れた。

「ど、どうしたんです？」

ステラの青い瞳は本当に輝いていた。

「・・・羨ましい」

彼女の口から絞り出すように出てきた言葉がそれだった。

「は、はい？」

「イブさんの故郷で育ったって事ですよ？いいなあ・・・凄く綺麗な所ですよ」

「え？・・・そうですか？」

汚い場所ではないが、凄く綺麗かと言われると自信を持って頷けない。もちろんレオンは気に入っている故郷だが、例えばユースアイだって綺麗な場所だと思う。そんなにずば抜けて綺麗とは言えない気がした。

ステラはまだうつとりしている。

「冬になると、真っ白になるくらい雪が積もるんですよ・・・」

「えっと、まあ、そうですね・・・」

それはそれで、なかなか大変なのである。

「私、本物の雪って見た事がないんです。いつも夢で見るだけで・・・あの白い景色が、イブさんは好きだったんですよ」

「あ、なるほど・・・」

つまり、ステラには雪景色を見ているイブの気持ちが伝わっているのだろう。自然を愛したと言われているサイレントコールドなのだ。彼女の目には、故郷で見る冬の景色が余程美しく映っていたに違いない。

その気持ちに共感しているステラを見ると、レオンは少し嬉しいような気がした。嬉しいとは少し違うかもしれないが、自分が信じていたイブ様を肯定して貰えたような気がしたのだ。毎年見ている雪景色をここまで美しいと思えるような、そんな女性だったのである。彼女にその面影を見たような気がした。

自然と頬が緩む。

だが、そんな時間も長くは続かなかった。

突然玄関のドアが開かれる。

そちらを見ると、当然というべきか、いたのはベティとシャーロットだった。まだ手を繋いだままだ。いつまでも出てこない2人を心配して戻ってきたのだろう。

2人ともこちらを見て固まっている。それが何故なのか分からなかったレオンだが、その後の彼女達の言葉で明らかになった。

「そっか・・・さすがの私も、そこまで関係が発展してるとは気付かなかったな」。レオンも意外とやるんだね」

「・・・不純行為なら、宿に帰ってからにして」

シャーロットの言葉の方が強烈過ぎた。

だが、慌てたらバスケットが落ちてしまいそうだったので、慌てられなかった。その反動なのか、目が回った時のように頭がくらくらした。

「そういう事ならお邪魔しないから、ゆっくりして行ってー。私達は先に買い物を済ませておくから」

ベティは笑顔でそう言い残してから、シャーロットの手を引いて出て行った。弁解する暇もなかった。

しばらくして、ようやくレオンの頭が立ち直る。とりあえず今の

状況をなんとかしなければならぬ。状況というか、包み込むように自分の手を握っているステラに、どうにか離れて貰うだけなのだが。

だが、ステラの方を見たレオンは啞然となった。

全然変わっていない。

感動を宿した瞳のまま、ステラはまだこちらを見つめている。というより、きっと何も見えていないのだろう。今の彼女が見ているのは、前世の記憶に出てくる雪景色なのだ。しかし、さっきの物音や会話に全く気付かないというのも、結構凄い話である。

凄いけれど、全然ありがたくはないのだが。

今の状況をどうしたらいいのだろうか。

声をかけるなりすればいいはずだったのだが、ここまで感慨に耽っている人の邪魔をしていいのだろうか。

それは何か、罪ではないだろうか。

どうしても、レオンには出来なかった。

結局、ステラが自力で現世に帰ってくるまで、一歩も動けなかったレオンだった。

ブラインド・センス

包丁で野菜を刻む規則正しい音が、隣のキッチンから聞こえてくる。他には、鍋の中で何かが煮えている音、時折薪が熱で弾ける音。そして、レオンは聞いた事のない、かなりアップテンポの鼻歌を口ずさんでいるベティの機嫌良さそうな声。

こちらのダイニングにも、湯気と一緒に、野菜の煮える美味しそうな香りが漂ってくる。何かスープを作っているらしいが、どんなスープなのかは分からない。それと混ざり合うように、ダイニングテーブルに置かれた4つのカップからも、何かのハーブらしいいい香りがする。

レオンはそれとなく室内を観察してみる。普通に見れば、少し寂しい感じはするものの、綺麗に整頓されているスッキリとした部屋だ。あまり細々とした物は置いていない。家具も少なく、目を引く物といえば、窓際にいくつかある植木鉢くらいだろうか。そこに植えられている花が、この部屋唯一の装飾品と言ってもいいかもしれない。

開放的な部屋と捉える事も出来る。しかし、この内装は、家主の嗜好をそのまま反映しているわけではない。

自分のすぐ隣に、ステラが座っている。そして、向かいにはシャーロットが。

ステラの正面、自分の斜向かいに座っているのが、ここの家主だった。

泰然と姿勢良く座っている、大人っぽい女性である。上品で落ち着いた物腰はどこかデイジーに似ているが、レオンの印象としては、向かい合っているステラの方がよく似ているような気がする。大人っぽいとはいえ、自分達と年齢がそれほど離れていないはずなのだ。

それなのに、何事にも動じないと思わせるような超然とした雰囲気
が彼女にはあった。自然な微笑みを浮かべている今の姿は、十分女
性らしくて柔らかい印象だが、どこか芯が通った力強さも感じる。
そついう相反する性質を共存させている女性。あと何年かしたら、
ステラもこついう雰囲気的女性になるのだろうか。

だが、彼女とステラには決定的な違いがあった。

単に違いというだけなら、例えば髪も違う。だけど、彼女の髪は
緩くウェーブした栗色のロングヘアだから、この町では一般的なも
のだ。そうではなくて、もっと特別な点が彼女にはある。

それは彼女の瞳だった。とは言つても、瞳の色が問題なのではな
い。

彼女の瞼は、ずっと閉じられたままなのである。

ここの家主であり伝承者でもあるフィオナは、目が見えない。

この家にお邪魔する前、ベティはその事実だけ教えてくれた。だ
が、気を遣つて欲しいとは言わなかった。言わなかったものの、普
通は気を遣つてしまうだろう。そう思っていたレオンだったが、そ
の考えも今は曖昧になりつつある。

レオンは改めてフィオナに視線を戻す。

フィオナは本当に堂々としているのだ。こうしていると、盲目の
人だと分からない程である。ただ目を瞑っているだけにしか見えな
い。玄関で迎えてくれた時も、ここにお茶を運んでくれた時も、ず
っと普通に微笑んで、普通に話していた。多少動きが不自然なこ
ろもあるが、盲目で不自由しているとは思えない程度でしかない。

長年この家で生活しているから慣れているのだろうかと思つたが、
ふと、レオンは気付いた。彼女は白と水色のワンピースを着ている
が、その左胸の辺りに銀のブローチをしている。その中心にサファ
イアのような青い宝石がはめ込まれているのだ。

さすがに、ついさつき同じ様な物を見ていたので、レオンにもす
ぐ予想がついた。

「このルーンが気になりますか？」

突然、フィオナの声がする。彼女の声は今の時期の日差しのように、穏やかで暖かみのある声である。

だが、その言葉の内容にレオンは驚きを隠せなかった。

どうして自分の視線がどこを向いているのか分かったのだろうか。こちらが何か言うよりも早く、フィオナが申し訳なさそうに言った。彼女は目を閉じたままだが、顔はこちらを向いている。

「あ、すみませんでした。驚かせるつもりはないんですよ。私の目が見えない事、もう聞いていたんですね？」

「えっと・・・はい」

こちらが驚いたのにも気付いていたらしい。レオンは声もあげなかったというのに。

キツチンからベティの声が飛んでくる。

「ごめんねー。一応言っておいた方がいいかと思って」

フィオナは笑顔で返事をした。声のした方角を正確に向いている。

「いいの。それより、本当に1人で大丈夫？」

「任せてー。こっちはいいいから、とにかくステラをよろしく。ステ

ラがここまで来たのは、フィオナさんに会う為だったと言っても過言じゃないから」

「え？そうなの？」

嬉しそうな顔になって、フィオナはステラの方を向く。そんな話は初めて聞いたレオンだが、確かにステラは少し緊張しているようだった。

「お名前は、ステラさん？」

「あ、はい・・・」

「遠い所からわざわざ着て貰って・・・でも、こんな何の変哲もない伝承者でごめんなさいね。おまけに目が見えないなんて、残念だったでしょう？」

言い方によつては深刻な雰囲気になりそうだが、フィオナはいとも簡単に、明るい口調で言ってしまった。

ステラは両手を胸の前で小さく振る。相手には見えないはずだが、

ついやつてしまうのが人の心理だろう。

「いえ！全然・・・」

「こんな普通の女ですけど、精一杯お手伝いさせていただきますね。普通の人間なりに、どんな悩みでも受け付けますから。ただのお姉さんだと思って、いつでも気軽に来て」

ニコニコと微笑むフィオナにつられるように、ステラも顔を綻ばせる。

「はい・・・よろしくお願いします」

次に、フィオナはこちらを向いた。

「ごめんなさい。お名前は何でした？」

玄関が開かれるなりベティとシャーロットが勝手に上がり込んでいっただけであって、自己紹介する暇がなかったのは、フィオナの責任ではない。

「レオンです。よろしくお願いします」

「アスリートですよね？」

実際その通りだが、目が見えないのに何故分かるのだろう。仮に見えていたとしても、レオンはよくジーニアスだと勘違いされるというのに。

すぐに返事が返ってこなかった為なのか、そこでフィオナは苦笑した。

「あ、またごめんなさい。つい感じた事をそのまま話してしまうんです」

「いえ・・・」

感じた事という言葉の意味が、レオンにはよく分からない。

フィオナは胸のブローチに触れながら説明する。

「このルーンは、目が見えない私用に、シャーロットが調整してくれた物なんです。一応、私にも魔法の才能がありますから、その魔法的な感覚というか・・・アスリートの方には分からないかもしれませんが、ジーニアスだけに感じ取れる感覚があるんです。その感覚を応用して少し視覚を補助するのが、このルーンの力なんです。

ですから、全く目が見えないというわけではないんですよ」

「そ、そうなんですか・・・」

論理は分らないでもないが、直感的には理解出来そうもない話だった。

そこでシャーロットが補足する。

「フィオナの目が見えているわけじゃない。だけど、例えば、耳が凄くいい人とか、鼻が凄く利く人だったら、それを頼りに周囲の様子をある程度知る事が出来る。人間以外の動物では、割と一般的な性質」

「あ、なるほど・・・」

確かに、人間よりも耳や鼻が利く動物は多い。

「フィオナの場合、魔法の才能に優れているから、その分鋭敏な魔法的感觉を持つている。そのルーンは、その感觉を整理して、视觉として与える役割を果たしているだけ。言ってみれば、ただの錯覚」
「錯覚ですか？」

思わず聞き返すと、シャーロットは頷いた。

「元々、フィオナの魔法的感觉は视觉を補って余りある程強い。必要だったから日常的に訓練していたとも言えるけど、先天的な才能も大きい。その結果、ルーンがなくても、フィオナは1人で生活が出来ていた。私には体感しようもないけど、目が見えないとは言っても、たぶん周囲の事がおよそ分かつているはず」

目が見えなくても周囲の事が分かる。レオンが目を瞑ったとしたら、ほとんど何も分からないに違いない。平原のモンスターに目眩ましの魔法を使われた時の事を思い出してみても、视觉がどれほど重要なものなのかはよく分かる。

それを補える程、フィオナの魔法的感觉というものは強いようだ。レオンにも体感しようがないが、その凄さだけは、なんとなく理解出来た。

レオンはステラの颜色を窺う。ジーニアスの彼女なら、フィオナの話も、ある程度身近な話として受け入れられるのだろうか。

見てみると、やはり彼女の青い瞳は少し見開かれているようだった。レオンには実感しようがなくても、彼女には驚ける程度に実感がある話らしい。

しばらく間を空けてから、フィオナはこちらを向いたまま説明を続ける。

「難しい話をされても困りますよね。とりあえず私の事は、目が見えないように見えて、実は見えている人だと思って貰えばいいですから」

なんとというか、本人が言っているとはいえ、その言い方はさすがにあんまりだろう。傍から聞くと嘘を吐いているようにしか聞こえない。まさか冗談なのだろうか。

「いや、それは・・・」

レオンが苦笑しながら言うと、フィオナも笑顔を返してくれる。本当に見えているとしか思えない反応の早さだった。

そこで話は終わりとはかりに、フィオナはステラの方を向く。

「ステラさん。私に会いに来たとベティが言っていましたけど、実際には、サイレントワールドの故郷に近いから、この町に来たんですよね？」

頷いたステラだが、すぐに気付いたように返事をした。目が見えていない事は間違いないのだから、声にした方が分かり易い。

「はい」

フィオナは微笑んでから頷く。

「私も少しだけですけど、その気持ちが分かるような気がします。もし私がこれから遠い町の出身で、そして冒険者になってみたいと思ったら、きつとここまでやってきたと思います。夢の中の彼女と同じ景色を見てみたい。同じ思いを共感してみたい。私はこんな身体ですから、冒険者になるのは無理な話ですけど、せめてステラさんのような人を応援したいと思ってこの仕事をしています。是非、ステラさんの夢に協力させて下さい」

本当にストリートな人だとレオンは思った。自分が盲目だという

事を、何の躊躇もなく自分で口にしてしまうのだ。何も包み隠さず話している。その印象がそのまま、彼女の言葉に誠意のようなものを感じさせる。ある意味、盲目である事を利点にしていると言えるかもしれない。

ステラの表情には笑みがこぼれていた。

「ありがとうございます。あの・・・よろしく願います」

微笑みを交わしあうステラとフィオナ。とりあえず、最初の信頼関係が築けたようなので、レオンにとっても嬉しい事だった。

だが、それはそれとして、気になる事があった。

「あの・・・」

レオンが遠慮がちに口を開く。

「その、フィオナさんは、サイレントコールドの伝承者なんですか？」

誰もはずきり言わないものの、どうやら話の流れからすると、そうかもしれないと思えてきたのだ。

質問に答えたのは、無表情そのもののシャーロットだった。

「・・・今更何を言ってるの？」

どうやら気付かなかったレオンが鈍感だったらしい。

馬鹿な質問をしたような気がして、いたたまれなくなってきたレオンの心情を察してくれたのか、フィオナが何事もなかったかのようには話題を変えた。

「それで、ステラさん。シャーロットからおおよその事は聞きました。ルーンの事をあまりご存じないようですね？」

「あ、はい・・・」

控えめに答えるステラに対して、フィオナは優しく微笑む。

「では、私の最初の仕事として、簡単に説明しておきます。あ、そうそう・・・それと、後で服のサイズを測らせて下さい」

「え？」

「私、こう見えても、服やアクセサリーのデザインもしているんですよ。ジーニアス用の魔導衣だって作れます。ちょうどルーンの調

整を頼んだそうですから、一緒に魔導衣も作っておきますね」

魔導衣というのは聞いた事がない言葉だが、どうやらステラが着ているような、ローブの事のようにだ。

それはそれとして、目が見えないデザイナーというのも、相当珍しいのではないか。だが、目の前の女性ならそれも有り得ると思っ
てしまうのも確かだった。フィオナの感覚がそれだけ鋭敏という事
なのだろう。あるいは、余程デザインセンスに優れているのか。

だが、ステラが気になったのはそういう事ではなかったらしい。

「あの、そんな・・・そこまでして貰うのは悪いです」

やたら遠慮しているのを見ると、もしかしたら、魔導衣というのは高価な物なのだろうか。ただのワンピースにしか見えないのだが、そこでシャーロットが口を挟む。

「ギルドに請求するから問題ない。元々、高いのはルーンそのものだし。ステラはルーンがもうあるから、むしろ安上がり」

ステラは意外そうに聞く。

「そうなんですか？」

「こう言ったらなんだけど、あのルーンは結構高価な物だから、服よりもルーンを盗まれないように気を付けて。服は代えが利くけど、あのルーンはそうはいかない」

「えっと・・・はい」

返事をしにくそうなステラだった。金銭的価値を別にすれば、服を盗まれる方が困るに違いない。

子供らしい真っ直ぐな視線をステラに向けながら、シャーロットが聞く。

「ベティのところに泊まってるの？」

「あ、はい。ベティの部屋にお邪魔させて貰ってます」

この町に來た初日にいろいろあった為、ステラはベティの部屋で寝泊まりしているのだ。

シャーロットは呟いた。

「最強」

ただ一言だけだったが、言いたい事は十分過ぎる程伝わった。隣にはガレットの部屋もあるのだ。これ以上安全な場所はなかなかない。

そこでフィオナが軽く両手を合わせる。

「ですから、魔導衣は任せて下さい。ただ、せっかくなのでいいルーンがあっても、有効利用出来なければ意味がないですからね。説明しておきますから聞いておいて下さい。あと、レオンさんもそのうちルーンを使った武器や鎧を使う事になると思います。アスリートの方はジーニアス程気を遣う必要はないですけど、それでも知っておいて損はないですから、一応聞いておいて下さい」

「分かりました」

フィオナは微笑む。どこか母親のような慈愛を感じる笑みだった。「それでは、最初に要点を言っておきますね。まず、ルーンは身につけていないと効果がないという事。次に、ルーンは周囲に特殊な素材がある場合、その影響を受けるという事。そして最後ですけど、特にジーニアスの場合、ルーンは身体はどこに身につけるかによっても、効果を変える場合があるという事です」

レオンとステラはしばらく頭の中でその言葉を反芻してから、やがてゆつくりと頷いた。頷いたのだが、正直、ルーンに触れた事もないレオンには実感しようのない話である。

それを確認してから、フィオナは説明を再開する。

「これらは結局、全部ひとつの事を言い表しているんです。つまり、ルーンは人の身体に作用して効果を発揮する物です。人の身体の中にある流れの影響を受けて、それを別の力に変換する。それがルーンの働きだと言えますね」

これも難しい話だった。少なくとも、目に見えるものの話ではない。

こちらの心を汲み取ってくれたのか、フィオナは優しく言った。「分からなくても仕方ないと思います。アスリートの方は、実際には感じ取れない話ですから」

「あ、はい・・・」

本当によく気が付く人だった。目が見えていないとは思えない。魔法的感覚というより、洞察力が優れているように思える。

「ですから、アスリートの方がルーンを扱う場合、ほとんどの方は職人の方に調整して貰った物をただ使っているだけです。例えば、鎧であれば身につけるだけです、剣であれば握るだけです。ルーンが実際にどんな作用をしているのか、知っていても知らなくても、結局効果は変わりませんからね。レオンさんも、分からないからといって、特に心配する必要はないです」

そこでフィオナはステラの方を見る。

「ただ、ジーニアスは違います。私達も含めて、ほぼ全てのジーニアスは体内の力の流れを認識しています。そして、私やステラさんのように、多少なりとも力に優れた人であれば、身体の外的事も多かれ少なかれ感じ取っています。つまり、身体の内と外、その境界に位置するルーンがどういう働きをしているのか、肌で感じ取る事が出来るんです。この違いが即ち、ジーニアスにとってルーンが特別である事の要因でもあります」

ジーニアスにとって、ルーンが特別。それはレオンにも分からない話ではない。例えば、酒場に入ったりする冒険者を見ると、ルーンを多く身につけているのは大抵ジーニアスの方なのである。最初はそれがルーンだとは知らなかった為、妙に宝石の好きな人が多いなと勘違いしていた程だ。

フィオナは話をこう締めくくった。

「ですからステラさん。ルーンが身体の内と外にどういう作用をするのか、それを理解するようにして下さい。最初は感じ取ってみるだけでも結構です。なるべく意識する時間を多く作って、ルーンに対する理解と順応を高めていくのが大切な事なんです。最初の頃はあまり違いがないかもしれませんが、もっと先に多くのルーンを扱うようになってくると、その理解があるかないとは大きく違います。是非試してみてください」

ステラの方を見てみると、彼女の表情は真剣そのものだった。初めて伝承者に会ったわけだから、多くのものを学び取ろうと必死なのだろう。

「はい。分かりました」

その返事を聞いて、フィオナは微笑む。人を安心させられる笑み。自分があと数年して、果たしてこんな微笑み方が出来るかと言われたら、とてもではないが自信がない。

そこで、ベティがニコニコしながらやってきた。どうやら、出てくるタイミングを見計らっていたようだ。

「お昼出来たよー。そろそろ休憩にしよう」

フィオナが笑顔で手を合わせる。

「そうね。じゃあ、早く済ませましょう」

そう言うなり、イスから立ち上がってドアから出て行こうとする。レオンには分からなかったが、何故か示し合わせたように、シャーロットとステラも立ち上がって着いていく。

理解出来ないながらも着いていこうとすると、その正面にベティが立ち塞がった。

彼女は笑いながら、両の拳を打ち合わせる。

「そうかそうか。レオンも男の子だねー。でも、どうしてもここを通りたければ、まず私を倒して貰わないと」

意味不明な要求だったが、とりあえずレオンは2歩後退した。本能的と言ってもいい。

「えつと・・・皆さんどこに行っただんです？」

「だから、聞きたかったら私を倒して貰わないと」

ベティは笑顔だが、レオンは困惑顔しか出来ない。

「いえ・・・じゃあ、何をしに行っただんです？」

「私の口から言わせたいの？」

「・・・そんな大変な事なんですか？」

「大変だよー。女の子にとっては」

全然話が見えない。

だが、これまでの会話を遡ってみると、なんとか解答に辿り着けた。

「あ……もしかして服のサイズを測りに行っただんですか？」

当然だと言わんばかりに、ベティは重々しく頷く。

「当たり前でしょー？そう言っただけだし」

確かに後で測るとは言っていたが、こんなにすぐだとは思わなかった。

「えっと……昼食の後でいいんじゃないですか？」

その方が落ち着いて測れるに違いない。

せいぜいその程度の気軽な一言だったのだが、それが結構な地雷を踏んでしまったらしい。急に満面の笑みになるベティだが、どう見てもいい笑顔ではなかった。凄みが尋常ではない。

「……ちよつとねー。事情があるんだよ。前と後では大違いなんだよね」

「そ、そうですか……」

微笑みが怖過ぎて、それどころではないレオンである。さらに一歩後退したが、それを読んだように一歩距離を詰めてくるベティを見て、内心レオンは戦慄していた。

彼女は本気だ。

「うん。まあ、ちょうどいいよね。ビギナース・アイモクリア出来たらいいし、ちよつと胸を貸して貰おうかな」

目の前の少女に胸を貸せるとしたら、恐らく彼女の父親くらいなものだろう。

「いえいえ。そんな、僕なんか……」

遠慮するように言ったが、もちろん必死の停戦交渉である。

少女は笑顔でこう言い放った。

「謙遜しなくていいってー。丈夫ならそれで十分だから」

それはきつと胸を貸すとは言わない。

だが、その言葉を発する暇もなかった。

気付いた時には、ベティは一瞬で距離を詰めている。どういふ歩

き方をすればここまで素早く動けるのか、レオンには見当も付かない程流麗な動き。

きっとこれが達人の足捌きに違いないと気付いたが、もう遅過ぎた。

懐の少女の気配が、一瞬爆発的に膨らむ。

受けきれないという確信だけはあった。

そして、そんなものがあっても何の役にも立たないという、もうひとつの確信も。

数秒後、その確信は現実として証明される事となった。

魔法考察

人類には腕が2本しかないはずだ。

それなのに、ベティと戦っていると、向こうには腕が3本も4本もあるような、そんな錯覚を覚えてしまう。そして、そんな相手の攻撃を、腕が2本しかない一般的な人類であるレオンが受けきれわけがない。今日はスカートだからよかったが、そうでなければこれに足まで加わるのだ。その波状攻撃を受けきれ人間がいるのだろうか。彼女の父親は受けきれようだが、恐らくリーチと体格を生かしているのだろうか。そのどちらにも恵まれないレオンはどうしたらいいのだろうか。

そこでつい溜息が出る。

仮にベティに勝てるようになったところで、ダンジョンでは役に立たない技術かもしれない。当たり前だが、彼女は人間しか相手にした事がないからである。それに、向こうはどういうつもりなのかは知らないが、こちらはベティに怪我をさせたくない。だから、どうしても受け中心になってしまう。ダンジョンでは相手に遠慮なんてしないし、モンスターを倒さずに取り押さえる機会なんて皆無だろう。

しかし、何を言ったところで、結局言い訳にしかない。

「結局何があつたんですか？」

ユースアイの大通り。昼食の残った特大バスケットとシャーロットをフィオナの家に残し、人の数が増えてきた広い道を歩きながら、隣を歩くステラが青い瞳をこちらに向けて聞いてくる。

「いいいえ。結局僕が悪かったので・・・」

この返答は2度目だが、前と同じく、ステラは釈然としない顔だった。ちなみに、彼女の質問は3回目。最初に聞かれた時、レオン

はうつかり、ベティに成敗されてましたと答えそうになって、口をつぐんでいた。そう答えた場合、何故成敗されていたのか理由を話さなければなくなる。気付かなかったとはいえ、レオンはステラの身体のサイズを測っている現場に踏み込むところだったのだから、そんな事を知ったらいい気がしないに違いない。止め方に異論がないとは言えないものの、そこを止めてくれた事に関しては、ベティに感謝しなければならない。

そのベティだが、レオンから見てステラを挟んだ向こう側に並んで歩いている。それはいいのだが、先程から周囲をキョロキョロ見回しているのがレオンは気になっていた。

「どうしたんです？さっきから誰か探してるんですか？」

聞いてみると、ベティはブラウンのポニーテールを揺らしながらこちらを向いた。彼女は瞳もブラウンだが、珍しく笑顔ではなかった。いつもの人懐っこい表情はなりを潜めていて、何かに驚いているような感じに瞳を大きくしている。

「いやー・・・なんかねー、気配を感じるんだよ」

「気配？」

彼女は真顔のまま頷く。

「なんていうか、分かるんだよね。私を警戒してるような、そんな感じが」

「そ、そうですか・・・」

女の勘だろうか。或いは、武闘家としての勘か。

2人の間に挟まれている格好のステラが怖ず怖ずと聞く。

「もしかして、その・・・私のせいですか？」

レオンには不明瞭な質問だが、ベティには分かったらしい。ステラに優しい笑顔を向ける。

「違う違う。この間みたいなのは、酒場では日常茶飯事なんだよ。向こうも一応は正式な冒険者なんだし、ちゃんとした大人なんだから、それで逆恨みする程落ちぶれてないって。そうじゃなくて、もっとうっとう・・・私個人に対する警戒というか、まあ、ある意味本能

だよ。虫の知らせっていうか、私の存在を察知されてるような、そんな感じがする」

なんとも抽象的な話だが、そんな感覚を察知できたとしても、ベティならあり得ない話ではない。

「大丈夫なんですか？」

不安そうに聞くステラに、ベティは余裕の笑みを見せた。

「私はね。向こうはどうか知らないけど」

ほんの少しだけだが、ベティを警戒しているというその人物にレオンは同情した。

そんな事をしているうちに、本日最後の目的地に到着する。

「あ、ここだよー」

ベティが指さした物自体は一般的な民家だが、レオンは声を上げざるを得なかった。

「広いですね・・・」

その言葉通り、物凄く広い敷地なのだ。敷地だけならガレット酒場よりも広い。

ただ、建物の規模はそれほどではないのかもしれない。一般的な木造2階建てが2棟ある。ニコルの家も民家とは別にガレージを置いてあるし、フレデリック邸はこの2棟を合わせた位の規模があるのだ。ただ、それ以上に、ここの家は庭が広かった。訓練場に匹敵するようなスペースの更地に加えて、その向こうに野菜や果物を育てている庭が見えるし、その脇には鶏か何かの飼育小屋が見える。

しかし、一番目に留まるのは、その敷地内を走り回る子供達である。

「もしかして、ここは学校ですか？」

「学校？」

ステラの質問について聞き返してしまったレオン。その2人にベティは微笑みながら言った。

「レオンの村には学校なんてなかったよね。ステラの町の学校はもっと大きかった？」

その質問にステラは小さく頷く。レオンの村もその通りだった。そもそも、学校という言葉に馴染みがない。

それを察してくれたのか、ベティが説明してくれる。

「学校っていうのはね、子供達に文字の読み書きとか計算を教えるところ。だけどこの場合、実質的には子供達の遊び場って言った方がいいかな。ただなんとなく、子供が集まる場所。勉強とかもそうだけど、植物とか動物と触れあったり、もっと単純に広場で遊んだりとか、そういう所だね。特に、小さい子供とかは町の外で遊ばせられないでしょ？そういう子供を少し年上の子供が面倒をみるんだよ。私も小さい頃は、フィオナさんやケイトさんに遊んで貰ったし、リディアやデイジーと知り合ったのもここなんだ」

「へえ・・・」

思わず感心してしまったレオンである。確かに、村くらい小規模な共同体なら必要ないが、これくらい大きな町になると、こういう施設があつてしかるべきなのかもしれない。

ベティは懐かしげに学校の方を見渡す。

「いい事も悪い事もいろいろあつたけど、ここで知り合った人とは今でも付き合いがあるし、いい思い出だね」。特に、フィオナさんに面倒みて貰えたのが、凄くいい経験だった気がする」

その言葉に、ステラが反応する。

「小さい頃のフィオナさんは、どういう子供だったんですか？」

嬉しそうな表情で、ベティはステラを見た。

「今は普通に生活出来てるけど、小さい頃のフィオナさんはまだ慣れてなくて、よく転んだり物にぶつかつたりしてたんだよ。一応私達が遊んで貰ってる立場なんだけど、そんなだったから、こっちもフィオナさんに気を遣つたりしてたんだ。それでも、フィオナさんはいつも笑顔で、一生懸命で、何も諦めたりしない、とにかく凄く強い人なんだ。今では伝承者や服飾の仕事も立派にこなしてるし。私やシャーロットはもちろん、私達世代の女の子はそんなフィオナさんを見てきたから、みんな影響を受けてると思うな」

「あの・・・そういえば、フィオナさんのご家族は？」

ふと気になってレオンは聞いてみた。フィオナの家には他の人の気配がまるでなかった。もう成人しているとはいえ、盲目の女性があの広い家で1人暮らししているのだろうか。

だが、質問してすぐにレオンは後悔した。立ち入った質問だし、それに、明るい話題になるとも思えない。

変わらないように見えるベティの表情だが、少し陰っているのがレオンには分かった。

「ちよつとね・・・ご両親とも、もうおられないんだよ。元々あんまり身体が強くなかったからね」

レオンは頭を下げた。

「・・・すみません。あの、こういう時こそ殴って貰っていいです」
デリカシーがなさ過ぎる。自分でも呆れるくらいだから、身体で分かった方がいい。

そんなレオンを見て、ステラは目を丸くしていたが、ベティは少し笑った。

「別にいいんだって。町の人みんなが家族みたいなものだから。私もたまに差し入れ持って遊びにいくし、ケイトさんとも親友だし。シャーロットなんか暇さえあれば行ってるから、ずっと1人ってわけでもないし。だいたい見て分かったと思うけど、シャーロットはフィオナさんにベッタベタだから」

確かに、仕事中は遠慮していたようだが、昼食の最中はまるで母娘に見える程甘えていた。今思い返してみれば、家の中のシャーロットは、フィオナから1メートル以上離れていなかった気さえする。手を伸ばせば触れられる距離を保っていたのだ。

そんなシャーロットを、嫌な顔ひとつせずには受け入れていた。そういうところが、フィオナの器の大きさなのかもしれない。

「というか、こんな話してる場合じゃないよね。じゃあ入ろうか」
笑顔で言うベティ。彼女がいつも明るいのは、フィオナから学び取ったからなのだろうか。よく考えてみれば、彼女だって過去に辛

い経験をしているのだ。それでも強く生きているのは、身近にそういう生き方をしている人がいるからなのかもしれない。

微笑みを返すレオン。自分が暗い顔をしていても仕方ない。

だが、返事を返す前に、学校の敷地の方から男性の声が飛んできた。

「そんなところに突っ立ってないで、早く入ってこい！ガレットの馬鹿娘！」

レオンの笑みが凍り付く。なんという暴言だろうか。自分の命が惜しくないのか。そして、今ベティを目の前にしている自分の命をどう保証してくれるのか。

だが、レオンの不安をよそに、ベティは普段通りの笑顔のまま、声のした方へ手を振った。

「先生！元気してたー？」

そのまま駆け寄っていつてしまったので、レオンとステラは一度視線を交わしてから、彼女の後を歩いていく。

広大な敷地の左手。ベティが最初に指さした建物の玄関の前にその男性は立っていた。

上下ダークグレイの質実そうな服装だが、その反面、かなり逞しい体つきをしている。ガレット程ではないものの、普段から身体を鍛えているのは間違いない。距離が近付くにつれ、その厳格そうな面構えに威圧されるが、その割にどこかまとまった顔立ち、そしてダークブラウンの短髪と瞳。年齢相応に皺は多いが、確かに面影があると納得した。

彼こそがブレットの父親で、伝承者であるハワードその人である。その近くにレオンとステラが到着する頃には、彼とベティは、親密なのか険悪なのかよく分からない会話の最中だった。

「最近会ってなかったねー。たまにはお父さんに顔見せにくらいいいのに」

「あいつの方が暇に決まってる。今日帰ったらあの野郎に、たまには顔を見せに来るのが礼儀だと言っておけ！」

しつかりとした口調で言うハワードだが、本当に命知らずとしか思えなかった。少なくとも、ガレットに対してそんな言い方が出来る人間を初めて見た。

啞然とした表情を見せるレオンと、それほどではないが面食らった様子のステラ。そんな2人を一瞬ずつだけ見たハワードは、ベティに向かって言った。

「話はケイトから聞いた。ちょうどいいから、お前は子供の面倒をみてろ」

かなりの命令口調だったが、ベティは割と乗り気だった。

「任せてー。あ、そういえばブレットは？」

その質問を言い終わる頃には、既にハワードは玄関のドアに手をかけている。

「知らない。あの馬鹿息子……今度見かけたら、代わりに何発か叩き込んでやれ」

恐ろしい事を言い残し、ハワードは玄関の向こうに消えた。

ベティは楽しそうな表情だが、レオンとステラは呆然といった様子でそれを見送るしかなかった。

やがて、こちらを向いたベティは軽く片手を振る。

「じゃあ、私は子供の相手をしてくるから、レオンとステラは頑張つて」

「……何をですか？」

ほとんど無意識にその質問が口から出たレオンに対して、ベティは笑顔で片目を瞑った。

「いろいろ」

その言葉を最後に、彼女は別の建物の方へと駆けだしていった。完全に取り残された2人は、ただ沈黙するしかない。

「……どうします？」

ステラがぼつりと聞いたが、何と答えればいいのか、レオンには分からなかった。

そこで突然玄関の扉が開く。

びつくりしてそちらを向いた2人の見習いを見ながら、ハワードは簡単に言った。

「早く入ってきなさい」

再び扉が閉まる。

全くにこりもしなかったが、どういうわけか急に丁寧語になっていた。そのせいなのか、少し緊張感が和らいだ気がした。

「入りましょうか」

「そうですね」

レオンの提案にステラが同意する。彼女の声が落ち着いているのが分かって、レオンも踏ん切りがついた。

改めてこの建物を観察してみると、植木鉢やプランターがいくつか置いてある。その中に植えられた色とりどりの花が玄関前を彩っているのだ。敷地奥には畑もあるようだし、結構華やかな場所だと言えるかもしれない。

玄関扉を開けると、ハワードが立ったまま待っていてくれた。そのまま、玄関に入ってすぐの部屋に案内される。そこが応接間だった。

フレデリック邸のように調度品がたくさんあるわけではないが、かなり立派な部屋だと言っているはずである。中央の黒いテーブルを囲うように焦げ茶色ソファが3つ。他には黒い棚と、風景画が2枚。そして、ここにもやはり植木鉢がいくつか置いてある。そのほとんどが、高い木が植えられた物だった。

ハワードの対面にレオンとステラが並んで座る配置になったが、しばらく間を空けてから、ハワードはいきなりレオンに質問してきた。

「レオン君だったね」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「君は字の読み書きが出来るのか？」

予想外の質問だったが、レオンは落ち着いて答える。

「一応は出来ます。何でも読めるわけではないですけど」

「誰に教わった？」

「母です」

しばらくレオンの目を見たハワードは、続いてステラの方に質問する。

「ステラさんだね？」

多少緊張した面持ちのステラだった。

「はい・・・」

「君はかなり上等な教育を受けたはずだ。違うか？」

その言葉に、レオンがびっくりする程ステラは動揺した。

「あの！それは・・・」

何か言い掛けて、ステラはそのまま黙ってしまう。気になったレオンはその表情を窺おうとするが、彼女は俯いてしまっていて、その横顔しか見えなかった。ただ、それでも分かる程、ステラは思い詰めたような表情をしていた。

次に口を開いた時のハワードは、初対面の時の様子からは想像もつかない程、優しい声をしていた。

「ベティは優しいだろう？」

顔を上げるステラ。青い瞳を見開いている。

対するハワードの表情は変わらないが、不思議と穏やかな雰囲気になっていく気がした。

「昔から元気が有り余っている子だったが、それは今も変わらないな。だが、それと同じかそれ以上に、彼女は思いやりのある子だ。他人の気持ちを汲んで、もしその人が苦しんでいればその力になりたいと思うような、そんな優しい心の持ち主なんだよ。そして、それはベティだけじゃない。私が面倒をみた子供は皆、その心を持っている。私が保証する。だから、君が心配するような事にはならない。そんなに不安がる事はない」

じつとステラを見るハワード。ステラは視線を逸らしたりはしないものの、どう返事をしたらいいのか、決めかねている様子だった。やがて、ハワードは再び視線をこちらに向けた。

「レオン君・・・いや、レオンと呼ばせて貰っていいね？」

「あ、はい」

彼は腕を組んだ。

「君は私が勧めるよりも前に、ソファに座っただろう？」

「え？」

思い返してみるが、確かにそうだった気がした。ハワードがソファの前に立った為、その時点で座る位置が決まったと思ったのだ。だから、後は勝手に座るだけだと思ったのだが、勧められるまで座ってはいけなかったのだろうか。

ハワードはここで初めて口元を上げた。

「ステラさんの方はすぐに座らなかった。普通の教育を受けていたら知っているような事だが、それが正しい礼儀だ。だから、それだけなら別に不思議な事はない。彼女も普通の教育を受けていたのだろうと思うだけだ。しかしね、彼女はその後、すぐに君の真似をするように座ったんだよ」

レオンはステラの方を見してみる。彼女はその視線に気付くと、そのまま視線を逸らしてしまった。どこか恥ずかしがっているような様子だった。

それを見て、ハワードは苦笑した。

「私もそういう場面を初めて見た。どうしてこの子はわざわざ礼儀に反する行いをするのか。礼儀を知らない者が、知っている人間の真似をする事はよくある。しかし、その逆は聞いた事がない。教育を受けていないと思われないのだろうか。だとしたら、それは何故か。それで先程の質問を試してみたわけだ。はっきり言って山勘だね」

まだレオンには話がよく分からない。彼女は どうしてそんな偽装をするのだろうか。

ハワードの視線がこちらを向いているのに気付き、レオンはそちらを向いた。彼は既に真面目な表情に戻っている。

「最初にレオンにした質問は少し失礼だったかもしれない。だが、

別に君に学がない事を貶したわけじゃない。一応確認しておきたかっただけだ。冒険者でも、文字の読み書きくらいは出来た方がいいに決まっている。他にも知っておいた方がいい事もあるが、まあまだ若いから、後からでもどうにかなるだろう。だから、文字が読めるなら私から言う事はない。ひとまずはこれで許して貰えないか？」

最初とは大違いの低姿勢な言い方に、レオンは戸惑った。

「いえいえ、僕は別に何も・・・礼儀を弁えていないのは確かですから、あの、気付いた時だけでも、注意して貰えるとありがたいです」

少しだけハワードの瞳が大きくなったような気がした。

「・・・なるほど。ガレットも目だけはまだ腐ってはいないか」

普通の口調でとんでもない事を言うので、レオンは絶句するしかなかった。本人が聞いていたら、間違いなく喧嘩沙汰ではないだろうか。全く油断出来ない。

ハワードはそこで間を取った。どうやら、2人の教育云々の話は終わりらしい。まだ聞いてみたい事があったのだが、ステラの表情が明るくないのを見て、レオンは諦める事にした。

次に彼の口から出た言葉は、やはり別の話題だった。

「アナライザーを知っているか？」

レオンでも知っている名前だ。サイレントコールドと同じ、伝説のジーニアスである。

彼はそこで頬を掻く。照れているように見えるが、彼にしては意外な仕草だった。

「私は一応、そのアナライザーの伝承者という事になっている。なっているんだが・・・こう言うと失望するかもしれないが、私はあまり魔法が得意ではない。もしかしたら、ベティから聞いているか？」

「あ、はい。ちょっとだけですけど・・・」

答えたレオンに、ハワードは苦笑を返す。

「今からもう20年以上前になるが、その頃この町にはジーニアス

の伝承者がいなかった。知つての通り、ここには毎年見習い冒険者がやってくるが、そんな状態だったから、ジーニアスには誰もろくなアドバースが出来なかった。私も、前世こそ伝説のジーニアスだが、魔法の才能がお世辞にも優れているとは言えない。いや、まあ、アナライザーもそうだったんだがね」

「本当ですか？」

例に漏れず、サイレントコールド以外の人物についてはほとんど知らないレオンである。

ハワードは頷く。

「ああ。だが、私はアナライザーのように冒険者になるつもりはなかった。ずっと学問に興味があったから、その道に進もうと思っていた。今のような教師になるのもいい。とにかく、私の魔法の才能なんてものはちっぽけなものだ。それを生かそうなんて事は考えた事もなかった。しかし・・・ジーニアスというのは、アスリートからは理解されない部分が多い。彼ら特有の悩みを抱えている事もあ。そして、この町では誰にもそれを理解して貰えない。本当に、あの時の彼らは孤独だったと思う」

どこか遠い視線で、壁にかかっている絵を見つめるハワード。その絵は、この町のすぐ近くのような草原の風景を描いた物だが、なんとなくどこか寂しげな感じがした。

「それで伝承者になったんですか？」

いつの間にか顔をあげていたステラが聞いた。明るい表情とはいえないが、落ち込んでいるというわけではなさそうだった。

少し表情を緩めて、ハワードは答える。

「なろうと思ったところで、急になれる職業ではない。カーバンクルがいないと、伝承者としては認められないからだ。だから、最初はまだ勝手に話を聞いているだけだった。自分の前世はアナライザーで、魔法の研究の為に話を聞かせて欲しいと嘘を言った。今思えば、恐らく嘘だとバレていただろう。私も若かったから、そんな幼稚な嘘が通用すると勘違いしていたわけだが、まあ、若気の至りと

いうのも悪いものではない。何人かはその嘘に付き合っ、話を聞かせてくれる事もあったからね」

つまり、全くの無報酬で話を聞いていたらしい。簡単に言うが、なかなか出来ない事だとレオンは思った。

ハワードの瞳は、何か懐かしいものを捉えている様子だった。

「それを何年も続けていると、いつの間にか私は伝承者と呼ばれるようになっていた。やっている事は、伝承者に似ていると言えない事もない。だから、いつしか町の人にそう認識されていたという事だろう。だが、ある日突然、カーバンクルが私の前に姿を現した。その時初めて、自分の事を伝承者と認識したと思う。不思議なものだな。カーバンクルにはこうなる事が分かっていたのか。それとも町の人が私の事をあまりにしつこく伝承者と呼ぶものだから、渋々都合をつけてくれたのか。いずれにしても、私は言わば町の都合で伝承者になったようなものだ。もちろん文句があるわけではないが、言わば間に合わせだと言えるな。今ではフィオナという立派な伝承者がいる。私はもうお役御免と言ってもいい。私のカーバンクルも最近ほとんど力を使った事が無い。ここに来る子供達のペットと言ってもいいくらいだ」

外で聞いたのとは大違いの、穏やかな声だった。

彼の昔話を聞いていてレオンが思ったのは、この人はとても優しいという事だった。この人を見て育ったから、ベティもフィオナも他の子供達も、同じように優しく育ったに違いない。強いフィオナを見て育った少女達が、同じように強く育ったように。

「・・・よろしく願います」

レオンよりも早く、ステラがそう言っ、頭を下げていた。

少し遅れたが、レオンも同じ気持ちだった。同じように頭を下げる。

本当に教師なのだ。この人から教わりたいと心から思える。レオンにとってはアレンも教師だが、それは彼の剣の腕が尊敬出来るからだ。尊敬出来るという意味では、目の前の男性も全く不足はない。

ハワードはやはり照れたようだった。

「・・・その挨拶はこの辺りでしか通用しない。だが、まあ、間違えというわけではないな」

ステラとレオンは顔を上げる。ハワードが戸惑っているのを確認して、2人は揃って少し笑ってしまった。

咳払いをしてから、ハワードは言った。

「アナライザーは学問としての魔法の基礎を作った人だ。普通の人には感じ取れない以上、その感覚を一般化するのは不可能な事だが、ジーニアスにとっては普遍的と言える法則があるし、体系だけでも理解しておけば、アスリートでもジーニアスに助言出来る場合がある」

「あの・・・すみません。ちょっと難しくないですか？」

弱気な声を出すレオンだが、ハワードは予想通りとばかりに頷いた。

「そう言うと思っていた。だから、簡単に3つだけまとめておく。今日はこれだけ覚えて帰りなさい」

頷く見習い2人。

「まず、魔法は大きく分けて2種類あるという事だ。それを簡単に言うなら、魔法を身体の外に使うか、それとも身体そのものに使うかという違い。端的に言ってしまうえば、前者は攻撃魔法、後者は治癒魔法だ。そして、この両者には決定的な違いがある。それは、攻撃魔法の方が格段に難しいという事だ。つまり、攻撃魔法は真に才能があるジーニアスにしか使えない。逆に治癒魔法は、ほぼ全てのジーニアスが使えると言ってもいい。前者の方が圧倒的に体力を消耗するし、魔法準備の時間も必要だ。アスリートでもそれくらいは理解しておけ。ジーニアスに疲労の色が見えるなら、攻撃魔法は控えさせて治癒に専念させる。それくらいは考えついてしかるべきだ」

「あの・・・」

怖ず怖ずと手を挙げたのはステラだった。

「私、攻撃は出来ませんが、人の怪我を治したりはした事ないんで

すけど・・・」

ハワードはあっさり答える。

「治癒魔法と言ったのは便宜上だ。実際には、誰でも怪我や病気が治せるわけではない。ただ、そうだな・・・実践的な話はフィオナに聞くといい。私はあくまで理論的な話しか出来ない。実際に、私も人の怪我は治せない。だが、人の状態というか、調子を知る事は出来る」

「調子ですか？」

レオンが聞くと、ハワードは頷いた。

「治癒魔法が簡単なのは、元々人の身体には整然とした力の流れがあるからだ。身体に何か異常があれば、その流れが乱れる。その流れを感じる程度なら、恐らく全てのジーニアスが出来るだろう。その流れに干渉して体調を整えたり、もっと上達すれば、身体機能を増加させたり、或いは怪我や病気を一瞬で治す事も出来る。それが治癒魔法と呼ばれるものの本質だ」

「一瞬で・・・」

そんな事が出来たとしたら、本当に医者いらすである。

「だが、反対に攻撃魔法の場合、身体の外には体内程の整然とした流れがない。自然の流れを、人間スケールで推し量るのは難しいと言うべきかもしれない。いずれにしても、この違いこそ、攻撃魔法が格段に難しい由来だ。煩雑であればあるほど、把握するのも難しくなるし、明確な流れにして意味を持たせるのも難しくなる。こちららは感じ取る事が出来るだけでも、相当鋭敏な感覚だと言える。フィオナの様に視覚の代わりをさせられる程となると、私には想像も出来ない。間違いなく、彼女は天才だろうな」

ふとレオンは、ニコルの言葉を思い出していた。ニコルはフィオナの事を、この町で一番頭がいい人だと言っていた。それは、魔法の才能の事をさしていたのだろうか。天才は天才でも、頭がいいとは少しニュアンスが違う気がする。確かに洞察力は優れていると思えたが、もしかしたら、何かまだレオンの知らない一面があるのか

もしれない。

レオンの疑念をよそに、ハワードは話を進めた。

「次に、魔法の属性についてだ。大昔には火属性とか水属性とか言われたが、これは本質的な呼び方とは言えない。拡散型と収束型と大別するのが正しい属性の呼び方だが、はつきり言って定着しているとは言い難い。だが、この際呼び方はどうでもいい。重要なのは、魔法は知識によって応用が利くという事だ」

アスリートのレオンはもちろんだが、ステラもよく話が飲み込めていない様子だった。話が抽象的過ぎるのだ。

ハワードは全く気にかける様子もなく話を続ける。

「知識とはつまり、科学知識の事だ。ステラは得意な魔法があるか？」

急な質問だが、ステラは落ち着いて答える。

「冷氣・・・でしょうか」

「収束型に分類されるな。だが、物が冷えるとはどういう事なのかを理解していれば、空気中の水蒸気以外にも応用が利く。例えば、空気そのものを凝固させたり、溶岩を凍らす事も出来るかもしれない。それ以外にも、あくまで理論的にはだが、モンスターが毒の粉を撒いてきた時に、それを一力所に固める事が出来るかもしれない。冷えるとは違うが、それも収束型だ」

物が集まる事が収束という意味だろう。物が冷えるという事は、つまり収束しているという意味なのかもしれない。

「そして、最後だ。特にレオンは必ず肝に銘じておきなさい」

こちらを見るハワードに、レオンは頷いてみせる。

「ジーニアスは時に孤独だ。それは、彼らにしか見えない世界があるからに他ならない。それをアスリートは忘れてはならない。出来るだけでいいから、彼らの事を理解しようとする事が大切だ。実際に全て理解するのは無理でも、その努力を怠ってはいけない。仮に理解出来なくても、彼らを投げ出してはいけない。ジーニアスの居場所になれるのは、結局アスリートしかない。今は理解出来ない

かもしれないが、この言葉だけは忘れないで欲しい」

ジーニアスの居場所という事は、つまりステラの居場所という事なのか。彼女が戦える場所を作るのが自分の役目。そういう意味だろうか。

いずれにしても、レオンは元からそのつもりだった。彼女がどんな人間でも受け入れる。あまり能力に優れているとは言えない自分だから、せめてそこだけはしっかり支えてあげたい。

「分かりました」

真っ直ぐに返事をするレオン。ハワードはわずかに頷いてくれたようだった。

だが、その言葉の直後、玄関から誰かが入ってくる音が聞こえた。「あの馬鹿は……」

一瞬にして剣呑な物言いになるハワードに影響されて、場の雰囲気が一変する。確かに間が悪いとは言えるかもしれないが、顔も見えない人物に対していきなり馬鹿と言うのもどうなのだろうか。ベティが様子を見に来たのかと思っていたが、しばらくして姿を見せたのは、今日は上下淡いブルーの服を着ている彼の息子のブレットだった。本当にハワードを若くしたような風貌で、近くで見ると親子だというのがよく分かる。

どういうわけか、彼は部屋の入り口辺りで固まっていた。その視線はステラの方に固定されている。

少し男性が苦手というステラは、さすがに不安になったのか、レオンの袖口を掴んできた。レオンの方が入り口に近い位置に座っている為、ブレットとステラの間挟まれる格好になった。

沈黙が続いてから、ブレットは絞り出すように言った。

「……美しい」

物々しく言った割には、彼の顔は喜びに満ち溢れているように見える。

美しいのは、どうやらステラの事らしい。それはレオンにも分かったし、多分間違っていないはずである。ただ、その言葉を聞いた

ステラがあからさまに動揺したので、レオンは少し心配になった。

「あの、ブレット。ちょっと今は・・・」

控えめに言ったつもりだったが、彼は氣にくわなかったようだった。

「前々から思っていたんだが、君はどういうつもりなんだ？」

どういふつもりと言われても、レオンには何の事かさっぱりである。

「・・・何が？」

「白々しいな。見れば分かるだろう!？」

何を見ればいいのか分からないし、きっと見ても分からない気がする。

「僕も前々から思ってたんですけど・・・」

どこか会話が噛み合っていない気がすると続けようとしたのだが、ブレットの言葉が割って入った。

「もうこれは止む終えまい。僕も手荒い真似は避けたいところだが、こうなってしまうては被害が拡大するだけだ。ここで決闘を・・・」

その瞬間、場違いな程明るい少女の声が玄関から聞こえてきた。

「決闘かー。いいね、それ。面白そう」

ブレットの表情が気の毒なくらい歪む。

声の主はそのまま勝手に上がり込んでくる。意外にも、足音は1人分だけではなかった。

その気配に気圧されるようにして、部屋に後ろ向きで入ってくるブレット。その視線は、先程まで自分が立っていた応接間の入り口に注がれている。

やがて姿を現したのは、既に半ば分かっていたが、やはりベティだった。

彼女は両手とも塞がっている状態だった。小さい子供の手を引いているからである。左右に1人ずつ、男の子と女の子のようだった。6、7歳くらいだろうか。

レオンはそれとなく室内の人物の表情を窺ってみる。取り乱して

いるのはブレットだけで、ベティは満面の笑み、ハワードは興味なさそうに壁に掛かった絵を眺めている。ステラと子供2人はきょとんとした表情だった。

「ブレット。決闘もいいけど、家の手伝いくらい、たまにはした方がいいんじゃない？」

「そ、そうだね・・・」

条件反射並の早さで、ブレットはベティの言葉に同意する。

不意にしゃがみこんで子供の目線に合わせてから、ベティは2人の子供に話しかけた。

「よかったねー。ブレットも遊んでくれるって」

「ほんとー？」

「うんうん。というか、気が変わる前に連れて行っちゃえばいいんだよ」

その言葉に歓声を上げて、ブレットに群がる子供のペア。楽しそうに見えない事もないが、ブレット本人だけはベティから視線を逸らす事も出来ない様子だった。

やがてベティが室内に踏み入れて塞いでいた出入り口を解放すると、そこからブレットと子供2人が出て行く。もしかしたら、逃げていくの方が正しいかもしれない。

応接間は再び元の落ち着きを取り戻した。

「さつてと・・・先生。もう話は終わり？」

ハワードはちらりとベティを見る。

「ああ」

「じゃあ帰ろうか。あ、その前に、ブレットにちょっと言ってくるねー。決闘とかはどうでもいいけど、ステラの事はしっかり言っておかないと。じゃないとあいつは鬱陶しいからなー」

そう言うなり、止める間もなく部屋から出て行ってしまった。あつという間に来てすぐに出て行く。本当に嵐みたいである。

啞然としたレオンとステラだが、さすがというべきかハワードはぼつりと言った。

「元気のいい事だ」

「・・・ですね」

相槌を打ったレオンだが、ハワードはこちらを一瞥もしなかった。そのまま独り言のように淡々と話し出す。

「だが、あれくらい仕切ってくれた方がいい。特にうちの馬鹿には、あれくらい気の強い女性がいい。ベティかデイジーか、その辺りが嫁に来てくれるとありがたいが」

「よ、嫁ですか」

何故か、反応したのはステラだった。

「しかし・・・ガレットもうちの馬鹿に大事な娘をやる気にはならんだろう。デイジーなどはうちの馬鹿には出来過ぎている。仮にご両親がいいと言っても、フレデリックさんに申し訳が立たない」

その大事な娘に、先程この人は馬鹿娘と言ったはずだが、もしかしたら覚えていないのだろうか。

最後にちらりと、ハワードはこちらに視線を送りながら言った。

「あの馬鹿息子の真似だけはするな。あいつには礼儀もへったくれない」

返事をしにくい事この上なかった。

だが、きつと真似ようと思っても真似出来ないに違いない。そんな確信だけは確かにあったレオンだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6452y/>

夢色彩のカーバンクル

2012年1月1日21時18分発行